埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 47 集

諏訪木遺跡Ⅷ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ＸＶ－

２０２４

埼 玉 県 熊 谷 市 教 育 委 員 会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 47 集

諏訪木（すわのき）遺跡Ⅷ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ＸＶ－

２０２４

埼 玉 県 熊 谷 市 教 育 委 員 会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めており、市内上之を中心とした地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から近世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性に鑑み、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、2011（平成23）年度及び2012（平成24）年度に発掘調査を行った諏訪木遺跡について報告するものでございます。本報告の諏訪木遺跡では、弥生時代から近世までの遺構・遺物が多数確認されました。弥生時代は墓域、古墳時代は居住域と墓域など、時代や時期によって異なる土地利用がなされていたことが明らかとなりました。これらの成果は、当地域の歴史を明らかにする上で大変貴重なものと言えます。

今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解・御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申し上げます。

令和６年３月

熊谷市教育委員会
教育長　**野原　　晃**

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之1969番地３他に所在する諏訪木遺跡（埼玉県遺跡番号59－016）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

2011（平成23）年度：2011（平成23）年８月29日～2012（平成24）年１月13日

2012（平成24）年度：2012（平成24）年９月６日～2013（平成25）年１月10日

整理・報告書作成期間は、下記のとおりである。

2022（令和４）年度：2022（令和４）年５月20日～2023（令和５）年３月24日

2023（令和５）年度：2023（令和５）年５月30日～2024（令和６）年３月22日

5　発掘調査は蔵持俊輔が、本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。なお、中・近世の遺物及び所見については、島村範久氏の御教示を得た。

6　発掘調査における写真撮影は蔵持が、遺物の写真撮影は、松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木克尚　　大出文恵　　金子正之　　小林　高　　菅谷浩之　　知久裕昭　　富田和夫

埼玉県教育局文化資源課　　公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは、個別に示した。

調査区全体図…１／400　　調査区全測図…１／200

住居跡・掘立柱建物跡・溝跡断面図・土坑・井戸跡・方形周溝墓断面図・不明遺構…１／60

溝跡平面図…１／120・１／150・１／200　　方形周溝墓平面図…１／120

2　遺構挿図中のトーンは、次のとおりである。

＝地山

3　遺構挿図中、断面図に添えてある数値は、標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器類・埴輪・石器・石製品・木製品…１／４　　板石塔婆・五輪塔…１／８

土製品・鉄製品・銭貨…１／２

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

弥生土器・土師器・陶磁器・瓦質土器・土師質土器・埴輪・石器・石製品・鉄製品断面: 白抜き

須恵器断面: 黒塗り　　灰釉陶器断面：　　木製品断面：

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物番号の後にＡが付く土器は、赤彩が施されていることを示す。

8　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位は、㎝、ｇである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物などを以下の記号で示した。

Ａ：白色粒子　　Ｂ：黒色粒子　　Ｃ：赤色粒子　　Ｄ：褐色粒子　　Ｅ：赤褐色粒子

Ｆ：白色針状物質　　Ｇ：長石　　Ｈ：石英　　Ｉ：白雲母　　ｊ：黒雲母

Ｋ：角閃石　　Ｌ：片岩　　Ｍ：砂粒　　Ｎ：礫　　Ｏ：金雲母

9　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

10　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖 36版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行　2014）を参考にした。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 ……1
　1　調査に至る経過 ……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 ……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 ……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……4
Ⅲ　遺跡の概要 ……9
　1　調査の方法 ……9
　2　検出された遺構と遺物 ……9
Ⅳ　遺構と遺物 ……18
　1　住居跡 ……18
　2　掘立柱建物跡 ……32
　3　溝跡 ……33
　4　土坑 ……70
　5　井戸跡 ……76
　6　ピット ……93
　7　方形周溝墓 ……101
　8　不明遺構 ……141
　9　遺構外出土物 ……146
Ⅴ　調査のまとめ ……151

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図 ……4
第２図　周辺遺跡分布図 ……6
第３図　調査地点位置図・年度別調査区割図 ……10
第４図　調査区全体図 ……11
第５図　調査区全測図（１） ……12
第６図　調査区全測図（２） ……13
第７図　調査区全測図（３） ……14
第８図　調査区全測図（４） ……15
第９図　調査区全測図（５） ……16
第 10 図　第１号住居跡 ……18
第 11 図　第１号住居跡出土遺物 ……19
第 12 図　第２号住居跡 ……20
第 13 図　第２号住居跡出土遺物 ……21
第 14 図　第３号住居跡・出土遺物 ……22
第 15 図　第４号住居跡・出土遺物 ……23
第 16 図　第５号住居跡・出土遺物 ……24
第 17 図　第６号住居跡 ……25
第 18 図　第７号住居跡 ……25
第 19 図　第７号住居跡出土遺物 ……26
第 20 図　第８号住居跡 ……27
第 21 図　第８号住居跡出土遺物 ……27
第 22 図　第９号住居跡 ……29
第 23 図　第９号住居跡出土遺物 ……29
第 24 図　第 10 号住居跡 ……30
第 25 図　第 11 号住居跡 ……31
第 26 図　第 11 号住居跡出土遺物 ……32
第 27 図　第１号掘立柱建物跡 ……32
第 28 図　第１・４～６・16 ～ 18 号溝跡（１） ……34
第 29 図　第１・４～６・16 ～ 18 号溝跡（２） ……35
第 30 図　第２・３・７・８・19 号溝跡 ……37

第 31 図　第 9・10・12 号溝跡 ……40
第 32 図　第 11 号溝跡 ……43
第 33 図　第 13 ～ 15・20 ～ 27 号溝跡（1） ……49
第 34 図　第 13 ～ 15・20 ～ 27 号溝跡（2） ……50
第 35 図　第 28 ～ 35 号溝跡 ……56
第 36 図　第 36 ～ 40 号溝跡 ……59
第 37 図　第 41 ～ 45 号溝跡 ……62
第 38 図　溝跡出土遺物（1） ……63
第 39 図　溝跡出土遺物（2） ……64
第 40 図　溝跡出土遺物（3） ……65
第 41 図　溝跡出土遺物（4） ……66
第 42 図　溝跡出土遺物（5） ……67
第 43 図　第 1 ～ 9 号土坑 ……72
第 44 図　第 10 ～ 13 号土坑 ……74
第 45 図　土坑出土遺物 ……75
第 46 図　第 1 ～ 6 号井戸跡 ……77
第 47 図　第 7 ～ 12 号井戸跡 ……81
第 48 図　第 13 ～ 17 号井戸跡 ……83
第 49 図　第 18 ～ 20 号井戸跡 ……86
第 50 図　井戸跡出土遺物（1） ……87
第 51 図　井戸跡出土遺物（2） ……88
第 52 図　井戸跡出土遺物（3） ……89
第 53 図　井戸跡出土遺物（4） ……90
第 54 図　ピット（1） ……94
第 55 図　ピット（2） ……95
第 56 図　ピット出土遺物 ……100
第 57 図　第 1 号方形周溝墓（1） ……102
第 58 図　第 1 号方形周溝墓（2） ……103
第 59 図　第 1 号方形周溝墓南周溝遺物出土状況 …104
第 60 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（1） ……105
第 61 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（2） ……107
第 62 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（3） ……109
第 63 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（4） ……110
第 64 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（5） ……111
第 65 図　第 2 号方形周溝墓（1） ……114
第 66 図　第 2 号方形周溝墓（2） ……115
第 67 図　第 2 号方形周溝墓出土遺物 ……116
第 68 図　第 3 号方形周溝墓（1） ……118
第 69 図　第 3 号方形周溝墓（2） ……119
第 70 図　第 3 号方形周溝墓出土遺物 ……120
第 71 図　第 4 号方形周溝墓（1） ……122
第 72 図　第 4 号方形周溝墓（2） ……123
第 73 図　第 4 号方形周溝墓出土遺物 ……124
第 74 図　第 5 号方形周溝墓 ……127
第 75 図　第 6 号方形周溝墓 ……128
第 76 図　第 6 ・ 7 号方形周溝墓出土遺物 ……129
第 77 図　第 7 号方形周溝墓 ……130
第 78 図　第 8 号方形周溝墓 ……132
第 79 図　第 8 号方形周溝墓出土遺物 ……133
第 80 図　第 9 号方形周溝墓（1） ……135
第 81 図　第 9 号方形周溝墓（2） ……136
第 82 図　第 9 号方形周溝墓出土遺物 ……137
第 83 図　第 10 号方形周溝墓 ……139
第 84 図　第 10 号方形周溝墓出土遺物 ……140
第 85 図　第 1 号不明遺構 ……142
第 86 図　第 1 号不明遺構出土遺物（1） ……143
第 87 図　第 1 号不明遺構出土遺物（2） ……144
第 88 図　遺構外出土遺物（1） ……147
第 89 図　遺構外出土遺物（2） ……148

挿表目次

第 1 表　周辺遺跡一覧表 ……7
第 2 表　第 1 号住居跡出土遺物観察表 ……19
第 3 表　第 2 号住居跡出土遺物観察表 ……21
第 4 表　第 3 号住居跡出土遺物観察表 ……22
第 5 表　第 4 号住居跡出土遺物観察表 ……23
第 6 表　第 5 号住居跡出土遺物観察表 ……24

第７表　第７号住居跡出土遺物観察表 ……26
第８表　第８号住居跡出土遺物観察表 ……27
第９表　第９号住居跡出土遺物観察表 ……29
第 10 表　第 11 号住居跡出土遺物観察表 ……32
第 11 表　溝跡出土遺物観察表 ……68
第 12 表　土坑出土遺物観察表 ……75
第 13 表　井戸跡出土遺物観察表 ……91
第 14 表　ピット計測表 ……97
第 15 表　ピット出土遺物観察表 ……101
第 16 表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表 ……112
第 17 表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表 ……116
第 18 表　第３号方形周溝墓出土遺物観察表 ……120
第 19 表　第４号方形周溝墓出土遺物観察表 ……125
第 20 表　第６号方形周溝墓出土遺物観察表 ……129
第 21 表　第７号方形周溝墓出土遺物観察表 ……130
第 22 表　第８号方形周溝墓出土遺物観察表 ……133
第 23 表　第９号方形周溝墓出土遺物観察表 ……138
第 24 表　第 10 号方形周溝墓出土遺物観察表 ……140
第 25 表　第１号不明遺構出土遺物観察表 ……145
第 26 表　遺構外出土遺物観察表 ……149

図版目次

図版１　2011（平成23）年度調査Ａ区全景（南東から）
2011（平成23）年度調査Ａ区全景（北西から）
図版２　2011（平成23）年度調査Ａ区東側全景（西から）
2011（平成23）年度調査Ａ区東側全景（北から）
図版３　2011（平成23）年度調査Ａ区西側全景（北東から）
2011（平成23）年度調査Ｂ区北側全景（西から）
図版４　2011（平成23）年度調査Ｂ区中央全景（西から）
2011（平成23）年度調査Ｂ区南側全景（北西から）
図版５　2012（平成24）年度調査Ａ区全景１（南から）
2012（平成24）年度調査Ａ区全景２（南から）
図版６　2012（平成24）年度調査Ｂ区全景（西から）
2012（平成24）年度調査Ｂ区全景（北から）
図版７　第１号住居跡（北西から）
第１号住居跡遺物出土状況１（北から）
第１号住居跡遺物出土状況２（南から）
第１号住居跡遺物出土状況３（東から）
第１号住居跡ピット２遺物出土状況（西から）
第２号住居跡（北西から）
第２号住居跡遺物出土状況（北東から）
第２号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（東から）
図版８　第２号住居跡ピット３遺物出土状況（東から）
第３号住居跡（北西から）
第４号住居跡（南東から）
第４号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（南東から）
第６号住居跡（北東から）
第７号住居跡（北東から）
第７号住居跡遺物出土状況１（南から）
第７号住居跡遺物出土状況２（南東から）
図版９　第８号住居跡（南西から）
第８号住居跡遺物出土状況（西から）
第９号住居跡（南東から）
第９号住居跡炉跡（南西から）
第 10 号住居跡（北東から）
第 11 号住居跡（南から）
第 11 号住居跡カマド（南から）
第１～６号溝跡（南東から）
図版 10　第２・３・５・６号溝跡（北西から）
第２・３・７・８号溝跡（2012（平成24）年度調査Ｂ区　西から）
第３・７・８号溝跡（2012（平成24）年度調査Ａ区　北東から）
第３号溝跡木組遺構検出状況１（2012（平成24）年度調査Ｂ区　東から）
第３号溝跡木組遺構検出状況２（2012（平成24）年度調査Ｂ区　北西から）
第４・５号溝跡（南東から）

第９号溝跡（南東から）
第 10 号溝跡（西から）
図版 11　第 10 号溝跡遺物出土状況１(西から)
第 10 号溝跡遺物出土状況２(西から)
第 10 号溝跡遺物出土状況３(西から)
第 10 号溝跡遺物出土状況４(南から)
第 11 号溝跡（2011(平成23)年度調査Ａ区　北から)
第 11 号溝跡（2012(平成24)年度調査Ａ区　南から)
第 11 号溝跡遺物出土状況１(2011(平成23)年度調査Ａ区　東から)
第 11 号溝跡遺物出土状況２(2011(平成23)年度調査Ａ区　西から)
図版 12　第 11 号溝跡遺物出土状況３(2011(平成23)年度調査Ａ区　西から)
第 11 号溝跡遺物出土状況４(2011(平成23)年度調査Ａ区　西から)
第 11 号溝跡礫出土状況(2011(平成23)年度調査Ａ区　南東から)
第 12 号溝跡（南西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況１（北西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況２（北西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況３（北西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況４（北西から）
図版 13　第 12 号溝跡遺物出土状況５（北西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況６（北西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況７（西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況８（西から）
第 12 号溝跡遺物出土状況９（西から）
第13～15号溝跡(2012(平成24)年度調査Ｂ区　南から)
第13･22号溝跡(2011(平成23)年度調査Ｂ区　南東から)
第13･26号溝跡(2011(平成23)年度調査Ｂ区　南東から)
図版 14　第 16 号溝跡・第２号土坑（北東から）
第 17 号溝跡（北東から）
第 18 号溝跡（北東から）
第 20・21 号溝跡（南西から）
第 21 号溝跡遺物出土状況（北西から）
第 22 号溝跡（西から）
第 24 号溝跡（西から）
第 27 号溝跡（南西から）
図版 15　第 32 号溝跡（北から）
第 33 号溝跡（北西から）
第 34・35 号溝跡（北から）
第 36 号溝跡・第９号井戸跡（西から）
第 37 号溝跡（南から）
第 38・39 号溝跡（南から）
第 40 号溝跡（南から）
図版 16　第 41 号溝跡（北西から）
第 42・43 号溝跡（南西から）
第 44・45 号溝跡（南から）
第１号土坑（東から）
第３号土坑（北東から）
第４号土坑（西から）
第５号土坑（東から）
第７号土坑（西から）
図版 17　第12号土坑（西から）
第１号井戸跡（東から）
第２号井戸跡（北西から）
第３号井戸跡（北西から）
第４号井戸跡（東から）
第５号井戸跡（北から）
第６号井戸跡（西から）
第８号井戸跡（北東から）
図版 18　第９号井戸跡（北西から）
第９号井戸跡遺物出土状況（北西から）
第 10 号井戸跡（北から）
第 11 号井戸跡（北東から）
第 12 号井戸跡（南西から）
第 13 号井戸跡（北東から）
第 13 号井戸跡井戸枠検出状況１（北西から）
第 13 号井戸跡井戸枠検出状況２（南東から）
図版 19　第 13 号井戸跡井戸枠検出状況３（北東から）
第 13 号井戸跡井戸枠内１（北から）

第 13 号井戸跡井戸枠内２(南東から)
第 14 号井戸跡（南西から）
第 16 号井戸跡（南から）
第 17 号井戸跡（西から）
第 18 号井戸跡（南から）
第 19 号井戸跡（北から）
図版 20　第 20 号井戸跡（北から）
第 20 号井戸跡半裁状況（南から）
第 20 号井戸跡井戸枠検出状況１（南から）
第 20 号井戸跡井戸枠検出状況２（西から）
第 20 号井戸跡井戸枠南東隅検出状況（南から）
第 20 号井戸跡井戸枠南西隅検出状況（南から）
第 20 号井戸跡井戸枠北東隅検出状況（北から）
第 20 号井戸跡遺物出土状況（南から）
図版 21　第１号方形周溝墓（2012(平成24) 年度調査Ｂ区　南西から）
第１号方形周溝墓東周溝遺物出土状況１
(2012 (平成24) 年度調査Ｂ区　北から)
第１号方形周溝墓東周溝遺物出土状況２
(2012 (平成24) 年度調査Ｂ区　南から)
第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　北から)
第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況２
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　北西から)
図版 22　第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況３
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　東から)
第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況４
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　西から)
第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況５
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　西から)
第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況６
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　南東から)
第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況７
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区　北から)
第１号方形周溝墓南周溝発掘作業状況
(2011 (平成23) 年度調査Ａ区)
第１号方形周溝墓北周溝遺物出土状況１
(2012(平成24) 年度調査Ｂ区　南西から)
第１号方形周溝墓北周溝遺物出土状況２
(2012(平成24) 年度調査Ｂ区　南から)
図版 23　第２号方形周溝墓（2012(平成24) 年度調査Ａ区　南東から）
第２号方形周溝墓東周溝遺物出土状況１
(2012(平成24) 年度調査Ａ区　東から)
第２号方形周溝墓東周溝遺物出土状況２
(2012(平成24) 年度調査Ａ区　南から)
第２号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１
(2012(平成24) 年度調査Ａ区　南から)
第２号方形周溝墓南周溝遺物出土状況２
(2012(平成24) 年度調査Ａ区　北東から)
図版 24　第３号方形周溝墓（2011(平成23) 年度調査Ａ区　南東から）
第３号方形周溝墓（2011(平成23) 年度調査Ｂ区　南から）
図版 25　第３号方形周溝墓東周溝遺物出土状況１
(2011(平成23)年度調査Ａ区　北西から)
第３号方形周溝墓東周溝遺物出土状況２
(2011(平成23)年度度調査Ａ区　南東から)
第４号方形周溝墓（2011(平成23)年度調査Ａ区　南西から）
第４号方形周溝墓南周溝西側礫出土状況
(2011(平成23)年度調査Ａ区　南東から)
第４号方形周溝墓北周溝東側(2012(平成
24)年度調査Ａ区　南東から)
図版 26　第４号方形周溝墓南周溝西側骨片出土状況
(2011(平成23)年度調査Ａ区　南東から)
第４号方形周溝墓南周溝東側遺物出土状況
１(2011(平成23)年度調査Ａ区　北から)
第４号方形周溝墓南周溝東側遺物出土状況
２(2011(平成23)年度調査Ａ区　北西から)
第４号方形周溝墓南周溝東側遺物出土状況
３(2011(平成23)年度調査Ａ区　南西から)
第５号方形周溝墓（南西から）
図版 27　第６号方形周溝墓（北東から）
第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況１（南東から）
第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況２（東から）
第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況３（北東から）

第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況４（北東から）
図版 28　第７号方形周溝墓（北西から）
第８号方形周溝墓(2012(平成24)年度調査Ａ区　南東から)
図版 29　第８号方形周溝墓(2012(平成24)年度調査Ｂ区　上から)
第８号方形周溝墓西周溝遺物出土状況（2012(平成 24) 年度調査Ａ区　南から）
第８号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１（2012(平成24)年度調査Ａ区　北西から）
第８号方形周溝墓南周溝遺物出土状況２（2012(平成24)年度調査Ａ区　北西から）
第８号方形周溝墓南周溝遺物出土状況３（2012(平成24)年度調査Ｂ区　北から）
図版 30　第９号方形周溝墓（2012(平成24) 年度調査Ａ区　南東から）
第９号方形周溝墓南西隅周溝（2011(平成23) 年度調査Ａ区　南から）
第９号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１（2012(平成 24) 年度調査Ａ区　南西から）
第９号方形周溝墓北周溝遺物出土状況１（2012(平成 24) 年度調査Ａ区　北西から）
第９号方形周溝墓北周溝遺物出土状況２（2012(平成 24) 年度調査Ａ区　東から）
図版 31　第 10 号方形周溝墓北側（2012(平成 24) 年度調査Ａ区　南から）
第 10 号方形周溝墓南側（2011(平成 23) 年度調査Ａ区　東から）
図版 32　第１号不明遺構（西から）
第１号不明遺構遺物出土状況１（北から）
第１号不明遺構遺物出土状況２(北東から)
第１号不明遺構遺物出土状況３(南東から)
第１号不明遺構遺物出土状況４(南東から)
第１号不明遺構遺物出土状況５（西から）
第１号不明遺構遺物出土状況６（南から）
第１号不明遺構遺物出土状況７（北から）
図版 33　第１号不明遺構遺物出土状況８（北から）
第１号不明遺構遺物出土状況９（東から）
第１号不明遺構遺物出土状況 10(南東から)
第１号不明遺構遺物出土状況11（北から）
第１号不明遺構遺物出土状況12（東から）
地元小学生見学会１(2011(平成23) 年度調査Ａ区)
地元小学生見学会２(2011(平成23) 年度調査Ａ区)
地元中学生発掘体験(2011(平成23) 年度調査Ｂ区)
図版 34　第 11 号住居跡　第 26 図３
第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 9
第１号方形周溝墓　第 60 図１～８
第 61 図９～13
図版 35　第１号方形周溝墓　第 61 図 14 ～19
第 62 図 20 ～25
第 63 図 26 ～28
図版 36　第１号方形周溝墓　第 63 図 34・35
第２号方形周溝墓　第 67 図１・２
第３号方形周溝墓　第 70 図１～４
第４号方形周溝墓　第 73 図１・４・５
第６号方形周溝墓　第 76 図６－１～３
遺構外　第 88 図２
図版 37　第１号住居跡　第 11 図１
第２号住居跡　第 13 図１・３・４
第４号住居跡　第 15 図１
第５号住居跡　第 16 図１
第７号住居跡　第 19 図１～３
第８号住居跡　第 21 図１・２
第５号溝跡　第 38 図５－７・８
第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 17
第 12 号溝跡　第 41 図 12 － 1
図版 38　第 12 号溝跡　第 41 図 12－２～４・７～10・12 ～ 14
第 20 号溝跡　第 42 図 20 － 1
第 21 号溝跡　第 42 図 21 － 1
第 33 号溝跡　第 42 図 33 － 4
第４号方形周溝墓　第 73 図 22
第８号方形周溝墓　第 79 図１
図版 39　第８号方形周溝墓　第 79 図２～４
第９号方形周溝墓　第 82 図１・２・６

第 10 号方形周溝墓　第 84 図１
遺構外　第 88 図 16・17・20
第 13 号井戸跡　第 52 図 13 － 14
第２号溝跡　第 38 図２－１
第 22 号溝跡　第 42 図 22 － 1
第 34 号溝跡　第 42 図 34 － １・２
第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 6
図版 40　第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 11
第 17 号井戸跡　第 52 図 17 － 1
第３号方形周溝墓　第 70 図 12
第１号不明遺構　第 87 図 44
遺構外　第 88 図 28・29・31・32・34
第 11 号住居跡　第 26 図４
第 10 号溝跡　第 39 図 10 － １～３・５・６
図版 41　第 11 号溝跡　第 39 図 11 － １～３
第 40 図 11 － 4
第１号井戸跡　第 50 図１－１
第５号井戸跡　第 50 図５－５
第６号井戸跡　第 50 図６－３
第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － ４～８・10
第 20 号井戸跡　第 53 図 20 － ２・５～７
第 10 号方形周溝墓　第 84 図９
図版 42　第１号不明遺構　第 86 図３～８・10～14・
16・17
図版 43　第１号不明遺構　第 86 図 18 ～ 21・23 ～ 25
第 87 図 29 ～ 34
第 36 号溝跡　第 42 図 36 － ２～４・７
遺構外　第 89 図 48
図版 44　第８号溝跡　第 39 図８－１
第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 14 ～ 16
第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 10 ～ 17
第 12 号溝跡　第 41 図 12 － 22・23
第５号井戸跡　第 50 図５－８・９
ピット 10・257　第 56 図１・16
第１号方形周溝墓　第 63 図 36 ～ 44
第 64 図 45 ～ 47
図版 45　第１号方形周溝墓　第 64 図 48 ～ 63
第２号方形周溝墓　第 67 図３～６
第３号方形周溝墓　第 70 図５～10
第４号方形周溝墓　第 73 図６～20
図版 46　第６号方形周溝墓　第 76 図６－４・５
第７号方形周溝墓　第 76 図７－１
第８号方形周溝墓　第 79 図 19 ～22
第９号方形周溝墓　第 82 図 21 ～25
第 10 号方形周溝墓　第 84 図４～６
遺構外　第 88 図３～13
第１号住居跡　第 11 図２～９
第２号住居跡　第 13 図５～11
図版 47　第３号住居跡　第 14 図１・２
第７号住居跡　第 19 図４～８
第９号住居跡　第 23 図１～６
第３号溝跡　第 38 図３－２・３
第４号溝跡　第 38 図４－１
第５号溝跡　第 38 図５－11～13
第８号溝跡　第 39 図８－２・３
第 10 号溝跡　第 39 図 10－18～20
第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 18 ～ 21
第 12 号溝跡　第 41 図 12 － 15 ～ 21
第 13 号溝跡　第 41 図 13 － ２・３
図版 48　第 22 号溝跡　第 42 図 22 － ３～５
第 24 号溝跡　第 42 図 24 － １～３
第 25 号溝跡　第 42 図 25 － １・２
第４号土坑　第 45 図４－１・２
第８号土坑　第 45 図８－１
第１号井戸跡　第 50 図１－６
第５号井戸跡　第 50 図５－ 10
ピット 10・42・168・251・256
第 56 図２・３・５・11・15
第２号方形周溝墓　第 67 図８・９
第４号方形周溝墓　第 73 図 23・24
第８号方形周溝墓　第 79 図５～ 17
第９号方形周溝墓　第 82 図７～ 11

図版 49　第９号方形周溝墓　第 82 図 12～19
第 10 号方形周溝墓　第 84 図２・３
遺構外　第 88 図 21～27
第５号溝跡　第 38 図５－３～５
第６号溝跡　第 38 図６－２～５
第 11 号溝跡　第 40 図 11－24～28
図版 50　第 17 号溝跡　第 41 図 17 －１
第 22 号溝跡　第 42 図 22－２
第 33 号溝跡　第 42 図 33 －２
第 34 号溝跡　第 42 図 34 －３
第 36 号溝跡　第 42 図 36 －９
第１号井戸跡　第 50 図１－７・８
第 10 号井戸跡　第 50 図 10 －１
第 13 号井戸跡　第 52 図 13 － 16
第 14 号井戸跡　第 52 図 14 －７～ 10
第 17 号井戸跡　第 52 図 17 －２
ピット 96・251　第 56 図４・13
第４号方形周溝墓　第 73 図 25
第１号不明遺構　第 87 図 43
遺構外　第 88 図 33
図版 51　第 10 号溝跡　第 39 図 10 －７・８
第 11 号溝跡　第 40 図 11 －５・６
第 36 号溝跡　第 42 図 36 －１・６・10
第５号井戸跡　第 50 図５－１～３
第６号井戸跡　第 50 図６－１・２
第 13 号井戸跡　第 51 図 13 －１～４
第 14 号井戸跡　第 52 図 14 －１・２
第 20 号井戸跡　第 53 図 20 －１
第１号不明遺構　第 86 図１
遺構外　第 89 図 38 ～ 43
図版 52　第２号溝跡　第 38 図２－２
第３号溝跡　第 38 図３－１
第 10 号溝跡　第 39 図 10 －９～ 11
第 11 号溝跡　第 40 図 11 －７
第１号井戸跡　第 50 図１－３・４
第５号井戸跡　第 50 図５－４
第 11 号井戸跡　第 51 図 11 －１
第 12 号井戸跡　第 51 図 12－１
第 19 号井戸跡　第 53 図 19 －１～３
第 20 号井戸跡　第 53 図 20 －３
ピット207･251　第 56 図７～10・14
第１号不明遺構　第 86 図２
遺構外　第 89 図 44
図版 53　第４号方形周溝墓　第 73 図 21
第８号方形周溝墓　第 79 図 18
第 20 号井戸跡　第 53 図 20 －９
第 36 号溝跡　第 42 図 36 －８
第 11 号溝跡　第 40 図 11 －30
第 20 号溝跡　第 42 図 20 －２
第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 32・33
第１号不明遺構出土鉄滓
第 10 号溝跡　第 39 図 10－12
第 10 号方形周溝墓　第 84 図７・８
図版 54　第５号溝跡　第 38 図５－６
遺構外　第 89 図 49・50
第６号溝跡　第 38 図６－６
第１号井戸跡　第 50 図１－５
ピット 169･258　第 56 図６・17
第４号方形周溝墓　第 73 図 26 ～ 29
第１号不明遺構　第 87 図 39・40
遺構外　第 89 図 47
図版 55　第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 13
第 11 号溝跡　第 40 図 11 －８
第 13 号井戸跡　第 51 図 13 －６～ 13
第 14 号井戸跡　第 52 図 14－４・５
第１号不明遺構　第 87 図 41
図版 56　骨　第 12・22 号溝跡
第９号井戸跡
第４号方形周溝墓南周溝
種子ほか　第１・９・10･11･18号井戸跡
第４号方形周溝墓西･南周溝
ピット251

Ⅰ　発掘調査の概要

１　調査に至る経過

1986（昭和 61）年６月６日付け 61 熊都発第 148 号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会では、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、1995（平成７）年 11 月 13 日から 1996（平成８）年１月 19 日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、1996（平成８）年２月９日付け熊教社発第 865 号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡、諏訪木遺跡、箱田氏館跡、上之古墳群）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づく本報告２地点分の埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より 2009（平成 21）年６月 12 日及び 2011（平成 23）年６月７日付けで提出された。本報告に係る発掘調査は、2011（平成 23）年度及び 2012（平成 24）年度に熊谷市教育委員会により実施された。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

2011（平成 23）年度調査	2011（平成 23）年８月 17 日付け熊教社発第 1354 号
	2011（平成 23）年８月 15 日付け教生文第４－ 495 号
2012（平成 24）年度調査	2012（平成 24）年８月 27 日付け熊教社発第 1424 号
	2009（平成 21）年 10 月 28 日付け教生文第４－ 733 号

２　発掘調査・報告書作成の経過

（１）　発掘調査

本報告にかかる発掘調査は、2011（平成 23）年度と 2012（平成 24）年度に実施された。調査期間は、2011（平成 23）年度が 2011（平成 23）年８月 29 日から 2012（平成 24）年１月 13 日まで、2012（平成 24）年度は 2012（平成 24）年９月６日から 2013（平成 25）年１月 10 日までである。調査面積は、2011（平成 23）年度が 1,670 ㎡、2012（平成 24）年度は 950 ㎡の計 2,620 ㎡である。

発掘調査は、いずれの年度も表土及び遺構の掘削に伴い排出される土の置場を確保するため、東西２回に分けて実施された。調査は、まず重機で表土を掘削し、作業員を導入して遺構確認作業を行った。そして、遺構の掘削、土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行い、これらの作業が終了した後、遺構平面図の作成、調査区の全景写真撮影を行った。その後、重機で埋め戻しを行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（２）整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、2022（令和４）年５月から 2023（令和５）年３月まで、2023（令和５）年５月から 2024（令和６）年３月までの２か年で実施した。作業は、2022（令和４）年５月から８月まで遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行い、併行して遺構の図面整理・デジタルトレース、遺構の版組を行った。９月から 2023（令和５）年３月までは遺物の実測・拓本、５月から８月までは遺物のトレースを行い、９月から 10 月まで遺物の版組を作成した。11 月からは遺物の写真撮影及び写真図版の割付け、12 月は原稿執筆・編集作業を行った。そして、2024（令和６）年１月末に印刷業者選定の後、印刷に入り、数回の校正を行い、３月下旬に報告書を刊行した。

３　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（１）発掘調査

2011（平成 23）年度

教育長	野原　晃
教育次長	藤原　清
社会教育課長	斉木　千春
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸　敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田　安彦
社会教育課文化財保護係主幹	吉野　健
主査	鯨井　敬浩（～ 2011（平成 23）年６月 30 日）
主査	杉浦　朗子
主査	松田　哲
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹

2012（平成 24）年度

教育長	野原　晃
教育次長	鯨井　勝
社会教育課長	岩上　精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸　敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田　安彦
社会教育課文化財保護係主幹	吉野　健
主査	杉浦　朗子
主査	松田　哲
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹

（２）整理・報告書作成事業

2022（令和４）年度

教育長	野原　　晃
教育次長	権田　宣行
社会教育課長	野村　和弘
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課副課長兼文化財保護係長	松田　　哲
社会教育課文化財保護係主査	星　　祥子
主査	小島　洋一
主査	山下　祐樹
主査	腰塚　博隆
主任	新井　　端
主事	山川愛希子
主事	山川　守男
主事	大野美知子
主事	中山　浩彦

2023（令和５）年度

教育長	野原　　晃
教育次長	権田　宣行
社会教育課長	原　　光則
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　　健
社会教育課副課長兼文化財保護係長	松田　　哲
社会教育課文化財保護係主査	茂木　留美
主査	小島　洋一
主査	山下　祐樹（～2023（令和５）年 11 月 21 日）
主査	腰塚　博隆
主任	森田　安彦
主事	山川愛希子
主事	山川　守男
主事	大野美知子
発掘調査員	礒﨑　　一

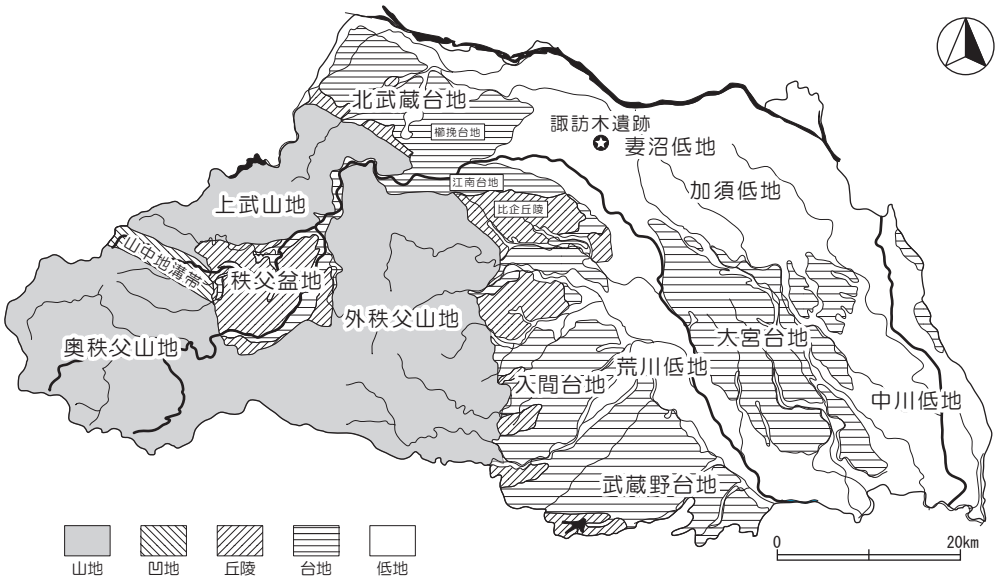
Ⅱ　遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県北部に位置し、県北最大の人口を有する市である。総面積159.82㎢を測る市の北側を利根川、南側を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の二大河川が最も近接する地域にある。地形的には、西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側に江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称であり、大里郡寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR東日本籠原駅から北へ約２㎞の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54ｍを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する諏訪木遺跡は、その新期荒川扇状地の扇端部、標高25ｍ前後に立地している。遺跡は、熊谷市上之に所在し、JR東日本熊谷駅からは北東へ約２㎞、荒川からは北へ約３㎞、利根川からは南へ約６㎞の距離にある。

次に諏訪木遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。本遺跡周辺では、縄文時代後期から遺跡が確認されている。本遺跡では、過去に行われた熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会2001）、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002･2007）において後期中葉の加曽利Ｂ式期から晩期中葉の安行３ｄ式までの遺構・遺物が確認されている。特に後者の調査では、遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。また、西に所在する中西遺跡（４）でも、後期中葉の加曽利Ｂ式期から晩期中葉の安行３ｄ式までの遺構・遺物が確認されており、北東約２㎞に所在する古宮遺跡（11）では、晩期前葉から中葉までに限定された遺物包含層が確認されている。当段階の遺跡は、この他にも市北部の妻沼



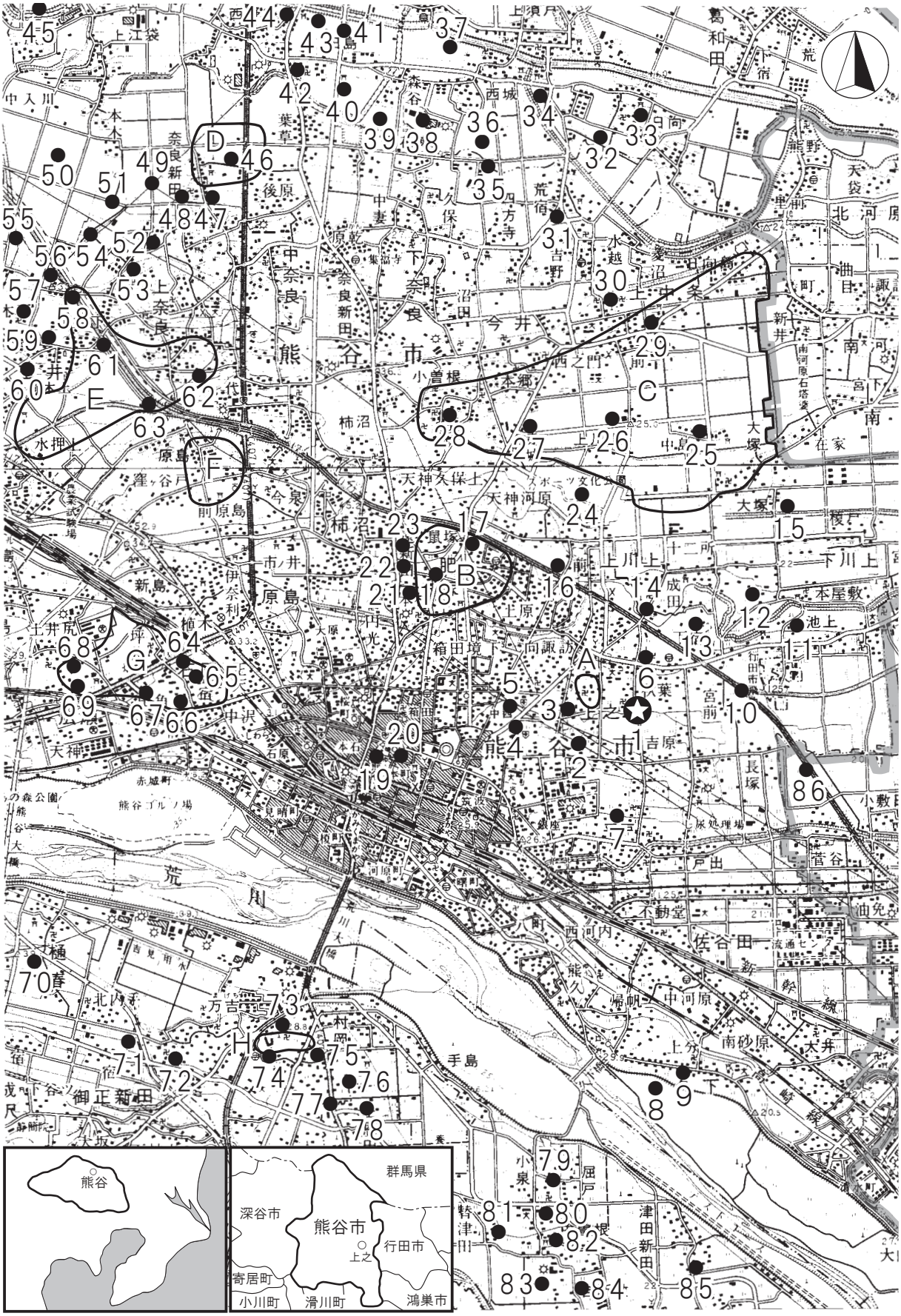
第１図　埼玉県の地形図

低地上に西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（42）などがある。晩期中葉以降は、途絶えてしまうが、東に隣接する前中西遺跡（２）や櫛挽台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）では、晩期末の浮線文土器が検出されている。いずれの遺跡も遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階の前期末から中期前半は、東に隣接する藤之宮遺跡の 2002（平成 14）年度に実施した調査で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。当段階の遺跡は、櫛挽台地直下ないし妻沼低地北部の低地上に集中し、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、深谷市上敷免遺跡（いずれも地図未掲載）などで再葬墓が確認されているにすぎない。なお、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片が出土している。

中期中葉になると、これまでの状況と一変して集落が集中して出現する。後期前半まで長期間続く前中西遺跡の他に東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（10）、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（86）、独立棟持柱建物跡が確認された古宮遺跡などが出現し、本格的な農耕集落が展開される。池上遺跡は、出土遺物 67 点が 2017（平成 30）年に、小敷田遺跡は方形周溝墓出土土器 15 点が 2018（平成 31）年）に県の有形文化財（考古資料）に指定されている。中期後半は、本遺跡の他に前段階に続いて営まれる前中西遺跡や北島遺跡（24）などがある。特に前中西遺跡は、これまでの調査成果から当地域における拠点集落であることが判明しており、中期後半以降、長野県北部を中心とする栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、長野県外では初の事例となった礫床木棺墓や大阪湾型銅戈を忠実に模倣した全国初の石戈などが確認されている。北島遺跡では、大規模集落の他に水田や水路、堰などの生産域も確認されており、前中西遺跡とともに東日本屈指の遺跡として注目される。後期以降については、遺跡数が急激に減少し、本遺跡以外確認例がなく、遺跡は台地や丘陵へと移っていく傾向にある。

古墳時代になると、再度低地上への進出が活発化し、前期の遺跡は、近年確認例が増加している。本遺跡以外にも周辺では、前中西遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡などで集落跡が確認されており、方形周溝墓による墓域も確認されている。また、中西遺跡では、方形周溝墓の他に前方後方型周溝墓も確認されている。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた本遺跡の調査では、河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2008）。中条遺跡（29）では、木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期はたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて藤之宮遺跡や中条遺跡などで集落跡が確認されている。また、５世紀末頃の鎧塚古墳や女塚１号墳（Ｃ：中条古墳群）、市指定史跡の横塚山古墳（Ｄ：奈良古墳群）などの古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長 43.8 ｍの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡二箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長 46 ｍを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はＢ種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			49	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
1	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	50	別府条里遺跡	奈良・平安
2	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	51	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中・近世
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	52	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
4	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	53	奈良氏館跡	平安末～中世
5	箱田氏館跡	平安末～中世	54	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
6	成田氏館跡	中世	55	寺東遺跡	縄文前～後
7	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	56	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
8	久下氏館跡	中世	57	玉井陣屋跡	平安末～中世
9	市田氏館跡	中世	58	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
10	池上遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安	59	水押下遺跡	古墳後
11	古宮遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	60	稲荷木上遺跡	古墳後
12	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	61	下河原中遺跡	奈良・平安
13	宮の裏遺跡	古墳後	62	本代遺跡	古墳後、近世
14	成田遺跡	古墳後	63	下河原上遺跡	近世
15	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	64	天神前遺跡	古墳中・後、中世
16	河上氏館跡	中世	65	兵部裏屋敷跡	中世
17	八幡上遺跡	古墳後	66	御蔵場跡	近世
18	出口下遺跡	古墳後	67	田角遺跡	平安
19	熊谷氏館跡	中世	68	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
20	宮町遺跡	奈良・平安、中世	69	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
21	肥塚館跡	中世	70	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
24	北島遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安、中世	73	村岡館跡	平安末
25	上中条中島遺跡	古墳前・後、奈良・平安	74	村岡北西原遺跡	平安
26	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	北西原遺跡	奈良・平安
27	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	東浦遺跡	古墳前、平安	77	西浦遺跡	奈良・平安
29	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	78	腰廻遺跡	奈良・平安
30	中条氏館跡	中世	79	北方遺跡	奈良・平安
31	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	80	宮前遺跡	奈良・平安
32	先載場遺跡	古墳後、奈良	81	西浦町遺跡	奈良・平安
33	八幡間遺跡	古墳後、奈良	82	宮前町遺跡	奈良・平安
34	東城館跡	平安	83	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	仲町遺跡	奈良・平安
36	西城館跡	平安	85	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後・晩	行田市		
38	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
40	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	熊谷市		
41	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
42	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	B	肥塚古墳群	古墳後～末
43	宮前遺跡	奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	実盛館	平安	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	道ヶ谷戸条里遺跡	縄文後、奈良	E	玉井古墳群	古墳後
46	横塚遺跡	古墳前、平安	F	原島古墳群	古墳後
47	東通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
48	西通遺跡	古墳後	H	村岡古墳群	古墳後

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では、本遺跡報告地点とほぼ同所に位置する上之古墳群（A）のほかに、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね６世紀から７世紀末ないし８世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）で

は、埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による第19地点の調査では、二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。また、池上遺跡では整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、本遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川跡から土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われていたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡が集中する。

集落以外では、北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（15）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡が残る。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（６）、久下氏館跡（８）、市田氏館跡（９）、河上氏館跡（16）、熊谷氏館跡（19）、肥塚館跡（21）、中条氏館跡（30）などがある。このうち、本遺跡北東に位置する成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する本遺跡で行われた過去の調査では、成田氏関連と思われる遺構や遺物が相次いで確認されている。公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による2001（平成13）年度の調査では、館跡から南に約300ｍの所で中世の居館と思われる変形した方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）。また、2002（平成14）年度の調査では、井戸枠に器高70㎝を超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものと推定されている（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。そして、熊谷市教育委員会による2008（平成20）年度の調査では、埴輪を持つ６世紀代の古墳の周溝が埋没した後に掘削された長方形の土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は、15世紀前半を上限とし、枚数がおよそ14,000枚と膨大であることから成田氏に関連するものであることは間違いない（熊谷市教育委員会2020）。

中世段階については、本遺跡で成田氏を想定させる遺構や遺物が確認されていることなどからその一端が明らかになりつつあるが、全体像を把握するには、まだ資料が不足している。また、近世段階についても中世と同様であり、本遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

１　調査の方法

今回報告する調査地点は、遺跡範囲北西部に位置する。調査は、2011（平成 23）年度及び 2012（平成 24）年度に実施された。各年度とも表土及び遺構の掘削に伴い排出される土の置場を確保するため、はじめに西側のＡ区、そして終了後に東側のＢ区の順で反転して行った。調査面積は、2011（平成 23）年度が 1,670 ㎡、2012（平成 24）年度が 950 ㎡の計 2,620 ㎡である。

いずれの調査もまず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行った。手掘り作業終了後は、遺構毎に実測、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。実測作業にあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように日本測地系で設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

今回報告する調査地点のグリッドは、東西が 27 から 41 まで、南北は 85 から 98 までが該当する。区画整理地内全体のグリッド図については、過去に刊行した前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会 2002・2003）に記載されていることから本報告では省略した。なお、2019（令和元）年度に報告した『諏訪木遺跡Ⅴ　上之古墳群第３・４号墳』（熊谷市教育委員会 2020）の第４～７図に掲載した東西グリッドは、誤りがあったことが発覚した。同報告では、東西グリッドを 12 から 33 までと示したが、正確には東西は 11 から 32 までであった。ここで訂正したい。

２　検出された遺構と遺物

今回報告する調査地点は、広大な遺跡範囲の北西部に位置する（第３図）。同所には古墳時代後期～末の上之古墳群も所在するが、本報告では須恵器と埴輪の破片が計３点出土したのみであり、古墳をはじめとする同段階の遺構は検出されなかったことから本報告では取り扱わなかった。

検出された遺構は、住居跡 11 軒、掘立柱建物跡１棟、溝跡 45 条、土坑 13 基、井戸跡 20 基、ピット 312 基、方形周溝墓 10 基、不明遺構１基である（第４～９図）。また、これらの遺構の他に 2011（平成 23）年度調査では、噴砂が所々で確認されたが、その時期は不明である。

住居跡は、古墳時代前期 10 軒、奈良時代１軒の計 11 軒が検出された。古墳時代前期の住居跡は、調査区中央付近から北側に位置し、同時期の方形周溝墓の方台部に位置するものもみられた。全形が検出されたものは少ないが、平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。正確な規模は不明なものが多いが、一辺３ｍ弱を測る小型のものもみられた。伴う出土遺物は、古墳時代前期の土師器のみである。奈良時代の住居跡は、調査区中央よりやや南東に位置する。正確な規模は不明であるが、平面プランは隅丸長方形を呈すると思われる。カマドは、北壁中央付近に設けられていた。出土遺物は、須恵器・土師器がある。

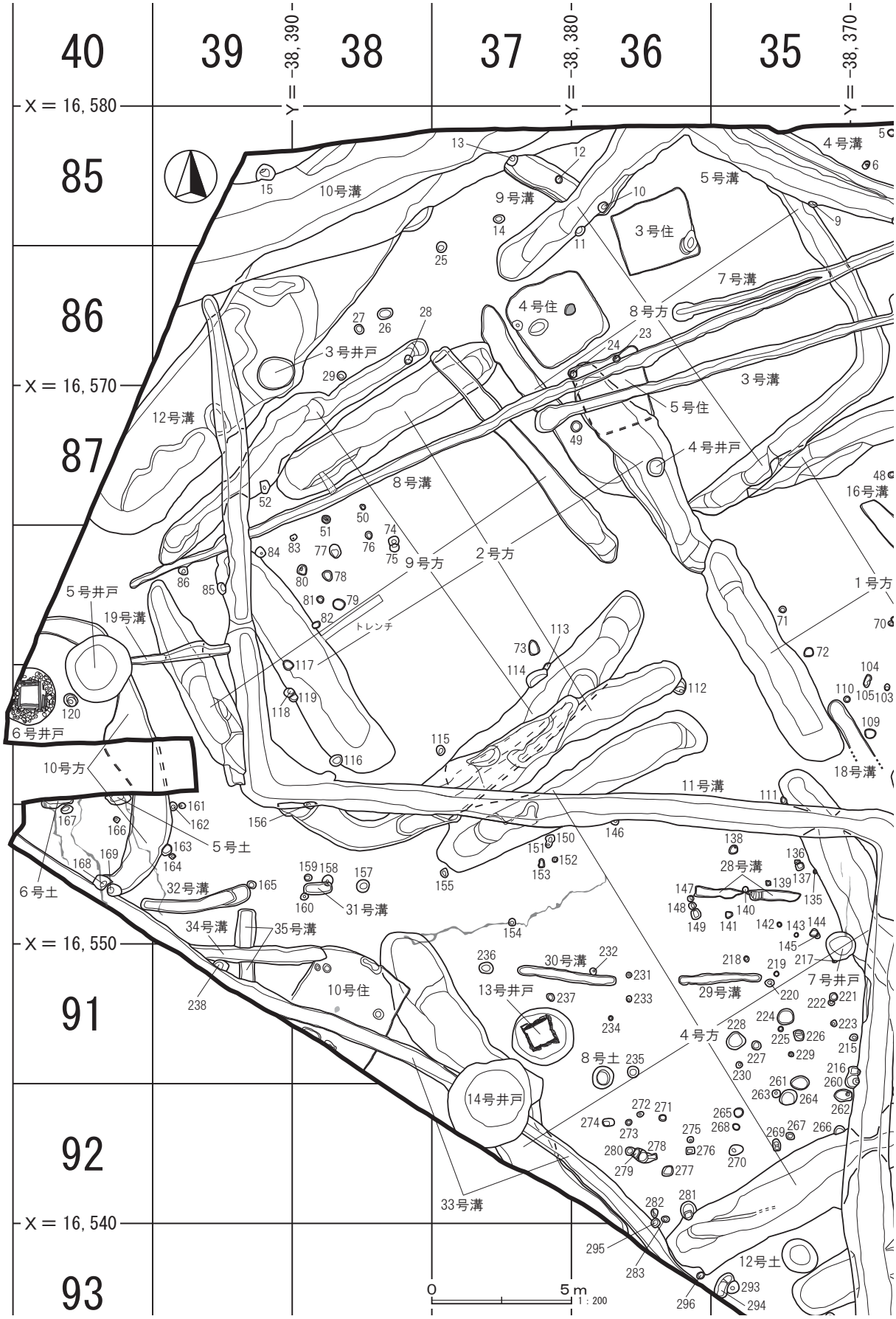
掘立柱建物跡は、１棟のみ検出された。第６号方形周溝墓の方台部に位置するが、本建物跡が新しいと思われる。１×１間の建物跡である。出土遺物に伴うものはないが、時期は中世以降と思われる。

溝跡は、45 条と多数検出されたが、調査区や確認面の都合から同一遺構、また南東端では方形周溝墓の可能性があるものがみられた。調査区ほぼ全面から検出されており、走行方向は様々である。蛇

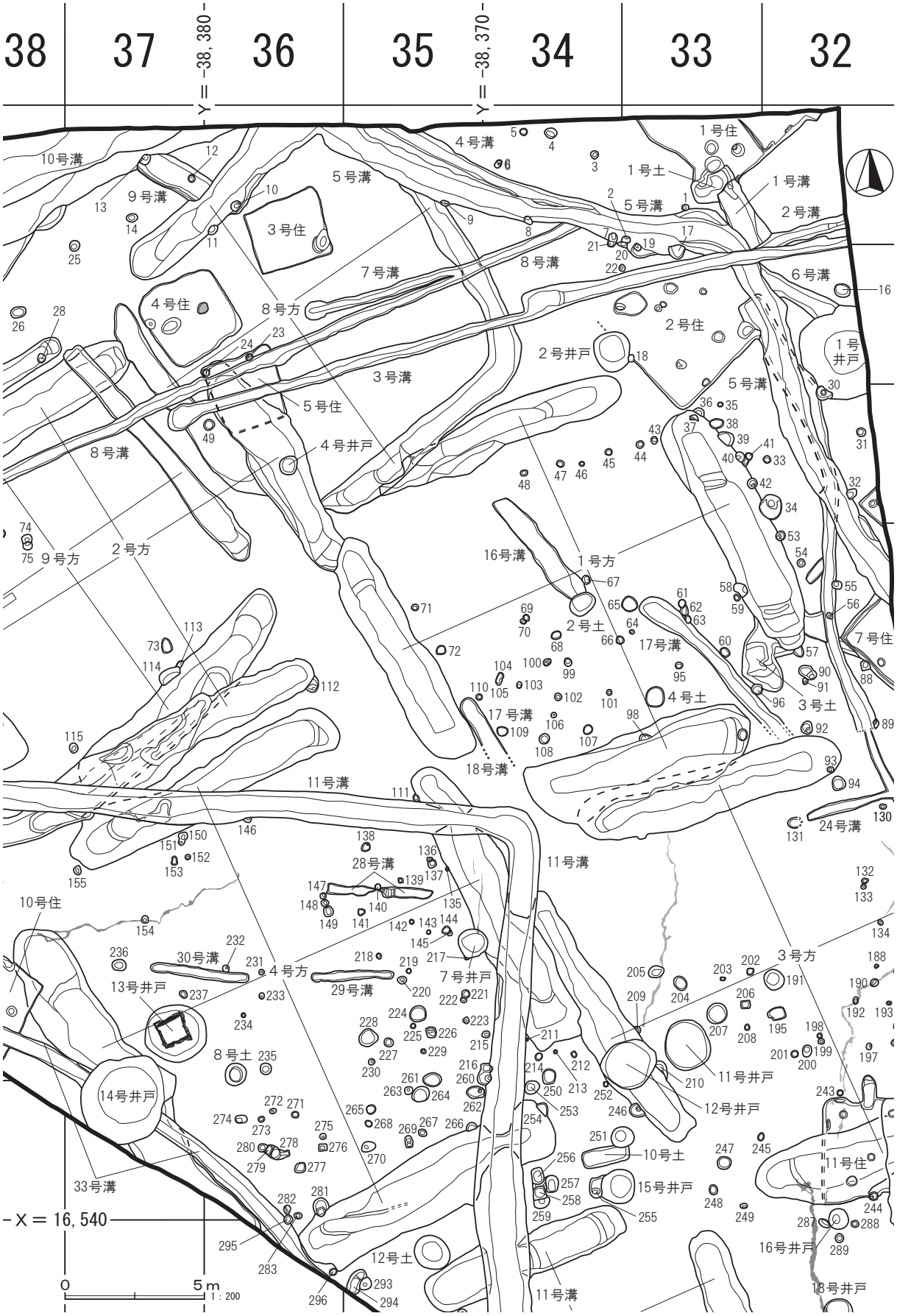
第３図　調査地点位置図・年度別調査区割図

40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
82
83
84
85
86
87
91
92
93
94
95
96
97
98
Y=-38,390
Y=-38,380
Y=-38,370
Y=-38,360
Y=-38,350
Y=-38,340
『諏訪木遺跡Ⅴ　上之古墳群第３・４号墳』（熊谷市教委 2020）報告地点
X=16,580
X=16,560
X=16,550
X=16,540
X=16,530
X=16,520
0
10 m
1：400

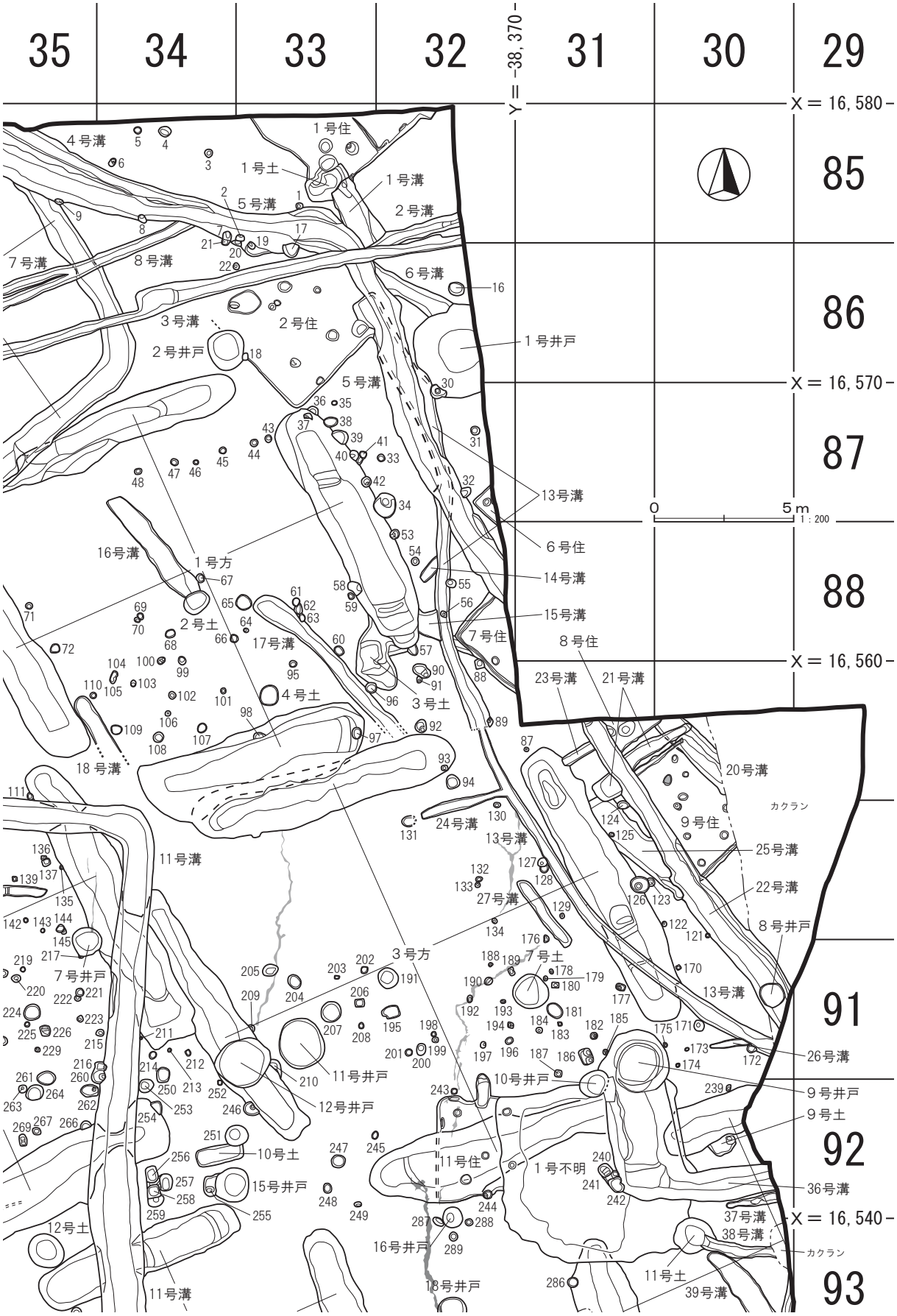
第４図　調査区全体図


40
39
38
37
36
35
Y＝−38,390
Y＝−38,380
Y＝−38,370
X＝16,580
X＝16,570
X＝16,550
X＝16,540
85
86
87
91
92
93
10号溝
9号溝
5号溝
4号溝
3号住
7号溝
4号住
8号方
3号井戸
3号溝
5号住
4号井戸
12号溝
8号溝
16号溝
2号方
9号方
1号方
5号井戸
19号溝
トレンチ
6号井戸
10号方
18号溝
11号溝
5号土
6号土
32号溝
31号溝
34号溝
35号溝
28号溝
30号溝
29号溝
7号井戸
10号住
13号井戸
4号方
8号土
14号井戸
33号溝
12号土
0
5m
1：200

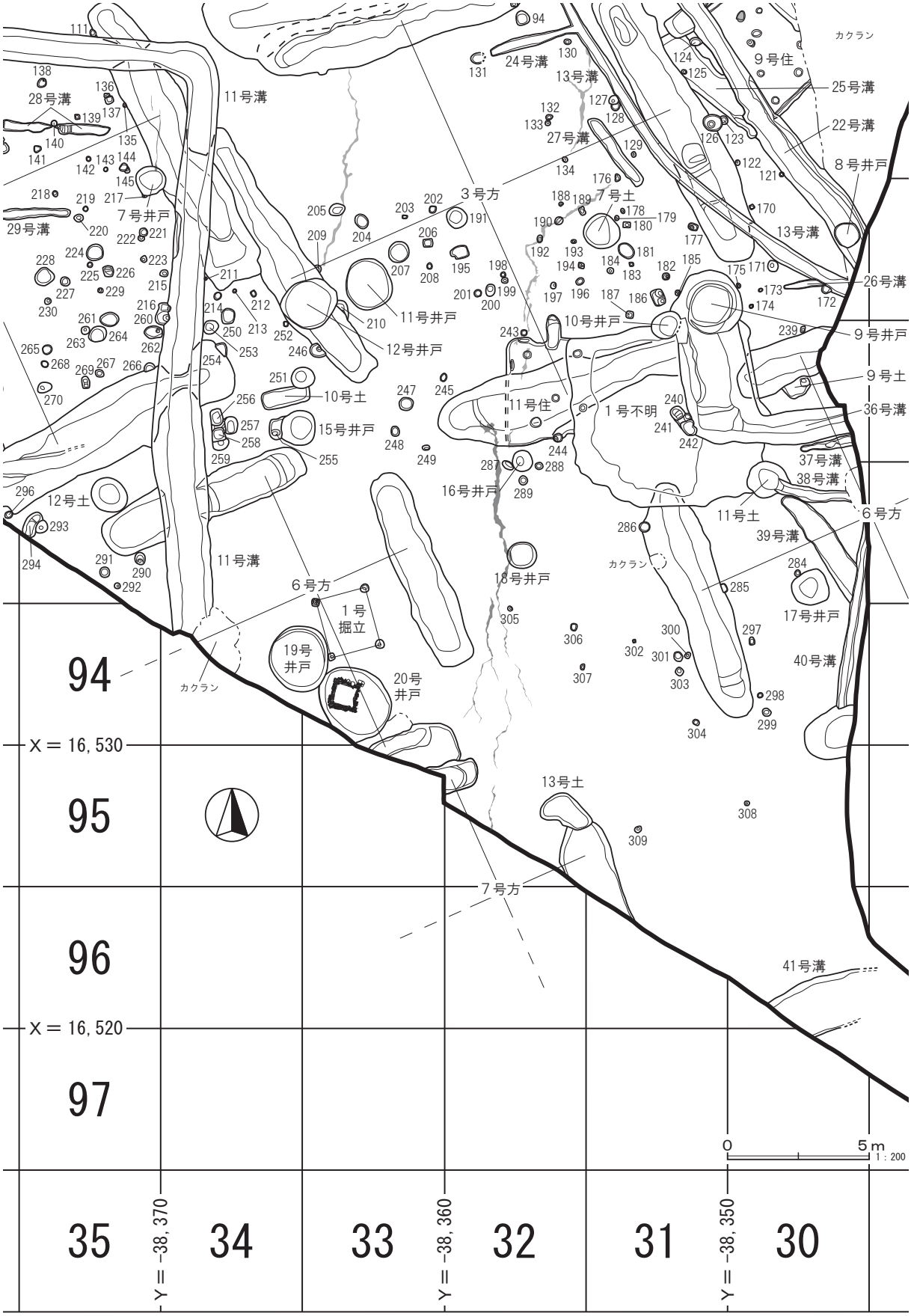
第５図　調査区全測図（１）


38
37
36
35
34
33
32
Y＝−38,380
Y＝−38,370
−X＝16,540
0
5m
1：200
1号住
1号土
1号溝
2号溝
3号住
4号住
5号住
4号溝
5号溝
6号溝
7号溝
8号溝
8号方
9号溝
10号溝
2号住
2号井戸
1号井戸
3号溝
4号井戸
16号溝
1号方
2号土
17号溝
4号土
3号土
7号住
18号溝
11号溝
24号溝
28号溝
10号住
30号溝
4号方
29号溝
7号井戸
3号方
13号井戸
8号土
14号井戸
11号井戸
12号井戸
10号土
15号井戸
11号住
33号溝
12号土
16号井戸
18号井戸

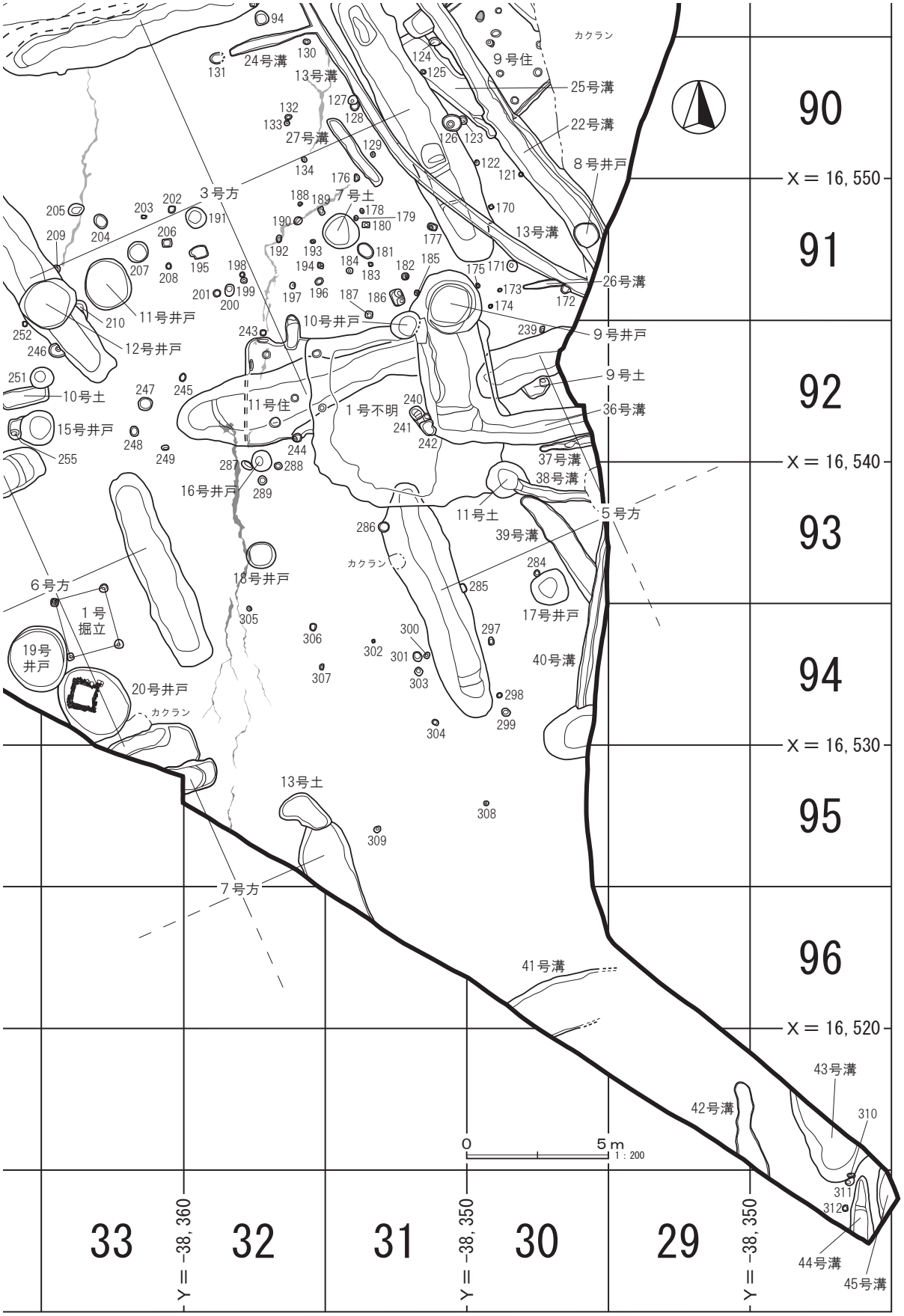
第６図　調査区全測図（２）


35
34
33
32
31
30
29
Y＝-38,370
X＝16,580
X＝16,570
X＝16,560
X＝16,540
85
86
87
88
91
92
93
0
5m
1：200
カクラン
1号住
1号土
1号溝
2号溝
4号溝
5号溝
6号溝
7号溝
8号溝
3号溝
2号住
2号井戸
1号井戸
13号溝
6号住
14号溝
15号溝
7号住
8号住
16号溝
1号方
2号土
17号溝
4号土
3号土
18号溝
23号溝
21号溝
20号溝
9号住
25号溝
22号溝
8号井戸
24号溝
13号溝
27号溝
3号方
7号土
7号井戸
11号溝
11号井戸
12号井戸
10号井戸
9号井戸
9号土
26号溝
10号土
15号井戸
11号住
1号不明
36号溝
37号溝
38号溝
12号土
16号井戸
18号井戸
11号土
39号溝

第７図　調査区全測図（３）


カクラン
9号住
25号溝
22号溝
8号井戸
24号溝
13号溝
27号溝
3号方
7号土
7号井戸
28号溝
29号溝
11号溝
11号井戸
12号井戸
10号井戸
9号井戸
26号溝
9号土
36号溝
37号溝
38号溝
6号方
39号溝
11号住
1号不明
10号土
15号井戸
16号井戸
12号土
11号土
18号井戸
17号井戸
40号溝
19号井戸
20号井戸
1号掘立
13号土
7号方
41号溝
X＝16,530
X＝16,520
Y＝−38,370
Y＝−38,360
Y＝−38,350
0
5m
1：200
94
95
96
97
35
34
33
32
31
30

第８図　調査区全測図（４）


90
91
92
93
94
95
96
X＝16,550
X＝16,540
X＝16,530
X＝16,520
33
32
31
30
29
Y＝−38,360
Y＝−38,350
Y＝−38,350
24号溝
13号溝
27号溝
3号方
7号土
9号住
25号溝
22号溝
8号井戸
13号溝
26号溝
11号井戸
10号井戸
9号井戸
12号井戸
10号土
15号井戸
11号住
1号不明
9号土
36号溝
37号溝
38号溝
16号井戸
11号土
5号方
39号溝
18号井戸
6号方
1号
掘立
19号
井戸
20号井戸
17号井戸
40号溝
13号土
7号方
41号溝
42号溝
43号溝
44号溝
45号溝
カクラン
0
5m
1：200

第９図　調査区全測図（５）

行するものやクランク状を呈するものもみられた。出土遺物は、流れ込みも含め、弥生時代中期後半～後期初頭の弥生土器、石器、古墳時代前期の土師器、土製品、奈良・平安時代の須恵器、土師器、土製品、中世の陶磁器、瓦質土器、土師質土器、銭貨、石製品、木製品、種子、近世の陶器、瓦質土器、土師質土器、木製品、種子、時期不明の鉄製品、骨などがある。時期は、古墳時代前期が３条、奈良・平安時代が 28 条、中世が２条、近世が２条、時期不明が 10 条である。

土坑は、13 基検出された。南東部及び北西部以外の調査区ほぼ全面に点在する。平面プランは、円形、楕円形、方形、長方形など様々である。出土遺物は、古墳時代前期の土師器、奈良時代の須恵器があるが、遺物量が少ない。時期は、古墳時代前期が１基、奈良・平安時代が３基、時期不明が９基である。

井戸跡は、20 基と多数検出された。南東部以外の調査区ほぼ全面に点在するが、中央付近に位置するものが多い。平面プランは、円形ないし楕円形を呈する。井戸枠に石組や木組のものがみられた。出土遺物は、流れ込みも含め、弥生時代中期後半～後期初頭の弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の須恵器、円筒埴輪、奈良・平安時代の須恵器、土師器、中世の陶磁器、瓦質土器、土師質土器、石製品、種子、近世の陶器、瓦質土器、土師質土器、骨、種子、植物などがある。時期は、平安時代が１基、中世が 12 基、近世が３基、時期不明が４基である。

ピットは、312 基と多数検出されたが、住居跡検出のピットには伴わないものもあるため総数が増える可能性が高い。調査区ほぼ全面に位置するが、調査区中央付近から北側にかけて密集する。出土遺物は、流れ込みも含め、弥生時代中期後半～後期初頭の弥生土器、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の須恵器、中世の陶器、瓦質土器、古代以降の石製品がある。検出された他の遺構の時期とほぼ合致するが、伴うものか不明である。

方形周溝墓は、弥生時代７基、古墳時代前期３基の計 10 基が検出された。時代・時期に関係なく、いずれもほぼ同軸方向を向く。弥生時代の７基は、調査区ほぼ全面に位置する。すべて四隅に土橋を持つ。北側に位置する４基は、ほぼ同規模であるが、南側の３基は北側４基に比べて小さい。伴う出土遺物は、弥生時代中期末～後期初頭の弥生土器のみである。時期は、４基が中期末、３基が後期初頭である。古墳時代前期の３基は、調査区北側に東西並んで位置し、方台部に同時期の住居跡が所在するものもみられた。調査区の都合から西側の１基は、隅に土橋を持つか不明であるが、その他は周溝が全周しない。規模は、中央に位置する１基が大きく、両脇の２基はやや小さい。伴う出土遺物は、土師器のみである。

不明遺構は、１基検出された。調査区中央東側に位置する。一辺約 6.5 ｍのややいびつな方形を呈する。伴う遺物は、磁器、瓦質土器、土師質土器、石製品などがあり、大量に出土した。時期は、中世である。

遺構外出土遺物は、弥生時代から近世まで幅広く検出されており、検出された遺構の時代・時期と合致する。出土位置は、図示不可能なものも含め、2011（平成 23）年度調査区からの出土が多い。出土遺物は、弥生時代中期後半～後期初頭の弥生土器、石器、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の須恵器、灰釉陶器、土師器、中世の陶磁器、瓦質土器、土師質土器、石製品、近世の瓦質土器、時期不明の石器がある。

Ⅳ　遺構と遺物

１　住居跡

第１号住居跡（第 10 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32・33 － 85 グリッドに位置する。南隅を第１号土坑に切られており、同所に直接的な切り合い関係のない第１号溝跡が位置するが、本住居跡が第１号溝跡より新しいと思われる。南側半分の検出であり、北側半分は調査区外にある。

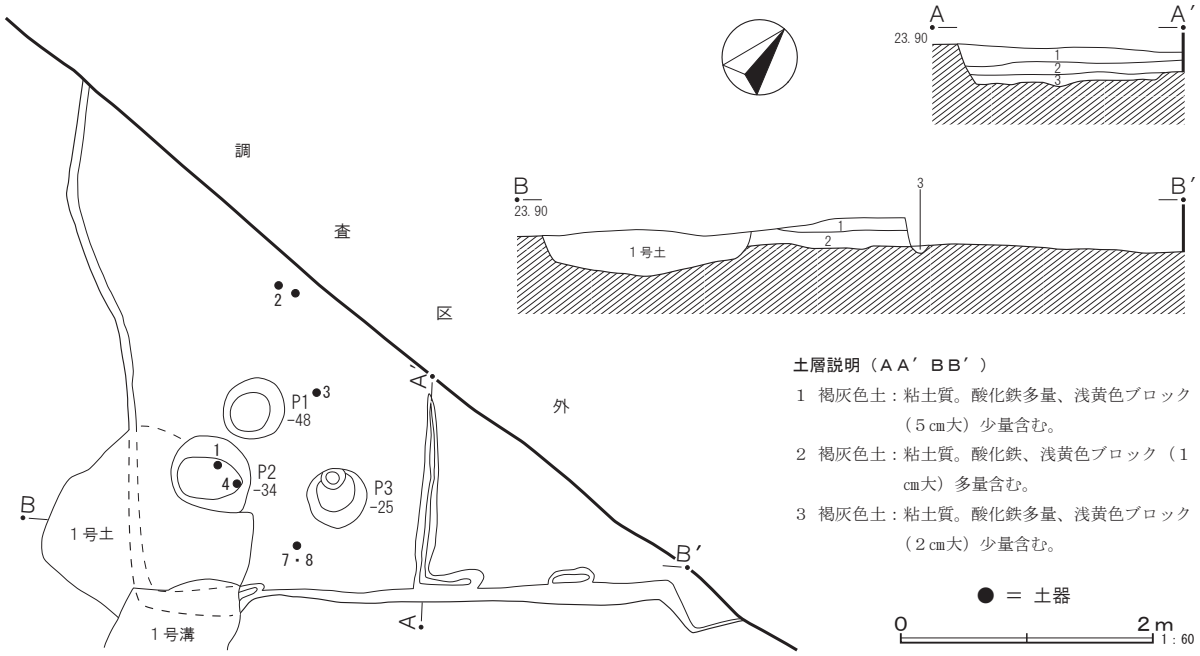
正確な規模は不明であるが、検出された南東壁は 4.8 ｍ、南西壁は 4.1 ｍ程を測る。平面プランは、隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－ 40°－Ｗを指す。確認面からの深さは、0.2 ｍ前後を測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、２層（１・２層）確認された。ほぼ水平に堆積しており、ブロックを含んでいたが、自然堆積と思われる。

壁溝は、短い壁溝が南東壁中央付近から東寄りで２箇所、南隅付近で１箇所確認された。いずれも幅は 0.1 ｍ前後、床面からの深さは 0.05 ｍ程を測る。また、南東壁中央付近の壁溝は、南西壁に併行して走る間仕切り溝が接続している。長さは 1.45 ｍ、床面からの深さは、0.05 ｍ前後を測る。覆土は、１・２層とほぼ同じ内容の層（３層）が確認された。

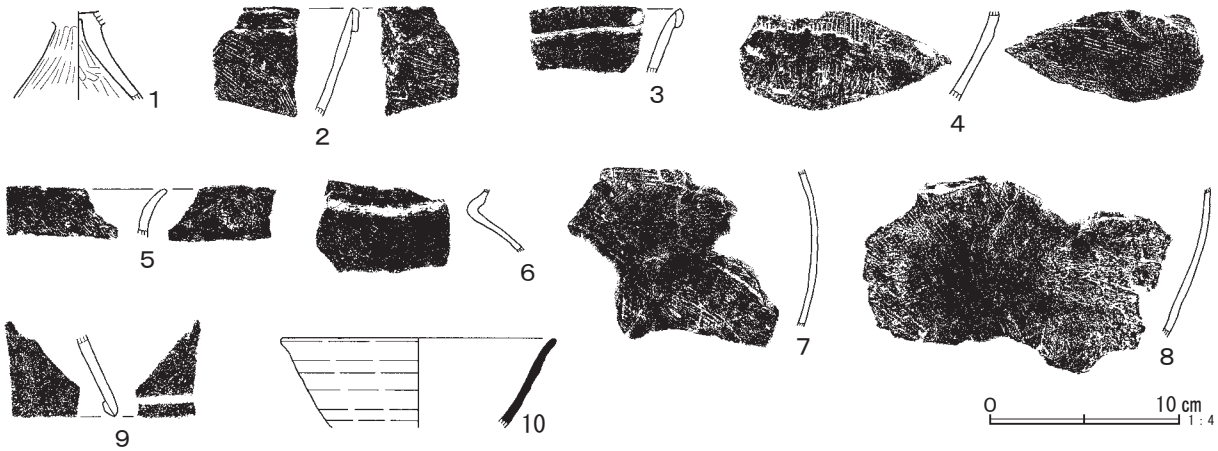
ピットは、３基検出された。ピット１は主柱穴、ピット２は貯蔵穴、ピット３は出入口に関連すると思われる。いずれも覆土は図示できなかったが、ピット１・３に柱痕跡は認められなかった。

炉跡は、確認されなかった。

出土遺物（第11図）は、土師器壺（２～４）、台付甕（５～９）、高坏（１）がある。１・４はピット２、２は床面ほぼ中央から西寄りの調査区境付近、３はピット１北東部、７・８は南隅付近の床面直上、その他は覆土からの出土である。この他にも流れ込みで平安時代の須恵器高台付椀（10）が出土した。



第 10 図　第１号住居跡



第 11 図　第１号住居跡出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　高坏	－	(4.65)	－	ABEHIKN	赤褐色	B	接～脚60%	外面大半摩耗顕著。
2	土師器　壺	－	－	－	ABDHN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
3	土師器　壺	－	－	－	ABEH	橙　色	B	口～頸部片	
4	土師器　壺	－	－	－	ABCDHK	浅黄橙色	B	胴下部片	
5	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
6	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHI	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	内外面摩耗顕著。
7	土師器　台付甕	－	－	－	ABHKN	にぶい褐色	B	胴中段片	8同一個体。
8	土師器　台付甕	－	－	－	ABHKN	外:黒褐　内:にぶい褐	B	胴中～下片	7同一個体。
9	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIK	にぶい黄橙色	B	台部片	内外面摩耗顕著。
10	須恵器高台付椀	(14.6)	(4.75)	－	ABHLN	灰　色	B	口～体20%	平安。末野産。

２～４は、土師器壺である。２・３は複合口縁部から頸部まで、４は胴下部の破片である。調整は、２の複合口縁部外面が横位のヘラミガキ、頸部外面と内面全面は斜位のハケメである。３は、摩耗が著しいため内外面ともに不明である。４は、外面が縦位のハケメ後に斜・縦位のヘラミガキ、内面は斜位のハケメが施されている。２は、胎土がやや粗い。

５～９は、土師器台付甕である。５は口縁部から頸部まで、６は口縁部下位から胴上部まで、７は胴部中段付近、８は胴部中段付近から下部まで、９は台部の破片である。６～９はＳ字甕であり、７・８は同一個体である。調整は、ハケメが主体となる。５は、口縁部外面上位が横位のヘラナデ、以下は斜位のハケメ、内面は横・斜位のハケメが施されている。胎土がやや粗い。６は、口縁部下位から頸部までが内外面ともに横ナデ、以下は外面が横位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。７・８は、外面上位が横位、下位は斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。器壁が薄い。９は、摩耗が著しいため内外面ともに不明である。裾部を折り返している。

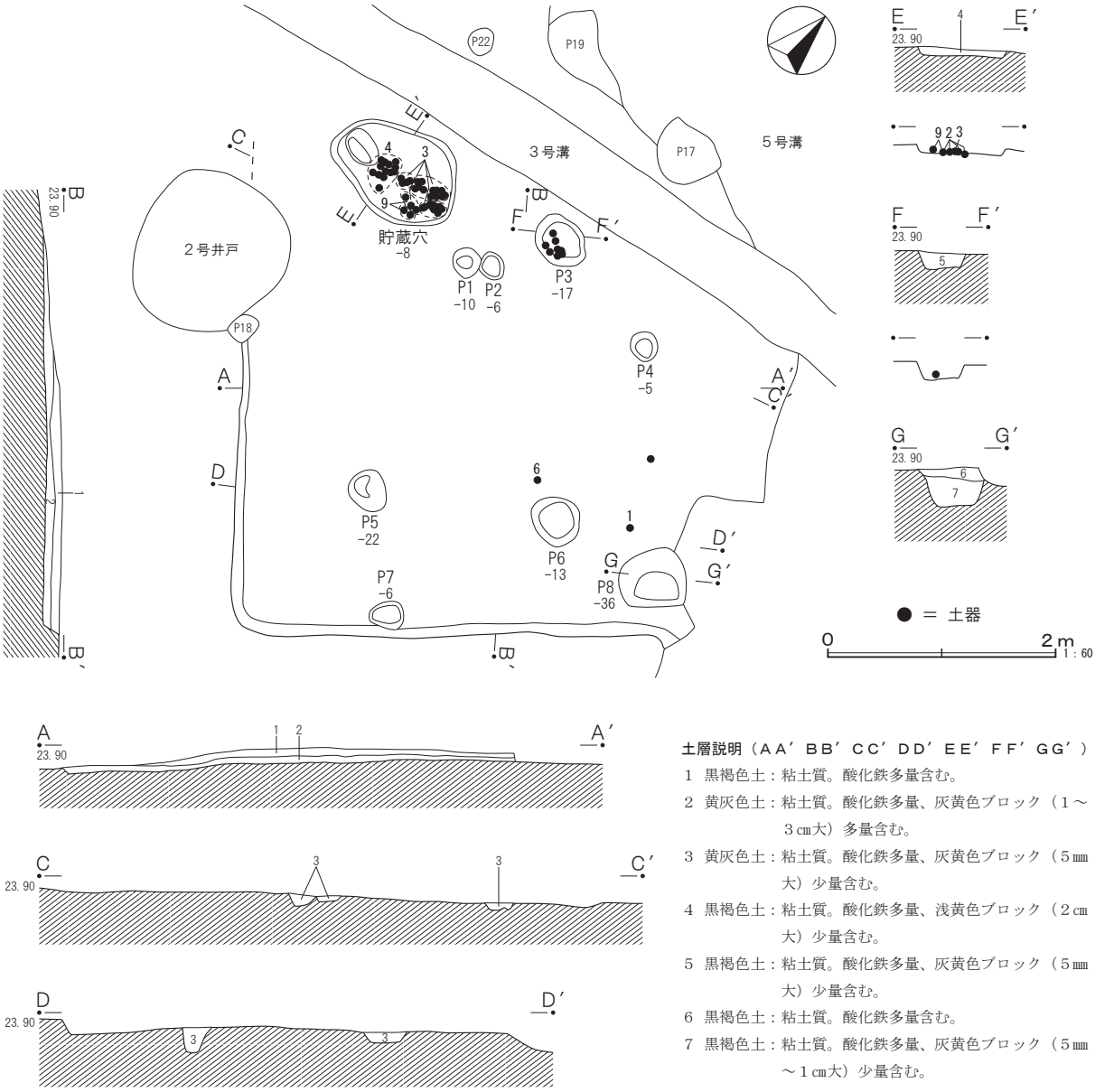
１は、土師器高坏の接合部から脚部下位までの部位であり、裾部を欠く。接合部の径が小さい。脚部は、外反しながら下る。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。

10 は、須恵器高台付椀の口縁部から体部までの部位である。末野産である。口縁部がわずかに外反し、体部はやや内湾する。調整は、内外面ともにロクロナデである。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第２号住居跡（第 12 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33・34 － 86・87 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複するが、本住居跡が最も古い。東から北側にかけて第５号溝跡、東隅付近を第 13 号溝跡、北側



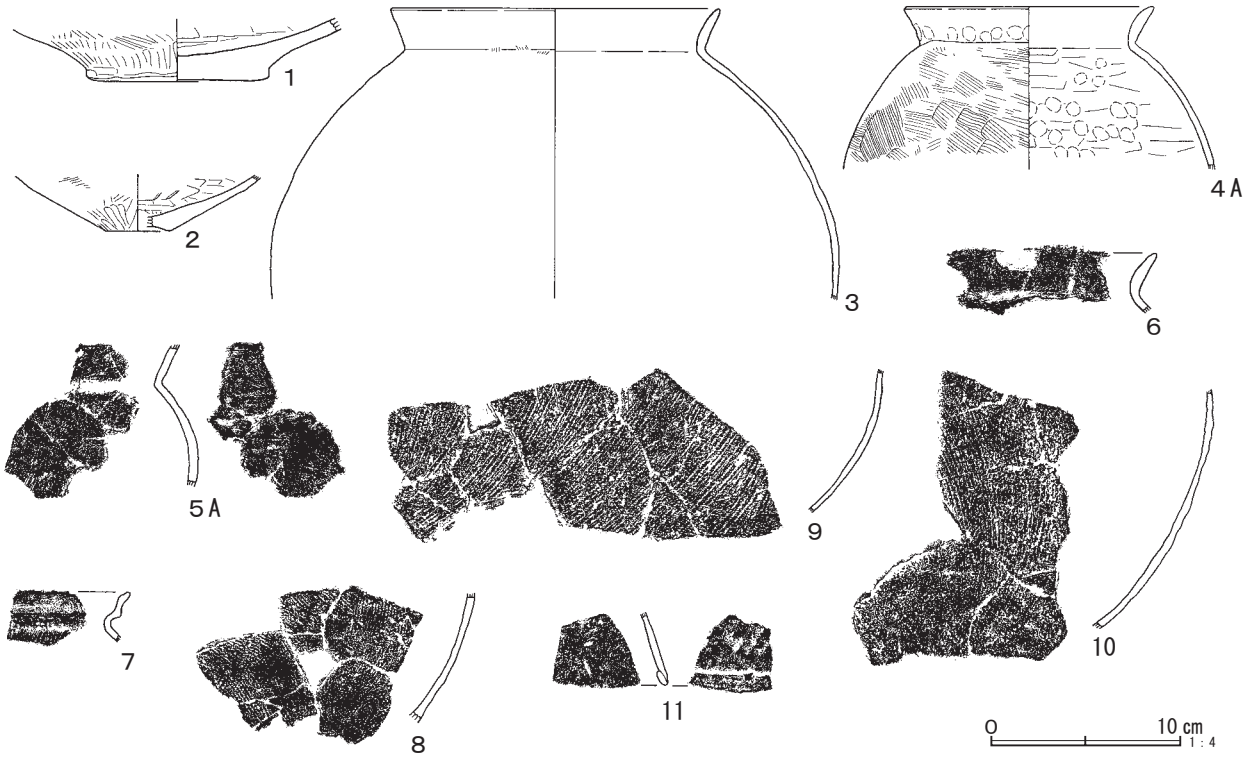
第12図　第2号住居跡

を第3号溝跡、南西壁中央付近を第2号井戸跡に切られている。北東部に位置する単独ピット17・19・22、南西壁中央付近に位置するピット18との新旧関係は、不明である。残存状態が悪い。

確認面からの掘り込みが浅く、南西壁は重複する第2号井戸跡の北西部が検出できていないため、正確な規模は不明であるが、一辺5m前後の隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－42°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.15mを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、2層（1・2層）確認された。ほぼ水平に堆積しており、下層にブロックを多量含んでいたが、自然堆積と思われる。

ピットは、8基検出された。床面中央から北西に位置するピット3、東隅に位置するピット8は、遺物が出土したこと、覆土が住居跡とほぼ同じであることから本住居跡に伴うものと判断した。その他については、その位置や覆土（3層）、深さなどから本住居跡に伴わない可能性が高い。

床面北西部では、貯蔵穴と思われる掘り込みが確認され、遺物が多数出土した。長軸1.23m、短軸



第 13 図　第２号住居跡出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	－	(3.3)	(9.6)	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	内外面やや摩耗。
2	土師器　壺	－	(3.0)	(3.4)	ABHKN	外:暗赤褐　内:にぶい橙	B	胴～底25%	外面大半剥離。
3	土師器　台付甕	(17.4)	(15.4)	－	ABHIKN	橙　色	B	口～胴20%	内外面摩耗顕著。
4	土師器　台付甕	13.2	(8.6)	－	ABEKN	橙　色	B	口～胴40%	外面大半摩耗顕著。内面赤彩、ほぼ剥落。外面赤彩？
5	土師器　壺	－	－	－	ABDHKN	外:橙　内:褐灰	B	口～胴中片	外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
6	土師器　台付甕	－	－	－	ABHIKN	外:暗赤褐　内:暗褐	B	口～胴上片	内面摩耗顕著。
7	土師器　台付甕	－	－	－	ABDEHKN	外:暗灰黄　内:にぶい黄	B	口～胴上片	
8	土師器　台付甕	－	－	－	ABEN	明赤褐色	B	胴下部片	
9	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHKN	赤褐色	B	胴中～下片	内外面やや摩耗。
10	土師器　台付甕	－	－	－	ABCEHKN	にぶい橙色	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
11	土師器　台付甕	－	－	－	ABEHIKN	橙　色	B	台部片	

0.85 mのいびつな楕円形を呈する。床面からの深さは、0.07 mと非常に浅く、西側底面はさらに深さ0.15 mを測るピット状の掘り込みになっていた。覆土は、ブロックを少量含む黒褐色土（４層）が確認された。

壁溝・炉跡は、確認されなかった。

出土遺物（第 13 図）は、土師器壺（１・２・５）、台付甕（３・４・６～11）がある。出土位置を図示した遺物は、貯蔵穴、南東部の床面直上から出土した。その他では、８が貯蔵穴、８以外は浅い覆土から出土した。

１・２・５は、土師器壺である。１・２は、胴下部から底部までの部位である。調整は、いずれも外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。５は、口縁部下位から胴部中段付近までの破片である。外面の調整は、摩耗が著しいため不明であるが、所々に縦位のハケメが残る。内面は、口縁部が横位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された横位のハケメが一部残る。胴部は、横位のヘラナデである。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

３・４・６～11は、土師器台付甕である。７～11は、Ｓ字甕である。いずれも器壁が薄い。３・４は、

口縁部から胴部中段付近までの部位である。いずれも短い口縁部が逆ハの字に開く。胴上部は半球形を呈し、最大径を中段よりやや上に持つと思われる。３の調整は、摩耗が著しいため内外面とも不明である。４は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外面がハケメ、内面はヘラナデであるが、口縁部外面下位と胴部内面は指頭圧痕も施されている。口縁部から胴上部の内面に赤彩が施されている箇所がみられたが、外面にも施されたかは不明である。６・７は、口縁部から胴上部までの破片である。６の外面調整は、口縁部が横ナデ、以下は横位のヘラナデである。内面は、摩耗が著しいため不明である。７の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外面が縦位に近い斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。８～10は、胴部中段付近から下部までに収まる破片である。調整は、いずれも外面がハケメ、内面は横・斜位のヘラナデであり、外面のハケメは、８が縦・斜位、９は斜位、10は縦位に近い斜位に施されている。11は、裾部を折り返した台部片である。調整は、内外面ともにヘラナデであり、外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。９・11は、胎土がやや粗い。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

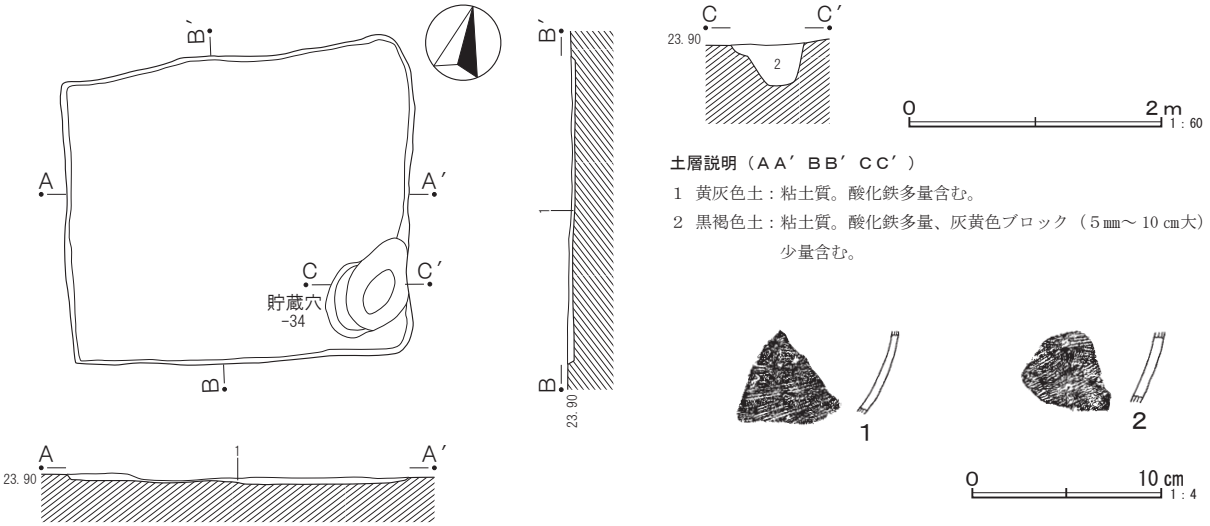
第３号住居跡（第14図）

2012（平成24）年度調査Ａ区36－85・86グリッドに位置する。同時期の第８号方形周溝墓方台部に位置するが、新旧関係は本住居跡が古いと思われる。本報告では、全形を検出した数少ない住居跡の１つであり、小さい部類に入る。

一辺2.5ｍ前後の隅丸方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－20°－Ｗを指す。確認面からの深さは、最大0.06ｍと浅い。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、混入物をほとんど含まない黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

貯蔵穴は、南東隅の床面に位置する。長軸0.88ｍ、短軸0.57ｍのいびつな楕円形を呈する。床面からの深さは、0.34ｍを測る。覆土は、ブロックを少量含む黒褐色土（２層）が確認された。

壁溝・炉跡・ピットは、確認されなかった。



第14図　第３号住居跡・出土遺物

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	
2	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	

出土遺物が少なく、図示可能なものは、土師器台付甕（第 14 図１・２）のみである。出土位置を図示できなかったが、いずれも貯蔵穴から出土した。１・２は、胴下部片である。いずれも調整は、外面が斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、第８号方形周溝墓より古い古墳時代前期と思われる。

第４号住居跡（第 15 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 36・37 － 86 グリッドに位置する。同時期の第８号方形周溝墓方台部に位置するが、新旧関係は本住居跡が古いと思われる。全形を検出した数少ない住居跡の１つで小さい部類に入るが、第３号住居跡よりやや大きい。

一辺３ｍ程のややいびつな隅丸方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－ 33°－Ｗを指す。確認面からの深さは、最大 0.05 ｍと浅い。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、炭化物を微量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的な埋め戻しか不明である　。

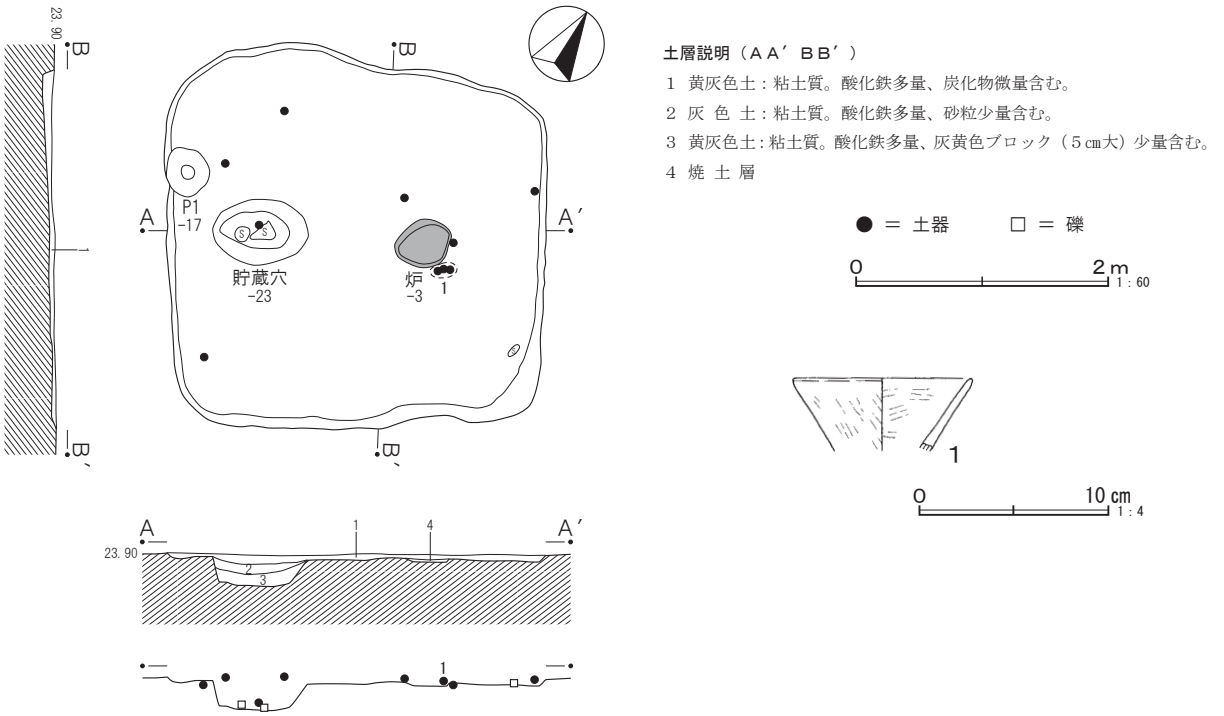
ピットは、１基のみ確認された。南西壁沿い中央からやや北西寄りの床面に位置しており、本住居跡に伴わない可能性がある。覆土は図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

炉跡は、床面中央からやや東寄りに位置する。長軸 0.46 ｍ、短軸 0.38 ｍのやや角張った楕円形を呈する。床面からの深さは、0.03 ｍと浅い。覆土は焼土（４層）のみであり、掘り方はみられなかった。

貯蔵穴は、床面中央から南西壁までの間に位置する。長軸 0.76 ｍ、短軸 0.52 ｍの楕円形を呈する。床面からの深さは、0.23 ｍを測る。覆土は、２層（２・３層）確認され、底面直上から遺物が出土した。

壁溝は、確認されなかった。

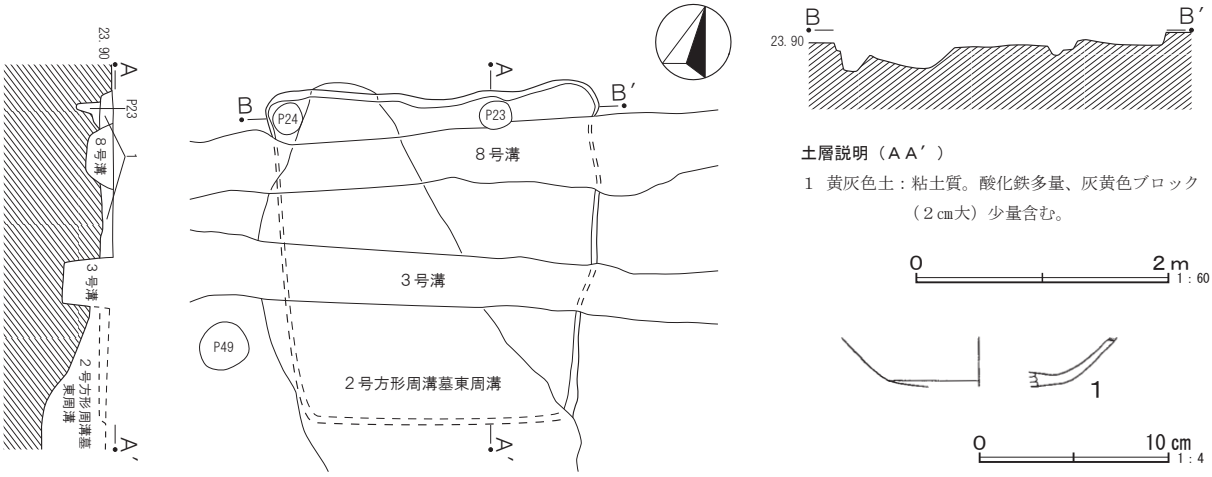
遺物は、貯蔵穴や床面ほぼ全面から少量出土したが、図示可能なものは、土師器壺（第 15 図１）の



第 15 図　第４号住居跡・出土遺物

第５表　第４号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	(9.6)	(3.9)	－	ABCEN	橙　色	B	口～頸40%	内外面摩耗顕著。



第 16 図　第５号住居跡・出土遺物

第６表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　高坏	－	(2.6)	－	ABHIKN	橙　色	B	坏部30%	内外面摩耗顕著。

みである。炉跡南東から出土した。１は、土師器小型壺の口縁部から頸部までの部位である。逆ハの字に開く。調整は、内外面ともにヘラミガキである。

本住居跡の時期は、第８号方形周溝墓より古い古墳時代前期と思われる。

第５号住居跡（第 16 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 36・37 － 86・87 グリッドに位置する。床面中央付近を第３号溝跡、その北側を第８号溝跡に切られており、西側大半で第２号方形周溝墓の東周溝上位を切っている。また、同時期の第８号方形周溝墓の方台部に位置するが、新旧関係は本住居跡が古いと思われる。北壁沿い中央からやや東寄りの床面で単独ピット 23、北西隅でピット 24 と重複するが、新旧関係は不明である。なお、西及び南壁については、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、西壁の第３・８号溝跡との重複箇所以外は実線で示すべきものである。

正確な規模は不明であるが、一辺 2.6 ｍ前後のややいびつな隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－ 20°－Ｗを指す。確認面からの深さは、最大 0.1 ｍと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、ブロックを少量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的な埋め戻しか不明である。

壁溝・ピット・炉跡・貯蔵穴は、確認されなかった。

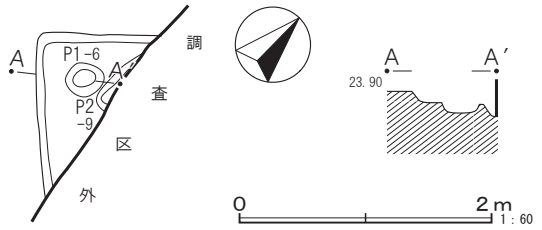
出土遺物で図示可能なものは、土師器高坏の坏部（第 16 図１）のみである。逆ハの字に大きく開き、下位に稜を持つ。調整は、内外面ともに摩耗が著しいため不明である。

本住居跡の時期は、第８号方形周溝墓より古い古墳時代前期と思われる。

第６号住居跡（第 17 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32 － 87・88 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。検出されたのは西隅付近のみであり、大半が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された南西壁は 1.25 ｍ、北西壁は 0.96 ｍを測る。平面プランは、他の住居跡と同じく隅丸方形であろうか。主軸方向は、Ｎ－ 47°－Ｗを指すと思われる。確認面から



第 17 図　第６号住居跡

の深さは、最大 0.08 mと浅い。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、図示できなかったが、混入物をほとんど含まない灰色系土が堆積していた。自然堆積と思われる。

ピットは、２基検出された。いずれもその位置と深さから本住居跡に伴わない可能性がある。覆土は、図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

壁溝・炉跡・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物はないが、本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第７号住居跡（第 18 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 31・32 － 88・89 グリッドに位置する。北隅付近を第５号溝跡に切られており、西隅付近で第 15 号溝跡を切っている。検出された南西壁中央付近で単独ピット 88 と重複するが、新旧関係は不明である。隅を含む西側のみの検出であり、大半が調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された北西壁は 2.04 m、南西壁は 3.16 mを測る。平面プランは、隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－ 49°－Wを指す。確認面からの深さは、最大 0.24 m を測る。床面は概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、２層（１・２層）確認された。ほぼ水平に堆積しており、下層にブロックを多量含んでいたが、自然堆積と思われる。

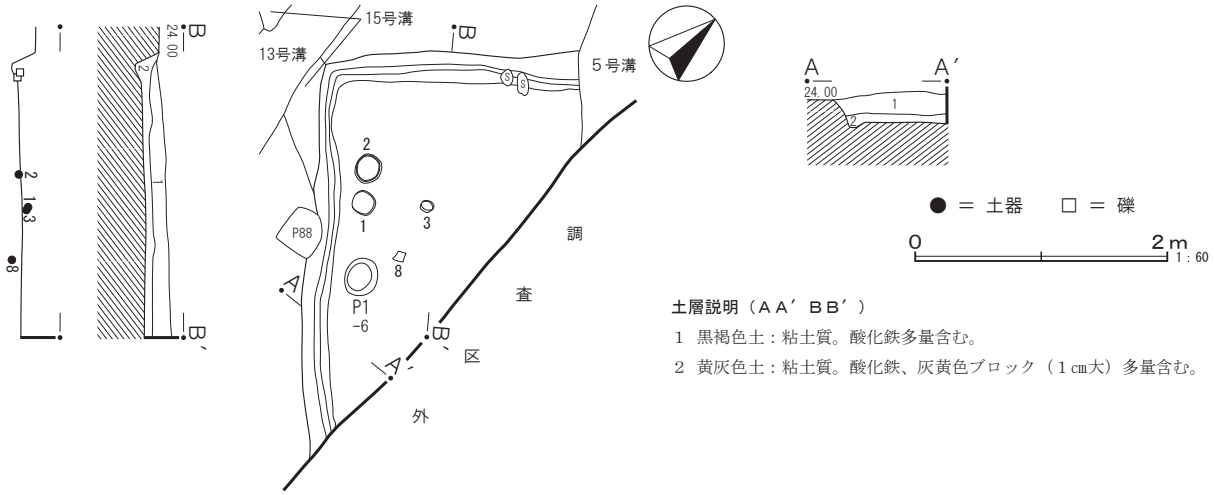
壁溝は、検出された範囲内を全周する。幅は 0.2 m、床面からの深さは 0.05 m前後を測る。

ピットは、１基のみ検出された。南西壁中央からやや南東寄りの床面に位置する。その位置・深さから本住居跡に伴わない可能性がある。覆土は、図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

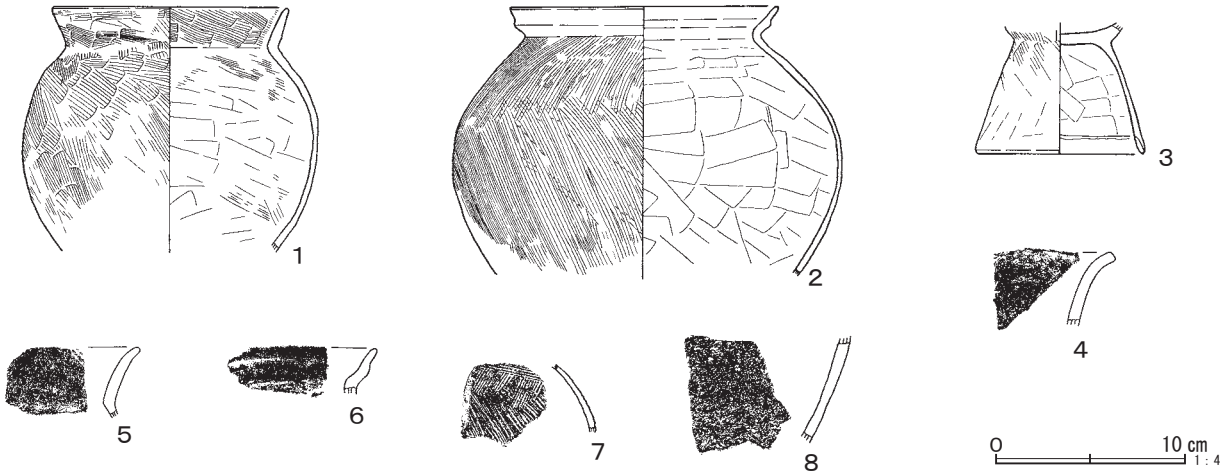
炉跡・貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第 19 図）は、土師器壺（４）、台付甕（１～３・５～８）がある。出土位置を図示した遺物は、主に南西壁沿いの床面直上から出土した。残存状態が比較的良好な１・２は、口縁部を下に向けた状態で出土した。その他は、覆土からの出土である。

４は、土師器壺の口縁部から頸部までの破片である。調整は、口縁部外面が斜位のヘラミガキ、頸



第 18 図　第７号住居跡



第 19 図　第７号住居跡出土遺物

第７表　第７号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　台付甕	(12.5)	(12.85)	－	ABEHIKN	黒褐色	B	口～胴60%	胴部内外面所々摩耗。
2	土師器　台付甕	(14.2)	(14.3)	－	ABCDHIKN	外:黒褐　内:にぶい黄褐	B	口～胴50%	内面輪積痕有。
3	土師器　台付甕	－	(6.85)	(9.0)	ABDHIKN	にぶい橙色	B	接～台60%	外面大半摩耗顕著。
4	土師器　壺	－	－	－	ABCDHKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
5	土師器　台付甕	－	－	－	ABCDHK	外:橙　内:浅黄橙	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
6	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIK	外:暗褐　内:灰黄褐	B	口～頸部片	
7	土師器　台付甕	－	－	－	ABH	外:黒褐　内:にぶい橙	B	胴上部片	
8	土師器　台付甕	－	－	－	ABHIKN	灰褐色	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。

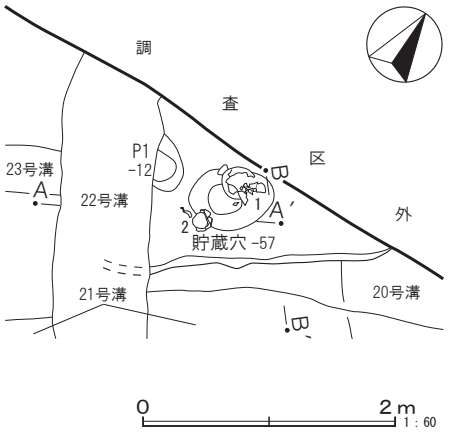
部外面は縦位に近い斜位のハケメ、内面は全面横位の粗いヘラミガキである。胎土がやや粗く、褐色粒を多量含む。

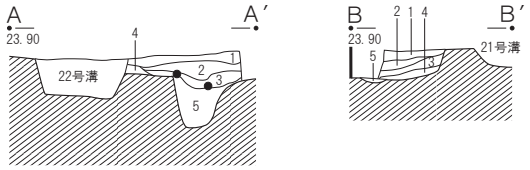
１～３・５～８は、土師器台付甕である。２・３・６・７は、Ｓ字甕である。６以外は、器壁が薄い。１・２は、口縁部から胴下部までの部位である。１は、短い口縁部が逆ハの字に開き、胴部は球形を呈する。調整は、外面全面と口縁部から頸部までの内面はハケメであるが、口縁部外面はヘラナデが一部併用されている。胴部内面はヘラナデであるが、ヘラナデ前に施されたハケメが所々に残る。２は、口縁部がＳ字状し、胴部は倒卵形を呈すると思われる。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は外面がハケメ、内面はヘラナデである。胴上部内面に輪積痕がみられた。３は、接合部から台部までの部位である。台部はやや内湾しながらハの字に下る。裾部を折り返している。調整は、接合部から台部上位の外面がハケメ、以下の外面と内面はヘラナデである。５・６は、口縁部から頸部までの破片である。調整は、５が内外面の摩耗が著しいため不明、６は内外面ともに横ナデである。７は、胴上部片である。調整は、外面が横・斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。外面のハケメは、上位が横位の羽状を呈する。８は、胴下部片である。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は摩耗が著しいため不明である。６・８は、胎土に白雲母を多量含む。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第８号住居跡（第 20 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30・31 － 89 グリッドに位置する。南東部で第 20 号溝跡を切っており、南西部を第 22 号溝跡に切られている。南隅付近のみの検出と思われ、大半が調査区外にある。なお、本住居跡南東に同時期の第 21 号溝跡と第９号住居跡が位置するが、直接的な切り合い関係にないため、新旧関係は不明である。





土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量、焼土粒、炭化物微量含む。

2 褐灰色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（５㎜大）多量、炭化物少量含む。

3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、炭化物多量含む。

4 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（３㎝大）多量、焼土粒、炭化物微量含む。

5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、焼土粒、炭化物少量含む。

第 20 図　第８号住居跡

第 21 図　第８号住居跡出土遺物

0　10 cm　1：4

第８表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　台付甕	17.2	(28.5)	－	ABDEHIKN	外:明赤褐　内:にぶい黄褐	B	口～台70%	胴部内外面輪積痕有。
2	土師器　鉢	(13.4)	9.2	3.7	ABDKN	淡赤橙　褐灰	B	70%	内面摩耗顕著。

正確な規模は不明であるが、検出された南東壁は 1.94 ｍを測る。平面プランは、隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－37°－Wを指すと思われる。確認面からの深さは、最大 0.25 ｍを測る。床面は、概ね平坦であったが、調査区外に向かってやや下る。掘り方は、みられなかった。覆土は、４層（１～４層）確認された。いずれの層も混入物を含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピットは、１基のみ検出された。南東壁と調査区のほぼ中間の床面に位置しており、西側半分を第 22 号溝跡に切られている。平面プランは、楕円形を呈すると思われる。覆土は、図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

貯蔵穴は、検出された南東壁沿い中央の床面に位置する。長軸 0.68 ｍ、短軸 0.49 ｍの楕円形を呈する。床面からの深さは、最大 0.57 ｍを測る。覆土は、焼土粒や炭化物を微量含む灰色土（５層）が確認され、残存状態の比較的良好な土器２個体が直上から出土した。

壁溝・炉跡は、確認されなかった。

出土遺物（第21図）は、土師器台付甕（１）、鉢（２）がある。いずれも貯蔵穴の覆土直上から出土した。

１は、口縁部の開きが小さく、胴部は倒卵形を呈し、最大径を中段付近に持つ。台部は、下位を欠くが、やや内湾しながら下る。調整は、胴下部から接合部付近を除く外面と口縁部から頸部までの内面がハケメ、胴下部から接合部付近の外面、胴部と台部の内面はヘラナデである。胴下部外面と胴部内面ほぼ全面に輪積痕がみられた。２は、口縁部がやや受け口状、体部は詰まった球形を呈する。調整は、体部の内外面がヘラミガキであるが、外面はヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。口縁部の内面は、ハケメである。口縁部の外面は、摩耗が著しいため不明である。器壁が薄い。胎土に褐色粒を多量含む。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第９号住居跡（第22図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30・31－89・90グリッドに位置する。南西壁付近を第22号溝跡に切られており、北隅付近で第20号溝跡を切っている。東隅付近は、調査区外にある。北隅付近については、第20号溝跡との新旧関係を平面的に確認できなかったが、土層断面観察の結果、本住居跡が新しいことが判明した。従って、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、本来は実線で示すべきものである。なお、本住居跡北西に同時期の第21号溝跡と第９号住居跡が位置するが、直接的な切り合い関係にないため、新旧関係は不明である。

長軸4.5ｍ、短軸は推定で3.3ｍ程を測り、平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－37°－Ｗを指す。確認面からの深さは、最大0.18ｍを測る。床面は、やや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、北東部のみの確認であるが、４層（１～４層）確認された。混入物をほとんど含まず、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

壁溝は、検出された南東壁及び北西壁沿いに巡る。幅は0.2ｍ、床面からの深さは0.1ｍ前後を測る。

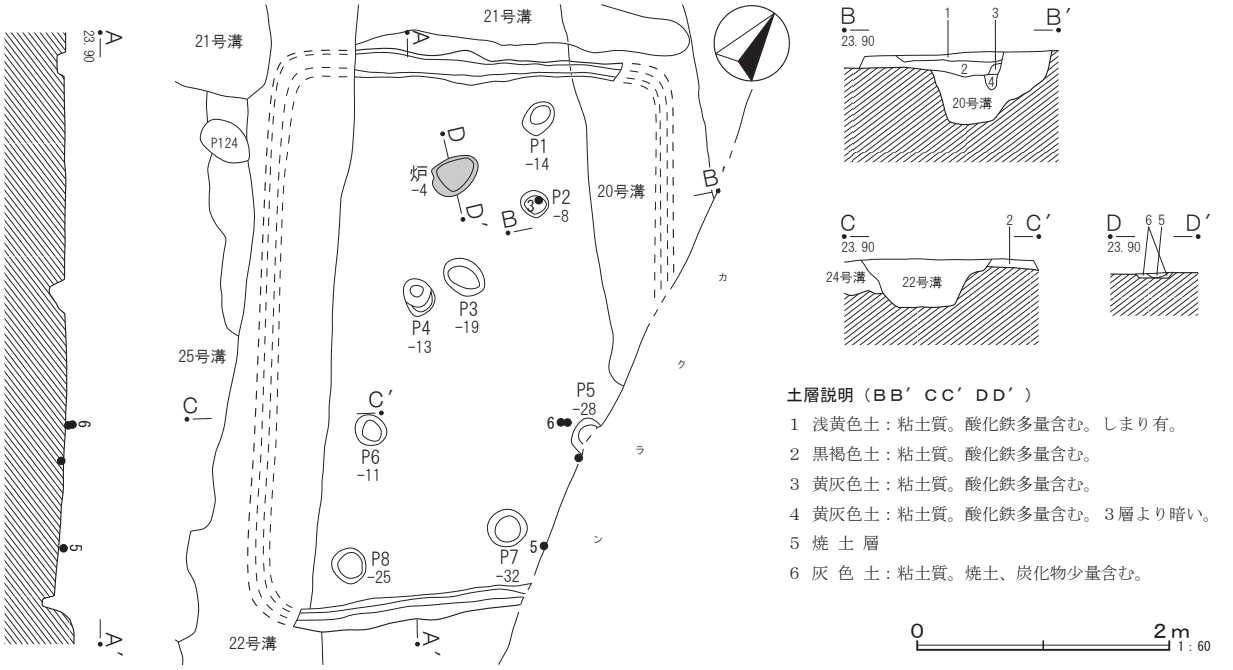
ピットは、８基検出された。ピット５・６は主柱穴、ピット７・８は出入口に関連すると思われる。その他については、遺物が出土したピット２も含め、その位置から本住居跡に伴わない可能性がある。いずれのピットも覆土を図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

炉跡は、床面中央と北西壁のほぼ中間に位置する。長軸0.4ｍ、短軸0.28ｍのややいびつな楕円形を呈する。床面からの深さは、0.04ｍと非常に浅い。覆土は、上層で焼土（５層）、下層で掘り方（６層）が確認された。

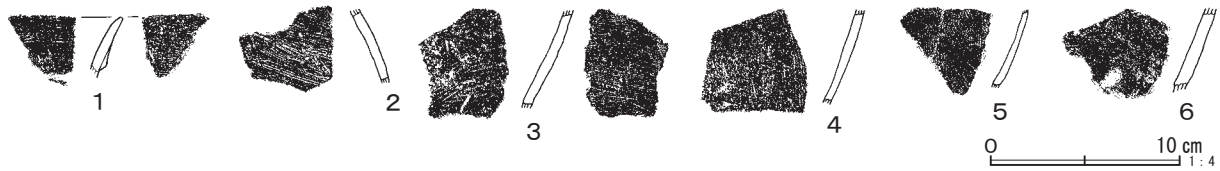
貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物（第23図）で図示可能なものは、土師器壺（１）、台付甕（２～６）がある。すべて破片である。３はピット２、５はピット７東、６はピット５西から出土した。その他は、覆土から出土した。

１は、土師器壺の複合口縁部の破片である。調整は、外面全面と口縁部内面上位が横ナデ、口縁部内面下位は横・斜位のハケメである。２～６は、土師器台付甕である。２のみ胴上部、その他は胴下部の破片である。調整は、３のみ内外面ともにハケメ、その他は外面がハケメ、内面はヘラナデであ



第 22 図　第９号住居跡



第 23 図　第９号住居跡出土遺物

第９表　第９号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器　壺	－	－	－	ACDHIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	
2	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHKN	外:にぶい黄褐　内:にぶい橙	B	胴上部片	
3	土師器　台付甕	－	－	－	ABCDHKN	橙　灰褐	B	胴下部片	
4	土師器　台付甕	－	－	－	ADHN	外:灰褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内外面やや摩耗。
5	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIK	外:暗褐　内:浅黄橙	B	胴下部片	
6	土師器　台付甕	－	－	－	ABHIKN	外:褐灰　内:暗灰	B	胴下部片	

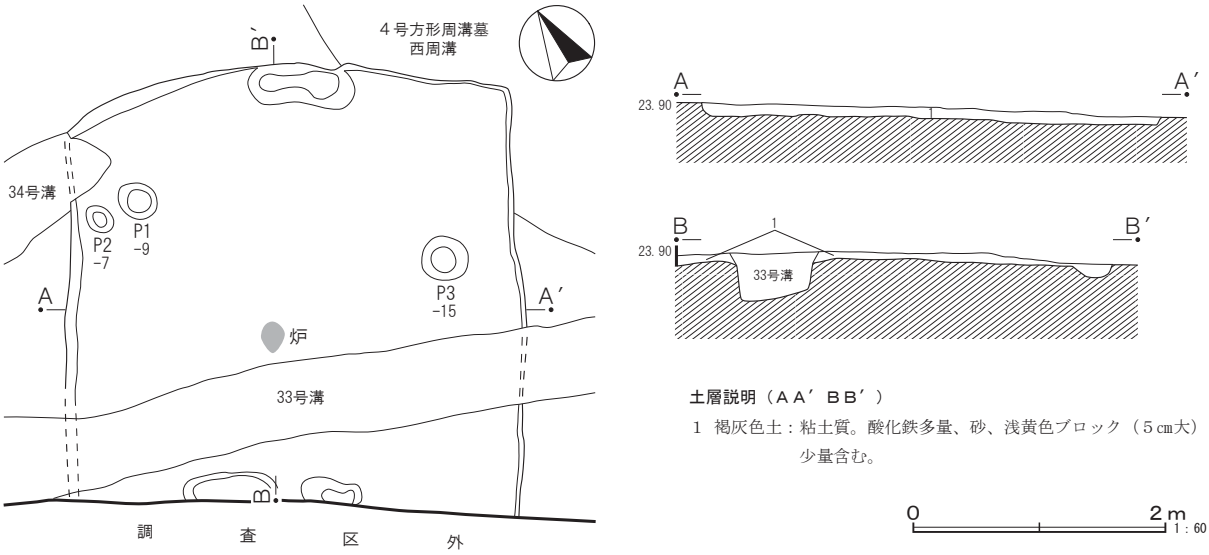
る。外面のハケメは、２・５・６が斜位、３は横・斜位、４は縦位に近い斜位に施されており、３の内面は横位に施されている。内面のヘラナデは、２が斜位、４～６は横・斜位に施されている。３は、胎土がやや粗い。

本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第 10 号住居跡（第 24 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 38・39 － 91 グリッドに位置する。東隅付近で第４号方形周溝墓の西周溝上位を切っており、中央からやや南側にかけて第 33 号溝跡に切られている。南西壁付近は、調査区外にある。北隅で重複する第 34 号溝跡との新旧関係は、土層断面で確認できなかったが、出土遺物などから本住居跡が古いと思われる。

正確な規模は不明であるが、一辺 3.5 m前後の隅丸方形を呈すると思われる。主軸方向は、N－60°－Wを指す。確認面からの深さは、最大0.1 mを測る。床面は、やや南東方向に下るが、概ね平坦であった。掘り方は、みられなかった。覆土は、ブロックを少量含む褐灰色土による単一層（１層）であったが、自然堆積と思われる。



第 24 図　第 10 号住居跡

壁溝は、北東壁及び南西壁の中央付近に巡る。前者は１箇所、後者は２箇所みられ、いずれも長さが 0.48 ～ 0.84 ｍと短い。幅は 0.3 ｍ、床面からの深さは 0.07 ｍ前後を測る。

ピットは、３基検出された。いずれもその位置から本住居跡に伴わない可能性がある。覆土は図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

炉跡は、床面ほぼ中央よりやや南に位置する。掘り込みはなく、長軸 0.22 ｍ、短軸 0.16 ｍの範囲で焼土が確認されたにとどまる。

貯蔵穴は、確認されなかった。

出土遺物はないが、本住居跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第 11 号住居跡（第 25 図）

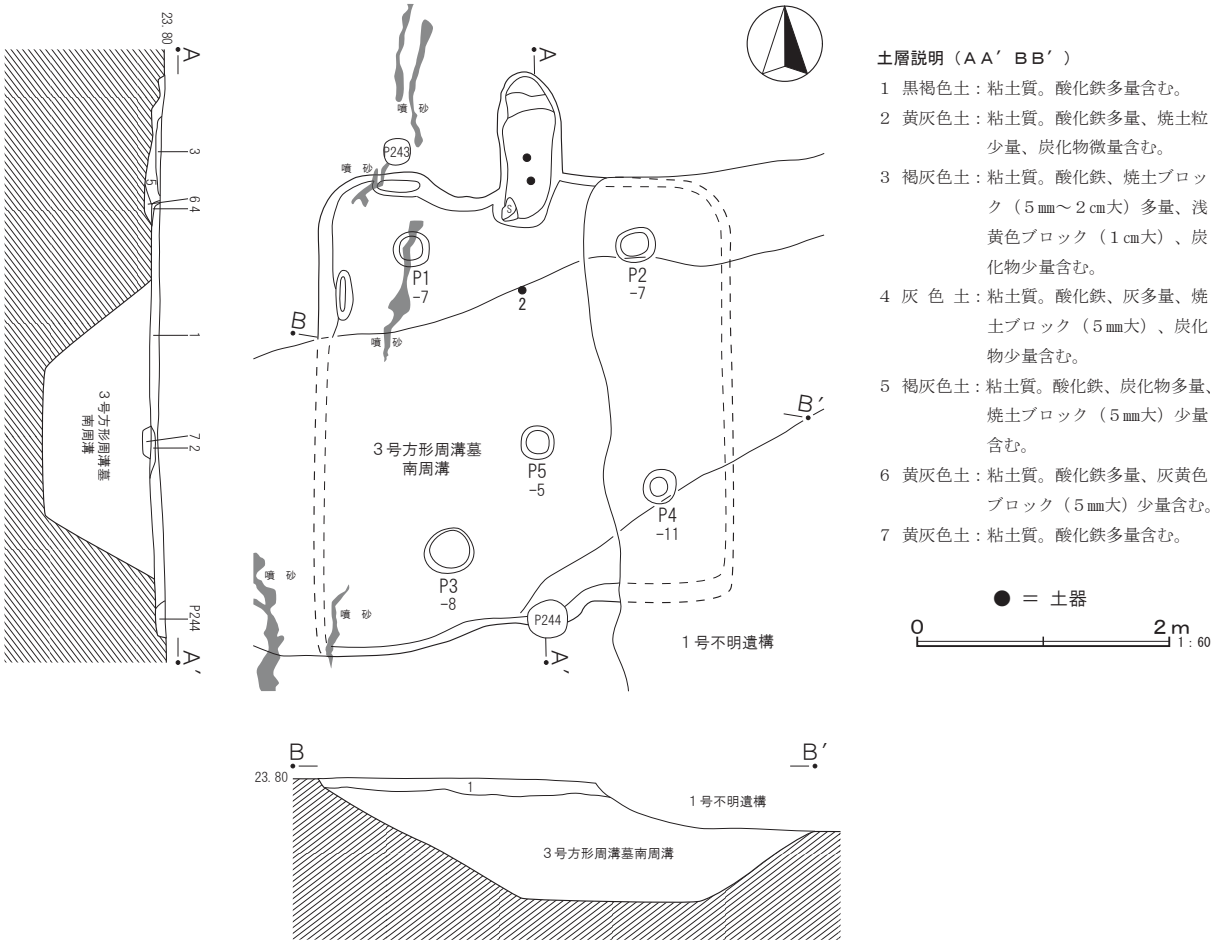
2011（平成 23）年度調査Ｂ区 31・32 － 91・92 グリッドに位置する。南壁西側を除く南側大半で第３号方形周溝墓の南周溝上位を切っており、東側を第１号不明遺構、南壁ほぼ中央を単独ピット 244 に切られている。なお、西壁南側の第３号方形周溝墓南周溝との重複箇所については、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、本来は実線で示すべきものである。

長軸 3.85 ｍ、短軸は推定で 3.35 ｍ程を測り、平面プランは、隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向は、Ｎ－１°－Ｅを指し、ほぼ東西南北に軸が揃う。確認面からの深さは、最大 0.13 ｍと浅い。床面は、概ね平坦であり、掘り方はみられなかった。覆土は、２層（１・２層）確認された。床面中央付近でのみ確認された２層で焼土粒や炭化物が確認されたが、その他はほとんど混入物を含まない黒褐色土（１層）であった。自然堆積と思われる。

カマドは、北壁中央に設けられており、袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部まで縦長の土坑状を呈する掘り込みになっており、煙道部先端手前に段を持つ。壁外への張り出しは、0.81 ｍと短い。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層が多く確認された。

壁溝は、西壁沿い北側とカマド西側の北壁沿いで確認された。いずれも長さ 0.4 ｍ程と短く、幅は 0.13 ～ 0.18 ｍ、床面からの深さは 0.05 ｍ前後を測る。

ピットは、５基検出された。いずれも浅いが、ピット１～４はその位置から主柱穴と思われる。ピッ



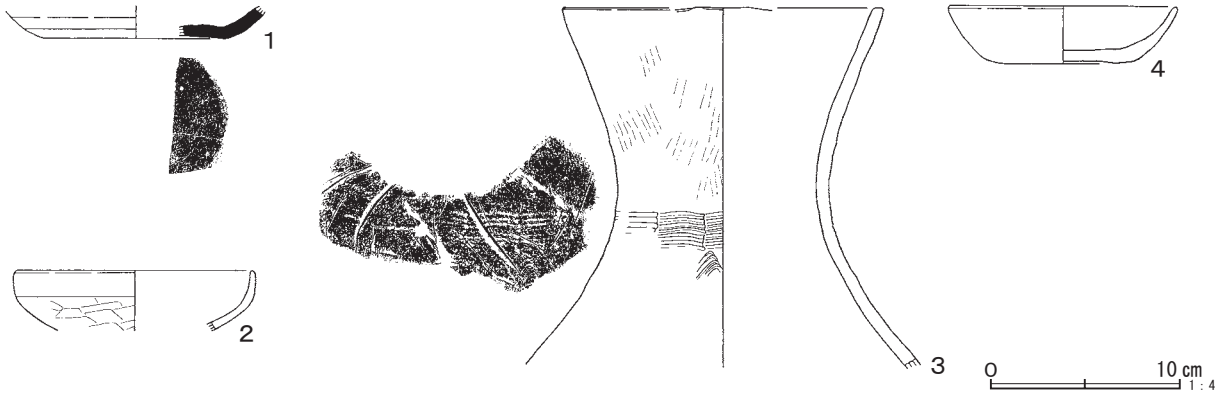
第 25 図　第 11 号住居跡

ト５は、床面中央付近に位置していることから屋根などを支えるものであろうか。ピット５以外、覆土を図示できなかったが、いずれも柱痕跡は認められなかった。

貯蔵穴は、確認されなかった。

本住居跡に伴う出土遺物（第 26 図）で図示可能なものは、須恵器坏（１）、土師器坏（２）のみであるが、この他にも図示不可能な同時期の須恵器坏、土師器甕の小片が出土した。２は、カマドと本住居跡中央との間の床面直上から出土した。また、弥生土器壺（３）、中世の土師質土器かわらけ（４）も出土したが、３は第３号方形周溝墓、４は第１号不明遺構からの流れ込みと思われる。

１は、須恵器坏の体部から底部までの部位である。南比企産である。底径が大きい。調整は、体部内外面がロクロナデであるが、外面下位は回転ヘラ削りが施されている。底面は、全面回転ヘラ削りである。体部内外面上位に自然釉が付着している。２は、土師器坏である。底部を欠く。口縁部がほぼ直立し、体部は底部に向かって緩やかに下る。調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部外面と底部はヘラ削りである。３は、弥生時代後期初頭の壺の口縁部から肩部までの部位である。端部が角張った口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。以下は、下位に向かって緩やかに広がる。外面文様は、頸部に４本一単位の櫛歯状工具による簾状文が２段、直下に同一工具による波状文が１段巡る。調整は、摩耗が著しいため内面は不明であるが、外面はヘラミガキである。器壁が厚い。４は、中世の在地系土師質土器かわらけである。大型で口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。調整は、内外面



第 26 図　第 11 号住居跡出土遺物

第 10 表　第 11 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	－	(1.75)	(9.6)	ABDFH	灰白色	B	体～底20%	南比企産。体部内外面上位自然釉付着。
2	土師器　坏	(12.8)	(3.2)	－	ABHIKN	橙　色	B	口～体20%	
3	弥生土器　壺	(16.9)	(19.0)	－	ABEHIN	外:橙　内:明赤褐	B	口～胴40%	弥生後。内外面摩耗顕著。
4	土師質かわらけ	(12.1)	3.05	7.5	BC	外:橙　内:淡橙	B	85%	中世。在地系。

ともに摩耗が著しいため不明である。器壁が厚く、胎土が粉っぽい。

本住居跡の時期は、奈良時代と思われる。

2　掘立柱建物跡

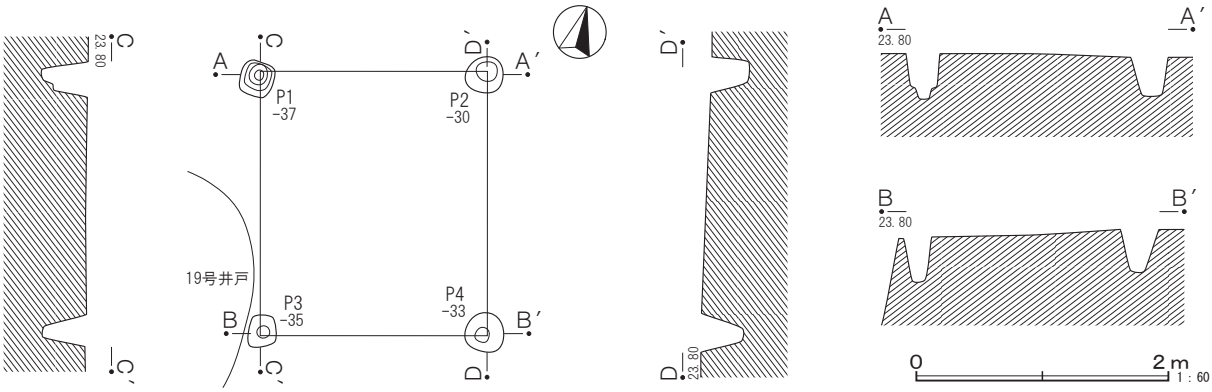
第 1 号掘立柱建物跡（第 27 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 33 － 93・94 グリッドに位置する。第 6 号方形周溝墓の方台部に位置しており、南西に第 19 号井戸跡が隣接する。新旧関係は、第 6 号方形周溝墓より新しいことは確実であるが、第 19 号井戸跡とは不明である。

１×１間の建物跡である。主軸方向は、Ｎ－ 17°－Ｗを指す。ピットは、４基検出された。柱間は、２ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.35 ｍ前後を測るが、平面プランは、ピット１・３が一辺 0.25 ｍ前後の方形、ピット２・４は径 0.3 ｍ前後の円形を呈する。覆土は図示できなかったが、柱痕跡は認められなかった。

遺物は、ピット２から奈良・平安時代の土師器甕の小片が微量出土したが、図示不可能であり、流れ込みと思われる。

本建物跡の時期は、中世以降と思われる。



第 27 図　第 1 号掘立柱建物跡

３　溝跡

第１号溝跡（第 28・29 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32・33 － 85・86 グリッドに位置する。南東部を第２・３号溝跡、南西部を第５号溝跡、北西部を第１号土坑に切られている。北側に位置する第１号住居跡とは直接的な切り合い関係にないが、重複する第１号土坑との新旧関係から本溝跡が古いと思われる。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、2.47 ｍと短い。幅は概ね１ｍ、確認面からの深さは、0.15 ｍ前後を測るが、底面北東部はピット状の掘り込みになっていた。底面からピット状の掘り込みの深さは、0.1 ｍを測る。断面形は、概ね逆台形状を呈するが、南東部の立ち上がり中段付近に段を持つ。覆土は、３層（13 ～ 15 層）確認された。いずれの層も混入物がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の須恵器・土師器の小片が少量出土したが、図示不可能であり、本溝跡に伴うものか不明である。

本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から古墳時代前期以前としか言えない。

第２号溝跡（第 30 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32・33 － 85・86 グリッドに位置する。西端で南側をほぼ併走する第３号溝跡に切られており、ほぼ同所で第１号溝跡を切っている。以東は、調査区外に延びる。

南西から北東方向に走る。検出された長さは3.54 ｍと短い。幅は概ね0.45 ｍ、確認面からの深さは、0.15 ｍ前後を測る。断面形は、やや横長の逆台形状を呈する。覆土は、灰色土による単一層（８層）であった。ブロックを多量、軽石を少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第 38 図）で図示可能なものは、奈良・平安時代の須恵器蓋（２－１）、中世の瓦質土器焙烙（２－２）があるが、本溝跡に伴うのは前者であり、後者は流れ込みと思われる。この他にも古墳時代前期の土師器、奈良・平安時代の土師器、中世の陶器の小片が少量出土したが、図示不可能であった。

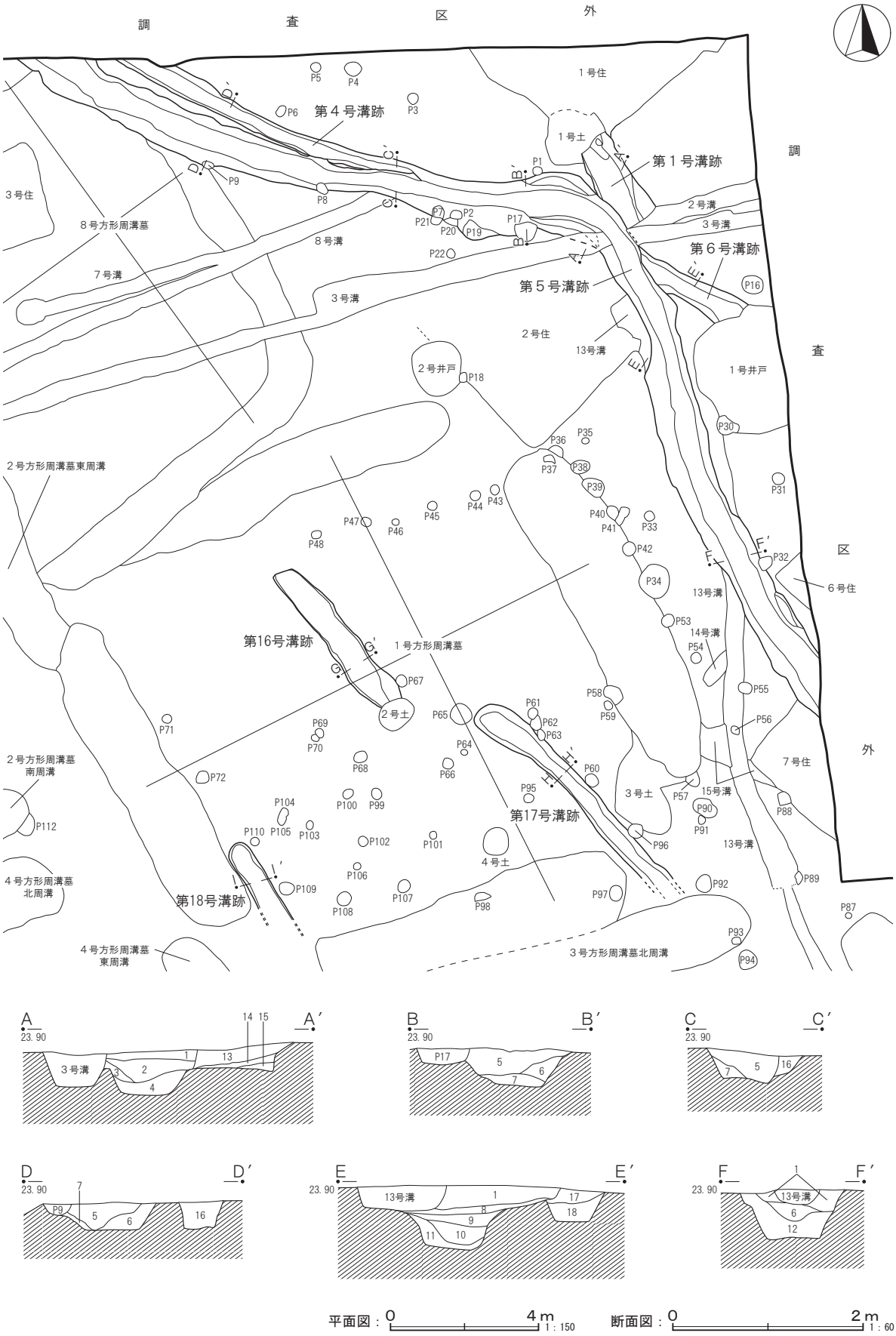
２－１は、須恵器蓋のつまみを含む天井部付近の部位である。末野産である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、つまみ外周に回転ヘラ削りが施されている。焼成が悪い。２－２は、在地系瓦質土器焙烙の口縁部から体部までの破片である。調整は、内外面が回転ナデ、体部外面は横位のヘラ削りである。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

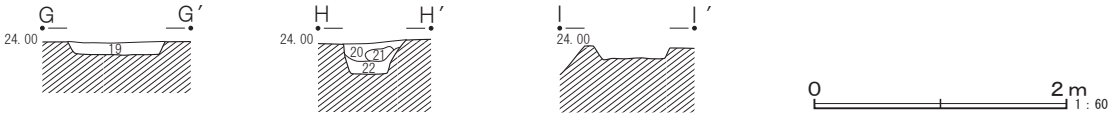
第３号溝跡（第 30 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区 32 ～ 37 － 85 ～ 87 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複するが、本溝跡が最も新しい。32・33 － 85・86 グリッド境付近で第１・２・５号溝跡、33 － 86 グリッドで第２号住居跡、34 ～ 37 － 86・87 グリッドで第８号方形周溝墓、36 － 86・87 グリッドで第５号住居跡と第２号方形周溝墓東周溝を切っている。以東は、調査区外に延びるが、2019（令和元）年度報告『諏訪木遺跡Ⅴ　上之古墳群第３・４号墳』の第３号溝跡と同一遺構と思われる。

南西から北東方向に走る。検出された長さは、25.55 ｍと長い。幅は概ね 0.5 ｍ前後を測るが、34 － 86 グリッド中央付近と南西端の 37 － 87 グリッドは、幅広であった。34 － 86 グリッド中央付近は、



第28図　第１・４～６・16～18号溝跡（１）



第１号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
13 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、焼土粒、炭化物微量含む。
14 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
15 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎜大）多量含む。

第４号溝跡
土層説明（ＣＣ′ ＤＤ′）
16 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、灰黄色ブロック（１㎝大）少量含む。

第５号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＤＤ′ ＥＥ′ ＦＦ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量含む。
4 灰色粘土：酸化鉄多量含む。
5 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
6 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
7 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量含む。
8 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、黄灰色ブロック（５㎜大）少量含む。
9 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、黄灰色ブロック（５㎜大）少量含む。８層より明るい。
10 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
11 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、黄灰色ブロック（１㎝大）多量、砂少量含む。
12 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎜大）多量含む。

第６号溝跡
土層説明（ＥＥ′）
17 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
18 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量含む。

第 16 号溝跡
土層説明（ＧＧ′）
19 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１㎝大）少量含む。

第 17 号溝跡
土層説明（ＨＨ′）
20 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量含む。
21 灰黄色ブロック：粘土質。
22 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、砂、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第 29 図　第１・４～６・16 ～ 18 号溝跡（２）

北西部が方形状に張り出しており、幅は 0.98 ｍを測る。底面に木組による遺構が設けられており、長さ 0.47 ～ 0.73 ｍを測る棒状の木材２本が西からみてＬ字状に組まれていた。そして、そのＬ字状の木組下に約 0.3 ｍ四方を測る板状の木材が敷かれていた。南西端の 37 － 87 グリッドの幅は、0.82 ｍを測り、土坑状を呈していた。確認面からの深さは、北東部が 0.3 ｍ、木組遺構東側が 0.45 ｍ、木組遺構西側が 0.25 ｍ、南西部が 0.4 ｍ前後を測り、深さが一定していない。断面形は、逆台形状を呈するが、幅広い箇所は横長、その他はやや縦長であった。覆土は、計７層（１～７層）確認された。確認した箇所で混入物が異なるが、総じて灰色土が堆積しており、土層が複数確認された箇所ではレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第 38 図）で図示可能なものは、瓦質土器火鉢（３－１）のみである。この他にも流れ込みで古墳時代前期の土師器壺（３－２）、台付甕（３－３）が出土した。

３－１は、在地系瓦質土器火鉢の体部片である。調整は、内外面ともにヘラナデであり、外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。３－２・３は、古墳時代前期の土師器である。３－２は、壺の胴下部片である。調整は、外面が斜位のやや粗いヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。３－３は、台付甕の胴部中段付近から下部までの破片である。調整は、内外面ともにハケメであり、外面は斜位、内面は上位大半が横位、下位は斜位に施されている。

本溝跡の時期は、近世と思われる。

第４号溝跡（第 28・29 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区 34・35 － 85 グリッドに位置する。34 － 85 グリッド南東部で南をほぼ併走する第５号溝跡に切られている。北西端以降は、調査区外に延びる。なお、本溝跡南東部の 32・33 － 86 グリッドに位置する第６号溝跡は、本溝跡の延長上にあり、同方向に走ることから同

一遺構の可能性がある。

南東から北東方向に走る。検出された長さは8.94ｍを測る。幅は、南東部が0.5ｍ前後を測るが、北西部は0.9ｍ程と広い。確認面からの深さは、概ね0.3ｍ前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、黒褐色土による単一層（16層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第38図）で図示可能なものは、古墳時代前期の土師器台付甕（４－１）のみである。この他にも器種不明の土師器小片が少量出土したが、図示不可能であった。すべて流れ込みと思われる。

４－１は、土師器台付甕の口縁部から胴上部までの破片である。調整は、内面全面と口縁部外面が横ナデであるが、内面は横ナデ前に施された横位のハケメが残る。頸部から胴上部の外面は、縦位に近い斜位の細かいハケメが施されている。

伴う出土遺物はないが、本溝跡の時期は、その走行方向などから奈良・平安時代と思われる。

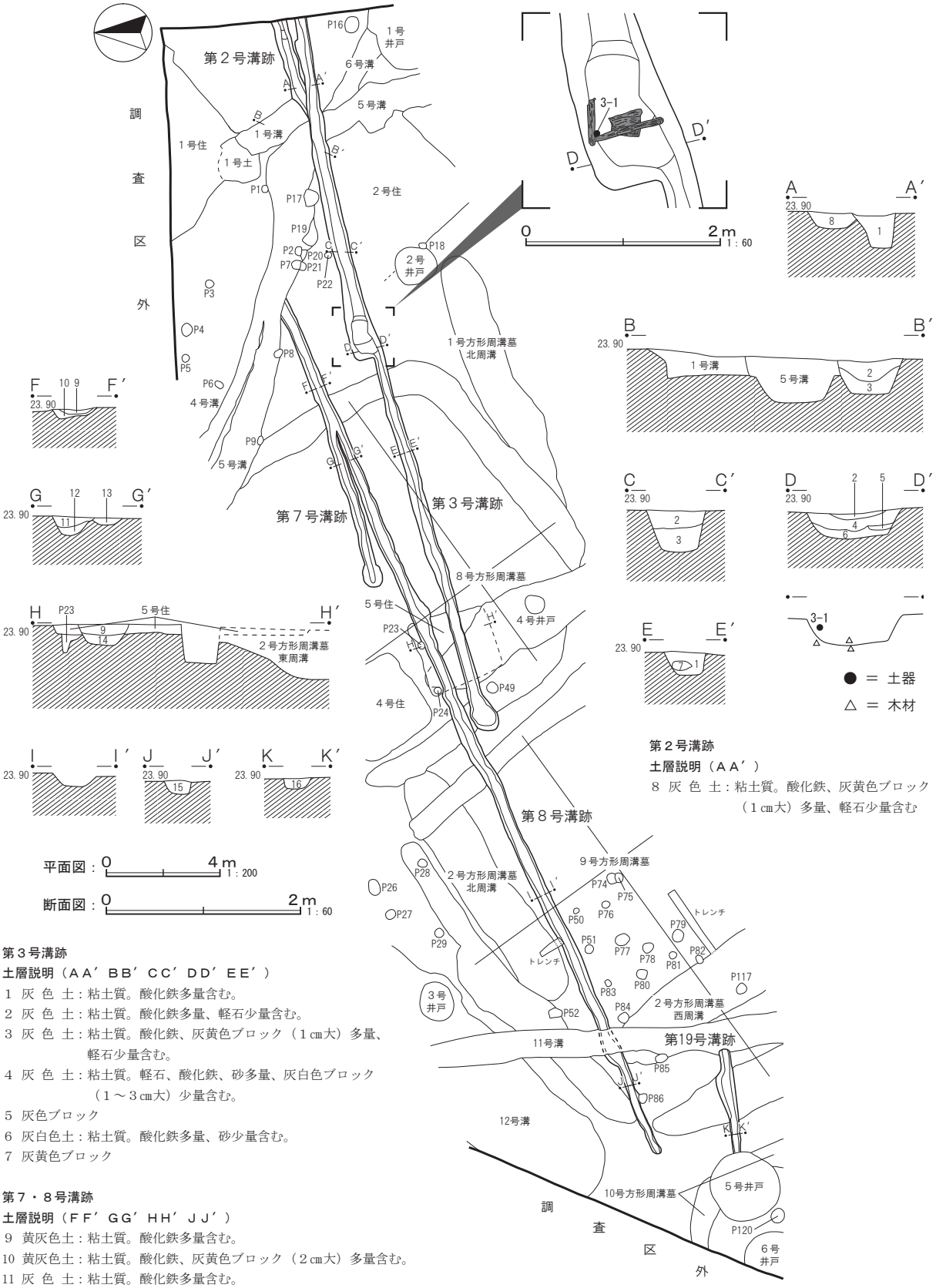
第５号溝跡（第28・29図）

2012（平成24）年度調査Ａ・Ｂ区32～36－85～88グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。32・33－86・87グリッドで第13号溝跡、33－86グリッドで第３号溝跡に切られており、32－88グリッドで第７号住居跡、33－86グリッドで第２号住居跡、33－85・86グリッド境で第１号溝跡、34－85グリッドで第４号溝跡、35・36－85グリッドで第８号方形周溝墓を切っている。34－85グリッドで重複する第８号溝跡との新旧関係は、出土遺物から本溝跡が古いことが判明した。所々で重複する単独ピットとの新旧関係は、不明なものが多い。北西及び南東端以降は、調査区外に延びるが、南東部は本溝跡の延長上にあり、同方向を走る第22号溝跡と同一遺構の可能性が高い。

32・33－86～88グリッドでは、南東から北西方向にやや蛇行しながら走るが、33－85・86グリッドで西へほぼ直角に曲がり、34－85グリッド以西は北西方向に走る。検出された長さは28.85ｍ、幅は、バラツキがみられたが、概ね1.2ｍ前後を測る。西に屈曲する33－85・86グリッドでは、南北両側の立ち上がり、32－87・88グリッドでは東側の立ち上がりにテラス状の段が設けられていた。確認面からの深さは、33～36－85・86グリッドが0.3ｍ前後、32・33－86～88グリッドは0.6ｍ前後を測り、北西から南東に向かって深くなる。断面形は、やや横長の逆台形状を呈する。覆土は、計12層（１～12層）確認された。確認した箇所で若干異なるが、総じて黄灰色土が多く確認された。ブロックを含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第38図）は、須恵器高台付椀（５－１）、瓶（５－２）、甕（５－３～５）がある。５－１・２は35－85グリッド、５－３は33－86グリッド、５－４・５は32－88グリッドから出土した。この他にも流れ込みで弥生時代中期後半～後期初頭と思われる磨石（５－６）、古墳時代前期の土師器壺（５－７・８）、高坏（５－９・10）、台付甕（５－11～13）が出土した。５－６・８は32－88グリッド、５－７・９・11～13は35－85グリッド、５－10は32－87グリッドの出土である。

５－１～５は、須恵器である。５－１・４は末野産、５－２・３は南比企産、５－５は不明である。５－１は、高台付椀の口縁部から体部までの部位である。口縁部が外反し、体部は内湾する。調整は、内外面ともにロクロナデである。酸化焔焼成である。５－２は、瓶の胴下部から底部までの部位であり、高台部を欠く。調整は、外面が回転ヘラ削り、内面はロクロナデである。５－３～５は、甕の胴



第３号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＤＤ′ ＥＥ′）
1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、軽石少量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量、軽石少量含む。
4 灰 色 土：粘土質。軽石、酸化鉄、砂多量、灰白色ブロック（１～３㎝大）少量含む。
5 灰色ブロック
6 灰白色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
7 灰黄色ブロック

第７・８号溝跡
土層説明（ＦＦ′ ＧＧ′ ＨＨ′ ＪＪ′）
9 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
10 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（２㎝大）多量含む。
11 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
12 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量含む。
13 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
14 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎝大）少量含む。
15 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第２号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
8 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量、軽石少量含む

第19号溝跡
土層説明（ＫＫ′）
16 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜～１㎝大）少量含む。

第30図　第２・３・７・８・19号溝跡

下部片である。調整は、いずれも外面がタタキ、内面はあて具痕がみられたが、５－３は内面のあて具痕に横・斜位のヘラナデ、５－４は外面のタタキ上位にカキ目、下位は斜位のヘラナデ、５－５は外面のタタキに斜位のヘラナデが施されている。５－３は、外面に自然釉がやや付着している。

５－６は、弥生時代のものと思われる砂岩製の磨石である。約２/３の残存と思われる。一面のみ極めて平滑である。５－７～13は、古墳時代前期の土師器である。５－７・８は、壺である。５－７は、口縁部から頸部までの部位である。複合口縁部から頸部が逆ハの字に開く。調整は、口縁部外面が横ナデ、頸部外面はハケメ、内面はヘラミガキである。５－８は、口縁部から肩部までの部位である。端部がやや角張った口縁部から頸部がやや外反しながら立ち上がる。肩部以下は膨らみが小さい。調整は、外面がヘラミガキであるが、所々にヘラミガキ前に施されたハケメが残る。内面は、口縁部から頸部までがハケメ、以下はヘラナデである。５－９・10は、高坏の接合部付近の部位である。５－10は、脚部に方形状の透かし孔を持つ。調整は、いずれも外面と坏部内面がヘラミガキ、５－10の脚部内面は、ヘラナデである。５－11～13は、台付甕である。５－11は口縁部から胴上部まで、５－12は胴下部、５－13は台部の破片である。調整は、５－11の外面全面と口縁部から頸部までの内面が斜位のハケメ、胴上部内面は横位のヘラナデである。５－12は、外面上位が斜位のハケメ、外面下位と内面はヘラナデであり、前者は横位、後者は横・斜位に施されている。５－13は、外面が斜位のハケメとヘラナデ、内面は横位のハケメである。

本溝跡の時期は、平安時代と思われる。

第６号溝跡（第28・29図）

2012（平成24）年度調査Ｂ区32・33－86グリッドに位置する。北西部を第５号溝跡、南東部を第１号井戸跡に切られている。北西延長上に位置する第４号溝跡と同一遺構の可能性がある。

南東から北西方向に走る。検出された長さは3.12ｍと短い。幅は、南東部が0.87ｍを測るが、北西部は0.62ｍと狭くなる。確認面からの深さは、0.3ｍ前後を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、２層（17・18層）確認された。下層にブロックを多量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第38図）は、須恵器坏（６－１）、瓶（６－２～５）、砥石（６－６）がある。この他にも流れ込みで古墳時代前期の器種不明の土師器小片が少量出土したが、図示不可能であった。

６－１～５は、須恵器である。６－１・４は南比企産、その他は不明である。６－１は、坏の底部である。底面は、回転糸切り後に外周ヘラ削りが施されている。６－２～５は、瓶である。６－２は肩部、６－３は胴上部、６－４・５は胴部中段付近から下部までの破片である。調整は、外面がロクロナデ、内面はヘラナデが主体となる。６－２は、内面上位にあて具痕がみられ、下位は横位のヘラナデが施されている。６－３の内面は、ロクロナデ後に横・斜位のヘラナデが施されている。６－４の外面は、ロクロナデ前に施されたタタキが一部残り、ロクロナデ後、部分的に回転ヘラ削りが施されている。内面は、横・斜位のヘラナデであるが、所々にあて具痕が残る。６－５は、外面にロクロナデ前に施されたタタキが一部残る。内面は、上位にあて具痕がみられたが、下位は横位のヘラナデが施されている。６－２～５は、すべて外面に自然釉が付着している。６－６は、緑色凝灰岩製の砥石である。片面を欠く。図示しなかった側面上位も含め、四面使用している。

本溝跡の時期は、奈良時代と思われる。

第７号溝跡（第 30 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区 35・36 － 86 グリッドに位置する。第８号方形周溝墓の東周溝と方台部を切っている。

南をほぼ併走する第８号溝跡から派生して北東から南西方向に走る。検出された長さは、5.78 ｍである。幅は、概ね 0.4 ｍ前後を測るが、南西端は幅 0.65 ｍを測る土坑状を呈していた。確認面からの深さは、0.15 ｍ前後を測る。断面形は、船底状を呈する。覆土は、２層（11・12 層）確認された。下層にブロックを多量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、古墳時代前期の器種不明の土師器小片が少量出土したが、図示不可能であり、流れ込みと思われる。

伴う出土遺物がないが、本溝跡の時期は、中世以降と思われる。

第８号溝跡（第 30 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区 34 ～ 40 － 85 ～ 88 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。34 ～ 37 － 86・87 グリッドで第８号方形周溝墓、36 － 86 グリッドで第５号住居跡と単独ピット 23、36 ～ 39 － 86 ～ 88 グリッドで第２号方形周溝墓、37 ～ 40 － 87・88 グリッドで第９号方形周溝墓を切っている。34 － 85 グリッドで重複する第５号溝跡とは、周辺遺構との新旧関係から本溝跡が新しいと思われる。39 － 88 グリッドで重複する第 11 号溝跡と単独ピット 86 との新旧関係は、不明である。35 － 86 グリッドでは、北側を併走する同時期の第７号溝跡が派生して走る。

南西から北東方向に走る。検出された長さは 31.96 ｍと長い。幅は、概ね 0.4 ｍ前後を測るが、南西端付近は 0.25 ｍ程と狭い。確認面からの深さは、36 － 86 グリッド付近が 0.21 ｍ程を測るが、その他は概ね 0.1 ｍ前後を測る。断面形は、概ねやや横長の逆台形状を呈する。覆土は、計５層（９・10・13 ～ 15 層）確認された。ブロックを含む層が多いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

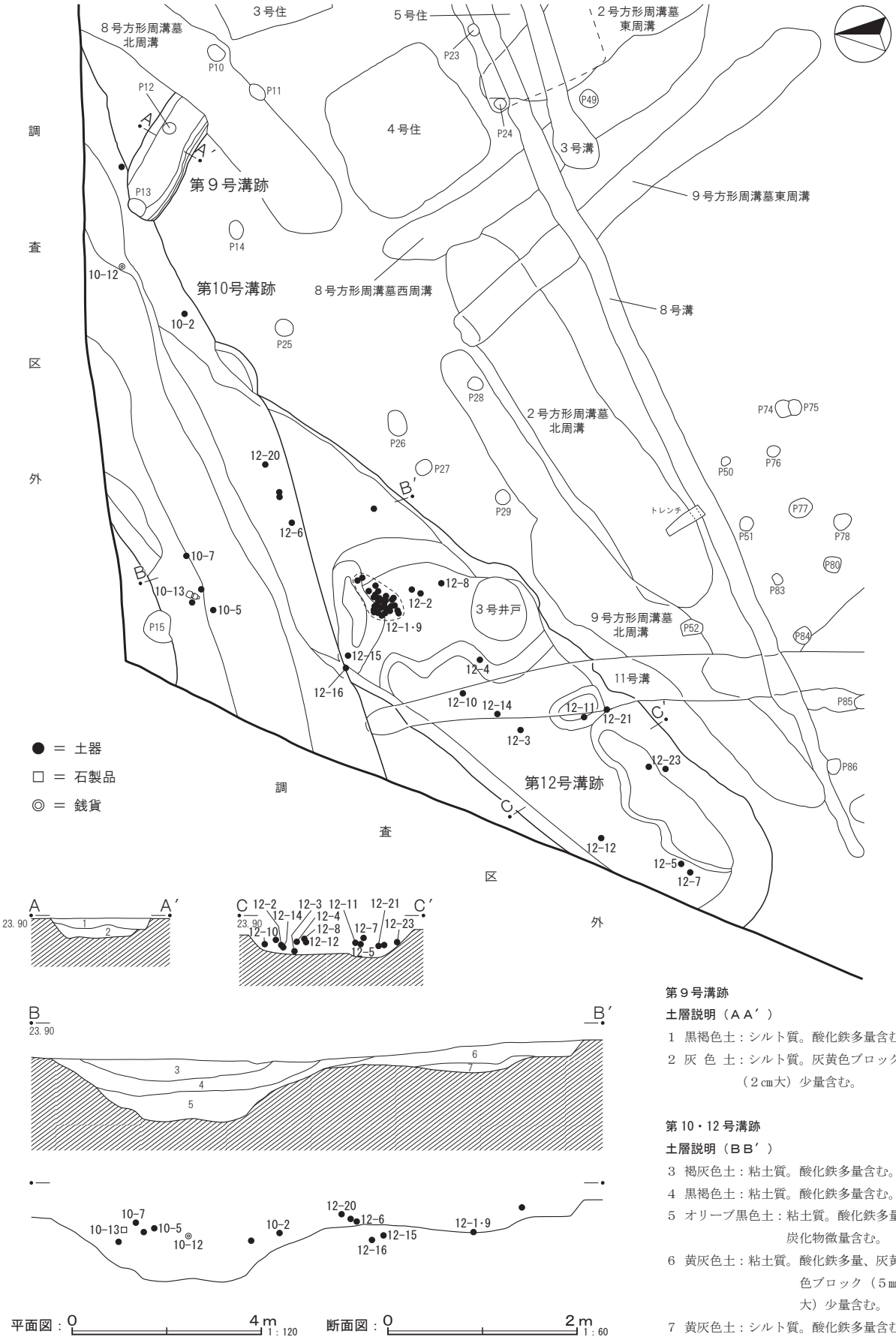
出土遺物（第 39 図）で図示可能なものは、弥生土器壺（８－１）、古墳時代前期の土師器台付甕（８－２・３）があり、この他にも図示不可能な古墳時代前期の土師器小片が少量出土したが、すべて流れ込みと思われる。

８－１は、弥生時代中期末の壺の口縁部から頸部までの破片である。頸部に突帯と爪形の刺突列が巡る。無文部の調整は、内外面ともにヘラミガキであり、口縁部外面上位は横位、下位は斜位、内面は横・斜位に施されている。内外面に赤彩が施されているが、外面はほぼ剥落している。８－２・３は、古墳時代前期の土師器台付甕であり、８－３はＳ字甕と思われる。８－２は口縁部から頸部まで、８－３は胴上部の破片である。調整は、８－２の口縁部が内外面ともに横ナデ、頸部外面は縦位、内面は横位のハケメである。８－３は、内外面ともにハケメであり、外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。器壁が薄い。

伴う出土遺物はないが、本溝跡の時期は、第７号溝跡と同じく中世以降と思われる。

第９号溝跡（第 31 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 36・37 － 85 グリッドに位置する。37 － 85 グリッドで第 10 号溝跡に



第９号溝跡

土層説明（ＡＡ′）

1　黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。

2　灰　色　土：シルト質。灰黄色ブロック（２㎝大）少量含む。

第 10・12 号溝跡

土層説明（ＢＢ′）

3　褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。

4　黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。

5　オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物微量含む。

6　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

7　黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。

第 31 図　第９・10・12 号溝跡

切られている。36・37 － 85 グリッド境で第８号方形周溝墓の北周溝、本溝跡底面で単独ピット 12・13 と重複するが、新旧関係は不明である。

南東から北西方向に走る。検出された長さは 2.49 ｍと短い。幅は、概ね 1.1 ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.2 ｍ程を測る。断面形は、横長の逆台形状を呈するが、南西側の立ち上がりは中段にテラス状の段を持つ。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、古墳時代前期の器種不明の土師器小片が少量出土したが、図示不可能であり、本溝跡に伴うものか不明である。

本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から近世以前としか言えない。

第 10 号溝跡（第 31 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 36 ～ 39 － 85・86 グリッドに位置する。37 － 85 グリッドで第９号溝跡、38・39 － 85・86 グリッドで第 12 号溝跡、39 － 86 グリッドで第 11 号溝跡を切っている。39 － 85 グリッドで単独ピット 15 と重複するが、新旧関係は不明である。南西及び北東端以降は、調査区外に延びる。

南西から北東方向に走る。検出された長さは 15.16 ｍを測る。検出された範囲での幅は 0.9 ｍ、確認面からの深さは 0.7 ｍ前後を測る。断面形は、概ね横長の逆台形状を呈するが、37・38 － 85 グリッドでは立ち上がり両側にテラス状の段が設けられていた。覆土は、３層（３～５層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第 39 図）は、陶器碗（10 － １・２・７）、徳利（10 － ８）、瓦質土器片口鉢（10 － ３）、焙烙（10 － ４・５）、擂鉢（10 － ９）、火鉢（10 － 10・11）、土師質土器かわらけ（10 － ６）、銭貨（10 － 12）、石製品五輪塔（10 － 13）がある。この他にも流れ込みで弥生土器壺（10 － 14）、甕（10 － 15・16）、古墳時代前期の土師器壺（10 － 18・19）、器台（10 － 17）、鉢（10 － 20）が出土した。

10 － １・２・７・８は、瀬戸美濃系の陶器である。10 － １・２・７は、碗である。10 － １は、丸碗である。高台部を欠く。口縁部の開きが小さく、体部は内湾する。内外面に灰釉が施釉されている。連房第１小期（1610 ～ 1625 年代）と思われる。10 － ２は、丸碗の体部から高台部までの部位である。体部が内湾し、高台部はやや外反する。高台部を除く内外面に灰釉が施釉されている。連房第２小期（1625 ～ 1650 年代）と思われる。10 － ７は、天目茶碗の口縁部から体部までの破片である。口縁部がやや内傾し、端部が外反する。体部は逆ハの字に下る。内外面に鉄釉が施釉されている。連房第２小期（1625 ～ 1650 年代）と思われる。10 － ８は、徳利の胴下部片である。内面のロクロ痕が顕著である。内面に灰釉、外面に長石釉が施釉されている。

10 － ３～５・９～ 11 は、在地系の瓦質土器である。10 － ３は、片口鉢の体部から底部までの部位である。須恵質である。調整は、内外面ともにロクロナデ後に横・斜位のヘラナデが施されている。底面は、回転糸切り痕が残る。体部内面及び底面が擦れている。10 － ４・５は、焙烙である。10 － ４は、口縁部外面に複数の稜が巡るが、内面の稜は不明瞭である。10 － ５は、体部内面中段に稜が巡る。口縁部外面に輪積痕が複数みられた。内耳は、10 － ４が未確認、10 － ５はやや間隔を空けて２つ確認された。16 ～ 17 世紀代と思われる。10 － ９は、擂鉢の体部片である。内面に８本の櫛目が施されており、擦れている。外面は、輪積痕が顕著に残る。10 － 10・11 は、角火鉢の口縁部から底部までに収まる破

片である。同一個体である。口縁部の器壁が厚い。体部は、逆ハの字に下る。口縁端部に菊花文が押印されている。

10 － 6 は、在地系の土師質土器かわらけである。口縁部から体部がやや内湾しながら立ち上がる。調整は、内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切り痕が残る。

10 － 12 は、銭貨「元豊通寶」である。完形である。書体は、行書である。10 － 13 は、安山岩製石製品五輪塔の空風輪部である。所々を欠くが、残存状態は良好である。断面形が楕円形を呈する。刻書は、みられない。16 世紀末と思われる。

10 － 14 ～ 16 は、弥生時代中期後半から後期初頭までに収まる土器である。10 － 14 は、壺の口縁部から頸部までの破片である。文様は、複合口縁部外面下位に爪形の刺突列が巡るのみである。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、内面全面と口縁部外面は横位、頸部外面は横・斜位に施されている。頸部下位に種子圧痕と思われる長方形の凹みがみられた。10 － 15・16 は、甕の口縁部から頸部までの破片である。文様は、いずれも頸部外面に単位不明の簾状文が巡り、10 － 16 は口縁端部内面に刻みが施されている。10 － 15 の調整は、口縁部外面が横ナデ、内面は全面横位のヘラミガキである。10 － 16 の調整は、内外面ともにヘラミガキであり、口縁部外面上位は横位、下位は斜位に粗く施されており、内面は横・斜位に施されている。10 － 16 は、器壁がやや厚く、胎土がやや粗い。

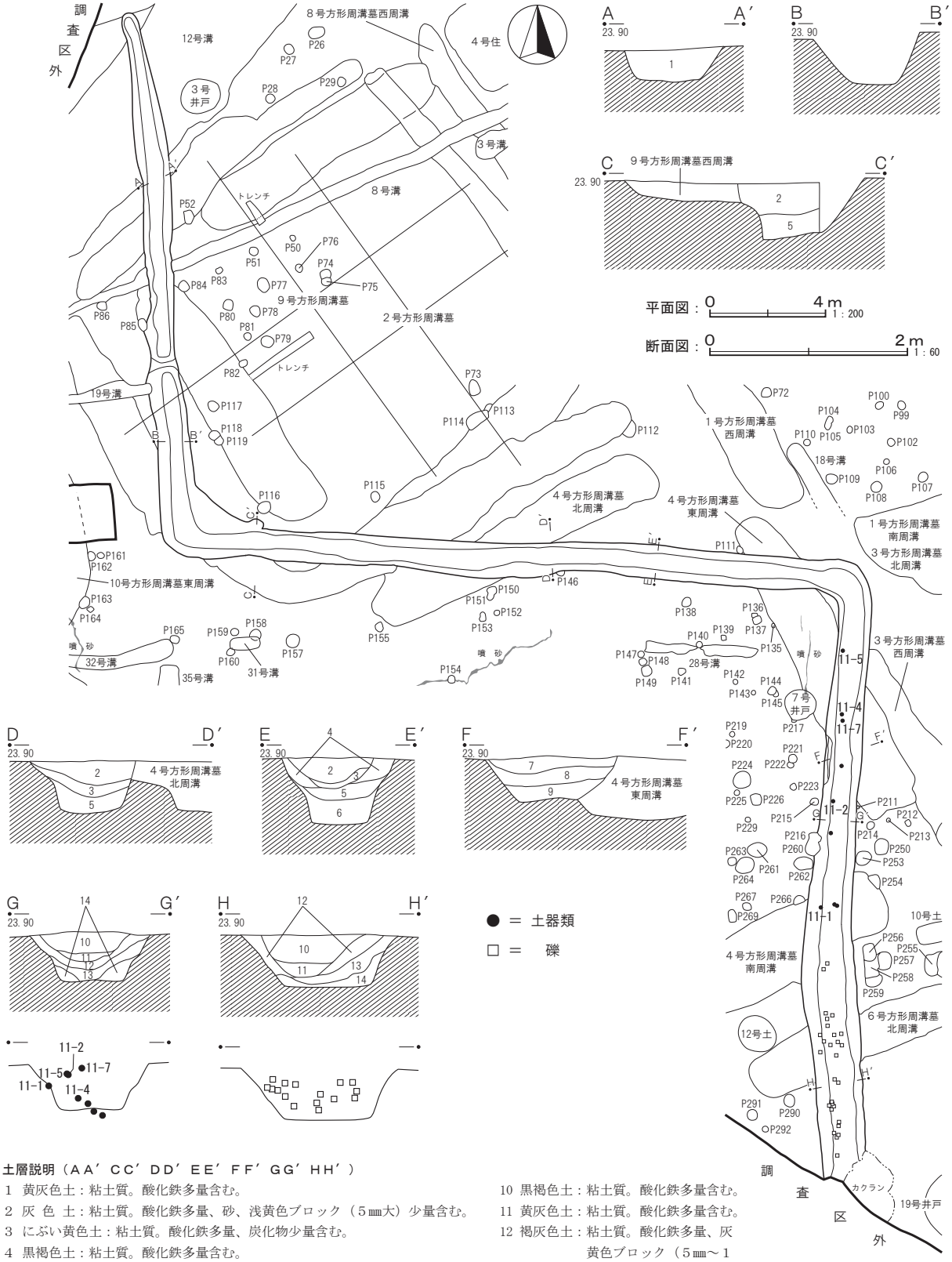
10 － 17 ～ 20 は、古墳時代前期の土師器である。10 － 18・19 は、壺の胴下部片である。同一個体である。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。器壁が厚く、胎土がやや粗い。10 － 17 は、器台の接合部から台部中段付近までの部位である。器受部底面に径 1.4 ㎝前後の焼成前穿孔がみられた。調整は、器受部外面がハケメ、器受部内面と台部外面はヘラミガキ、台部内面はヘラナデである。台部外面はヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。10 － 20 は、鉢の口縁部から体部までの破片である。調整は、口縁部から頸部までの外面が横ナデ、体部外面と内面全面はヘラミガキであり、前者は横・斜位、後者は横位に施されている。

本溝跡の時期は、近世と思われる。

第 11 号溝跡（第 32 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区及び 2012（平成 24）年度調査Ａ区 34 ～ 39 － 86 ～ 94 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。34・35 － 93 グリッドで第６号方形周溝墓の北周溝、34 － 90 グリッドで第３号方形周溝墓の西周溝、34 ～ 37 － 89 ～ 92 グリッドで第４号方形周溝墓、37 ～ 39 － 87 ～ 90 グリッドで第２・９号方形周溝墓、39 － 86・87 グリッドで第 12 号溝跡、39 － 88 グリッドで第 19 号溝跡を切っている。39 － 86 グリッドでは、第 10 号溝跡に先端を切られており、39 － 88 グリッドで第８号溝跡、所々で多くの単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。南端の 34 － 94 グリッドでは、東側が撹乱を受けていた。同グリッド以南は、調査区外に延びる。

34・35 － 90 ～ 94 グリッドでは、ほぼ南北方向に走るが、34 － 90 グリッドで西へ直角に曲がり、39 － 89・90 グリッドまでほぼ東西方向に走る。そして、同グリッドで北へ直角に曲がり、以北はほぼ南北方向に走り、39 － 86 グリッドで終息する。検出された長さは、61.1 ｍと長い。幅は、概ね 1.1 ｍ前後を測るが、38・39 － 89・90 グリッドの北へ直角に曲がる箇所は 2.1 ｍ、南北に走る 34・35 － 92・93 グリッド境付近は 1.9 ｍと広く、39 － 86 グリッドの先端付近は 0.5 ｍ程と狭い。確認面から



土層説明（AA′ CC′ DD′ EE′ FF′ GG′ HH′）

1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
3 にぶい黄色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
4 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
5 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、砂多量、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
6 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（2～5㎝大）多量含む。
7 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
8 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（5㎜～1㎝大）少量含む。
9 灰 色 土：粘土質。砂、灰白色ブロック（5㎜大）少量含む。
10 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
11 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
12 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～1㎝大）少量含む。
13 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
14 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（1～3㎝大）多量含む。

第32図　第11号溝跡

の深さは、概ね0.5ｍ前後が主体となるが、39－86グリッドの先端付近は0.3ｍ程と浅く、35・36－89・90グリッド付近は0.7ｍ程と深い。断面形は、やや横長の逆台形状を呈する箇所が多い。覆土は、計14層（１～14層）確認された。先端の39－86・87グリッド付近は、黄灰色土による単一層（１層）であったが、その他では混入物の異なる複数の土層が確認された。ブロックを含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第39・40図）は、青磁碗（11－１・２）、白磁碗（11－５）、陶器壺（11－３）、甕（11－６）、瓦質土器片口鉢（11－７）、土師質土器かわらけ（11－４）、石製品五輪塔（11－８）がある。また、掲載していないが、34－92～94グリッドでは中層から上層にかけて自然礫が多数出土した。この他にも流れ込みで弥生土器壺（11－９・10）、甕（11－11～17）、古墳時代前期の土師器壺（11－18）、台付甕（11－19・20）、鉢（11－21）、奈良・平安時代の須恵器坏（11－22）、瓶（11－23・24）、甕（11－25～28）、土師器坏（11－29）、土錘（11－30）、近世の陶器壺（11－31）が出土した。鉄製品刀子（11－32・33）は、本溝跡に伴うものか不明である。出土位置は、流れ込みも含め、11－９・24・31以外は、2011（平成23）年度調査Ａ区からの出土である。なお、11－９は、第２号方形周溝墓西周溝との重複箇所から出土したことから同方形周溝墓からの流れ込みと思われる。

11－１・２・５は、中国産の磁器である。11－１・２は、青磁碗の体部から高台部までの部位である。11－１は、見込みにヘラ及び櫛状工具で花文が描かれている。龍泉窯系Ｉ－３類（12世紀中頃～13世紀）と思われる。11－２は、体部内外面に細かい櫛目が施され、内面は横、外面は縦方向に施されている。同安窯系Ｉ－１ｂ類（12世紀中頃～13世紀）と思われる。11－５は、白磁碗Ｖ類の体部片である。見込みと体部境に沈線状の段を持つ。12～13世紀と思われる。

11－３・６は、陶器である。11－３は、瀬戸美濃系の口広有耳壺の底部である。内外面に灰釉が施され、回転糸切り痕が残る底面は、錆釉を施釉した後に拭い取っている。古瀬戸後Ⅳ期（1440～1480年）と思われる。11－６は、常滑系甕の胴下部片である。外面に縦長格子文が横位に押印されている。第13号井戸跡出土13－２と同一個体の可能性がある。

11－７は、在地系瓦質土器片口鉢の口縁部から体部上位までの破片である。須恵質である。調整は、内外面ともにロクロナデである。

11－４は、在地系の土師質土器かわらけである。口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。厚底で底部中央が突出している。底面は、回転糸切痕が残る。

11－８は、角閃石安山岩製の石製品五輪塔の水輪部である。側面一部を欠く。平面形が楕円形を呈する。表裏面とも中央が凹み、鑿による加工痕が明確に残る。

11－９～17は、弥生時代中期末から後期初頭までに収まる土器である。11－９・10は、壺である。11－９は、頸部から胴下部までの部位である。無花果状を呈する。文様は、頸部外面に細いヘラ描きの平行沈線が２条巡り、区画内に無節Ｒが施文されているが、下にはみ出ている。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。内面全面に細かい輪積痕が複数残る。11－10は、肩部片である。外面下位にＬＲ単節縄文が施文されている。調整は、外面上位無文部が横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。胎土に白雲母を多量含む。11－11～17は、甕である。11－11～14は口縁部

から頸部まで、11 － 15 は頸部から胴上部まで、11 － 16・17 は胴部中段付近の破片である。外面文様は、櫛歯状工具による文様が主体となる。櫛歯の単位は、11 － 12・17 が不明、11 － 11・13・16 は５本、11 － 14 は６本、11 － 15 は７本である。11 － 11 は、口縁端部に指頭圧痕、以下は斜線文が施されている。11 － 12 は、口縁端部内面に刻みが施され、頸部に簾状文が巡る。11 － 13 は、口縁端部にＬＲ単節縄文と思われる縄文が施文され、頸部に簾状文が巡る。11 － 14 は、頸部に波状文が巡る。11 － 15 は、波状文が３段巡る。11 － 16 は縦位の羽状文、11 － 17 は斜線文が描かれている。調整は、11 － 12 の口縁部外面が横位、頸部外面が縦位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。11 － 13 の内面は、口縁部が横位、頸部は斜位のヘラナデである。11 － 14 の口縁部外面無文部は横ナデ、内面は横・斜位のヘラミガキである。11 － 11・15・17 の内面、11 － 13 の外面は、摩耗が著しいため不明である。11 － 11 は胎土に白雲母、11 － 12 は礫を多量含む。11 － 17 は、外面にイネの圧痕と思われる凹みがみられた。

11 － 18 ～ 21 は、古墳時代前期の土師器である。11 － 18 は、壺の胴下部片である。外面の調整は、摩耗が著しいため不明、内面は横位のハケメである。11 － 19・20 は、台付甕である。11 － 19 は胴上部、11 － 20 は頸部から胴上部までの破片である。調整は、11 － 19 は外面が横位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。11 － 20 は、外面と頸部内面がハケメであり、前者は頸部が斜位、胴上部は横位、後者は横位に施されている。胴上部内面は、横位のヘラナデである。11 － 21 は、鉢の口縁部片である。調整は、外面が横・斜位のヘラナデ、内面は横位のハケメである。他の器種の可能性もある。11 － 19・20 は内面、11 － 21 は外面に輪積痕が残る。

11 － 22 ～ 30 は、奈良・平安時代の遺物である。11 － 22 ～ 28 は、須恵器である。11 － 22 が東金子産、11 － 23 は末野産、11 － 27 は不明、その他は南比企産である。11 － 22 は、坏の体部から底部までの部位である。調整は、内外面がロクロナデ、底面は回転糸切り後に外周ヘラ削りが施されている。11 － 23・24 は、瓶である。11 － 23 は胴下部から底部までの部位、11 － 24 は胴部中段付近から下部までの破片である。いずれも調整は、内外面ともにロクロナデであるが、11 － 23 の外面は横・斜位のヘラナデ、11 － 24 の内面は横位のヘラナデが施されており、あて具痕が残る。11 － 23 は内外面、11 － 24 は外面上位に自然釉が付着している。11 － 25 ～ 28 は、甕である。11 － 25 ～ 27 は胴上部、11 － 28 は胴下部の破片である。外面の調整は、11 － 26 が横・斜位のヘラナデであり、その他はタタキである。内面調整は、11 － 25 があて具痕が残り、その他はヘラナデである。11 － 26 は斜位、11 － 27・28 は横・斜位に施されているが、11 － 26・28 はあて具痕が一部残る。11 － 26 ～ 28 は、外面に自然釉が付着している。11 － 29 は、土師器坏である。浅身で口縁部の開きが小さく、体部は内湾する。底部は、中央付近を欠くが、平底に近い。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデであるが、体部以下は摩耗が著しいため不明である。11 － 30 は、土錘である。半分を欠く。

11 － 31 は、近世の瀬戸美濃系陶器有耳壺の底部である。底面を除く内外面に鉄釉が施釉されている。17 ～ 18 世紀代と思われる。

11 － 32・33 は、時期不明の鉄製品刀子である。11 － 32 は刃先付近、11-33 は柄部付近のみの残存である。11 － 33 は、屈曲している。

本溝跡の時期は、中世と思われる。

第 12 号溝跡（第 31 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 38 ～ 40 － 85 ～ 88 グリッドに位置する。38・39 － 85・86 グリッドで第 10 号溝跡、39 － 86・87 グリッドで第 11 号溝跡、38・39 － 86・87 グリッド境で第３号井戸跡に切られている。南西端の立ち上がり付近は、調査区外にある。

南西から北東方向に走るが、南西部は 40 － 88 グリッドで終息する。検出された長さは 12.2 ｍを測る。幅は 0.9 ｍ、確認面からの深さは概ね 0.3 ｍ前後を測るが、底面は土坑ないしピット状に落ち込む箇所が複数みられた。断面形は、概ね横長の逆台形状を呈するが、底面は落ち込む箇所があることから凹凸がみられた。覆土は、２層（６・７層）確認された。上層にブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第 41 図）は、古墳時代前期の土師器壺（12 － １～６・15 ～ 19）、台付甕（12 － ７～９・20・21）、高坏（12 － 10・11）、器台（12 － 12）、ミニチュア土器（12 － 13・14）がある。この他にも流れ込みで弥生土器甕（12 － 22・23）、写真のみ掲載の動物と思われる骨（図版 56）が出土した。出土位置は、図示不可能なものも含め、ほぼ全面から出土した。

12 － １～６・15 ～ 19 は、土師器壺である。12 － １は、やや大型壺の口縁部から胴部中段付近までの部位である。口縁部から頸部が逆ハの字に開き、胴部は半球形を呈する。調整は、内外面ともに摩耗が著しいため部分的な図示であるが、外面全面と口縁部から頸部までの内面がヘラミガキ、胴部内面はヘラナデである。肩部内面に輪積痕がみられた。12 － ２は、ほぼ完形の中型壺である。口縁部がやや外反しながら逆ハの字に開く。胴部はほぼ球形を呈し、最大径を中段付近に持つ。底部は、平底でやや円柱状を呈する。調整は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、外面がヘラミガキ、内面は口縁部が不明、胴部はヘラナデである。胴上部から中段付近の内面に複数の輪積痕がみられた。12 － ３は、ほぼ完形の小型壺である。口縁部がやや外反し、すぼまる頸部がほぼ直立する。胴部は、中段より下が膨らみ、最大径を持つ。底部は、中央付近が出っ張る。調整は、口縁端部外面が横ナデ、以下の外面は全面ヘラミガキであるが、頸部と胴上部はヘラミガキ前に施された粗いハケメが残る。内面は、口縁部から頸部までがヘラミガキ、以下は計測不可能のため図示できなかったが、肩部から胴上部がヘラナデと指オサエ、中段以下はハケメ後にヘラミガキが施されている。頸部と肩部内面の境に輪積痕が残る。器壁が厚い。12 － ４～６は、胴下部から底部までに収まる部位である。12 － ４・５は底径が大きく、12 － ６は小さい。12 － ５は、厚底である。調整は、12 － ４が内面の剥離が著しいため図示不可能であるが、その他はすべて外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。12 － ４は、外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。12 － ４・５は、底面に複数の凹みがみられた。12 － ６は、胎土がやや粗い。同一個体の 12 － 15・16 は胴上部、12 － 17 は肩部から胴部中段付近まで、同一個体の 12 － 18・19 は胴下部の破片である。12 － 15・16 は、内外面ともに摩耗が著しいため定かではないが、外面下位にＬＲ単節縄文らしき痕跡がみられ、弥生土器の可能性もある。調整は、12 － 15・16 が不明、12 － 17 は外面が斜・縦位のヘラミガキ、内面は上下が斜位、中間が横位のヘラナデである。12 － 18・19 は、外面が横位のヘラナデ後、粗いヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。12 － 17、12 － 18・19 は、外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。12 － 15・16、12 － 18 は、胎土がやや粗い。12 － 15・16 は、礫を多量含む。

12 － 7 ～ 9 ・20・21 は、土師器台付甕である。12 － 7 ～ 9 は、接合部から台部までに収まる部位である。調整は、12 － 7 の外面がハケメ、内面はヘラナデであるが、内面はヘラナデ前に施されたハケメが一部残る。12 － 8 ・ 9 は内外面ともにヘラナデであるが、12 － 9 の台部内面は、ハケメに近い箇所が一部みられた。12 － 7 は、胎土がやや粗い。12 － 20・21 は、口縁部から胴上部までの破片である。調整は、いずれも摩耗が著しいため、不明である。

12 － 10・11 は、土師器高坏の接合部から脚部までの部位である。いずれも調整は、坏部内面と外面がヘラミガキであるが、12 － 10 の脚部外面はヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。12 － 10 の脚部内面は、ハケメが主体となるが、ヘラナデとヘラミガキも一部併用されている。12 － 11 の脚部内面は、ヘラナデである。

12 － 12 は、土師器器台の接合部から台部上位までの部位である。内面中央に大きい焼成前穿孔がみられた。調整は、器受部内面と外面全面がヘラミガキ、台部内面はヘラナデである。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

12 － 13・14 は、土師器ミニチュア土器である。12 － 13 は、口縁部を欠く。やや詰まった球形を呈する。調整は、内外面ともにヘラミガキである。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。12 － 14 は、ややいびつな逆台形状を呈する。調整は、内外面ともにヘラミガキである。口縁部内面に輪積痕が残る。胎土がやや粗い。

12 － 22・23 は、弥生時代中期後半から後期初頭までに収まる甕である。12 － 22 は口縁部から頸部まで、12 － 23 は頸部から胴上部までの破片である。外面文様は、12 － 22 が口縁部外面にＬＲ単節縄文が施文されている。12 － 23 は、頸部に３～４本一単位の櫛歯状工具による簾状文が横位に巡り、以下は同一工具で横位の羽状文が描かれている。調整は、12 － 22 が口縁部外面の縄文施文部にハケメが一部残る。頸部外面は斜位のヘラミガキ、内面は全面横・斜位のヘラナデである。12 － 23 の内面は、横位のヘラナデであり、輪積痕が残る。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第 13 号溝跡（第 33・34 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区及び 2012（平成 24）年度調査Ｂ区 30 ～ 33 － 86 ～ 91 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。30・31 － 89 ～ 91 グリッドで第３号方形周溝墓、32 － 88 グリッドで第 15 号溝跡、32・33 － 86 ～ 88 グリッドで第５号溝跡、32・33 － 86 グリッドで第２号住居跡を切っており、30 － 91 グリッドで第 26 号溝跡に切られている。また、32 － 89・90 グリッドで第 24 号溝跡、32 － 88 グリッドで第 14 号溝跡、所々で単独ピットと重複しており、第 24 号溝跡は土層断面観察で切り合いが認められなかったことから同時期と思われる。第 14 号溝跡及び単独ピットとの新旧関係は、不明である。南東端以降は、調査区外に延びる。なお、第５号溝跡との重複箇所については、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、新旧関係から本来は実線で示すべきものである。

南東から北西方向にやや蛇行して走り、第２号住居跡と重複する 32・33 － 86 グリッドで終息する。検出された長さは、32.72ｍと長い。幅は、2012（平成24）年度調査Ｂ区では推定箇所も含め、0.4 ～ 1.1ｍ程とバラツキがみられたが、2011（平成 23）年度調査Ｂ区では、概ね 0.45 ｍ前後を測る。なお、32

－89グリッドで幅に差があるのは、調査年度による確認面の違いによる。確認面からの深さは、2012（平成24）年度調査Ｂ区ではバラツキがみられ、北西端の32・33－86グリッド境付近は0.26ｍを測るが、32－88グリッド付近で0.1ｍ前後と浅くなり、32－89グリッド北側では0.27ｍと再度深くなる。2011（平成23）年度調査Ｂ区では、32－89グリッド南側が0.05ｍと非常に浅いが、第３号方形周溝墓の東周溝と重複する31－90・91グリッド境付近は0.2ｍ程とやや深くなり、南東部の30－91グリッド付近は0.15ｍ前後と再度浅くなる。断面形は、横長の逆台形状を呈する箇所が多いが、一部は船底状を呈する。覆土は、計10層（１～10層）確認された。北東部の32・33－86・87グリッド付近は、褐灰色土及び黄灰色土が確認されたが、その他では混入物が若干異なる黒褐色土が確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第41図）で図示可能なものは、古墳時代前期の土師器壺（13－１・２）、台付甕（13－３）があるが、流れ込みと思われる。13－１・２は2011（平成23）年度調査Ｂ区、13－３は2012（平成24）年度調査Ｂ区からの出土である。この他にも図示不可能な平安時代の須恵器坏の小片が微量出土しており、これらが本溝跡に伴うと思われる。

13－１・２は、土師器壺である。13－１は、胴下部から底部までの部位であり、底面を欠損している。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。13－２は、複合口縁部から頸部までの破片である。調整は、口縁部外面が横位、頸部外面と内面全面は横・斜位のハケメであり、頸部外面はハケメ後に横位のヘラミガキが施されている。胎土に白色粒を多量含む。器壁が薄い。13－３は、土師器台付甕の胴部中段付近から下部までの破片である。外面の調整は、摩耗が著しいため不明であるが、内面は横・斜位のヘラナデである。内面に輪積痕がみられた。

本溝跡の時期は、重複する第５号溝跡より新しい平安時代と思われる。

第14号溝跡（第33図）

2012（平成24）年度調査Ｂ区32－88グリッドに位置する。第13号溝跡から派生するが、新旧関係は不明である。

南西から北東方向に走る。検出された長さは、0.81ｍと短く、幅は0.38ｍを測る。確認面からの深さは、0.04ｍと非常に浅い。断面形は、船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、黄灰色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しか不明である。

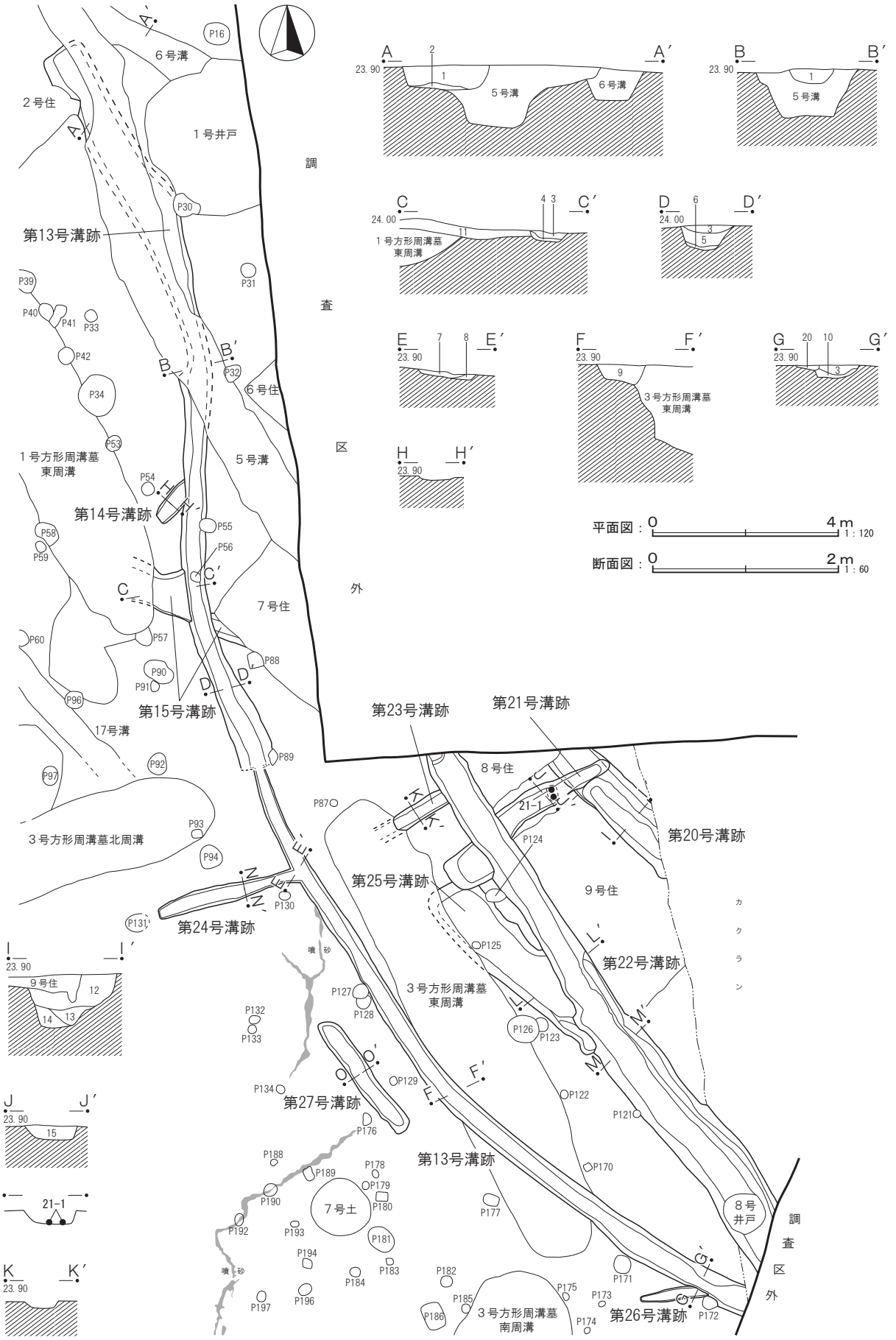
遺物は、図示不可能な古墳時代前期の土師器高坏、平安時代の土師器甕の小片が微量出土したが、後者が本溝跡に伴うと思われる。

本溝跡の時期は、第13号溝跡と同じく平安時代としておきたい。

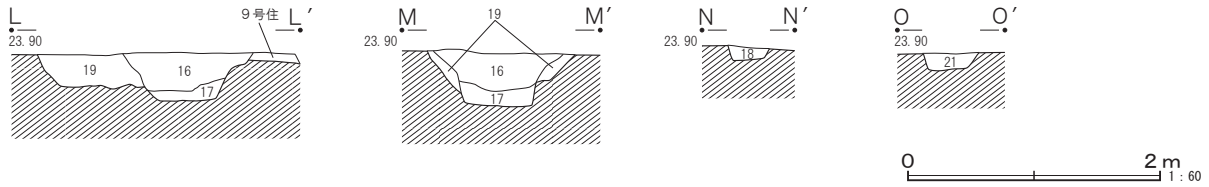
第15号溝跡（第33・34図）

2012（平成24）年度調査Ｂ区32－88グリッドに位置する。第７号住居跡と第13号溝跡に切られている。北西部で第１号方形周溝墓東周溝と重複しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。残存状態が悪い。

南東から北西方向に走る。検出された長さは1.77ｍと短いが、北西部は重複する第１号方形周溝墓との新旧関係からさらに延びると思われるが、第１号方形周溝墓の方台部でその続きが確認されていないことから東周溝内で終息すると思われる。幅はバラツキがみられ、第７号住居跡と第13号溝跡と



第 33 図　第 13 ～ 15・20 ～ 27 号溝跡（1）



第 13 号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′ ＤＤ′ ＥＥ′ ＦＦ′ ＧＧ′）
1 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎝大）多量含む。
3 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１㎝大）多量含む。
5 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
6 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（３㎝大）少量含む。
7 黒褐色土：粘土質。酸化鉄微量含む。
8 黒褐色土：粘土質。浅黄色ブロック（１㎝大）少量、酸化鉄微量含む。
9 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
10 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１～２㎝大）多量含む。

第 15 号溝跡
土層説明（ＣＣ′）
11 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。

第 20 号溝跡
土層説明（ＩＩ′）
12 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎜～３㎝大）多量含む。
13 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５～10㎝大）多量含む。
14 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜～３㎝大）少量含む。

第 21 号溝跡
土層説明（ＪＪ′）
15 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第 22 号溝跡
土層説明（ＬＬ′ ＭＭ′）
16 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
17 黄灰色土：粘土質。浅黄色ブロック（３～10㎝大）多量含む。

第 24 号溝跡
土層説明（ＮＮ′）
18 黒褐色土：粘土質。酸化鉄微量含む。

第 25 号溝跡
土層説明（ＬＬ′ ＭＭ′）
19 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜～１㎝大）少量含む。

第 26 号溝跡
土層説明（ＧＧ′）
20 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１㎝大）少量含む。

第 27 号溝跡
土層説明（ＯＯ′）
21 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（５㎜大）多量含む。

第 34 図　第 13 ～ 15・20 ～ 27 号溝跡（２）

の間は0.42ｍ程と狭いが、第13号溝跡から北西部は0.74～１ｍ程と広い。確認面からの深さは、0.1ｍ前後を測る。断面形は、船底状を呈する。覆土は、混入物をほとんど含まない黒褐色土による単一層（11層）であった。自然堆積か人為的な埋め戻しか不明である。

出土遺物がないため、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降、第７号住居跡より古い古墳時代前期以前としか言えない。

第16号溝跡（第28・29図）

2012（平成24）年度調査Ｂ区34－87・88グリッドに位置する。南東端で第２号土坑、その北側で単独ピット67と重複するが、新旧関係は不明である。また、第１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、第２号土坑との重複箇所まで4.36ｍを測り、第２号土坑南東で続きがみられなかったことから第２号土坑内で終息すると思われる。幅は、ややバラツキがみられたが、概ね0.7ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.1ｍ程と浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、黄灰色土による単一層（19層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

遺物は、図示不可能な古墳時代前期の土師器高坏、奈良・平安時代の土師器甕の小片が微量出土したが、後者が本溝跡に伴うと思われる。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 17 号溝跡（第 28・29 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32・33 － 88・89 グリッドに位置する。所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。また、第１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。その走行方向から南東部の 2011（平成 23）年度調査Ｂ区で第３号方形周溝墓の北周溝と重複することになるが、確認面の都合からか重複は確認されなかった。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、6.58 ｍを測る。幅は、北西端付近が 0.88 ｍ程とやや広いが、その他は概ね 0.55 ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.24 ｍ程を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、３層（20 ～ 22 層）確認された。一部に大きいブロックを含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第 41 図）で図示可能なものは、奈良・平安時代の須恵器甕（17 － 1 ）のみであるが、この他に図示不可能な同時期の須恵器・土師器小片が微量出土した。17 － 1 は、須恵器甕の胴下部片である。末野産である。外面の調整は、タタキ後にカキ目が施されている。内面は、あて具痕が残る。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 18 号溝跡（第 28・29 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 34・35 － 89 グリッドに位置する。第 16・17 号溝跡と同じく第１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。その走行方向から 2011（平成 23）年度調査Ａ区で第 11 号溝跡と重複することになるが、確認面の都合からか重複は確認されなかった。新旧関係は、本溝跡が古いと思われる。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、2.33 ｍと短い。幅は概ね 0.6 ｍ前後、確認面からの深さは 0.1 ｍ程を測る。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰黄色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

遺物は、図示不可能な古墳時代前期の土師器高坏、奈良・平安時代の土師器甕の小片が微量出土したが、後者が本溝跡に伴うと思われる。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 19 号溝跡（第 30 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 39・40 － 88・89 グリッドに位置する。第９号方形周溝墓の西周溝を切っており、東側は第 11 号溝跡、西側は第５号井戸跡に切られている。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、3.58 ｍと短いが、東側は第 11 号溝跡以東、西側は第５号井戸跡以西にその続きが確認されなかったことから、全長は検出された長さとほとんど変わらないと思われる。幅は、第９号方形周溝墓との重複箇所が 0.6 ｍ程と広いが、その他は概ね 0.3 ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.1 ｍ程を測る。断面形は、船底状を呈する。覆土は、黒褐色土による単一層（16 層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係とその走行方向から奈良・平安時代と思われる。

第 20 号溝跡（第 33・34 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30 － 89 グリッドに位置する。北西部を第８号住居跡と第 21 号溝跡、

南東部大半を第９号住居跡に切られている。北西端以降は、調査区外に延びる。南東端は、撹乱を受けていた。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、2.81 mと短い。幅は、概ね 0.95 m前後を測る。確認面からの深さは、0.56 m程を測る。断面形は、概ね逆台形状を呈するが、底面南西側は一段深くなっていた。覆土は、３層（12 ～ 14 層）確認された。いずれの層もブロックを含んでおり、ややランダムな層位であることから埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第 42 図）は、古墳時代前期の土師器鉢（20 － 1 ）、土玉（20 － 2 ）がある。20 － 1 は、土師器鉢の口縁部から体部上位までの部位である。口縁部が逆ハの字に開き、最大径を持つ。体部は、膨らみが小さい。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。器壁が薄い。20 － 2 は、完形の土玉である。

本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から第８・９号住居跡、第 21 号溝跡より古い古墳時代前期と思われる。

第 21 号溝跡（第 33・34 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30・31 － 89・90 グリッドに位置する。北東端で第 20 号溝跡を切っている。南西端手前を第 22 号溝跡に切られており、ほぼ同所で第 25 号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。なお、本溝跡の北西に隣接して第８号住居跡、南東に第９号住居跡が位置するが、直接的な切り合い関係にないため、新旧関係は不明である。

南西から北東方向にやや蛇行しながら走る。検出された長さは、4.27 mと短い。幅は、南西部が 0.84 m、北東部は 0.28 m程を測り、南西から北東に向かって狭まる。確認面からの深さは、概ね 0.15 m前後を測る。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、黄灰色土による単一層（15 層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第 42 図）で図示可能なものは、古墳時代前期の土師器壺（21 － 1 ）のみである。21 － 1 は、土師器壺の有段口縁部から頸部までの部位である。口縁部が大きく外反し、頸部はほぼ直立する。外面の調整は、口縁端部付近が横ナデ、以下の口縁部はヘラミガキ、頸部はハケメ、内面は全面ヘラミガキであるが、口縁部の内外面は、ヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。口縁部内面に赤彩が施されている。

本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係と出土遺物から第 20 号溝跡より新しい古墳時代前期と思われる。

第 22 号溝跡（第 33・34 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30・31 － 89 ～ 91 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。30・31 － 89・90 グリッドで第９号住居跡と第 21 号溝跡、30 － 90 グリッド西側中央以南で第 25 号溝跡を切っており、30 － 91 グリッドで第８号井戸跡に切られている。北西部では、ほぼ直交して走る第 23 号溝跡、また所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。北西及び南東端以降は、いずれも調査区外に延びるが、北西部の延長上に位置する第５号溝跡は、同一遺構の可能性が高い。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、10.11 mを測る。幅は、北西部が 0.7 m、南東部は 1.2

m前後を測り、北西から南東に向かって広くなる。確認面からの深さは、概ね0.4 m前後を測る。断面形は、やや横長の逆台形状を呈するが、立ち上がり中段付近に稜を持つ箇所がみられた。覆土は、２層（16・17層）確認された。下層にブロックを多量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第42図）で図示可能なものは、平安時代の須恵器坏（22－１）、甕（22－２）があり、この他にも図示不可能な同時期の土師器坏小片、写真のみ掲載の小動物と思われる骨（図版56）がある。また流れ込みで古墳時代前期の土師器壺（22－３）、台付甕（22－４・５）も出土した。

22－１・２は、須恵器である。22－１は南比企産、22－２は新治産か。22－１は、坏の底部である。底面に回転糸切り痕が残り、ヘラによる×印が刻まれている。22－２は、甕の胴上部片である。調整は、外面がタタキ、内面は横位のヘラナデであるが、所々にあて具痕が残る。

22－３～５は、古墳時代前期の土師器である。22－３は壺、22－４・５は台付甕である。22－４はＳ字甕である。すべて口縁部から頸部までの破片であり、胎土がやや粗い。調整は、22－３の複合口縁部外面が横ナデ、頸部外面は縦位に近い斜位のハケメ、内面は全面横・斜位のヘラナデである。22－４は、口縁部内外面が横ナデ、頸部外面は斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。22－５は、口縁部内外面が横ナデであるが、内面は一部に斜位のヘラナデが施されている。頸部は、内外面ともに横位のヘラナデである。

本溝跡の時期は、平安時代と思われる。

第23号溝跡（第33図）

2011（平成23）年度調Ｂ区31－89グリッドに位置する。南西部で第３号方形周溝墓東周溝と重複しており、新旧関係は本溝跡が新しいと思われるが、平面プランは確認できなかった。北東部は、直交して走る第22号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。南西部の延長上に同方向を走る第24号溝跡が位置しており、同一遺構の可能性がある。

南西から北東方向に走る。検出された長さは、1.23 mと短いが、重複する第３号方形周溝墓より新しいことから南西部はさらに延びる可能性がある。幅は、概ね0.35 m前後を測る。確認面からの深さは、0.07 m程と浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、図示できなかったが、黒褐色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係やその走行方向から第22号溝跡と同じく平安時代と思われる。

第24号溝跡（第33・34図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区32－89・90グリッドに位置する。同時期の第13号溝跡から派生しており、北東部の延長上を同方向に走る第23号溝跡と同一遺構の可能性がある。また、第３号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。

南西から北東方向に走る。検出された長さは、3.08 mと短い。幅は、第13号溝跡との接続箇所付近が0.23 m程と狭いが、その他は概ね0.4 m前後を測る。確認面からの深さは、0.11 m程と浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、混入物をほとんど含まない黒褐色土による単一層（18層）であった。自然堆積と思われる。

出土遺物（第42図）で図示可能なものは、古墳時代前期の土師器壺（24－１）、台付甕（24－２・３）があるが、流れ込みと思われる。24－１は、土師器壺の胴部中段付近の破片である。調整は、外面が縦・横位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキである。24－２・３は、土師器台付甕である。24－２は口縁部から頸部まで、24－３は胴下部の破片である。調整は、24－２の口縁部内外面が横ナデ、頸部は内外面ともに横位のヘラナデである。24－３は、外面が斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。24－２は、胎土がやや粗い。

伴う出土遺物がないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係などから平安時代と思われる。

第25号溝跡（第33・34図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30・31－89～91グリッドに位置する。30－90グリッド西側中央以南を第22号溝跡に切られているが、北東側の立ち上がりは第22号溝跡に併走する形で残存する。北西端では、第21号溝跡、第３号方形周溝墓東周溝と重複しており、前者との新旧関係は不明、後者とは切り合い関係を確認しなかったが、本溝跡が新しいと思われる。第３号方形周溝墓との重複箇所については、図面上で推定ラインとして破線で示しているが、本来は実線で示すべきものである。所々で重複する単独ピットとの新旧関係は、不明である。南東端以降は、調査区外に延びる。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、8.24ｍを測る。幅は、立ち上がり両側が確認された北西部で1.1ｍ前後を測る。確認面からの深さは、概ね0.25ｍ程を測る。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、黒褐色土による単一層（19層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物（第42図）で図示可能なものは、古墳時代前期の土師器壺（25－１・２）があるが、流れ込みと思われる。25－１・２は、土師器壺である。25－１はやや肥厚する口縁部下位から頸部まで、25－２は胴下部の破片である。調整は、25－１が内外面とも斜位のヘラミガキが施されているが、内面はやや粗く施されており、外面は所々にヘラミガキ前に施されたハケメが残る。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。25－２は、外面が斜位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。内面は、横・斜位のハケメである。

伴う出土遺物がないため、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降、平安時代以前としか言えない。

第26号溝跡（第33・34図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－91グリッドに位置する。東側で第13号溝跡を切っており、単独ピット172とも重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、1.3ｍと短い。幅は、概ね0.26ｍ前後を測るが、西端は0.12ｍと狭い。確認面からの深さは、0.05ｍ程と浅い。断面形は、船底状を呈する。覆土は、黒褐色土による単一層（20層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係から第13号溝跡より新しい平安時代以降としか言えない。

第27号溝跡（第33・34図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区31－90・91グリッドに位置し、第13号溝跡西側を併走する。第３号

方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、4.2 mと短い。幅は、概ね 0.4 m前後を測る。確認面からの深さは、0.14 m程と浅い。断面形は、やや横長の逆台形状を呈する。覆土は、黄灰色土による単一層（21 層）であった。ブロックを多量含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物（第 42 図）で図示可能なものは、奈良時代の須恵器椀（27 － 1 ）のみである。27 － 1 は、須恵器椀の口縁部から体部までの部位である。南比企産である。口縁端部が僅かに外反し、体部はやや内湾する。器壁が薄い。

本溝跡の時期は、奈良時代と思われる。

第 28 号溝跡（第 35 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 35・36 － 90 グリッドに位置する。単独ピット 140 と重複するが、新旧関係は不明である。また、第４号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。西側延長上に位置する第 31 号溝跡と第 32 号溝跡は、その走行方向から同一遺構の可能性がある。

ほぼ東西方向に走る。単独ピット 140 との重複箇所付近が途切れるが、検出された長さは、3.76 m を測る。幅は、ややバラツキがみられるが、概ね 0.35 m前後を測る。確認面からの深さは、西側が 0.05 m、東側が 0.07 mと非常に浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

遺物は、奈良・平安時代の須恵器坏、土師器甕の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 29 号溝跡（第 35 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 35・36 － 91 グリッドに位置する。第４号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。西側延長上に位置する第 30 号溝跡と第 34 号溝跡は、その走行方向から同一遺構の可能性がある。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、2.95 mと短い。幅は、ややバラツキがみられるが、概ね 0.3 m前後を測る。確認面からの深さは、0.03 m程と非常に浅い。断面形は、船底状を呈する。覆土は、図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

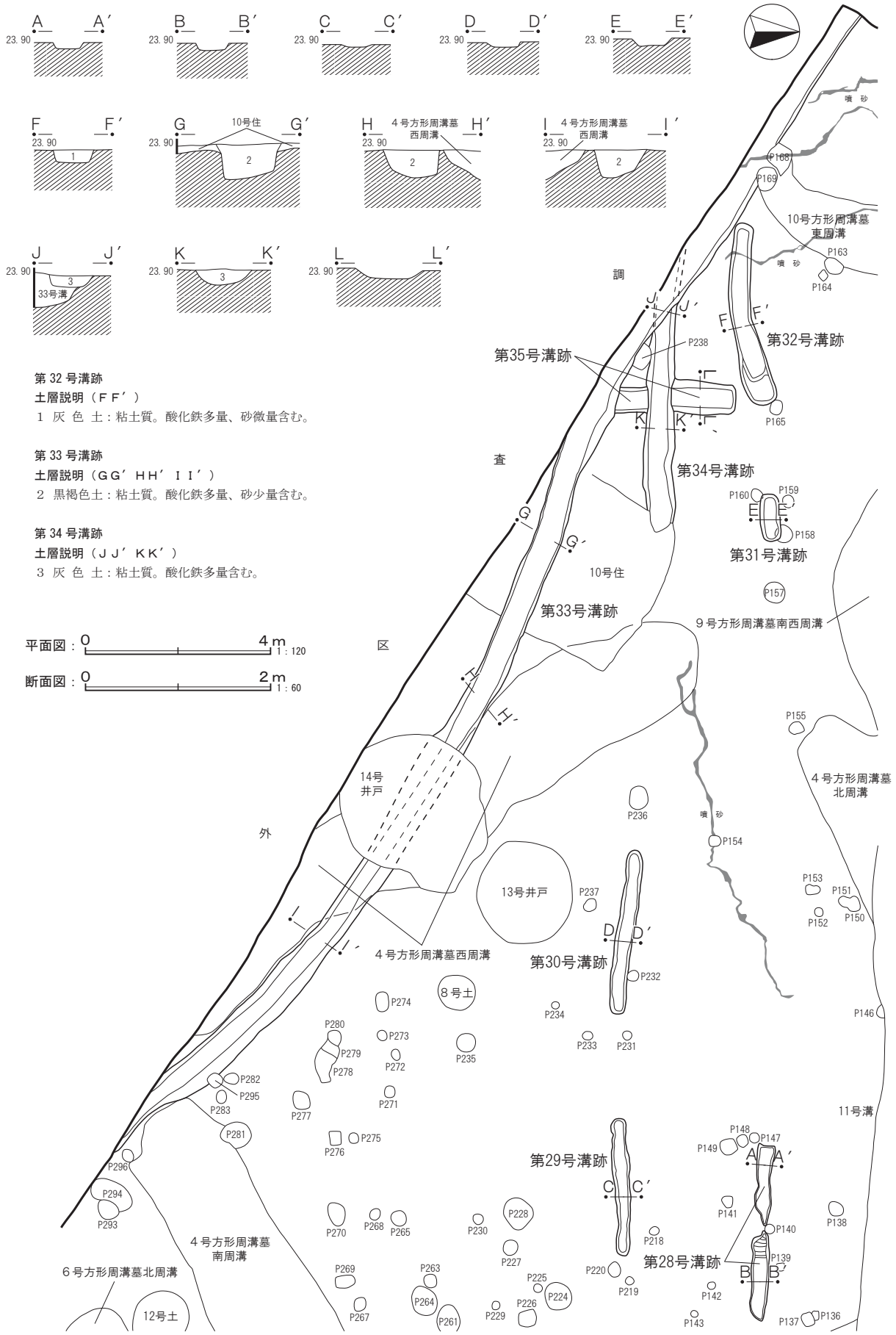
出土遺物はないが、本溝跡の時期は、その走行方向などから奈良・平安時代と思われる。

第 30 号溝跡（第 35 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 36・37 － 91 グリッドに位置する。北東部で単独ピット 232 と重複するが、新旧関係は不明である。また、第４号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。東側延長上に第 29 号溝跡、西側延長上に第 34 号溝跡が位置しており、その走行方向から同一遺構の可能性がある。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、3.5 mと短い。幅は、ややバラツキがみられるが、概ね 0.35 m前後を測る。確認面からの深さは、0.05 m程と非常に浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、その走行方向などから奈良・平安時代と思われる。



第 35 図　第 28 ～ 35 号溝跡

第 31 号溝跡（第 35 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 38 － 90 グリッドに位置する。単独ピット 158・160 を切っている。東側延長上に第 28 号溝跡、西側延長上に第 32 号溝跡が位置しており、その走行方向から同一遺構の可能性がある。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、1.02 ｍと非常に短い。幅は、0.4 ｍ程を測る。確認面からの深さは、0.08 ｍ程と非常に浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、その走行方向などから奈良・平安時代と思われる。

第 32 号溝跡（第 35 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 39・40 － 90 グリッドに位置する。東端で単独ピット 165 と重複するが、新旧関係は不明である。東側延長上に第 28 号溝跡と第 31 号溝跡が位置しており、その走行方向から同一遺構の可能性がある。

ほぼ東西方向に走るが、中央付近がやや南側に屈曲する。検出された長さは、3.98 ｍと短い。幅は、西側が 0.4 ｍと狭く、東側が 0.63 ｍと広い。確認面からの深さは、最大 0.13 ｍを測るが、東端は一段高くなり、0.05 ｍを測る。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積と思われる。

遺物は、奈良・平安時代の須恵器坏、土師器甕の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 33 号溝跡（第 35 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 36 ～ 40 － 90 ～ 93 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。36 ～ 38 － 91 ～ 93 グリッドで第４号方形周溝墓、38・39 － 91 グリッドで第 10 号住居跡、40 － 90 グリッドで第 10 号方形周溝墓を切っており、37 － 91・92 グリッドで第 14 号井戸跡、39 － 90・91 グリッドで第 34 号溝跡に切られている。また、39 － 91 グリッドで第 35 号溝跡、所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。南東及び北西端以降は、調査区外に延びる。

調査区沿いを南東から北西方向に走る。検出された長さは、第 14 号井戸跡との重複箇所も含めて 28.72 ｍを測る。幅は概ね 0.6 ｍ、確認面からの深さは 0.35 ｍ前後を測る。断面形は、ややいびつな逆台形状を呈する。覆土は、黒褐色土による単一層（２層）であった。自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第 42 図）は、平安時代の須恵器皿（33 － １）、甕（33 － ２）、土師器甕（33 － ３）がある。この他にも流れ込みで古墳時代前期の土師器壺（33 － ４）、台付甕（33 － ５）が出土した。

33 － １・２は、須恵器である。いずれも末野産である。33 － １は、皿の体部から底部までの部位である。調整は、体部が内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切り痕が残る。33 － ２は、甕の胴下部片である。調整は、内外面ともに横・斜位のヘラナデであるが、内面はあて具痕が所々に残る。33 － ３は、土師器長胴甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部がコの字状を呈し、胴上部は口径以上に膨らむ。調整は、口縁部内外面が横ナデであり、外面は指オサエとヘラによる刻みもみられた。胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデである。器壁が薄い。

33－4・5は、古墳時代前期の土師器である。33－4は、壺の口縁部から胴上部までの部位である。外反する口縁部が大きく開き、頸部はすぼまる。胴部は半球形を呈し、口径以上に膨らむ。調整は、口縁部から頸部までの内面と外面全面がヘラミガキ、胴部内面はヘラナデであるが、頸部と胴上部内面の境はヘラナデ前に施されたハケメが一部残る。胎土がやや粗い。33－5は、台付甕の接合部から台部中段付近までの部位である。調整は、台部内面と外面全面がヘラナデ、胴部内面はハケメである。

本溝跡の時期は、重複する第34号溝跡より古い平安時代と思われる。

第34号溝跡（第35図）

2011（平成23）年度調査Ａ区38・39－90・91グリッドに位置する。39－90・91グリッドで第33号溝跡を切っており、重複箇所西側は調査区外に延びる。39－91グリッドで直交して走る第35号溝跡、単独ピット238と重複するが、新旧関係は不明である。38－91グリッドで重複する第10号住居跡との新旧関係は、土層断面で確認できなかったが、出土遺物から本溝跡が新しいと思われる。東側延長上に位置する第29号溝跡と第30号溝跡は、その走行方向から同一遺構の可能性がある。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、第33号溝跡との重複箇所も含めて5.28ｍを測る。幅は、概ね0.6ｍ、確認面からの深さは、0.15ｍ前後を測る。断面形は、西側が横長の逆台形状、東側は船底状を呈する。覆土は、灰色土による単一層（３層）であった。自然堆積と思われる。

出土遺物（第42図）は、平安時代の須恵器坏（34－１・２）、甕（34－３）がある。34－１～３は、須恵器である。34－１・２は末野産、34－３は不明である。34－１・２は、坏である。34－１は全形の分かる個体、34－２は体部から底部までの部位である。34－１は口縁端部が外反し、以下は34－２も含め、体部が内湾し、底部はやや上げ底である。調整は、口縁部から体部が内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切り痕が残る。34－３は、甕の胴上部片である。調整は、内面が横・斜位のヘラナデであるが、あて具痕が残る。外面は、自然釉が付着しているため不明である。

本溝跡の時期は、重複する第33号溝跡より新しい平安時代と思われる。

第35号溝跡（第35図）

2011（平成23）年度調査Ａ区39－90・91グリッドに位置する。第33・34号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

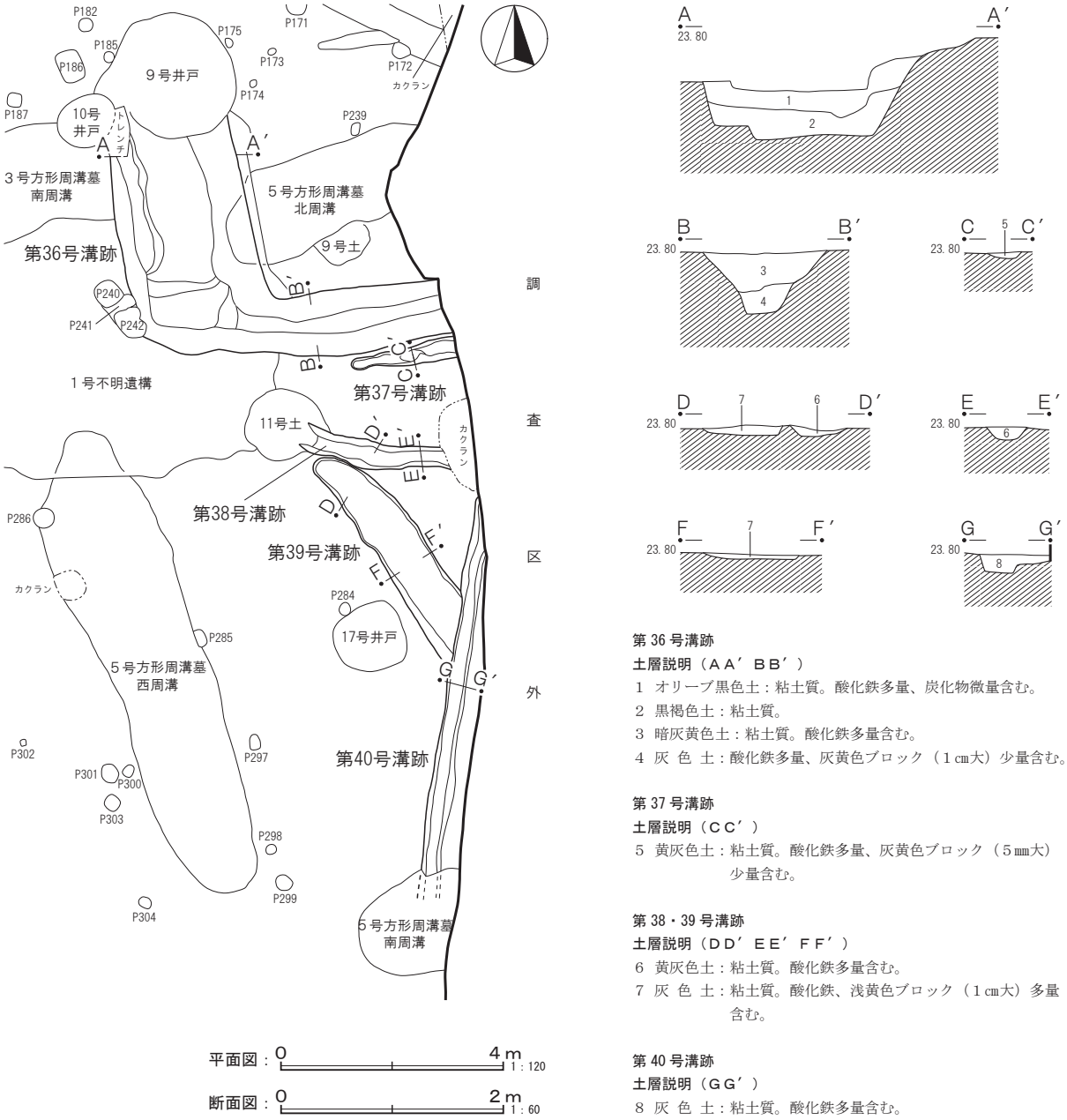
ほぼ南北方向に走る。検出された長さは、2.51ｍと短い。幅は、重複する第34号溝跡北側が0.5ｍ前後とやや広く、南側は0.4ｍ前後と狭い。確認面からの深さは、0.1ｍ程と浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

遺物は、図示不可能な弥生土器甕、平安時代の須恵器瓶の小片が微量出土したが、後者が本溝跡に伴うと思われる。

本溝跡の時期は、重複する第33・34号溝跡と前後する平安時代としておきたい。

第36号溝跡（第36図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30・31－91・92グリッドに位置する。30－92グリッドで第５号方形周溝墓の北周溝、31－92グリッドで第３号方形周溝墓の南周溝、31－91・92グリッドで第１号不明遺構を切っている。30・31－91・92グリッドで重複する第９号井戸跡は、同時期の可能性が高い。所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。30－92グリッド以東は、調査区外に延びる。



第36号溝跡
土層説明（ＡＡ′ＢＢ′）
1 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物微量含む。
2 黒褐色土：粘土質。
3 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 灰 色 土：酸化鉄多量、灰黄色ブロック（1㎝大）少量含む。

第37号溝跡
土層説明（ＣＣ′）
5 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。

第38・39号溝跡
土層説明（ＤＤ′ＥＥ′ＦＦ′）
6 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
7 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（1㎝大）多量含む。

第40号溝跡
土層説明（ＧＧ′）
8 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。

第36図　第36～40号溝跡

30－92グリッドは、ほぼ東西方向に走るが、30・31－92グリッド境で北へ直角に曲がり、同グリッド北側で第9号井戸跡に接続する。検出された長さは、7.68ｍを測る。幅・確認面からの深さ・断面形については、走行方向で異なる。東西方向に走る30－92グリッドは、幅が概ね1.1ｍ前後、確認面からの深さは0.55ｍ程を測り、断面形はＶ字状を呈する。南北方向に走る30・31－92グリッドは、幅が概ね2.3ｍ前後、確認面からの深さは0.9ｍ程を測り、断面形は横長の逆台形状を呈し、西側にテラス状の段が設けられていた。覆土も走行方向で異なる。南北方向に走る30・31－92グリッドは、中層以下の確認であるが、色調の異なる２層（１・２層）が確認された。東西方向に走る30－92グリッドも色調の異なる２層（３・４層）が確認された。いずれもレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

本溝跡に伴う出土遺物（第42図）は、磁器碗（36－１）、陶器碗（36－２）、壺（36－３）、皿（36

－４）、擂鉢（36－５）、香炉（36－６）、土師質土器かわらけ（36－７）、木製品漆器椀（36－８）がある。この他にも流れ込みで奈良・平安時代の須恵器甕（36－９）、中世の陶器碗（36－10）、土師質土器かわらけ（36－11）が出土した。

36－１は、肥前系磁器天目茶碗の口縁部から体部までの破片である。外面全面と口縁部内面に青磁釉、体部内面に透明釉が施釉されている。17 世紀中頃と思われる、36－２～６は、陶器である。36－５のみ丹波系、その他は瀬戸美濃系である。36－２は、天目茶碗の口縁部から体部までの部位である。口縁端部が外反し、体部は内湾する。体部外面下位以外に鉄釉が施釉されている。連房第２小期（1625～1650 年代）と思われる。36－３は、有耳壺の口縁部から胴部中段付近までの部位である。短い口縁部が外反し、頸部はすぼまる。肩部が張り出し、胴部はほぼ直立する。外面全面と口縁部から頸部までの内面に鉄釉が施釉されているが、口縁端部は拭い取られている。連房第２・３小期（1625～1660 年代）と思われる。36－４は、志野菊皿である。口縁端部と体部内面に菊花が表現されている。内外面に長石釉が施釉されている。大窯４段階（1590～1610 年代）と思われる。36－５は、擂鉢の体部片である。内外面に錆釉が施釉されている。36－６は、筒形香炉の口縁部片である。外面に彫りの深い平行沈線が３条巡る。内外面に長石釉が施釉されている。煙管の灰落しに使用されたため、口縁端部に敲打痕が残る。36－７は、在地系の土師質土器かわらけである。口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。底面に回転糸切り痕を残す。器壁が厚い。17 世紀中頃と思われる。36－８は、木製品漆器椀の体部から高台部上位までの部位である。体部が内湾し、高台部はハの字に小さく開くと思われる。内外面に朱の漆が塗られている。樹種は、不明である。

36－９は、奈良・平安時代の須恵器甕の胴部中段付近の破片である。南比企産である。調整は、外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。36－10・11 は、中世の遺物である。36－10 は、瀬戸美濃系陶器碗の口縁部から体部までの破片である。内外面に灰釉が施釉されている。古瀬戸後期（15 世紀代）と思われる。36－11 は、古河公方系の土師質土器かわらけである。体部から底部までの部位である。底面に板目状圧痕がみられた。15 世紀後半～16 世紀初頭と思われる。

本溝跡の時期は、近世と思われる。

第 37 号溝跡（第 36 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30－92 グリッドに位置する。第５号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。北側に隣接して第 36 号溝跡が東西に併走する。東端以降は、調査区外に延びる。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは、1.89 ｍと短い。幅は、調査区との境付近で 0.38 ｍ程を測り、西側に向かって狭まる。先端付近は、0.2 ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.05 ｍと非常に浅い。断面形は、船底状を呈する。覆土は、黄灰色土による単一層（５層）であった。ブロックを少量含んでいたが、自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は、その走行方向から奈良・平安時代の可能性が高い。

第 38 号溝跡（第 36 図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－93グリッドに位置する。西端を第11号土坑に切られている。また、第５号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。南側に隣接し

て第39号溝跡が位置するが、重複していないため新旧関係は不明である。東端は撹乱を受けていたが、調査区外に延びると思われる。

ほぼ東西方向にやや蛇行しながら走る。検出された長さは、2.34 mと短い。幅は、攪乱を受けた東端付近が0.35 mとやや狭いが、その他は概ね0.45 m前後を測る。確認面からの深さは、0.08 m程と非常に浅い。断面形は、船底状を呈する。覆土は、黄灰色土による単一層（６層）であった。自然堆積と思われる。

出土遺物がないが、本溝跡の時期は、重複する遺構との新旧関係とその走行方向などから第11号土坑より古い奈良時代としておきたい。

第39号溝跡（第36図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－93グリッドに位置する。南東部を第40号溝跡に切られている。第５号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本溝跡が新しいと思われる。北側に隣接して第38号溝跡が位置するが、重複していないため新旧関係は不明である。。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、3.96 mを測る。幅は、概ね1.2 m前後を測るが、北西端は0.48 m程と狭まる。確認面からの深さは、0.07 m前後と非常に浅い。断面形は、横長の船底状を呈する。覆土は、灰色土による単一層（７層）であった。ブロックを多量含んでいたことから埋め戻された可能性がある。

遺物は、奈良・平安時代の須恵器坏、土師器甕の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第40号溝跡（第36図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区29・30－93・94グリッドに位置する。30－93グリッドで第39号溝跡を切っている。第５号方形周溝墓の方台部に位置し、南西端では南周溝を切っていると思われるが、平面プランは確認できなかった。本溝跡が新しいと思われる。北東端以降は、調査区外に延びる。

南西から北東方向に走る。検出された長さは6.33 mを測り、南西部は重複する第５号方形周溝墓南周溝以南に続きがみられなかったことから重複箇所内で終息すると思われる。南東側の立ち上がりが調査区外にあるため正確な幅は不明であるが、検出された範囲では最大m 0.69を測る。確認面からの深さは、0.16 m程を測る。断面形は、北西側が逆台形状を呈するが、南東側は中段にテラス状の段が設けられていた。覆土は、灰色土による単一層（８層）であった。自然堆積と思われる。

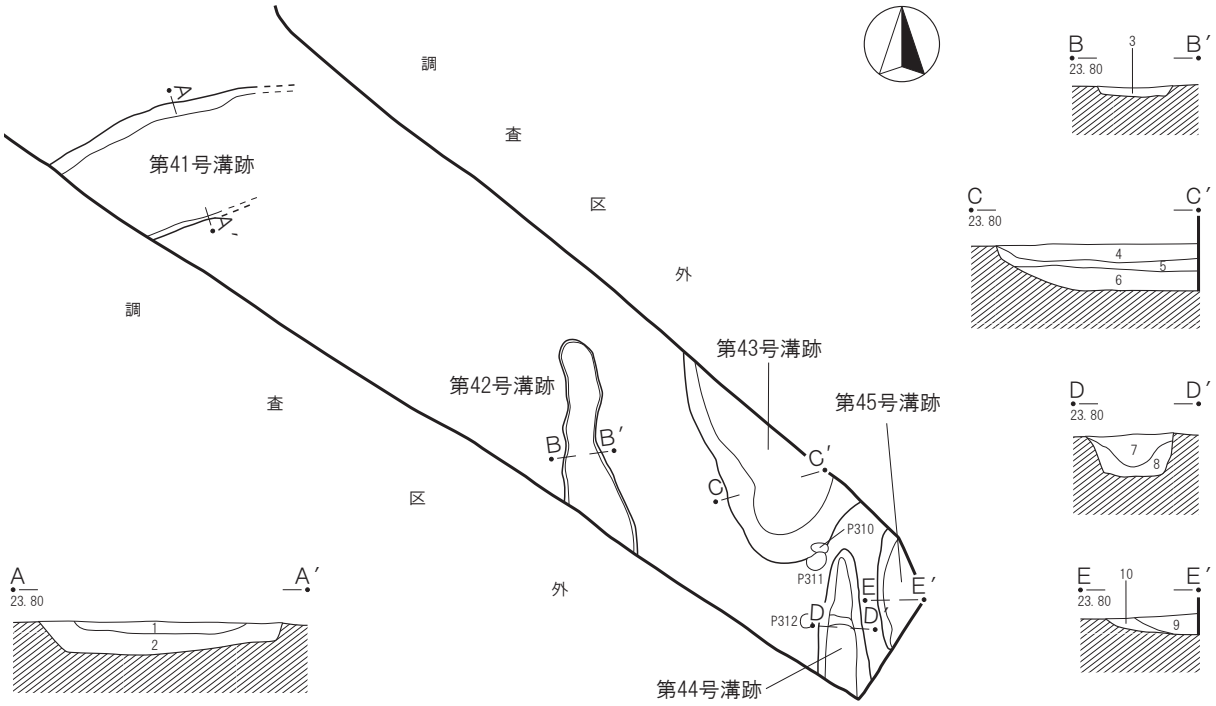
遺物は、図示不可能な奈良・平安時代の須恵器坏・甕、中世以降の磁器の小片が微量出土したが、後者が本溝跡に伴うと思われる。

本溝跡の時期は、中世以降としか言えない。

第41号溝跡（第37図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－96・97グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。南西端以降は、調査区外に延びる。なお、調査区の都合から定かではないが、本溝跡と28－97・98グリッドに位置する第43号溝跡は、方形周溝墓の可能性がある。

南西から北東方向に走るが、北東部は途切れる。検出された長さは、2.38 mと短い。幅は、1.9 m前後を測る。確認面からの深さは、0.26 m程を測る。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、



第 41 号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第 42 号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂多量含む。

第 43 号溝跡
土層説明（ＣＣ′）
4 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、白色粒（火山灰）、砂少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂、灰黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
6 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（３～５㎝大）多量含む。

第 44 号溝跡
土層説明（ＤＤ′）
7 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
8 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１～３㎝大）多量含む。

第 45 号溝跡
土層説明（ＥＥ′）
9 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
10 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（２㎝大）少量含む。

平面図：0 4m 1：120
断面図：0 2m 1：60

第 37 図　第 41 ～ 45 号溝跡

２層（１・２層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本溝跡の時期は、不明と言わざるを得ない。

第 42 号溝跡（第 37 図）

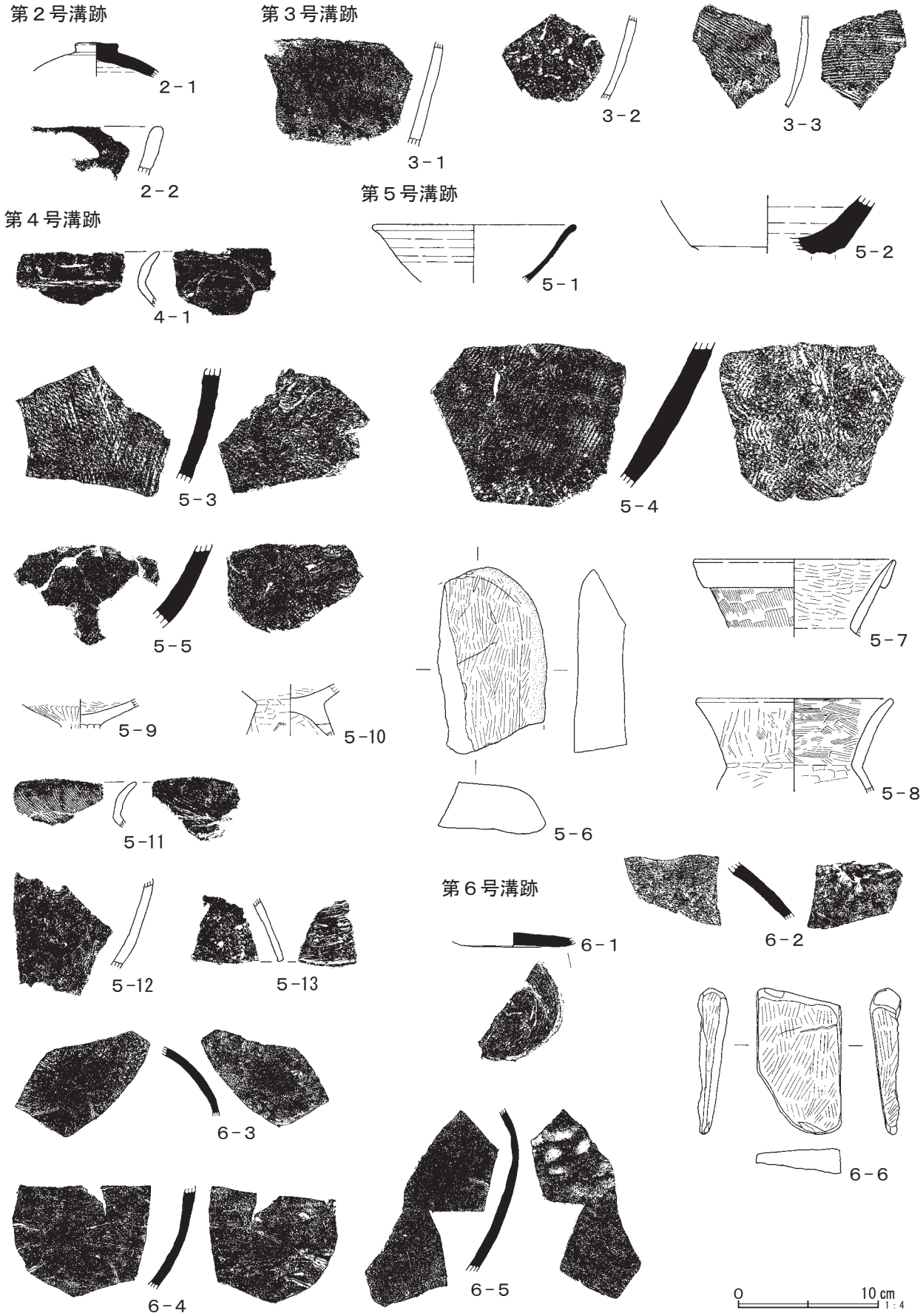
2011（平成 23）年度調査Ｂ区 28・29 － 97・98 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。南端以降は、調査区外に延びる。

ほぼ南北方向に蛇行しながら走る。検出された長さは、3.3 ｍと短い。幅は、南から北端に向かって狭まる。南側の調査区境付近は 0.87 ｍ、北端付近は 0.5 ｍ前後を測る。確認面からの深さは、0.07 ｍ程と浅い。断面形は、横長の逆台形状を呈する。覆土は、砂を多量含む灰色土による単一層（３層）であった。自然堆積と思われる。

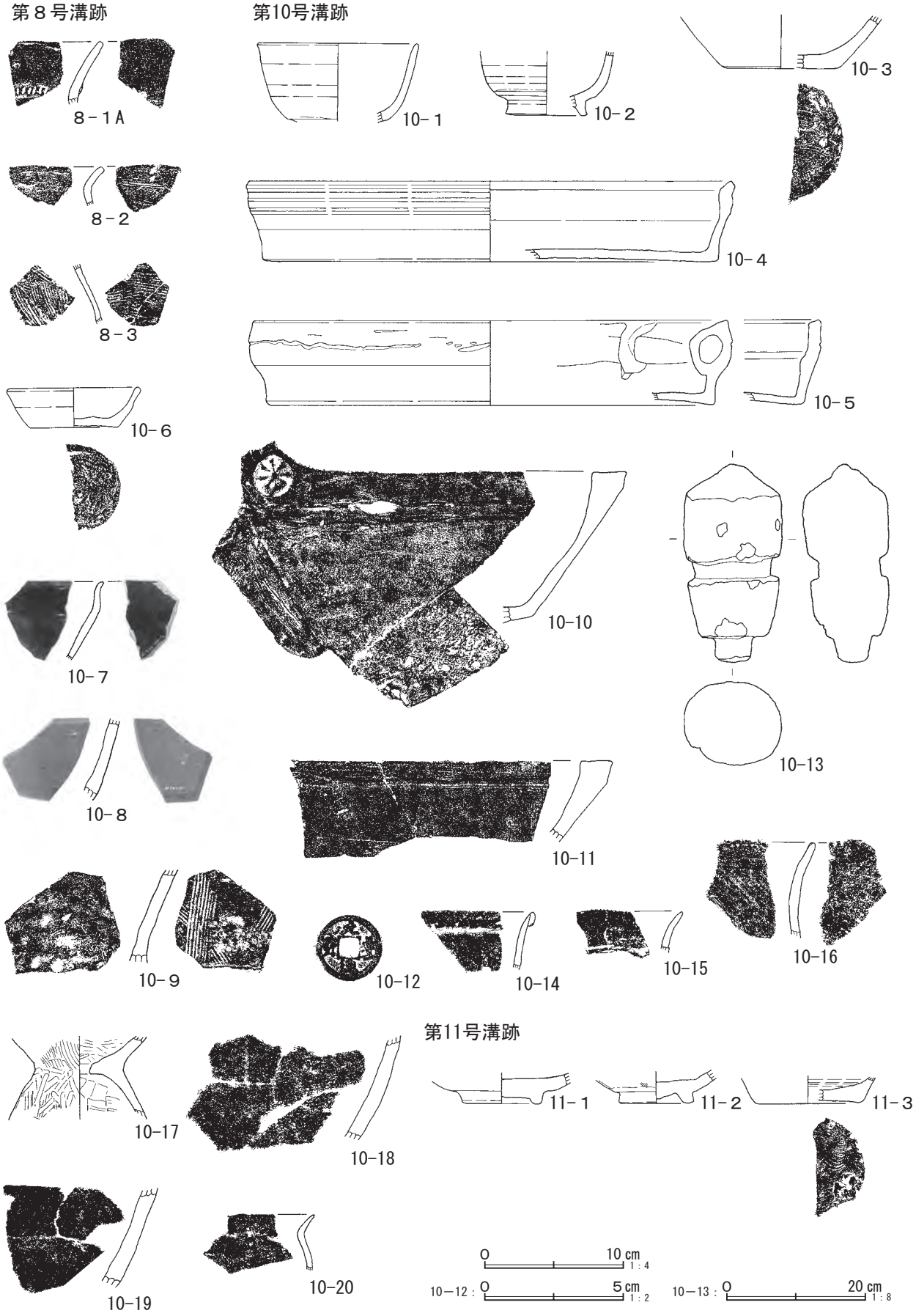
出土遺物がないため、本溝跡の時期は、不明と言わざるを得ない。

第 43 号溝跡（第 37 図）

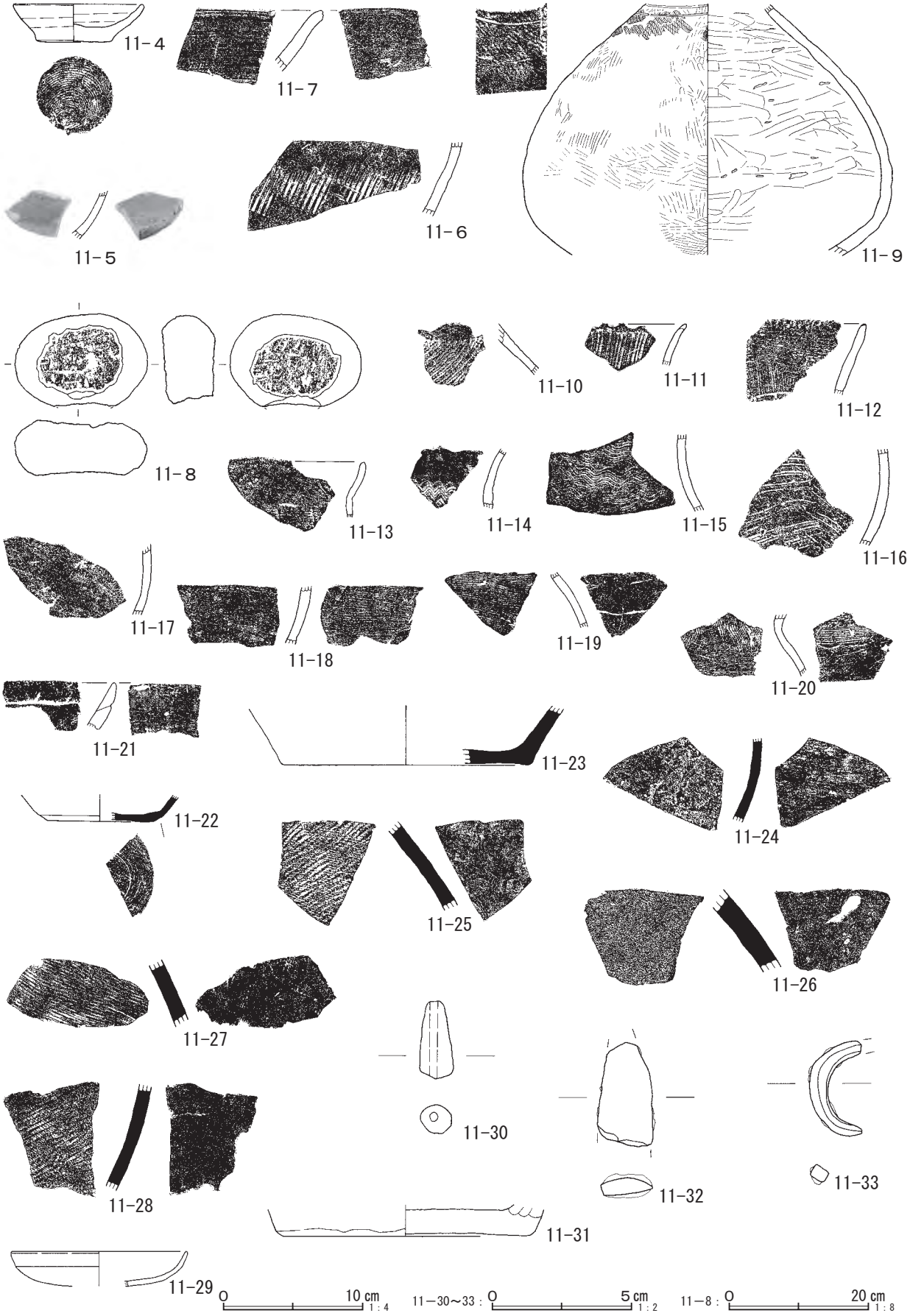
2011（平成 23）年度調査Ｂ区 28 － 97・98 グリッドに位置する。南東端で単独ピット 310・311 と重複するが、新旧関係は不明である。北側は、調査区外に延びる。なお、調査区の都合から定かではないが、本溝跡と第 41 号溝跡は、方形周溝墓の可能性がある。



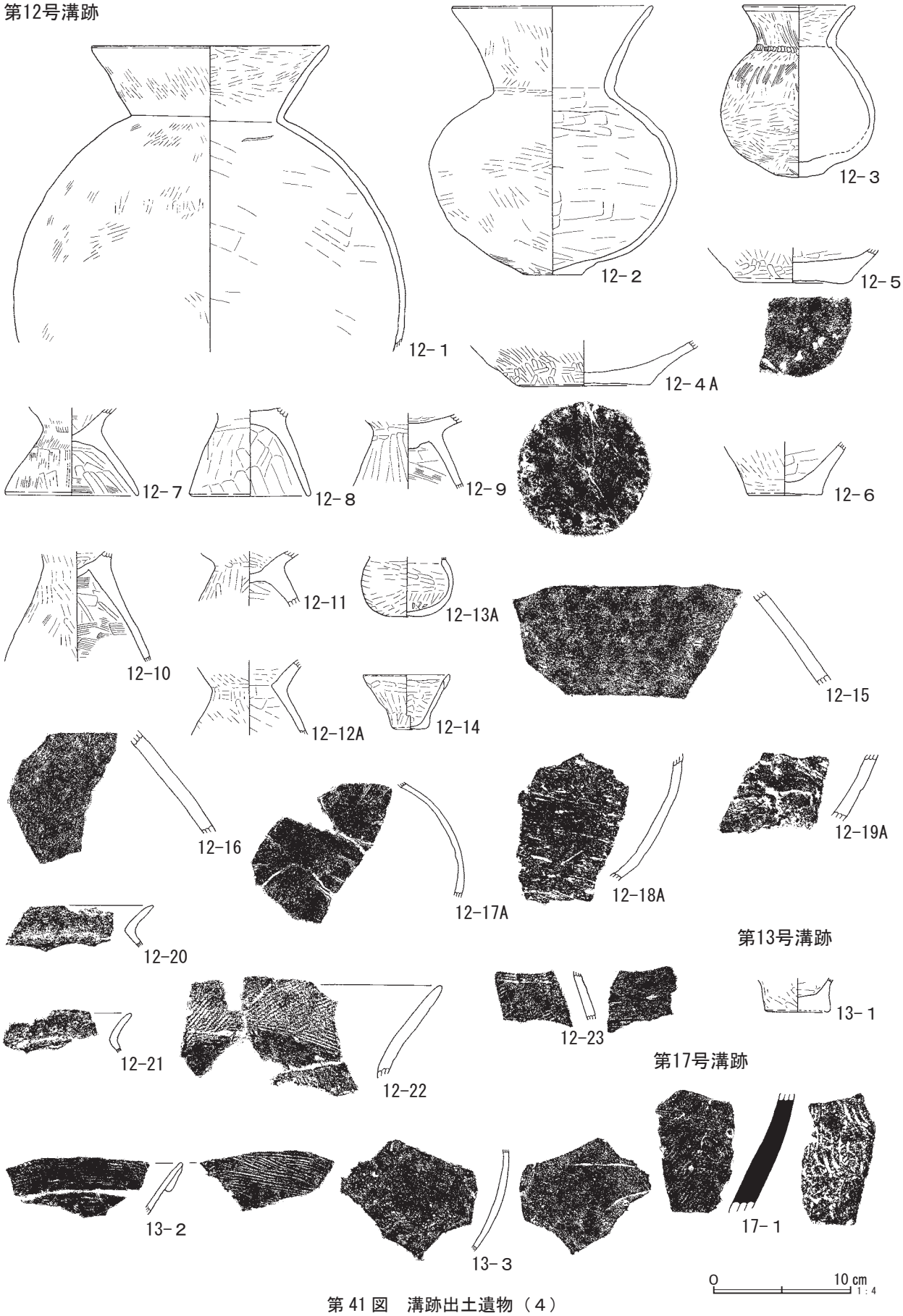
第 38 図　溝跡出土遺物（１）



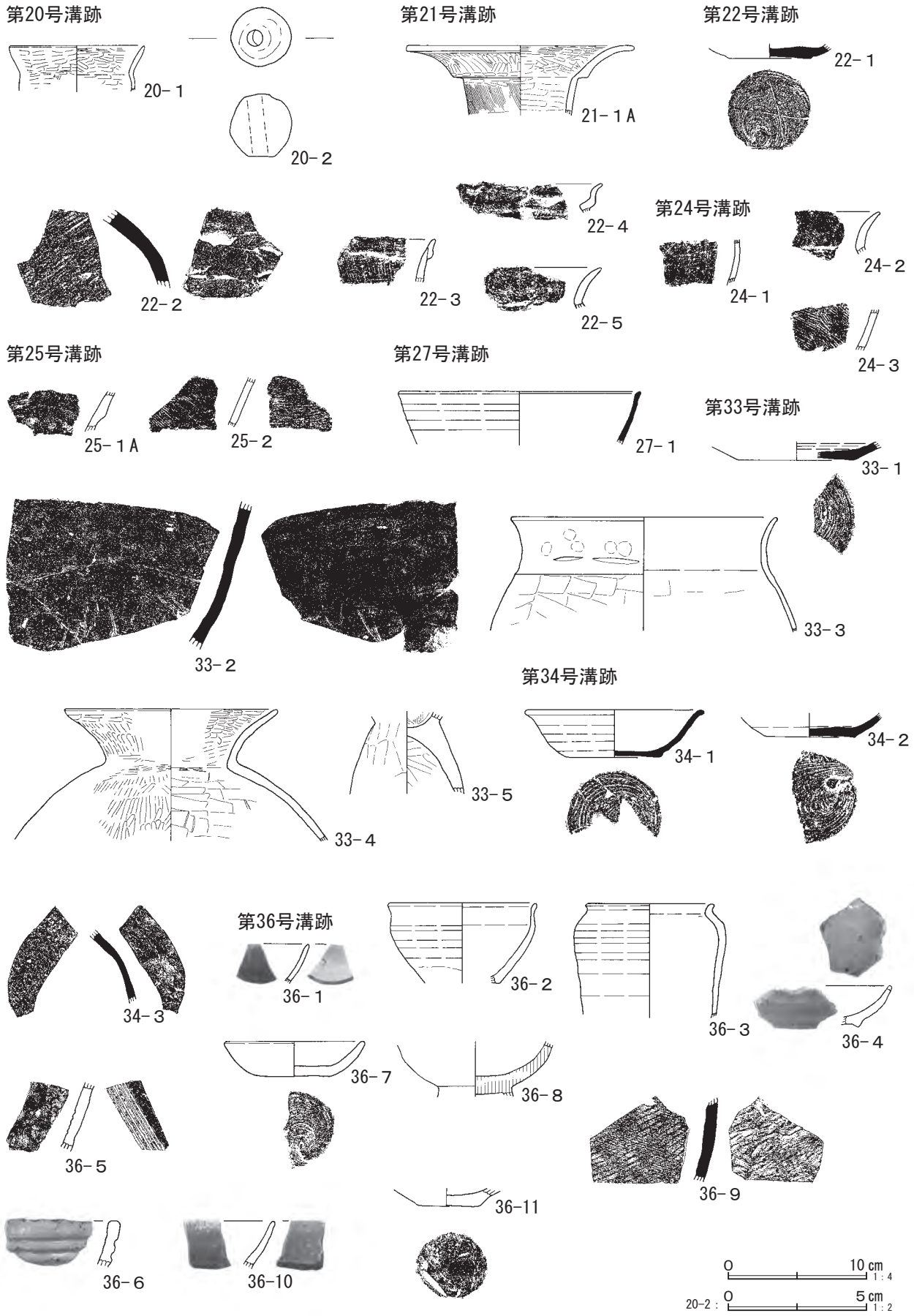
第 39 図　溝跡出土遺物（２）



第 40 図　溝跡出土遺物（３）



第 41 図　溝跡出土遺物（4）



第 42 図　溝跡出土遺物（5）

第 11 表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　考
2-1	2号溝跡	須恵器　蓋	－	(2.45)	3.1	ABHLN	灰白色	C	天井部20%	奈良・平安。末野産。
2-2	2号溝跡	瓦質土器　焙烙	－	－	－	ABCDHKN	外:黒褐　内:灰	B	ロ～体部片	中世。在地系。
3-1	3号溝跡	瓦質土器　火鉢	－	－	－	ABDHKN	外:黒褐　内:にぶい橙	B	体部片	近世。在地系。
3-2	3号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABCDHN	外:にぶい橙　内:黄灰	B	胴下部片	古墳前。
3-3	3号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIKN	外:黒褐　内:にぶい黄橙	B	胴中～下片	古墳前。
4-1	4号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABEHIKN	外:褐灰　内:明赤褐	B	ロ～胴上片	古墳前。
5-1	5号溝跡	須恵器高台付椀	(14.6)	(4.1)	－	ABEHL	橙　色	B	ロ～体40%	平安。末野産。酸化焔焼成。
5-2	5号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABFN	外:暗青灰　内:黄灰	A	胴～底20%	奈良・平安。南比企産。
5-3	5号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	胴下部片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。
5-4	5号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHN	灰白色	B	胴下部片	奈良・平安。末野産。
5-5	5号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDH	灰白色	B	胴下部片	奈良・平安。産地不明。
5-6	5号溝跡	磨　石	最大長(13.0)cm、最大幅(7.8)cm、最大厚(3.7)cm。重量(539.0)g。約2/3残。砂岩。							
5-7	5号溝跡	土師器　壺	(14.6)	(5.55)	－	ABDEHKN	橙　浅黄橙　黒褐	B	ロ～頸40%	古墳前。内外面所々摩耗。
5-8	5号溝跡	土師器　壺	(14.2)	(6.75)	－	ABCDHIKN	外:にぶい橙　内:灰褐	B	ロ～肩20%	古墳前。
5-9	5号溝跡	土師器　高坏	－	(2.1)	－	ABDHIKN	外:にぶい橙　内:にぶい橙	B	接合部55%	古墳前。内面やや摩耗。
5-10	5号溝跡	土師器　高坏	－	(3.7)	－	ABHKN	にぶい橙色	B	接～脚80%	古墳前。
5-11	5号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIKN	暗灰黄色	B	ロ～胴上片	古墳前。外面輪積痕有。
5-12	5号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDEHIKN	外:淡黄　黒　内:橙	B	胴下部片	古墳前。外面やや摩耗。
5-13	5号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDIKN	橙　色	B	台部片	古墳前。内外面やや摩耗。
6-1	6号溝跡	須恵器　坏	－	(1.0)	(7.7)	ABFHN	灰色	B	底部45%	奈良。南比企産。
6-2	6号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	AB	黄灰　灰オリーブ	A	肩部片	奈良・平安。産地不明。外面自然釉付着。
6-3	6号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABN	外:黒褐　内:灰	A	胴上部片	奈良・平安。産地不明。外面自然釉付着。
6-4	6号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABFN	外:暗灰　内:灰	A	胴中～下片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。
6-5	6号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABN	外:暗灰　内:灰	A	胴中～下片	奈良・平安。産地不明。外面自然釉付着。
6-6	6号溝跡	砥　石	最大長(9.65)cm、最大幅(6.05)cm、最大厚(2.15)cm。重量(172.5)g。片面欠。緑色凝灰岩。							
8-1	8号溝跡	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDH	明赤褐　にぶい橙	A	ロ～頸部片	弥生中。内外面赤彩、外面ほぼ剥落。
8-2	8号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHN	灰褐　明赤褐	B	ロ～頸部片	古墳前。
8-3	8号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	古墳前。
10-1	10号溝跡	陶器　碗	(11.6)	(5.7)	－	－	－	－	ロ～底30%	近世。瀬戸美濃系。
10-2	10号溝跡	陶器　碗	－	(4.65)	(5.9)	－	－	－	体～高30%	近世。瀬戸美濃系。
10-3	10号溝跡	瓦質土器片口鉢	－	(3.85)	(8.5)	ABHN	灰白色	B	体～底40%	中～近世。在地系。
10-4	10号溝跡	瓦質土器　焙烙	(35.2)	5.8	(33.8)	ABHK	黒　色	B	10%	中～近世。在地系。
10-5	10号溝跡	瓦質土器　焙烙	(34.4)	6.1	(32.6)	ABDHKN	黒　暗褐	B	25%。	中～近世。在地系。外面輪積痕有。
10-6	10号溝跡	土師質かわらけ	(9.7)	2.85	(6.4)	ABCKN	灰褐　にぶい橙	B	45%	中～近世。在地系。
10-7	10号溝跡	陶器　碗	－	－	－	－	－	－	ロ～体部片	近世。瀬戸美濃系。
10-8	10号溝跡	陶器　徳利	－	－	－	－	－	－	胴下部片	近世。瀬戸美濃系。
10-9	10号溝跡	瓦質土器　擂鉢	－	－	－	ABDHIKN	褐灰色	B	体部片	近世。在地系。外面輪積痕顕著。
10-10	10号溝跡	瓦質土器　火鉢	－	－	－	ABHIKN	灰　黒	B	ロ～底部片	近世。在地系。10-11同一個体。
10-11	10号溝跡	瓦質土器　火鉢	－	－	－	ABHIK	灰　黒	B	ロ～体部片	近世。在地系。10-10同一個体。
10-12	10号溝跡	銭貨　元豊通寶	最大径2.35cm、孔径0.7cm、最大厚0.1cm。重量3.06g。完形。行書。初鋳年1078年。							
10-13	10号溝跡	石製品　五輪塔	最大長28.5cm、最大幅14.1cm、最大厚12.45cm。重量(3,200.0)g。所々欠。安山岩。空風輪部。							
10-14	10号溝跡	弥生土器　壺	－	－	－	ABHN	にぶい黄橙色	B	ロ～頸部片	弥生後。内外面摩耗顕著。外面凹み有。
10-15	10号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	ロ～頸部片	弥生中～後。内面やや摩耗。
10-16	10号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:黒褐　内:にぶい褐	B	ロ～頸部片	弥生後。内外面摩耗顕著。
10-17	10号溝跡	土師器　器台	－	(6.0)	－	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	接～台80%	古墳前。器受部内面やや摩耗。
10-18	10号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABDHN	にぶい橙	B	胴下部片	古墳前。外面摩耗。10-19同一個体。
10-19	10号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABDHN	にぶい橙	B	胴下部片	古墳前。内面大半摩耗。10-18同一個体。
10-20	10号溝跡	土師器　鉢	－	－	－	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	ロ～体部片	古墳前。内外面摩耗顕著。
11-1	11号溝跡	青磁　碗	－	(2.25)	5.8	－	－	－	体～高70%	中世。龍泉窯系。
11-2	11号溝跡	青磁　碗	－	(2.35)	(5.4)	－	－	－	体～高30%	中世。同安窯系。
11-3	11号溝跡	陶器　壺	－	(1.85)	(7.8)	－	－	－	底部40%	中世。瀬戸美濃系。
11-4	11号溝跡	土師質かわらけ	9.4	2.8	5.5	ABHN	にぶい黄色	B	90%	中世。在地系。
11-5	11号溝跡	白磁　碗	－	－	－	－	－	－	体部片	中世。中国産。
11-6	11号溝跡	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	胴下部片	中世。常滑系。13号井戸13－2同一個体？
11-7	11号溝跡	瓦質土器片口鉢	－	－	－	－	－	－	ロ～体部片	中世。在地系。
11-8	11号溝跡	石製品　五輪塔	最大長(12.9)cm、最大幅18.95cm、最大厚7.95cm。重量(1,403.0)g。側面一部欠。角閃石安山岩。水輪部。							
11-9	11号溝跡	弥生土器　壺	－	(18.0)	－	ABEHIN	外:橙　内:黒褐	B	頸～胴45%	弥生中。内外面所々摩耗。内面輪積痕有。
11-10	11号溝跡	弥生土器　壺	－	－	－	ABHI	灰黄褐色	B	肩部片	弥生中。内外面やや摩耗。
11-11	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:褐　内:橙	B	ロ～頸部片	弥生中。内面摩耗顕著。
11-12	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	AHIKN	外:黒褐　内:褐	B	ロ～頸部片	弥生後。内面摩耗顕著。
11-13	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	褐灰　橙	B	ロ～頸部片	弥生中～後。内面下位、外面摩耗顕著。
11-14	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	外:灰褐　内:にぶい橙	B	ロ～頸部片	弥生中～後。
11-15	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHKN	外:にぶい黄橙　内:浅黄橙	B	頸～胴上片	弥生後。内外面摩耗顕著。
11-16	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHKN	灰褐　にぶい橙	B	胴中段片	弥生中～後。
11-17	11号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	胴中段片	弥生中～後。内外面摩耗顕著。外面凹み有。
11-18	11号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABDEHK	浅黄色	B	胴下部片	古墳前。外面摩耗顕著。
11-19	11号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHN	外:浅黄　内:橙	B	胴上部片	古墳前。内面輪積痕有。
11-20	11号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIKN	橙　色	B	頸～胴上片	古墳前。内面輪積痕有。
11-21	11号溝跡	土師器　鉢	－	－	－	ABDHI	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	口縁部片	古墳前。外面輪積痕有。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
11-22	11号溝跡	須恵器　坏	－	(1.95)	(7.6)	ABL	黄灰色	B	体～底25%	奈良。東金子産。
11-23	11号溝跡	須恵器　瓶	－	(4.25)	(18.0)	ALN	外:黒　内:暗ｵﾘｰﾌﾞ灰	A	胴～底10%	奈良・平安。末野産。内外面自然釉付着。
11-24	11号溝跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABF	灰　ｵﾘｰﾌﾞ黒	B	胴中～下片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。
11-25	11号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	黄灰色	B	胴上部片	奈良・平安。南比企産。
11-26	11号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	外:灰白　内:黄灰	B	胴上部片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。
11-27	11号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABN	外:暗灰　内:灰	B	胴上部片	奈良・平安。産地不明。外面自然釉付着。
11-28	11号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	AFN	灰　色	B	胴下部片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。
11-29	11号溝跡	土師器　坏	(12.7)	(2.45)	－	ABCHIKN	橙　色	B	20%	奈良。内外面摩耗顕著。
11-30	11号溝跡	土　錘	最大長(2.8)㎝、最大幅(1.2)㎝、孔径(0.3)㎝。重量(3.5)g。胎土:ABCHKN。半分欠。							
11-31	11号溝跡	陶器　壺	－	(2.25)	(17.7)	－	－	－	底部30%	近世。瀬戸美濃系。
11-32	11号溝跡	鉄製品　刀子	最大長(3.7)㎝、最大幅(1.95)㎝、最大厚(0.55)㎝。重量(8.7)g。刃部先端付近残。							
11-33	11号溝跡	鉄製品　刀子	最大長(3.4)㎝、最大幅(0.7)㎝、最大厚(0.5)㎝。重量(2.9)g。柄部付近残。							
12-1	12号溝跡	土師器　壺	17.4	(22.35)	－	ABEHIKN	橙　色	B	口～胴30%	古墳前。内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
12-2	12号溝跡	土師器　壺	14.6	19.7	4.5	ABCDKN	浅黄橙色	B	ほぼ完形	古墳前。内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
12-3	12号溝跡	土師器　壺	8.3	12.6	3.7	ABEHKN	にぶい橙色	B	ほぼ完形	古墳前。内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
12-4	12号溝跡	土師器　壺	－	(3.4)	9.8	ABCHKN	赤褐色	B	底部90%	古墳前。内面剥離顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
12-5	12号溝跡	土師器　壺	－	(2.55)	(8.6)	ABDHKN	外:浅黄橙　内:赤褐	B	底部25%	古墳前。内面やや剥離。底面凹み有。
12-6	12号溝跡	土師器　壺	－	(4.0)	5.5	ABCDHIN	外:にぶい黄橙　内:黒	B	胴～底90%	古墳前。外面摩耗顕著。
12-7	12号溝跡	土師器　台付甕	－	(6.4)	(9.8)	ABDHKN	にぶい黄橙　黒	B	接～台25%	古墳前。
12-8	12号溝跡	土師器　台付甕	－	(6.45)	(8.9)	ABCHIKN	外:にぶい橙　内:にぶい褐	B	接～台45%	古墳前。外面摩耗顕著。
12-9	12号溝跡	土師器　台付甕	－	(5.5)	－	ABCHIKN	にぶい褐色	B	接～台60%	古墳前。内外面やや摩耗。
12-10	12号溝跡	土師器　高坏	－	(8.1)	－	ABCDKN	にぶい橙色	B	接～脚80%	古墳前。外面摩耗顕著。
12-11	12号溝跡	土師器　高坏	－	(4.05)	－	ABCHIN	明赤褐色	B	接～脚80%	古墳前。
12-12	12号溝跡	土師器　器台	－	(5.5)	－	ABDHIN	にぶい褐　明褐	B	接～台90%	古墳前。内外面摩耗。外面赤彩、ほぼ剥落。
12-13	12号溝跡	土師器　ﾐﾆﾁｭｱ	－	(4.35)	2.8	ABCDHIN	浅黄色	B	肩～底80%	古墳前。外面摩耗。外面赤彩、ほぼ剥落。
12-14	12号溝跡	土師器　ﾐﾆﾁｭｱ	(6.4)	4.0	2.7	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	80%	古墳前。内面輪積痕有。
12-15	12号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	橙　色	B	胴上部片	古墳前。内外面摩耗顕著。12-16同一個体。
12-16	12号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABDHIN	橙　色	B	胴上部片	古墳前。内外面摩耗顕著。12-15同一個体。
12-17	12号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABEHIN	外:にぶい橙　内:暗灰黄	B	肩～胴中片	古墳前。外面赤彩、ほぼ剥落。
12-18	12号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABCHN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	古墳前。外面赤彩、ほぼ剥落。12-19同一個体。
12-19	12号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABCHN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	古墳前。外面赤彩、ほぼ剥落。12-18同一個体。
12-20	12号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDEHIN	赤褐　暗褐	B	口～胴上片	古墳前。内外面摩耗顕著。
12-21	12号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIN	にぶい橙色	B	口～胴上片	古墳前。内外面摩耗顕著。
12-22	12号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIN	橙　色	B	口～頸部片	古墳前。
12-23	12号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIK	外:にぶい褐　内:にぶい黄橙	B	頸～胴上片	弥生後。内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
13-1	13号溝跡	土師器　壺	－	(2.5)	4.8	ABEHKN	にぶい黄橙色	B	胴～底80%	古墳前。内外面摩耗顕著。
13-2	13号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	外:浅黄橙　内:にぶい黄橙	B	口～頸部片	古墳前。
13-3	13号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHKN	浅黄橙色	B	胴中～下片	古墳前。外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
17-1	17号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHL	灰黄色	B	胴下部片	奈良・平安。末野産。
20-1	20号溝跡	土師器　鉢	(9.8)	(3.3)	－	ABHIN	にぶい橙色	B	口～体20%	古墳前。外面やや摩耗。
20-2	20号溝跡	土　玉	最大径2.15㎝、孔径0.55㎝。重量9.1g。胎土:ABN。完形。							
21-1	21号溝跡	土師器　壺	16.5	(5.05)	－	ABEHKN	外:にぶい橙　内:赤褐	B	口～頸75%	古墳前。内外面所々摩耗。口縁部内面赤彩。
22-1	22号溝跡	須恵器　坏	－	(1.05)	6.0	ABFHN	灰　色	B	底部100%	平安。南比企産。底面×印有。
22-2	22号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABHNO	灰黄褐色	B	胴上部片	奈良・平安。新治産？
22-3	22号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABEHKN	橙　色	B	口～頸部片	古墳前。内外面やや摩耗。
22-4	22号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABHKN	褐灰　明赤褐	B	口～頸部片	古墳前。
22-5	22号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDEHKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	古墳前。
24-1	24号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい褐　内:にぶい橙	B	胴中段片	古墳前。
24-2	24号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDIKN	外:にぶい黄褐　内:浅黄橙	B	口～頸部片	古墳前。内外面やや摩耗。
24-3	24号溝跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABDEIN	外:にぶい黄橙　内:橙	B	胴下部片	古墳前。
25-1	25号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:にぶい橙　内:褐灰	B	口～頸部片	古墳前。外面赤彩、ほぼ剥落。
25-2	25号溝跡	土師器　壺	－	－	－	ABHN	外:赤褐　内:褐灰	B	胴下部片	古墳前。内面摩耗顕著。
27-1	27号溝跡	須恵器　椀	(17.5)	(3.85)	－	AFN	褐灰色	B	口～体10%	奈良。南比企産。
33-1	33号溝跡	須恵器　皿	－	(1.35)	(8.2)	ABHLN	灰白色	B	体～底25%	平安。末野産。
33-2	33号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABLN	黄灰色	B	胴下部片	奈良・平安。末野産。
33-3	33号溝跡	土師器　甕	(19.2)	(8.25)	－	ABDHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴20%	奈良。胴部内面摩耗顕著。
33-4	33号溝跡	土師器　壺	(15.4)	(9.55)	－	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴30%	古墳前。外面やや摩耗。
33-5	33号溝跡	土師器　台付甕	－	(5.95)	－	ABDHN	橙　色	B	接～台55%	古墳前。内外面やや摩耗。
34-1	34号溝跡	須恵器　坏	(12.9)	3.45	6.9	ABHLN	灰　色	B	45%	平安。末野産。
34-2	34号溝跡	須恵器　坏	－	(1.8)	6.5	ABDHLN	黄灰色	B	体～底60%	平安。末野産。
34-3	34号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	AB	外:灰ｵﾘｰﾌﾞ　内:灰	B	胴上部片	奈良・平安。産地不明。外面自然釉付着。
36-1	36号溝跡	磁器　碗	－	－	－	－	－	－	口～体部片	近世。肥前系。
36-2	36号溝跡	陶器　碗	(10.8)	(5.85)	－	－	－	－	口～体20%	近世。瀬戸美濃系。
36-3	36号溝跡	陶器　壺	(11.4)	(8.25)	－	－	－	－	口～胴30%	近世。瀬戸美濃系。
36-4	36号溝跡	陶器　皿	－	－	－	－	－	－	15%	近世。瀬戸美濃系。
36-5	36号溝跡	陶器　擂鉢	－	－	－	－	－	－	体部片	近世。丹波系。
36-6	36号溝跡	陶器　香炉	－	－	－	－	－	－	口縁部片	近世。瀬戸美濃系。
36-7	36号溝跡	土師質かわらけ	(10.2)	2.5	5.4	ABDHK	明褐灰　灰白	B	45%	近世。在地系。
36-8	36号溝跡	木製品　漆器椀	－	(4.05)	－	－	赤　色	－	体～高15%	近世。内外面朱漆。
36-9	36号溝跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰　色	B	胴中段片	奈良・平安。南比企産。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
36-10	36号溝跡	陶器　碗	－	－	－	－	－	－	ロ～体部片	中世。瀬戸美濃系。
36-11	36号溝跡	土師質かわらけ	－	(1.25)	4.7	ABDHK	褐灰色	B	体～底90%	中世。古河公方系。内外面摩耗顕著。

南東から北西方向に走る。検出された長さは、2.34 mと短い。北東側の立ち上がりが調査区外にあるため正確な幅は不明であるが、検出された範囲では2.01 mを測る。確認面からの深さは、0.37 m程を測る。断面形は、横長の船底状を呈する。覆土は、３層（４～６層）確認された。中層以下にブロックを含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本溝跡の時期は、不明と言わざるを得ない。

第44号溝跡（第37図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区28－98グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。南端以降は、調査区外に延びる。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは、2.19 mと短い。幅は、南から北端に向かって狭まる。南側の調査区境付近は0.82 m、北端付近は0.3 m程を測る。確認面からの深さは、最大m 0.33を測る。断面形は、逆台形状を呈する。覆土は、２層（７・８層）確認された。下層にブロックを多量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、奈良・平安時代の土師器小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第45号溝跡（第37図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区27～29－97・98グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。大半が調査区外にある。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは、西側立ち上がりで1.92 mと短い。東側の立ち上がりが調査区外にあるため正確な幅は不明であるが、検出された範囲では最大0.75 mを測る。確認面からの深さは、調査区との境付近で最大0.15 mを測る。断面形は、横長の船底状を呈すると思われる。覆土は、２層（９・10層）確認された。下層にブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、奈良・平安時代の須恵器・土師器の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、奈良・平安時代と思われる。

４　土坑

第１号土坑（第43図）

2012（平成24）年度調査Ｂ区33－85グリッドに位置する。第１号住居跡の南隅と第１号溝跡北側を切っている。

長軸1.64 m、短軸1.5 mを測る。平面プランは、南側が横長の長方形、北側はいびつな半円形状を呈する。確認面からの深さは、最大0.37 mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は東と北側に段を持ち、中央付近が擂鉢状に凹む。覆土は、３層（１～３層）確認された。ブロックを含む層が多いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、図示不可能な古墳時代前期の土師器小片が微量出土したが、流れ込みと思われる。

本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から古墳時代前期以降としか言えない。

第２号土坑（第 43 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 34 － 88 グリッドに位置する。北西部で第 16 号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、第１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。

長軸 0.96 m、短軸 0.86 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.11 mと浅い。立ち上がりは西・南側が緩やか、東・北側が鋭角であり、底面は東側に向かってやや下る。覆土は、ブロックを少量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

出土遺物がないため、本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降としか言えない。

第３号土坑（第 43 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32・33 － 88・89 グリッドに位置する。北東部で第１号方形周溝墓の東周溝、南側で単独ピット 96、東側でピット 57 と重複するが、新旧関係は不明である。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は 1.34 m、南北は 2.86 mを測る。平面プランは、南側が半円形、北側はいびつな方形状を呈する。確認面からの深さは、最大 0.33 mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は中央付近が不規則に凹む。覆土は、４層（１～４層）確認された。ブロックを少量含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、図示不可能な古墳時代前期の器種不明の土師器小片が微量出土したが、本土坑に伴うものか不明である。

本土坑の時期は、不明と言わざるを得ない。

第４号土坑（第 43 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33 － 89 グリッドに位置する。第１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。

長軸 0.74 m、短軸 0.67 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.1 mと浅い。立ち上がりは、鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、ブロックを少量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

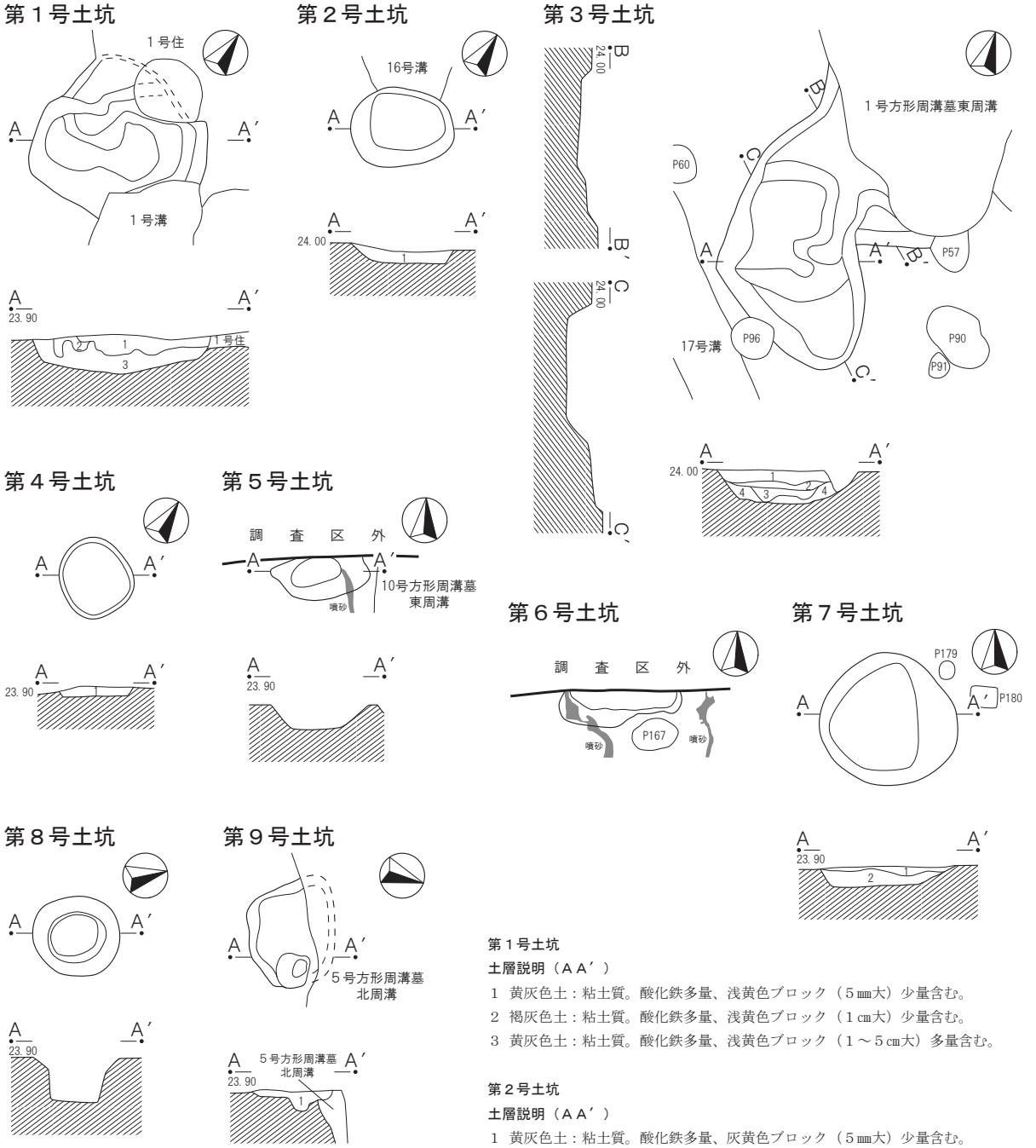
出土遺物（第 45 図）は、古墳時代前期の土師器壺（４－１）、台付甕（４－２）があるが、この他にも図示不可能な同時期の土師器小片が微量出土した。

４－１は、土師器壺の胴部中段付近の破片である。調整は、外面が横・斜位のヘラミガキ、内面は横位の粗いヘラナデである。４－２は、土師器台付甕の口縁部から頸部までの破片である。調整は、口縁部内外面が横ナデ、頸部は内外面ともにヘラナデであるが、外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。

本土坑の時期は、古墳時代前期と思われる。

第５号土坑（第 43 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 40 － 89 グリッドに位置する。第 10 号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。北東部の立ち上がり付近は、調査区外にある。



第１号土坑

土層説明（ＡＡ′）

１　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
２　褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
３　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（１～５㎝大）多量含む。

第２号土坑

土層説明（ＡＡ′）

１　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第３号土坑

土層説明（ＡＡ′）

１　褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
２　黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
３　灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
４　暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄多量含む。

第４号土坑

土層説明（ＡＡ′）

１　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第７号土坑

土層説明（ＡＡ′）

１　灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
２　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（１～３㎝大）少量含む。

第９号土坑

土層説明（ＡＡ′）

１　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、白色粒（火山灰）、浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。

0　2m　1：60

第 43 図　第１～９号土坑

長軸0.92ｍ、検出された短軸は0.4ｍを測る。平面プランは、いびつな長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大0.22ｍを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、図示できなかったが、黒褐色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から古墳時代前期以降としか言えない。

第６号土坑（第43図）

2011（平成23）年度調査Ａ区40－89・90グリッドに位置する。第10号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。北側は、調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された東西は1.14ｍ、南北は0.35ｍを測る。平面プランは、方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さや覆土については、計測を失念してしまったため不明である。

出土遺物がないため、本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から古墳時代前期以降としか言えない。

第７号土坑（第43図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区31・32－91グリッドに位置する。第３号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。

径1.25ｍ前後のややいびつな円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.18ｍを測る。立ち上がりは、東側が緩やか、その他は鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、２層（１・２層）確認された。ブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降としか言えない。

第８号土坑（第43図）

2011（平成23）年度調査Ａ区36－91・92グリッドに位置する。第４号方形周溝墓方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。

径0.8ｍ前後の円形を呈する。確認面からの深さは、最大0.41ｍを測る。立ち上がりは、確認面下0.15ｍ程まで緩やかであるが、以下は鋭角であった。底面は、北側に向かってやや下る。覆土は、計測を失念してしまったため不明である。

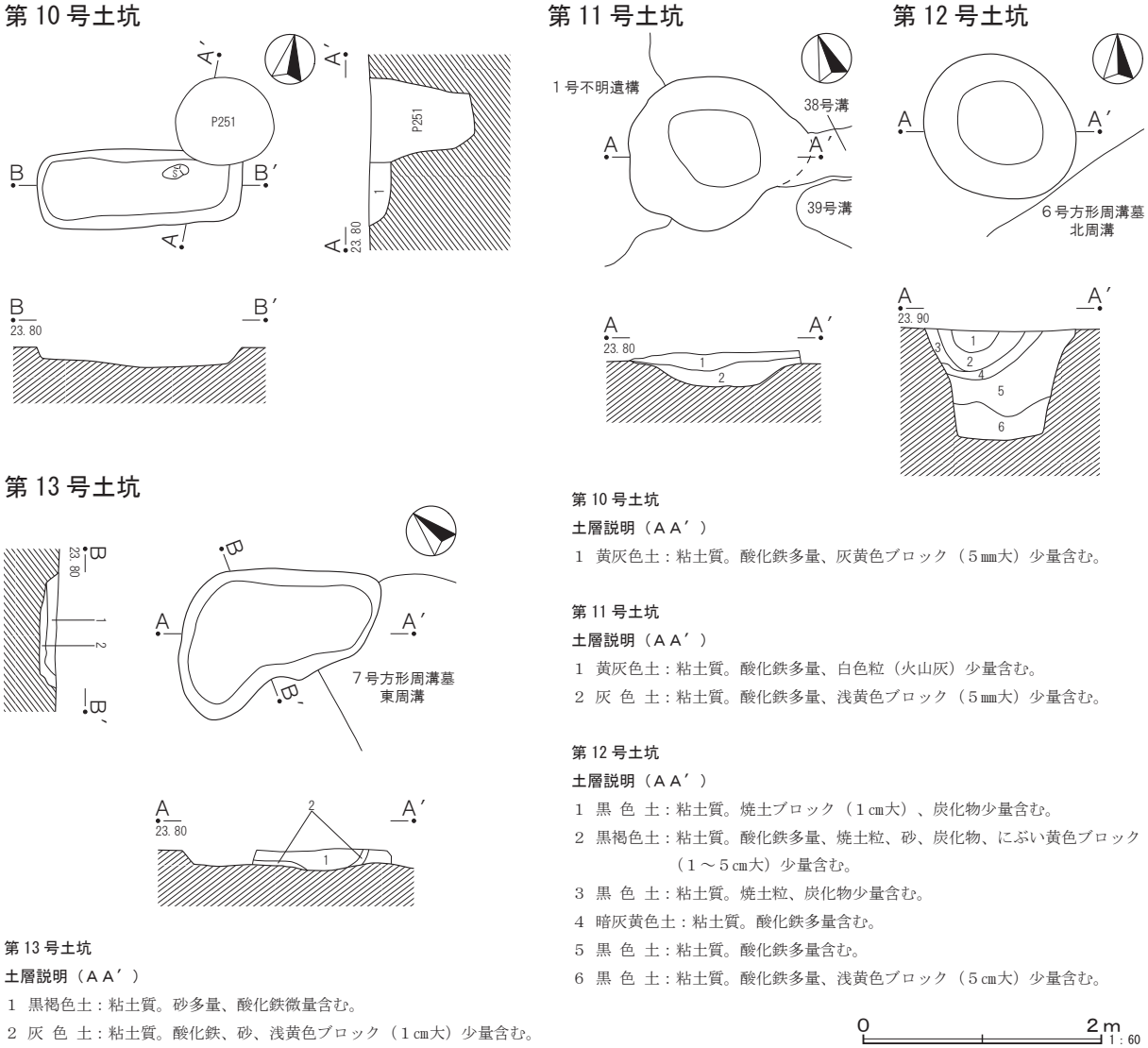
出土遺物で図示可能なものは、古墳時代前期の土師器壺（第45図８－１）のみであるが、本土坑に伴うものか不明である。８－１は、土師器壺の胴下部片である。調整は、外面が縦・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。

本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代中期末以降としか言えない。

第９号土坑（第43図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－92グリッドに位置する。北側で第５号方形周溝墓北周溝と重複しており、土層断面観察の結果、本土坑が新しいことが判明した。従って、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、本来は実線で示すべきものである。

正確な規模は不明であるが、長軸0.95ｍ、短軸0.6ｍのいびつな方形状を呈する。確認面からの深



第 10 号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第 11 号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、白色粒（火山灰）少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。

第 12 号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黒 色 土：粘土質。焼土ブロック（１㎝大）、炭化物少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、焼土粒、砂、炭化物、にぶい黄色ブロック（１～５㎝大）少量含む。
3 黒 色 土：粘土質。焼土粒、炭化物少量含む。
4 暗灰黄色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
5 黒 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
6 黒 色 土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（５㎝大）少量含む。

第 13 号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：粘土質。砂多量、酸化鉄微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂、浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。

0　2 m　1：60

第 44 図　第 10 ～ 13 号土坑

さは、概ね 0.07 mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であったが、東側でピット状の掘り込みが確認された。底面からの深さは 0.11 mを測る。覆土は、混入物を少量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。火山灰と思われる白色粒を含んでいたことから自然堆積と思われる。

遺物は、図示不可能な器種不明の弥生土器小片が微量出土したが、第５号方形周溝墓からの流れ込みと思われる。

本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代後期初頭以降としか言えない。

第 10 号土坑（第 44 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 33・34 － 92 グリッドに位置する。北東隅を単独ピット 251 に切られている。

長軸 1.73 m、短軸 0.67 mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.18 mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面は西側がほぼ平坦であったが、東側はやや凹む。覆土は、ブロックを少量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

遺物は、奈良・平安時代の土師器甕の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

第 45 図　土坑出土遺物

第 12 表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
4-1	4号土坑	土師器　壺	－	－	－	ABCHKN	橙　色	B	胴中段片	古墳前。
4-2	4号土坑	土師器　台付甕	－	－	－	ABEHKN	外:にぶい赤褐　内:橙	B	口～頸部片	古墳前。
8-1	8号土坑	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:灰褐　内:にぶい褐	B	胴下部片	古墳前。
11-1	11号土坑	須恵器　坏	－	(0.95)	(7.3)	ABF	灰　色	B	底部35%	奈良。南比企産。

本土坑の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 11 号土坑（第 44 図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－93グリッドに位置する。東側で第38号溝跡を切っている。西側は、第１号不明遺構と重複するが、新旧関係は本土坑が古いと思われる。また、第５号方形周溝墓方台部に位置しているが、新旧関係は本土坑が新しいと思われる。

長軸が推定 1.55 m程、短軸は 1.3 mを測る。平面プランは、いびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.28 mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、奈良時代の須恵器坏（第図 11 －１）のみであるが、この他に図示不可能な同時期の土師器甕の小片も出土した。11 －１は、須恵器坏の底部である。南比企産である。底面の調整は、回転糸切り後に外周ヘラ削りが施されている。

本土坑の時期は、第 38 号溝跡より新しい奈良時代と思われる。

第 12 号土坑（第 44 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 35 － 93 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。

長軸 1.35 m、短軸 1.18 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.91 mと比較的深い。立ち上がりは鋭角であり、底面は中央付近がやや凹む。覆土は、６層（１～６層）確認された。上層に混入物を多く含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は、奈良・平安時代の須恵器坏、土師器甕の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、奈良・平安時代と思われる。

第 13 号土坑（第 44 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 31・32 － 95 グリッドに位置する。南東部で第７号方形周溝墓の東周溝を切っている。

長軸 1.88 m、短軸１mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.18 mを測る。立ち上がりはやや鋭角であり、底面は南側がやや凹むが、その他はほぼ平坦であった。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物がないため、本土坑の時期は、重複する遺構との新旧関係から弥生時代中期末以降としか言えない。

5　井戸跡

第１号井戸跡（第 46 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32 － 86・87 グリッドに位置する。北西部で第６号溝跡、西側で第 13 号溝跡を切っている。南西部で単独ピット 30 と重複するが、新旧関係は不明である。東側の立ち上がり付近は、調査区外にある。

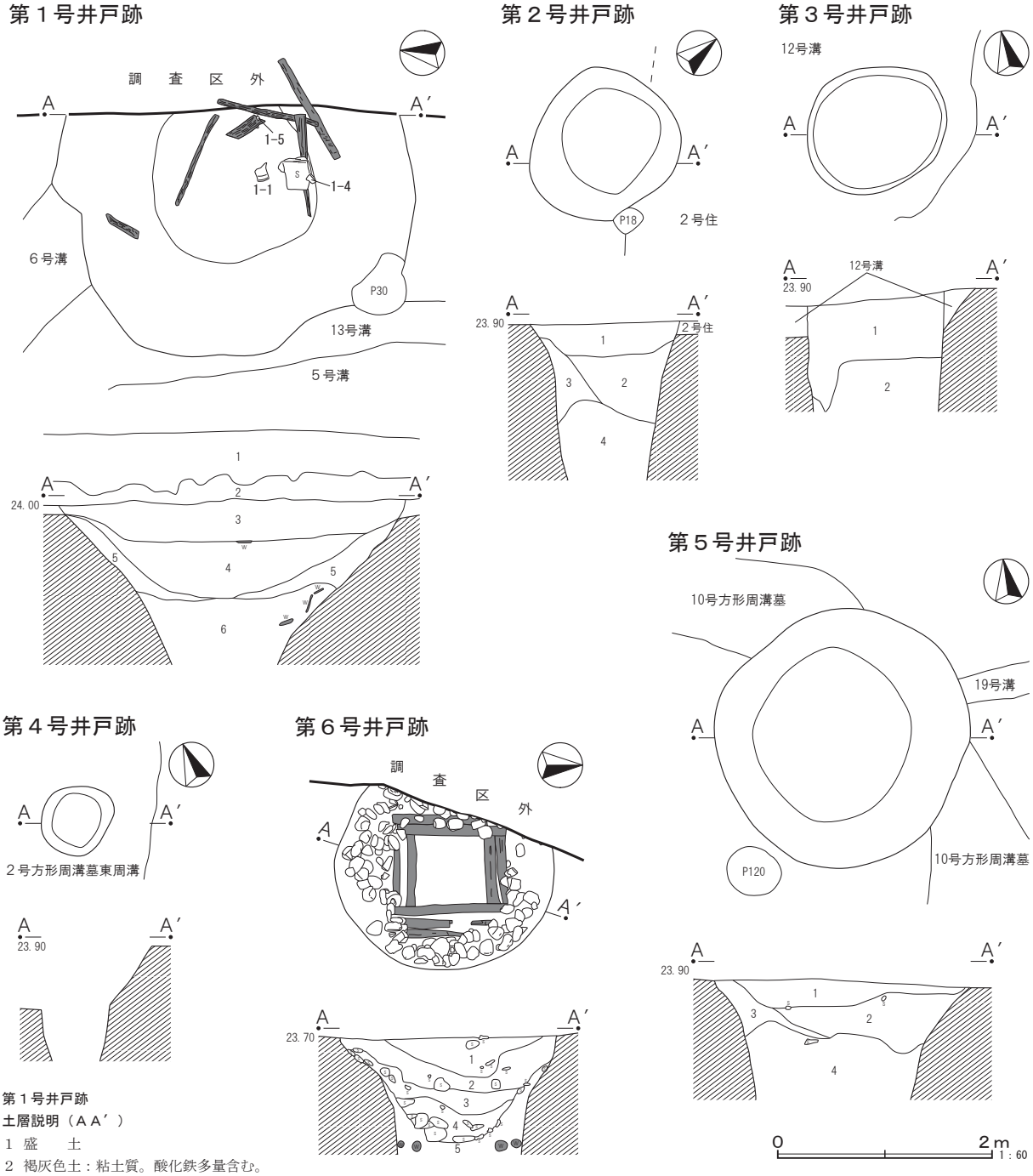
正確な規模・平面プランは不明であるが、径 3.4 ｍ前後のややいびつな円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.4 ｍ程までにとどめたが、調査区境での土層断面観察の結果、確認面より 0.15 ｍ程高い面から掘削されていた。断面形は、擂鉢状を呈する。本井戸跡の覆土は、４層（３～６層）確認された。ブロックを含む層が多く、レンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。４層直上及び６層上位から木材が検出された。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 50 図）は、瓦質土器片口鉢（１－１～４）、砥石（１－５）、写真のみ掲載の桃の種子（図版 56）がある。出土した木材については、取り上げを行ったが、脆弱であったことから計測は不可能であった。この他にも流れ込みで古墳時代前期の土師器台付甕（１－６）、奈良・平安時代の須恵器瓶（１－７）、甕（１－８）が出土した。

１－１～４は、在地系の瓦質土器片口鉢である。１－１は全形の分かる個体であるが、片口部は未検出である。２は、口縁部を欠く。１－３・４は体部片である。いずれも器壁が厚い。１－１は口縁部から体部、１－２は体部が逆ハの字に開くが、ナデ成形による凹凸がみられる。１－１は、口縁部断面形が切出し状を呈する。２は、須恵質である。調整は、いずれも口縁部外面と内面全面はロクロナデ、体部外面はヘラナデと指オサエが施されている。底面は、１－１は図示しなかったが、回転糸切後ヘラによる調整痕、１－２は回転糸切痕が残る。いずれも内面は、使用頻度が高かったためよく磨れている。１－１は、13 世紀後半と思われる。１－３は、体部外面上位にナデ成形による痕跡が残る。内面は、被熱のためか剥離が顕著である。１－４は、片口部が一部残る。外面下位は、剥離が顕著である。１－５は、凝灰岩製の砥石である。半分以上を欠く。四面使用している。

１－６は、古墳時代前期の土師器台付甕の台部片である。器壁が薄く、裾部内面を折り返していることからＳ字甕と思われる。調整は、内外面ともにヘラナデであるが、外面上位にヘラナデ前に施された斜位のハケメが残る。ヘラナデは、内面の折り返し部のみ横位、その他は斜位に施されている。胎土がやや粗い。１－７・８は、奈良・平安時代の須恵器である。いずれも南比企産である。１－７は、瓶の胴上部から中段付近までの破片である。調整は、内外面ともに横・斜位のヘラナデであるが、外面はタタキ目、内面はあて具痕が一部残る。外面下位に自然釉が付着している。１－８は、甕の胴下部片である。調整は、外面が横・斜位のヘラナデであるが、所々にタタキ目が残る。内面は、ロクロナデである。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。



第１号井戸跡

土層説明（ＡＡ′）

1 盛　　土
2 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、礫（１～５㎝大）少量含む。
4 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１～10㎝大）少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１～５㎝大）多量含む。
6 暗灰色粘土：緑灰色ブロック（３～10㎝大）少量含む。

第２号井戸跡

土層説明（ＡＡ′）

1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物微量含む。
3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
4 暗灰色粘土：酸化鉄多量含む。

第３号井戸跡

土層説明（ＡＡ′）

1 黄灰色粘土：酸化鉄多量、灰白色ブロック（５㎜～２㎝大）微量含む。
2 暗灰色粘土

第５号井戸跡

土層説明（ＡＡ′）

1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜～２㎝大）少量含む。
3 褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１～10㎝大）少量含む。
4 暗灰色粘土：暗緑灰色ブロック（５～15㎝大）少量含む。

第６号井戸跡

土層説明（ＡＡ′）

1 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（２～10㎝大）多量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
4 黄灰色粘土
5 不　　明

第46図　第１～６号井戸跡

第２号井戸跡（第 46 図）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33・34 － 86 グリッドに位置する。北東部で第２号住居跡を切っている。南東部で単独ピット 18 と重複するが、新旧関係は不明である。

長軸 1.43 m、短軸 1.31 mのやや角張った楕円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.47 m程までにとどめた。立ち上がりは確認面下 0.5 m前後まで鋭角であったが、以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、４層（１～４層）確認された。混入物が少なく、レンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

遺物は、板石塔婆と思われる緑泥片岩の小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、中世と思われる。

第３号井戸跡（第 46 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 38・39 － 86・87 グリッドに位置する。第 12 号溝跡を切っている。

長軸 1.38 m、短軸 1.27 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 0.95 m程までにとどめた。立ち上がりから最下位までほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、２層（１・２層）確認された。ランダムな層位であることから人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物は、木製品曲物が掘削した最下面で出土したが、脆弱であったことから取り上げ及び計測は不可能であった。この他にも図示不可能な古墳時代前期の土師器壺・甕、平安時代の酸化焔焼成による須恵器高台付椀の小片が出土したが、いずれも流れ込みと思われる。

本井戸跡の時期は、中世以降と思われる。

第４号井戸跡（第 46 図）

2012（平成 24）年度調査Ａ区 36 － 87 グリッドに位置する。第２号方形周溝墓の東周溝を切っている。

長軸 0.72 m、短軸 0.65 mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.1 m程までにとどめた。立ち上がりは未確認であるが、中段以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、図示できなかったため、不明である。

出土遺物がないが、本井戸跡の時期は、中世以降と思われる。

第５号井戸跡（第 46 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 40 － 88・89 グリッドに位置する。第 10 号方形周溝墓北東隅の方台部と周溝を切っており、東側では第 19 号溝跡を切っている。南西に隣接して第６号井戸跡が位置する。

径 2.3 m前後のややいびつな円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.1 m程までにとどめた。立ち上がりは、確認面下 0.55 m前後まで緩やかであったが、以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、４層（１～４層）確認された。ブロックを含む層が多く、レンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 50 図）は、陶器擂鉢（５－１～３）、瓦質土器焙烙（５－４）、土師質土器かわらけ（５－５～７）がある。この他にも流れ込みで弥生土器甕（５－８・９）、古墳時代前期の土師器壺（５－ 10）が出土した。

５－１～３は、瀬戸美濃系の陶器擂鉢の体部片である。すべて同一個体である。内面に 10 ～ 11 本の櫛目が縦・斜位に施されており、内外面に錆釉が施釉されている。調整は、内外面ともにロクロナデ

が主体となるが、体部外面下位はヘラ削りが施されている。16 世紀末～17 世紀と思われる。５－４は、在地系瓦質土器焙烙の口縁部から体部までの破片である。口縁部と体部の外面境に輪積痕が残り、体部内面中央に稜が巡る。５－５～７は、在地系の土師質土器かわらけである。５－７のみ口縁部を欠く。いずれも器壁が厚く、底面に回転糸切痕を残す。中型の５－５は、口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。内面の体部と底部の境に強いロクロ痕が巡り、凹む。底部の外面縁辺部がドーナツ状に擦れている。小型の５－６・７のうち、全形の分かる５－６は、口縁部から体部までが短く、逆ハの字に開く。

５－８・９は、弥生時代中期末から後期初頭までに収まる甕の胴部中段付近から下部までの破片である。いずれも外面文様は、櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれている。櫛歯状工具の単位は、５－８が５本、５－９が６本である。内面調整は、いずれも斜位のヘラミガキである。５－ 10 は、古墳時代前期の土師器壺の胴下部片である。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。外面に赤彩が施されているが、半分剥落している。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第６号井戸跡（第 46 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 40・41 － 89 グリッドに位置する。第 10 号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。西側立ち上がり付近は、調査区外にある。北東に第５号井戸跡が隣接して位置する。

正確な規模は不明であるが、径 2.05 m前後の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.1 m程までにとどめた。立ち上がりは、確認面下 0.5 m前後までやや緩やかであったが、以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、５層（１～５層）確認された。１～４層で多数の礫、５層中央で木組の井戸枠が検出された。礫は、井戸枠外周に裏込めとして使用されたと思われるが、大半が崩落した状態であった。井戸枠は、長さ 0.7 ～ 1.05 m、径 0.05 ～ 0.12 mを測る棒状の木材が方形に組まれており、東側のみ３列、他は２列並んで設置されていた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第 50 図）は、陶器徳利（６－１）、擂鉢（６－２）、土師質土器かわらけ（６－３～６）がある。井戸枠に使用された木材については、取り上げを行ったが、脆弱であったことから計測は不可能であった。

６－１は、瀬戸美濃系陶器舟徳利の口縁部から頸部までの破片である。口縁部が受け口状を呈し、内外面に長石釉が施釉されている。17 世紀代と思われる。６－２は、備前系陶器擂鉢の口縁部から体部までの破片である。内外面に錆釉が施釉されている。口縁部に縁帯を持ち、外面に２条の沈線が巡る。縁帯端部は上位に延びる。体部は逆ハの字に下り、内面に７本の櫛目が斜位に施されている。16 世紀代と思われ、流れ込みの可能性が高い。６－３～６は、在地系の土師質土器かわらけである。やや小型の６－６のみ口縁部を欠く。すべて底面に回転糸切痕が残る。６－３は、いわゆる江戸かわらけである。器壁が薄く、内外面に黒色処理が施されている。17 世紀以降と思われる。６－４は、口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。６－５は、口縁部と体部の境がくびれる。

本井戸跡の時期は、近世と思われる。

第７号井戸跡（第 47 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 34・35 － 90・91 グリッドに位置する。第４号方形周溝墓東側の方台部と周溝を切っている。南西部で単独ピット 217 と重複するが、新旧関係は不明である。

径１ｍ前後のややいびつな円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 0.9 ｍ程までにとどめた。立ち上がりから最下位までほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、ブロックを少量含む灰色土による単一層（１層）であった。人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物がないが、本井戸跡の時期は、中世以降と思われる。

第８号井戸跡（第 47 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30 － 91 グリッドに位置する。第 22 号溝跡を切っている。

径 0.85 ｍ前後のいびつな円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.46 ｍ程までにとどめた。立ち上がりは、確認面下 0.6 ｍ前後まで鋭角であったが、以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は中層以下の確認であるが、４層（１～４層）確認された。上２層にブロックを少量含み、レンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

遺物は、中世の在地系土師質土器かわらけの小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第９号井戸跡（第 47 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30・31 － 91・92 グリッドに位置する。南側で第１号不明遺構を切っており、南西部を第 10 号井戸跡に切られている。南側に位置する第 36 号溝跡は、同時期の可能性が高い。また、第３号方形周溝墓南東隅の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。なお、第１号不明遺構との重複箇所については、図面上で推定ラインとして破線で示しているが、両者の新旧関係から本来は実線で示すべきものである。

径 2.4 ｍ前後のいびつな円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.35 ｍ程までにとどめた。立ち上がりは、確認面下 0.7 ｍ前後まで鋭角であり、中段付近にテラス状の段がほぼ全周する。段以下は、ほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、６層（１～６層）確認された。中層にブロックを含んでおり、レンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

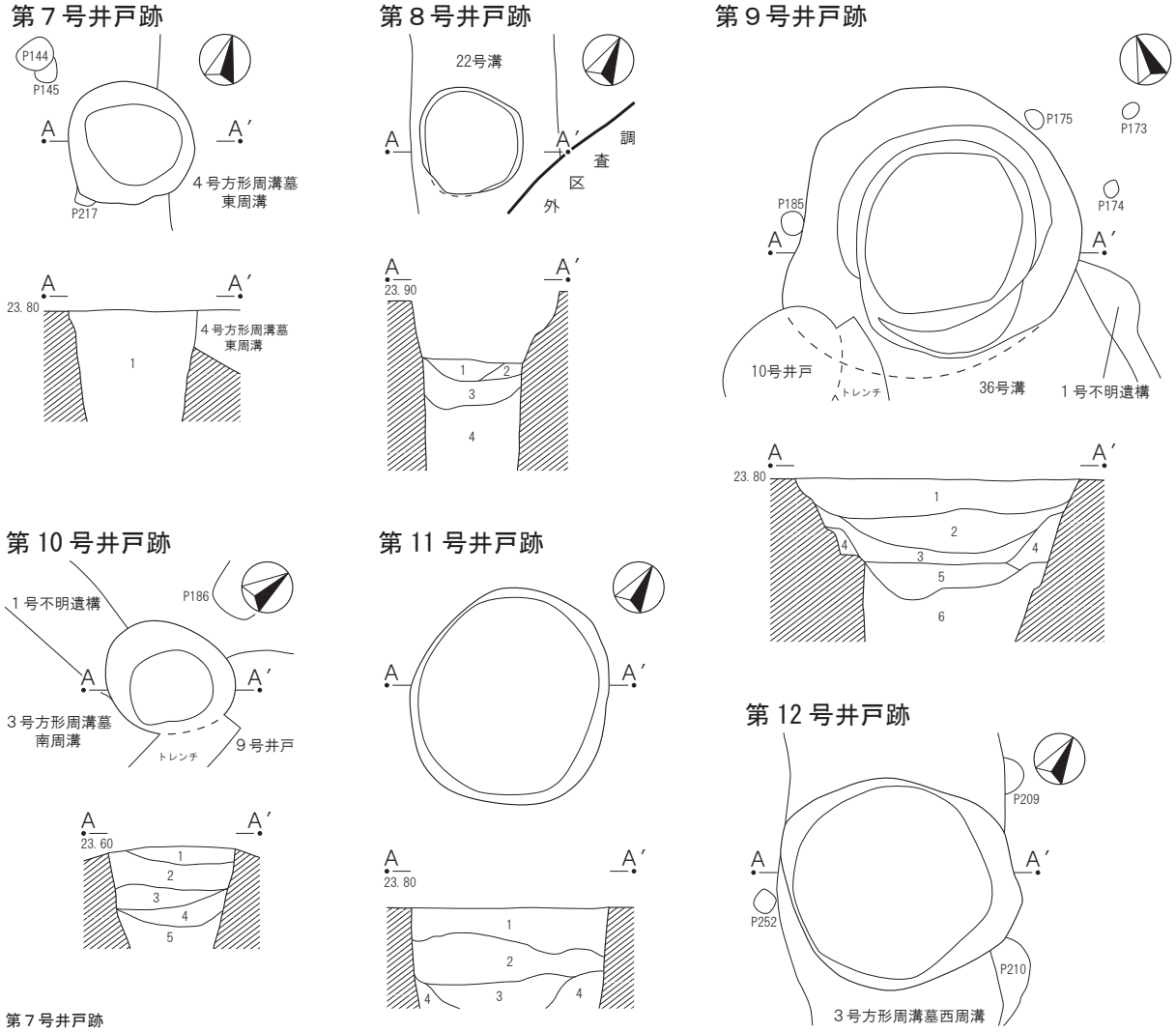
遺物は、写真のみ掲載の動物と思われる骨、桃の種子、松笠、シロツメクサと思われる植物（図版 56）が出土した。

時期を特定し得る遺物はないが、本井戸跡の時期は、近世と思われる。

第 10 号井戸跡（第 47 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 31 － 91・92 グリッドに位置する。東側で第９号井戸跡、西側から南側にかけて第 36 号溝跡、第３号方形周溝墓の方台部と南周溝、第１号不明遺構を切っている。

長軸 1.1 ｍ、短軸 0.9 ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 0.85 ｍ程までにとどめた。立ち上がりから最下位まで鋭角に掘り込まれていた。覆土は、５層（１～５層）確認された。ブロックを含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。



第７号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂、灰色ブロック（１～５㎝大）少量含む。

第８号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 オリーブ黒色土：粘土質。浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
2 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 灰色粘土

第９号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 オリーブ黒色粘土：酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
4 オリーブ黒色粘土：酸化鉄、灰黄色ブロック（１～５㎝大）多量含む。
5 暗灰色粘土：オリーブ灰色ブロック（１～10㎝大）少量含む。
6 オリーブ灰色粘土

第 10 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（５㎝大）多量含む。
4 黒 色 土：粘土質。酸化鉄微量含む。
5 暗青灰色土：粘土質。酸化鉄微量含む。

第 11 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（10㎝大）少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 オリーブ黒色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（20㎝大）多量含む。

第 12 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
2 灰白色ブロック：酸化鉄多量含む。
3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
4 暗灰色粘土：酸化鉄、緑灰色ブロック（５㎝大）少量含む。
5 緑灰色粘土：酸化鉄少量含む。

第 47 図　第７～12 号井戸跡

出土遺物（第 50 図）で図示可能なものは、奈良・平安時代の須恵器甕（10 － 1 ）のみであるが、流れ込みと思われる。この他に写真のみ掲載の桃の種子（図版 56）が出土した。10 － 1 は、須恵器甕の胴下部片である。南比企産である。調整は、外面がタタキ、内面は横・斜位のヘラナデであるが、内面はあて具痕が僅かに残る。

時期を特定し得る遺物がないが、本井戸跡の時期は、第 36 号溝跡と第 9 号井戸跡より新しい近世と思われる。

第 11 号井戸跡（第 47 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 33 － 91 グリッドに位置する。第 3 号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。西側に同時期の第 12 号井戸跡が隣接して位置する。

長軸 1.79 m、短軸 1.62 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 0.82 m程までにとどめた。立ち上がりから最下位までほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、４層（１～４層）確認された。ブロックを含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第 50 図）で図示可能なものは、瓦質土器片口鉢（11 － 1 ）のみである。この他に写真のみ掲載の桃の種子（図版 56）が出土した。11 － 1 は、在地系瓦質土器片口鉢の体部片である。調整は、内外面ともに横・斜位のヘラナデであり、外面は指オサエも施されている。内面下位が擦れている。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第 12 号井戸跡（第 47 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 33・34 － 91・92 グリッドに位置する。第 3 号方形周溝墓の西周溝を切っている。東側で単独ピット 210 と重複するが、新旧関係は不明である。東側に同時期の第 11 号井戸跡が隣接して位置する。

長軸 2.05 m、短軸 1.72 mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 1.28 mを測る。立ち上がりから底面までほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、５層（１～５層）確認された。底面は、湧水の激しい砂層であった。炭化物を含む層やブロックがみられたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

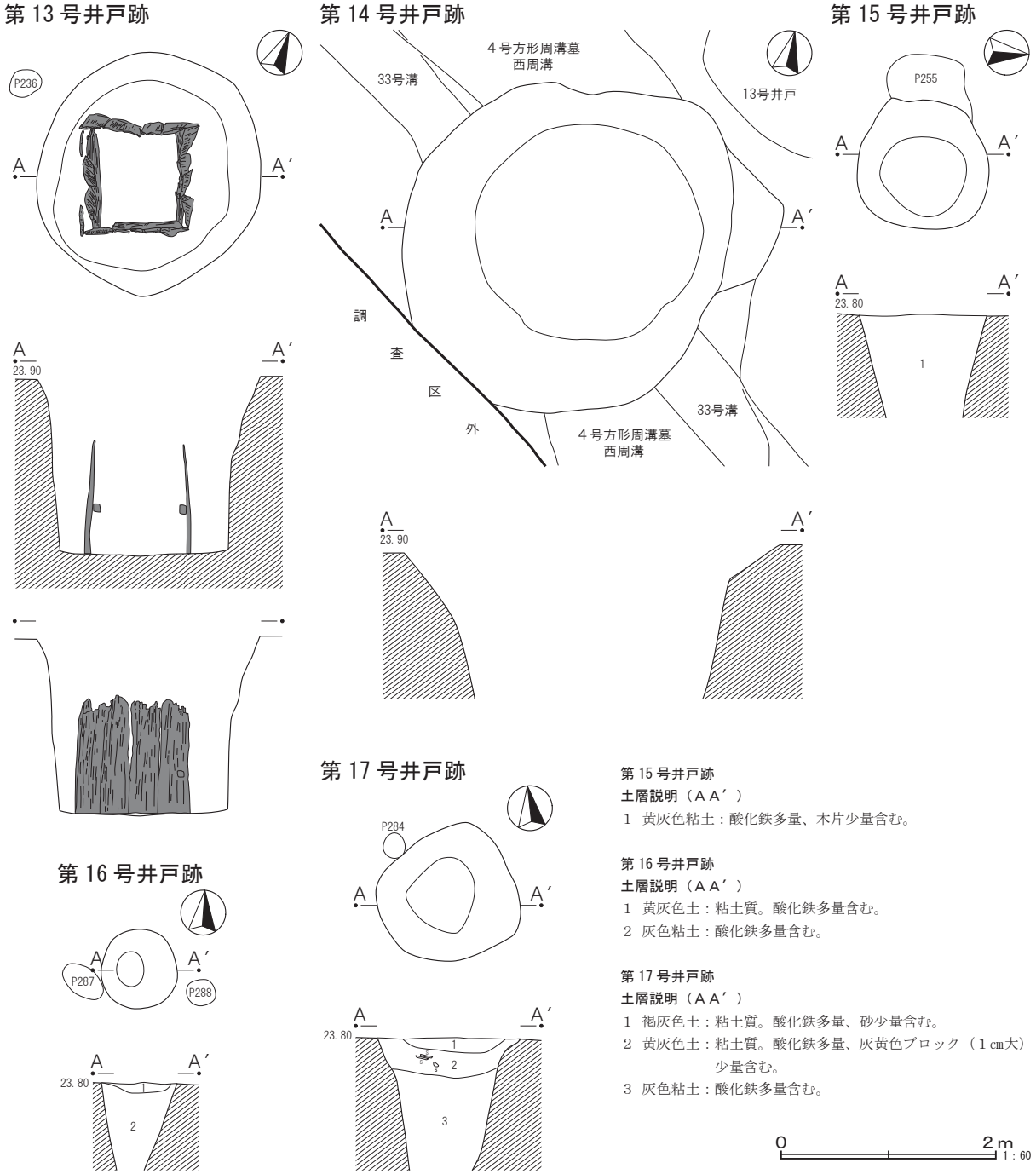
本井戸跡に伴う出土遺物（第 51 図）は、瓦質土器片口鉢（12 － 1 ）のみである。この他にも流れ込みで奈良・平安時代の須恵器坏（12 － 2 ・ 3 ）が出土した。

12 － 1 は、在地系瓦質土器片口鉢の体部片である。調整は、内外面ともにヘラナデであり、内面は横位、外面は横・斜位に施されている。外面は指オサエも施されている。12 － 2 ・ 3 は、須恵器坏の底部である。いずれも南比企産である。調整は、内外面ともにロクロナデ、底面は、回転糸切り後に外周ヘラ削りが施されている。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第 13 号井戸跡（第 48 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 36・37 － 91 グリッドに位置する。第 4 号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。南西に同時期の第 14 号井戸跡が隣接して位置する。



第 15 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色粘土：酸化鉄多量、木片少量含む。

第 16 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2　灰色粘土：酸化鉄多量含む。

第 17 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1　褐灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
2　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（1㎝大）少量含む。
3　灰色粘土：酸化鉄多量含む。

第 48 図　第 13 ～ 17 号井戸跡

長軸 2.28 m、短軸 2.08 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 1.67 mを測る。立ち上がりは、確認面下 0.8 m前後まで鋭角であったが、以下はほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、図示できなかったため不明であるが、底面は砂礫層であった。底面中央からやや南西寄りでは、木組による方形の井戸枠が確認された。井戸枠は、長さ１m、幅 0.25 m前後、厚さ 0.1 m未満の板材を一辺に４枚縦に並べており、内面中段に長さ 0.7 ～ 0.8 m、一辺 0.05 m前後の角材で裏留めしていた。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 51・52 図）は、青磁碗（13 － 1）、陶器甕（13 － 2 ～ 4）、土師質土器かわらけ（13 － 5）、石製品五輪塔（13 ～ 6 ～ 13）がある。井戸枠に使用された木材については、取り上げを行ったが、脆弱であったことから計測は不可能であった。この他にも流れ込みで古墳時代

後期の須恵器高坏（13 － 14）、奈良・平安時代の須恵器坏（13 － 15）、甕（13 － 16）が出土した。

13 － 1は、中国の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類の体部片である。体部内面にヘラと櫛状工具の片切彫りによる花文が描かれている。12 世紀中頃～ 13 世紀と思われる。13 － 2 ～ 4は、常滑系陶器甕の胴部中段から下部までに収まる破片である。13 － 2は、外面に縦長格子文が押印されている。第 11 号溝跡出土 11 － 6と同一個体の可能性がある。13 － 5は、在地系の土師質土器かわらけの底部である。底径が大きい。底面に回転糸切痕が残る。胎土が緻密で粉っぽい。13 － 6 ～ 13は、角閃石安山岩製の石製品五輪塔の水輪部である。平面形が楕円形を呈するもの（13 － 6 ～ 8）と円形を呈するもの（13 － 9 ～ 13）がある。13 － 7 ・ 11は完形ないしほぼ完形であるが、その他は欠損箇所がみられた。表裏面とも中央が凹み、鑿による加工痕が明確に残る。

13 － 14 ～ 16は、須恵器である。13 － 14のみ末野産で古墳時代後期、その他は南比企産で奈良・平安時代と思われる。13 － 14は、高坏の接合部付近である。段を持つ接合部直下とやや間隔を空けた脚部に透かし孔が設けられている。接合部直下の透かし孔は円形を呈し、３つ設けられているが、そのうちの１つは未貫通である。脚部の透かし孔は、上位一部のみの残存であるが、長方形ないし方形を呈すると思われる。脚部の透かし孔直上には、やや太い沈線が横位に１条巡る。外面一部に自然釉が付着している。13 － 15は、坏の底部である。底面は、全面回転ヘラ削りである。13 － 16は、甕の口縁部から頸部までの破片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。頸部外面に６本一単位の櫛歯状工具による波状文が横位に巡る。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第 14 号井戸跡（第 48 図）

2011（平成23）年度調査Ａ区37－91･92グリッドに位置する。第４号方形周溝墓と第33号溝跡を切っている。南西部の立ち上がりは、調査区外にある。北東に同時期の第13号井戸跡が隣接して位置する。

長軸は推定3.5ｍ程、短軸は3.05ｍを測る。ややいびつな楕円形北東部に台形状の出っ張りが付く。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して0.9ｍ程までにとどめた。立ち上がりから最下位まで鋭角に掘り込まれていた。覆土は、崩落してしまったことから図示できなかったため、詳細は不明である。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 52 図）は、青磁碗（14 － 1）、陶器甕（14 － 2）、土師質土器かわらけ（14 － 3）、石製品五輪塔（14 ～ 4 ・ 5）がある。この他にも流れ込みで奈良・平安時代の須恵器高台付椀（14 － 6）、瓶（14 － 7）、甕（14 － 8 ～ 10）、土師器羽釜（14 － 11）が出土した。

14 － 1は、中国の龍泉窯系青磁碗Ⅰ３類の口縁部から体部までの破片である。体部内面にヘラと櫛状工具で花文が描かれている。12 世紀中頃～ 13 世紀と思われる。14 － 2は、常滑系陶器甕の頸部から肩部までの破片である。14 － 3は、在地系土師質土器かわらけの体部から底部までの部位である。調整は、体部の内外面がロクロナデ、底面は回転糸切痕が残る。14 － 4 ・ 5は、角閃石安山岩製の石製品五輪塔である。４は地輪部、５は水輪部である。方形を呈する４は、対角線上の両角付近を欠く。楕円形を呈する５は、側面一部を欠く。いずれも表裏面の中央が凹み、鑿による加工痕が明確に残る。５は、被熱している。

14 － 6 ～ 11は、奈良・平安時代の土器である。14 － 6 ～ 10は、須恵器である。14 － 6が末野産、

その他は南比企産である。14－６は、高台付椀である。口縁部を欠く。体部が内湾し、ハの字に開く短い高台が付く。調整は、体部内外面がロクロナデ、底面は全面回転ヘラ削りである。内外面に自然釉が付着している。14－７は、瓶の胴部中段付近から下部までの破片である。調整は、内外面ともにロクロナデである。14－８～10は、甕である。14－８は肩部、14－９は肩部から胴上部まで、14－10は胴下部の破片である。14－８・９は、同一個体である。調整は、14－８・９の外面がタタキ、内面は半円形のあて具痕が残る。14－10は、外面がタタキ、内面は横位のヘラナデであるが、あて具痕が所々に残る。14－９は、外面に自然釉がやや付着している。14－10は、内面が平滑であり、転用硯の可能性がある。14－11は、土師器羽釜の口縁部から胴部中段までの部位である。角張った口縁部が内傾し、胴部との境に鍔が巡り、円形を呈する焼成前穿孔が設けられている。胴部は、上位が緩やかに膨らむ。調整は、内外面ともに口縁部が横ナデ、胴部はタタキであり、外面は口縁部と胴上部に指オサエも施されている。内面は、タタキ目の上にほぼ等間隔でヘラによる斜線が刻まれている。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第15号井戸跡（第48図）

2011（平成23）年度調査Ａ区33･34－92グリッドに位置する。西側で単独ピット255と重複するが、新旧関係は不明である。

径1.2ｍ前後のややいびつな円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して0.95ｍ程までにとどめた。立ち上がりから最下位まで鋭角に掘り込まれていた。覆土は、木片を少量含む黄灰色土による単一層（１層）であった。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

遺物は、被熱した礫が出土したのみである。

時期を特定し得る遺物がないが、本井戸跡の時期は、中世以降と思われる。

第16号井戸跡（第48図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区32－92・93グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。南西に単独ピット287が隣接するが、新旧関係は不明である。

径0.7ｍ前後の円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して0.8ｍ程までにとどめた。立ち上がりから最下位まで鋭角に掘り込まれていた。覆土は、２層（１・２層）確認された。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

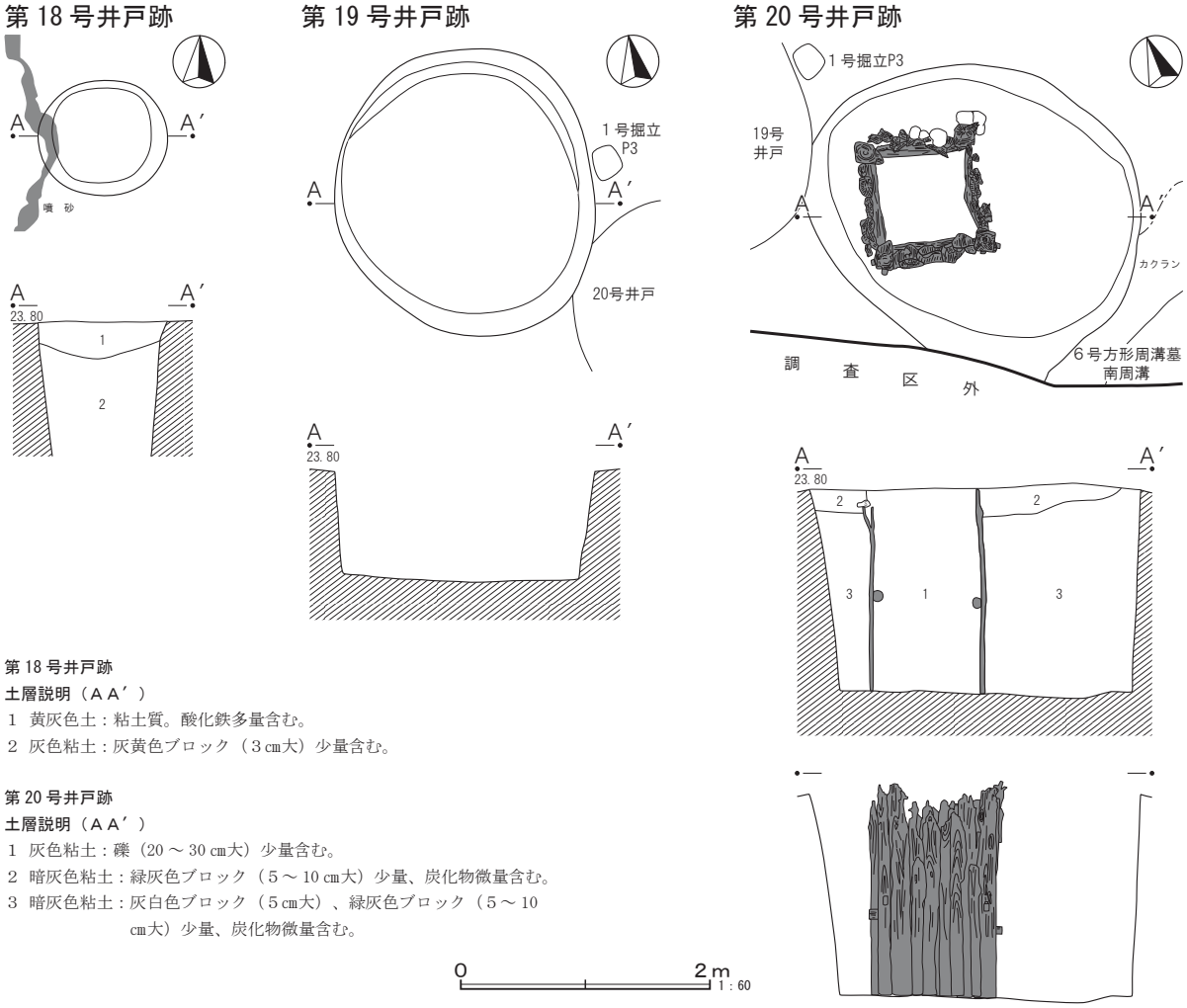
遺物は、中世の在地系土師質土器かわらけの小片が微量出土したが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、中世と思われる。

第17号井戸跡（第48図）

2011（平成23）年度調査Ｂ区30－93・94グリッドに位置する。第５号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。北西に単独ピット284が隣接するが、新旧関係は不明である。

一辺1.1ｍ前後のいびつな隅丸方形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して1.23ｍ程までにとどめた。立ち上がりは、確認面下0.35ｍ前後まで緩やかであったが、以下は鋭角に掘り込まれていた。覆土は、３層（１～３層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。



第 18 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 灰色粘土：灰黄色ブロック（３㎝大）少量含む。

第 20 号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色粘土：礫（20 ～ 30 ㎝大）少量含む。
2 暗灰色粘土：緑灰色ブロック（５～ 10 ㎝大）少量、炭化物微量含む。
3 暗灰色粘土：灰白色ブロック（５㎝大）、緑灰色ブロック（５～ 10 ㎝大）少量、炭化物微量含む。

第 49 図　第 18 ～ 20 号井戸跡

出土遺物（第 52 図）は、須恵器高台付椀（17 － 1）、甕（17 － 2）、瓶（17 － 3）があるが、17 － 3は古墳時代末のものであり、流れ込みと思われる。

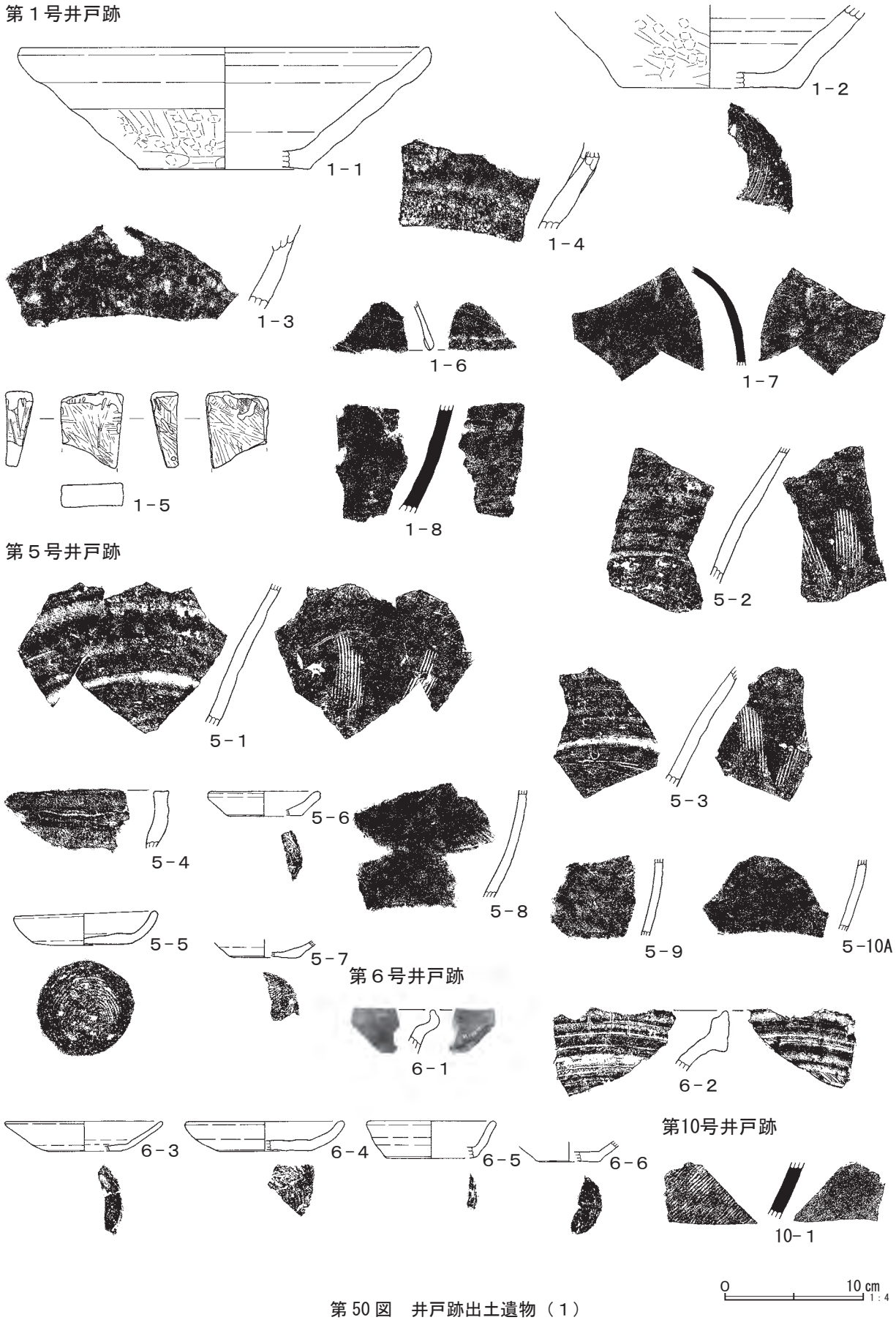
17 － 1 ～ 3は、須恵器である。17 － 1は酸化焔焼成による末野産、17 － 2・3は南比企産である。17 － 1は、高台付椀である。口縁部が外反し、体部は内湾する。短い高台部は、ハの字に開く。調整は、内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切痕が残る。17 － 2は、甕の胴部中段付近の破片である。調整は、外面がタタキ、内面は斜位のヘラナデが施されているが、あて具痕が所々に残る。17 － 3は、瓶の口縁部である。逆ハの字に小さく開き、下位に稜を持つ。調整は、内外面ともにロクロナデである。外面に自然釉が付着している。

本井戸跡の時期は、平安時代と思われる。

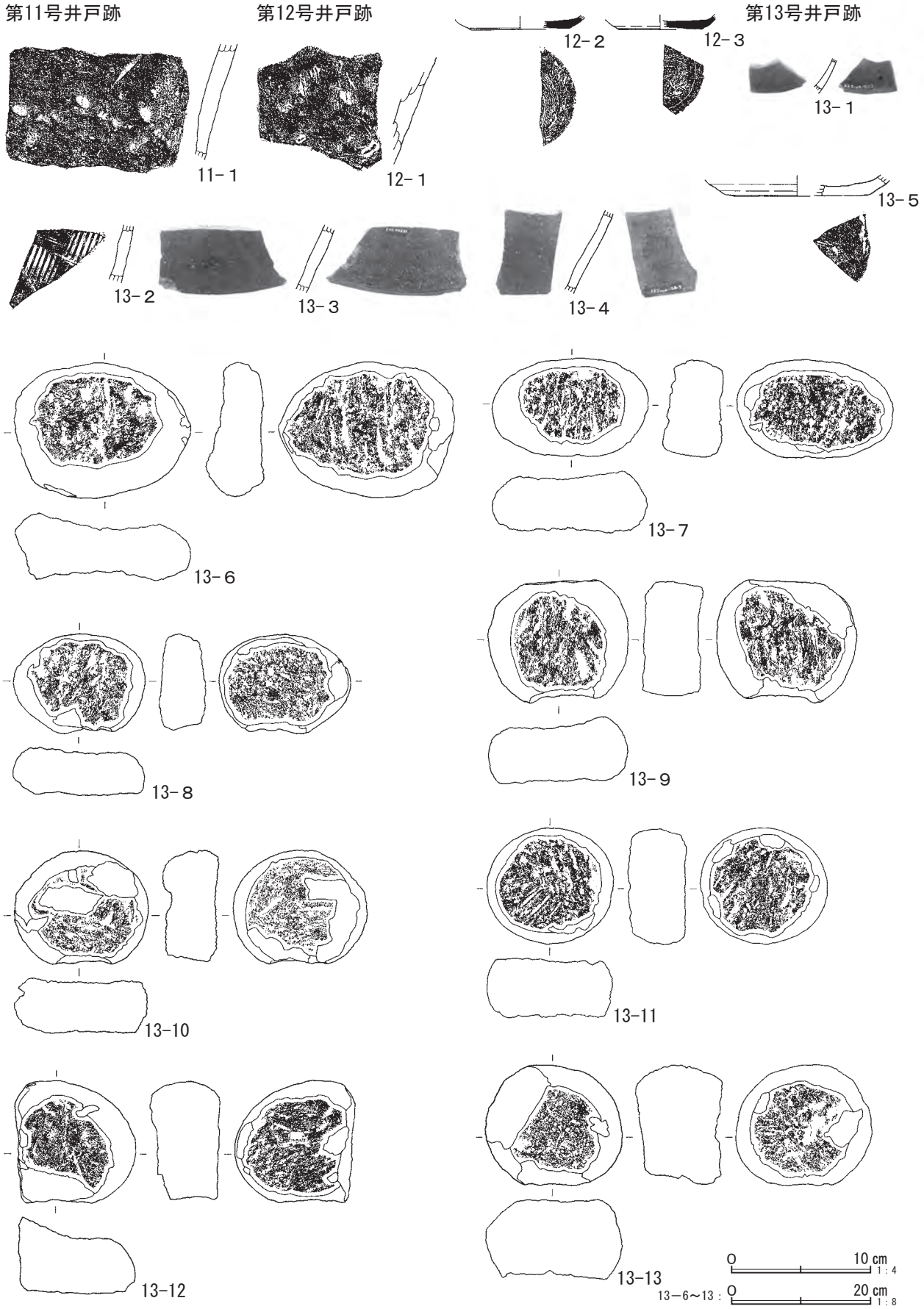
第 18 号井戸跡（第 49 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 32 － 93 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、西側立ち上がり付近で噴砂が確認された。新旧関係は、不明である。

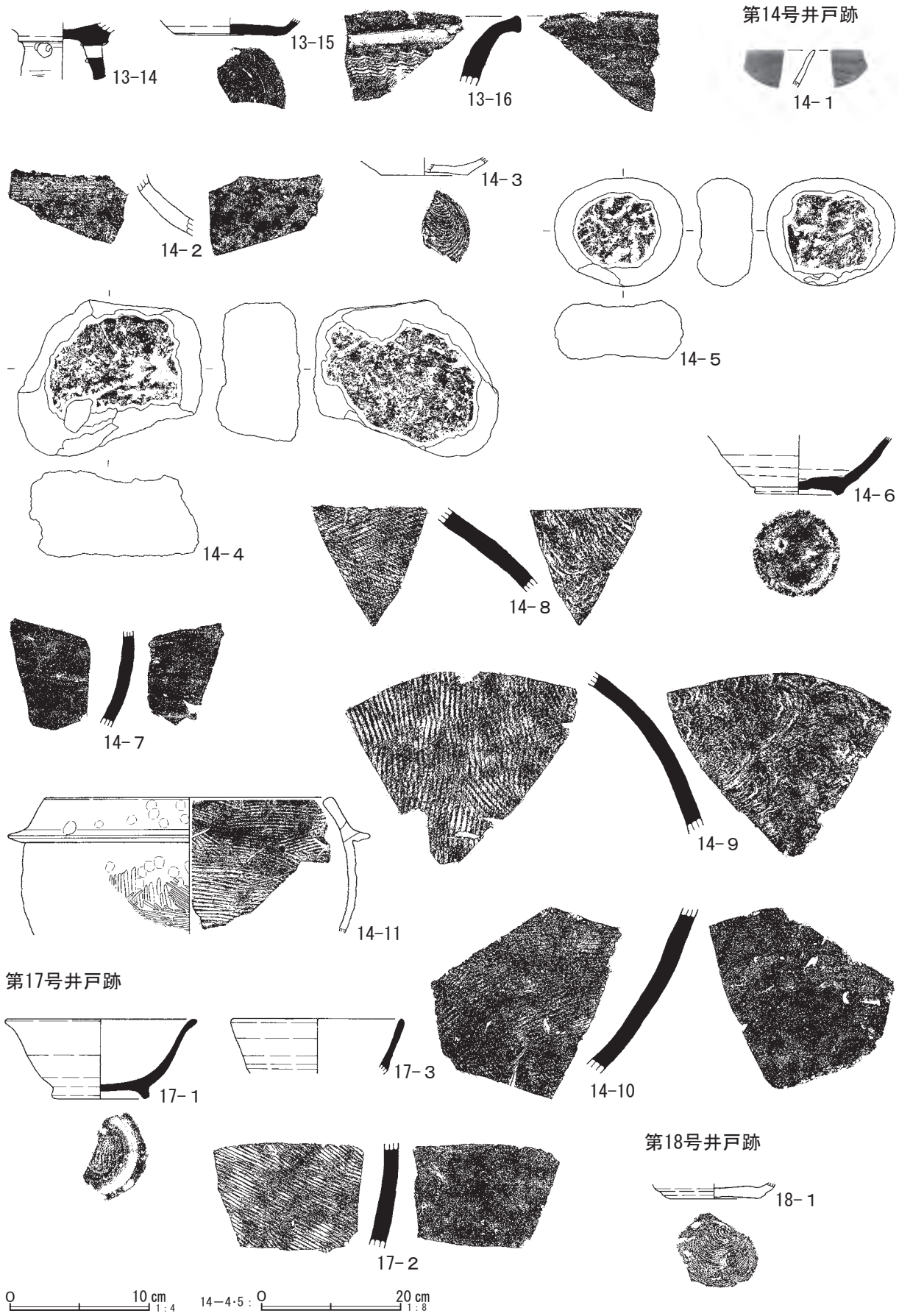
径１ｍ前後の円形を呈する。確認面からの深さは、掘削作業時の安全面を考慮して 1.1 ｍ程までにとどめた。立ち上がりから最下位までほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを含んでおり、ほぼレンズ状に堆積していたが、自然堆積か人為的な埋め戻



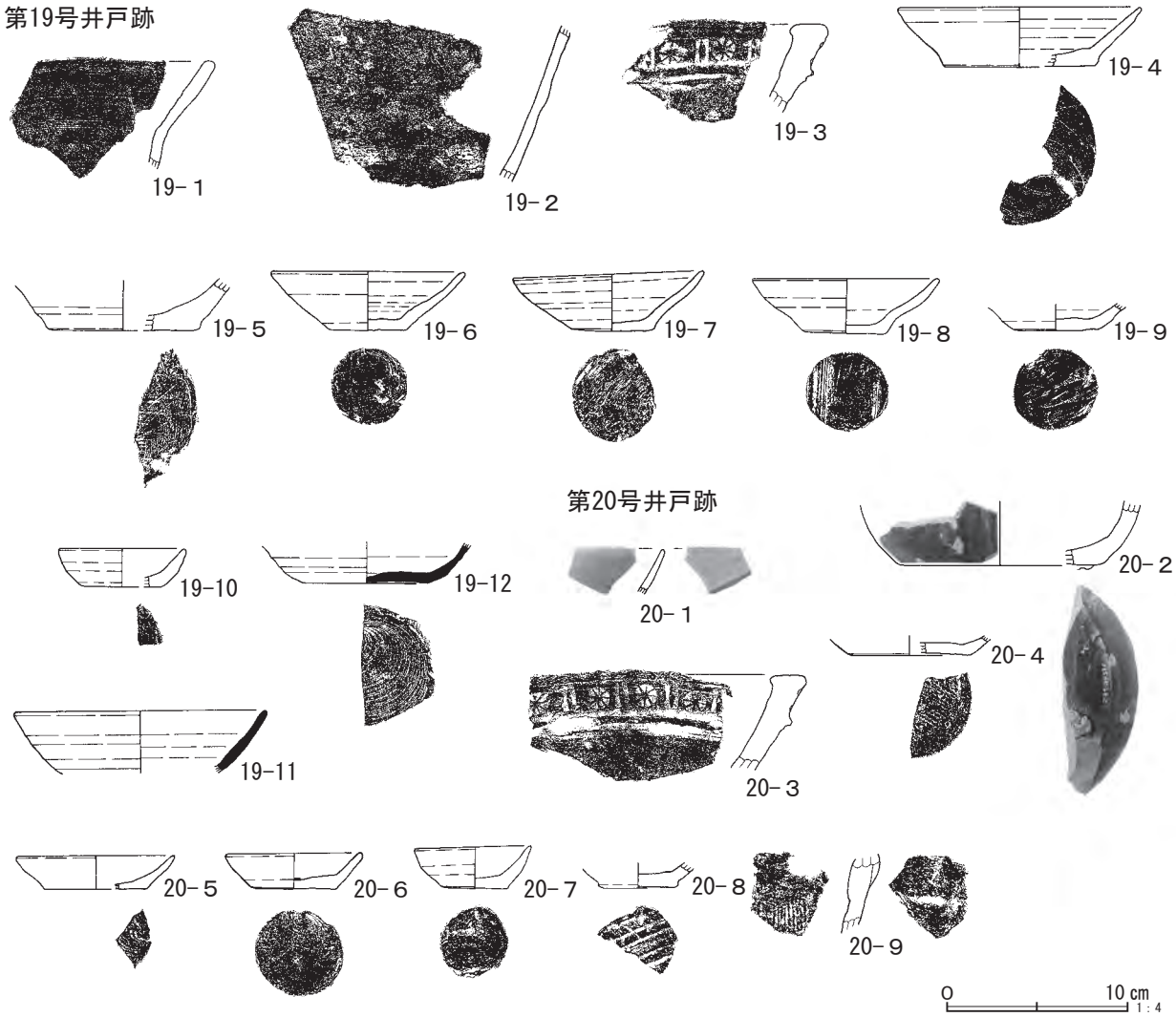
第 50 図　井戸跡出土遺物（１）



第 51 図　井戸跡出土遺物（２）



第 52 図　井戸跡出土遺物（3）



第 53 図　井戸跡出土遺物（４）

しか不明である。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 52 図）で図示可能なものは、土師質土器かわらけ（18 － 1）のみであるが、この他に写真のみ掲載の桃の種子（図版 56）が出土した。18 － 1 は、在地系の土師質土器かわらけの底部である。体部と底部の境に強いロクロナデによる凹みがある。底面は、回転糸切痕が残る。

本土坑の時期は、中世と思われる。

第 19 号井戸跡（第 49 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 33 － 93 グリッドに位置する。南東で第 20 号井戸跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、第６号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。

長軸 2.34 m、短軸 2.08 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.88 mを測る。立ち上がりから底面までほぼ垂直に掘り込まれていた。覆土は、図示できなかったため詳細は不明であるが、底面は砂礫層であった。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 53 図）は、瓦質土器土鍋（19 － 1 ・ 2）、火鉢（19 － 3）、土師質土器かわらけ（19 － 4 ～ 10）がある。この他にも流れ込みで奈良時代の須恵器坏（19 － 11・12）が

第 13 表　井戸跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1-1	1号井戸跡	瓦質土器片口鉢	(29.8)	8.8	(12.4)	ABDN	灰　色	B	15%	中世。在地系。
1-2	1号井戸跡	瓦質土器片口鉢	－	(6.0)	(13.0)	ABEHKN	褐灰色	B	体～底15%	中世。在地系。
1-3	1号井戸跡	瓦質土器片口鉢	－	－	－	ABDHN	外:灰白　内:オリーブ黒	B	体部片	中世。在地系。内面被熱？
1-4	1号井戸跡	瓦質土器片口鉢	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい橙　内:灰黄	B	体部片	中世。在地系。
1-5	1号井戸跡	砥　石	最大長(5.5)cm、最大幅(4.45)cm、最大厚(2.0)cm。重量(60.9)g。半分以上欠。凝灰岩。							
1-6	1号井戸跡	土師器　台付甕	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	台部片	古墳前。
1-7	1号井戸跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABFN	灰　色	B	胴上～中片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。
1-8	1号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰　色	B	胴下部片	奈良・平安。南比企産。
5-1	5号井戸跡	陶器　擂鉢	－	－	－	－	－	－	体部片	中～近世。瀬戸美濃系。5-2・3同一個体。
5-2	5号井戸跡	陶器　擂鉢	－	－	－	－	－	－	体部片	中～近世。瀬戸美濃系。5-1・3同一個体。
5-3	5号井戸跡	陶器　擂鉢	－	－	－	－	－	－	体部片	中～近世。瀬戸美濃系。5-1・2同一個体。
5-4	5号井戸跡	瓦質土器　焙烙	－	－	－	ABDHIK	黒褐色	B	口～体部片	中～近世。在地系。外面輪積痕有。
5-5	5号井戸跡	土師質かわらけ	10.5	2.45	7.0	ABCEKN	橙　色	B	ほぼ完形	中～近世。在地系。
5-6	5号井戸跡	土師質かわらけ	(7.6)	1.8	(5.5)	ABCKN	にぶい黄橙色	B	20%	中～近世。在地系。
5-7	5号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.3)	(5.0)	ABCDK	にぶい黄橙色	B	体～底25%	中～近世。在地系。
5-8	5号井戸跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:黒褐　内:にぶい赤褐	B	胴中～下片	弥生中～後。内面やや摩耗。
5-9	5号井戸跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:黒褐　内:暗褐	B	胴中～下片	弥生中～後。外面摩耗顕著。
5-10	5号井戸跡	土師器　壺	－	－	－	ABDHI	外:赤　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	古墳前。内外面摩耗。外面赤彩、半分剥落。
6-1	6号井戸跡	陶器　徳利	－	－	－	－	－	－	口～頸部片	近世。瀬戸美濃系。
6-2	6号井戸跡	陶器　擂鉢	－	－	－	－	－	－	口～体部片	中～近世。備前系。
6-3	6号井戸跡	土師質かわらけ	(11.4)	2.15	(5.5)	ABCEH	橙　色	B	25%	近世。在地系。内外面黒色処理。
6-4	6号井戸跡	土師質かわらけ	(11.5)	2.15	(7.1)	ABCHKN	橙　色	B	20%	近世。在地系。
6-5	6号井戸跡	土師質かわらけ	(9.4)	2.7	(6.7)	ABDK	にぶい橙色	B	20%	近世。在地系。
6-6	6号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.5)	(4.6)	ABDHKN	灰白色	B	体～底40%	近世。在地系。
10-1	10号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ADFN	灰　色	B	胴下部片	奈良・平安。南比企産。
11-1	11号井戸跡	瓦質土器片口鉢	－	－	－	ABEHN	黒褐色	B	体部片	中世。在地系
12-1	12号井戸跡	瓦質土器片口鉢	－	－	－	ABEHN	外:にぶい褐　内:にぶい橙	B	体部片	中世。在地系
12-2	12号井戸跡	須恵器　坏	－	(0.95)	(7.2)	ADFN	黄灰色	B	底部35%	奈良。南比企産。
12-3	12号井戸跡	須恵器　坏	－	(1.1)	6.1	ABF	灰　色	B	底部25%	奈良。南比企産。
13-1	13号井戸跡	青磁　碗	－	－	－	－	－	－	体部片	中世。龍泉窯系。
13-2	13号井戸跡	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	胴下部片	中世。常滑系。11号溝11-6同一個体？
13-3	13号井戸跡	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	胴中～下片	中世。常滑系。
13-4	13号井戸跡	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	胴中～下片	中世。常滑系。
13-5	13号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.55)	(10.2)	ABDH	橙　色	B	底部20%	中世。在地系。
13-6	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長19.5cm、最大幅25.2cm、最大厚9.6cm。重量(2,400.0)g。側面所々欠。角閃石安山岩。水輪部。							
13-7	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長14.1cm、最大幅22.4cm、最大厚8.6cm。重量1,782.0g。完形。角閃石安山岩。水輪部。							
13-8	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長(14.05)cm、最大幅18.9cm、最大厚6.8cm。重量(1,122.0)g。片側面・所々欠。角閃石安山岩。水輪部。							
13-9	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長(17.1)cm、最大幅20.2cm、最大厚9.2cm。重量(2,200.0)g。側面大半欠。角閃石安山岩。水輪部。							
13-10	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長(16.2)cm、最大幅19.2cm、最大厚7.9cm。重量(1,725.0)g。側面・所々欠。角閃石安山岩。水輪部。							
13-11	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長16.75cm、最大幅18.1cm、最大厚8.45cm。重量1,603.0g。ほぼ完形。角閃石安山岩。水輪部。							
13-12	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長(17.3)cm、最大幅(16.9)cm、最大厚(10.3)cm。重量(2,000.0)g。側面大半欠。角閃石安山岩。水輪部。							
13-13	13号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長(17.3)cm、最大幅(19.6)cm、最大厚12.35cm。重量(2,800.0)g。側面大半・所々欠。角閃石安山岩。水輪部。							
13-14	13号井戸跡	須恵器　高坏	－	(4.1)	－	AHLN	灰　色	B	接合部90%	古墳後。末野産。外面一部自然釉付着。
13-15	13号井戸跡	須恵器　坏	－	(1.25)	(8.0)	ABDF	灰　橙	B	底部25%	奈良。南比企産。
13-16	13号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ABDFN	灰　色	B	口～頸部片	奈良・平安。南比企産。
14-1	14号井戸跡	青磁　碗	－	－	－	－	－	－	口～体部片	中世。龍泉窯系。
14-2	14号井戸跡	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	頸～肩部片	中世。常滑系。
14-3	14号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.3)	(6.4)	ABCDH	にぶい橙色	B	体～底40%	中世。在地系。
14-4	14号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長(21.7)cm、最大幅(26.0)cm、最大厚(12.3)cm。重量(4,000.0)g。両対角付近欠。角閃石安山岩。地輪部。							
14-5	14号井戸跡	石製品　五輪塔	最大長15.5cm、最大幅18.45cm、最大厚8.4cm。重量(2,200.0)g。側面一部欠。角閃石安山岩。被熱。水輪部。							
14-6	14号井戸跡	須恵器高台付椀	－	(4.3)	6.4	ABHL	灰白色	C	体～高60%	平安。末野産。内外面自然釉付着。
14-7	14号井戸跡	須恵器　瓶	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	胴中～下片	奈良・平安。南比企産。
14-8	14号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	肩部片	奈良・平安。南比企産。14-9同一個体。
14-9	14号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	肩～胴上片	奈良・平安。南比企産。外面自然釉付着。14-8同一。
14-10	14号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	胴下部片	奈良・平安。南比企産。内面平滑。
14-11	14号井戸跡	土師器　羽釜	(20.6)	(9.8)	－	ABHKN	黒褐　にぶい橙	A	口～胴15%	平安。
17-1	17号井戸跡	須恵器高台付椀	(13.8)	5.7	(7.0)	ABDHL	にぶい黄橙色	C	40%	平安。末野産。酸化焔焼成。
17-2	17号井戸跡	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰　色	B	胴中段片	奈良・平安。南比企産。
17-3	17号井戸跡	須恵器　瓶	(12.5)	(3.95)	－	ABDFN	灰　色	B	口縁部20%	古墳末。南比企産。外面自然釉付着。
18-1	18号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.1)	(6.6)	ABCDHK	浅黄橙色	B	底部40%	中世。在地系。
19-1	19号井戸跡	瓦質土器　土鍋	－	－	－	ABHK	暗灰色	B	口～胴上片	中世。在地系。
19-2	19号井戸跡	瓦質土器　土鍋	－	－	－	ABHK	外:褐灰　内:灰	B	胴下部片	中世。在地系。
19-3	19号井戸跡	瓦質土器　火鉢	－	－	－	ABCDHI	灰　色	C	口縁部片	中世。在地系。20号井戸20-3同一個体？
19-4	19号井戸跡	土師質かわらけ	(13.6)	3.3	(8.4)	ABDHK	灰黄　黒	B	40%	中世。山内上杉系。口縁部内外面タール付着。
19-5	19号井戸跡	土師質かわらけ	－	(2.9)	(8.4)	ABHK	黒褐色	B	体～底40%	中世。古河公方系。内外面黒色処理。
19-6	19号井戸跡	土師質かわらけ	(10.8)	3.25	4.3	ABCHK	にぶい黄橙色	B	50%	中世。古河公方系。外面所々タール付着。
19-7	19号井戸跡	土師質かわらけ	10.6	3.4	4.6	ABH	にぶい黄橙色	B	90%	中世。古河公方系。
19-8	19号井戸跡	土師質かわらけ	10.4	3.2	4.6	ABEHK	にぶい黄橙色	B	ほぼ完形	中世。古河公方系。
19-9	19号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.5)	4.7	ABDHK	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	体～底90%	中世。古河公方系。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
19-10	19号井戸跡	土師質かわらけ	(7.1)	2.15	(4.4)	ABC	浅黄橙色	B	15%	中世。古河公方系。口縁部内外面タール付着。
19-11	19号井戸跡	須恵器　坏	(14.0)	(3.45)	－	ABDFN	灰白色	B	口～体15%	奈良。南比企産。
19-12	19号井戸跡	須恵器　坏	－	(2.25)	6.9	ABDHL	灰　色	B	体～底40%	奈良。末野産。
20-1	20号井戸跡	白磁　碗	－	－	－	－	－	－	口縁部片	中世。中国産。
20-2	20号井戸跡	陶器　壺	－	(3.55)	(11.3)	－	－	－	胴～底20%	中世。瀬戸美濃系。
20-3	20号井戸跡	瓦質土器　火鉢	－	－	－	ABDHKN	灰　色	B	口縁部片	中世。在地系。19号井戸19-3同一個体？
20-4	20号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.1)	(6.4)	ABDEK	にぶい黄橙色	B	体～底40%	中世。在地系。
20-5	20号井戸跡	土師質かわらけ	(8.8)	1.9	(5.7)	ABEH	にぶい橙色	B	25%	中世。山内上杉系。口縁部内外面タール付着。
20-6	20号井戸跡	土師質かわらけ	7.65	2.1	4.8	AH	黒　色	B	70%	中世。山内上杉系。内外面タール付着。
20-7	20号井戸跡	土師質かわらけ	6.55	2.45	3.7	ABEHK	浅黄橙色	B	70%	中世。古河公方系。
20-8	20号井戸跡	土師質かわらけ	－	(1.4)	(4.4)	ABDEHK	にぶい黄橙色	B	体～底30%	中世。古河公方系。
20-9	20号井戸跡	円筒埴輪	－	－	－	ABCKN	明赤褐色	B	胴部片	古墳後。内面輪積痕有。

出土した。

19－1～3は、在地系の瓦質土器である。19－1・2は、土鍋である。19－1は口縁部から胴上部まで、19－2は胴下部の破片である。19－3は、丸火鉢の口縁部片である。19－3は、外面に縦位の沈線状を呈する2本の刻印が等間隔に押印され、間に菊花の印花文が施されている。第20号井戸跡出土20－3と同一個体の可能性がある。19－1・3は、15世紀後半～16世紀初頭と思われる。

19－4～10は、在地系の土師質土器かわらけである。19－4のみ山内上杉系、その他は古河公方系である。15世紀後半～16世紀初頭と思われる。19－4は、底部中央を欠く。口縁部から体部が逆ハの字に開き、口縁端部が尖る。器高が低く、底径が大きい。19－5～10は、19－5が大型、19－10が小型、その他は中型である。大型の19－5と中型の19－9は口縁部、小型の19－10は底部中央を欠く。中型の19－6～8は、口縁部がやや受け口状を呈し、体部との境付近に緩い稜を持つ。小型の19－10は、口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。調整は、いずれも内外面がロクロナデであり、見込みに指ナデ痕がみられた。底面は、19－4・10が回転糸切痕、19－5・6・8・9は回転糸切痕と板目状圧痕、19－7は板目状圧痕が残る。19－5は、内外面に黒色処理が施されている。19－4・10は口縁部内外面、19－6は外面の所々にタールが付着している。

19－11・12は、奈良時代の須恵器坏である。19－11は口縁部から体部まで、19－12は体部から底部までの部位である。19－11は南比企産、19－12は末野産である。19－11は口縁部から体部がやや内湾しながら立ち上がる。19－12は、体部が内湾し、底部はやや上げ底である。調整は、いずれも内外面ともにロクロナデ、19－12の底面は回転糸切痕が残る。

本井戸跡の時期は、中世と思われる。

第20号井戸跡（第49図）

2011（平成23）年度調査A区33－94グリッドに位置する。北西部で第19号井戸跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、第6号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は本井戸跡が新しいと思われる。南側の立ち上がりは、調査区外にある。

長軸2.76ｍ、短軸2.33ｍ程の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは、最大1.74ｍを測る。立ち上がりから底面まで鋭角ないしほぼ垂直に掘り込まれていた。底面北西部に木組による方形の井戸枠が設けられており、覆土は3層（1～3層）確認された。2・3層は裏込め、1層は灰色粘土による単一層であり、人為的に埋め戻された可能性がある。底面は、砂礫層であった。井戸枠は、四隅に約0.15ｍ四方の角材が据えられ、間に長さ1.1～1.7ｍ、幅0.1ｍ、厚さ0.05ｍ前後を測る板材を8枚前後、縦に並べていた。そして、内面は四隅の角材の中段付近に設けられた長方形の孔

（0.08 × 0.04 m）に両端及び井戸枠側を加工した径 0.1 m前後の木材を通し、補強していた。

本井戸跡に伴う出土遺物（第 53 図）は、白磁碗（20 － 1 ）、陶器壺（20 － 2 ）、瓦質土器火鉢（20 － 3 ）、土師質土器かわらけ（20 － 4 ～ 8 ）がある。井戸枠に使用された木材については、取り上げを行ったが、脆弱であったことから計測は不可能であった。この他にも流れ込みで古墳時代後期の円筒埴輪片（20 － 9 ）が出土した。

20 － 1 は、中国産白磁碗Ⅷ類の口縁部片である。内面に沈線が横位に巡る。12 世紀中頃～ 13 世紀と思われる。20 － 2 は、瀬戸美濃系陶器口広有耳壺の胴下部から底部までの部位である。底面は錆釉、その他は灰釉が施されている。底面に回転糸切痕を残し、トチンの一部が付着している。古瀬戸後期 15 世紀中頃～末と思われる。20 － 3 は、在地系瓦質土器丸火鉢の口縁部片である。外面に縦位の沈線状を呈する 2 本の刻印が等間隔に押印され、間に菊花の印花文が施されている。第 19 号井戸跡出土 19 － 3 と同一個体の可能性がある。15 世紀後半～ 16 世紀初頭と思われる。20 － 4 ～ 8 は、在地系の土師質土器かわらけである。20 － 4 以外は、小型である。20 － 4 ・ 8 は、口縁部を欠く。20 － 5 ・ 6 は山内上杉系、20 － 7 ・ 8 は古河公方系である。15 世紀後半～ 16 世紀初頭と思われる。20 － 4 は、体部と底部の内面境に強いロクロ痕が巡り、凹む。20 － 5 は、底部中央の器壁が薄い。20 － 6 は、体部下位の器壁が厚く、底部中央が凹む。20 － 7 は、口縁部と体部外面の境付近に緩い稜を持つ。20 － 7 ・ 8 は、見込みに指ナデ痕がみられた。底面は、20 － 4 ～ 6 が回転糸切り痕、20 － 7 ・ 8 は回転糸切り痕と板目状圧痕がみられた。20 － 5 は内外面、20 － 6 は口縁部内外面にタールが付着している。

20 － 9 は、古墳時代後期の円筒埴輪の胴部片である。外面上位に低い突帯が横位に巡り、下位は縦位のハケメ、内面は斜位のヘラナデが施されている。内面中段に輪積痕がみられた。

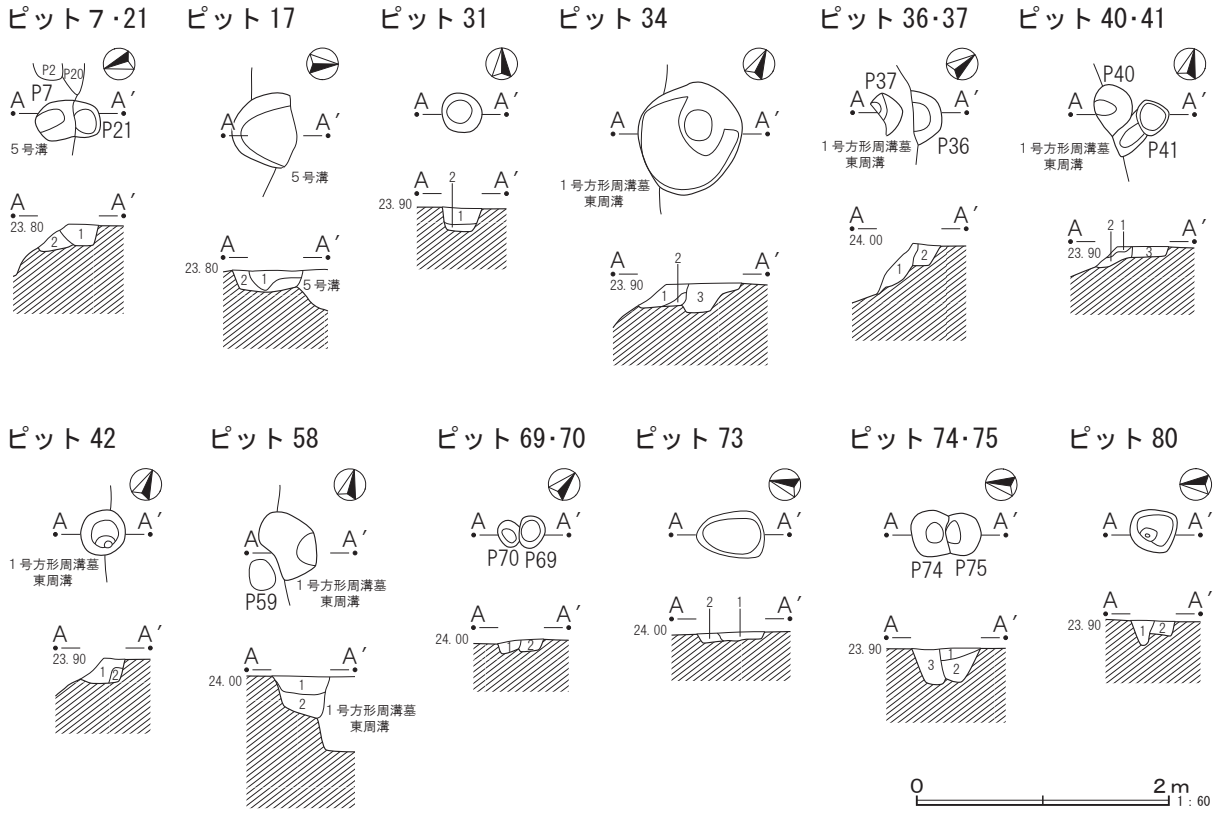
本土坑の時期は、中世と思われる。

6　ピット

単独ピットは、計 312 基と多数確認された。ただし、住居跡検出のピットは伴わないものもあるため総数が増える可能性が高い。33･34 － 87 グリッドに位置するピット 43 ～ 48 は、柱筋がややずれるが、南西から北東方向にかけてほぼ直線的に並ぶことから柵列跡の可能性がある。

ピットは、2011（平成 23）年度調査区及び 2012（平成 24）年度調査区ともに所在しない箇所もあるが、いずれもほぼ全面から検出された。このうち、密集するのは、30 ～ 33 － 90 ～ 92 グリッド、32 ～ 35 － 88・89 グリッド、34 ～ 36 － 91・92 グリッド、38・39 － 87 ～ 89 グリッドである。重複するもので新旧関係を把握できたもの、覆土が複数確認されたもの、柱材や礎石などが確認されたものについては、第 54・55 図に示した。覆土が単一層であるもの、不明なものについては、図示しなかった。各ピットの計測値は、第 14 表を参照のこと。なお、表中の長短軸に（）が付くものは現存長、深さに（）が付くものは、重複する遺構の底面から確認された数値を示す。また、備考欄には、他の遺構との新旧関係とともに出土土器で図示不可能な小片について、古墳時代前期の土師器は「前土」、奈良・平安時代の土師器は「奈平土」、須恵器は「奈平須」、中世の土器類（陶磁器含む。）は「中」の表記で記載した。

以下、図示したピットについて記述する。



ピット7・21
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（1㎝大）少量含む。
2　黄灰色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（1㎝大）多量、砂少量含む。

ピット17
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量、焼土粒微量含む。
2　黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（3㎝大）多量含む。

ピット31
土層説明（ＡＡ′）
1　灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2　灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。

ピット34
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
2　黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（2㎝大）多量含む。
3　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。

ピット36・37
土層説明（ＡＡ′）
1　黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
2　黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。

ピット40・41
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2　黄灰色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎜大）多量含む。
3　黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。

ピット42
土層説明（ＡＡ′）
1　灰　色　土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2　灰　色　土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（1㎝大）多量含む。

ピット58
土層説明（ＡＡ′）
1　黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2　黒褐色土：シルト質。酸化鉄、浅黄色ブロック（5㎜大）多量含む。

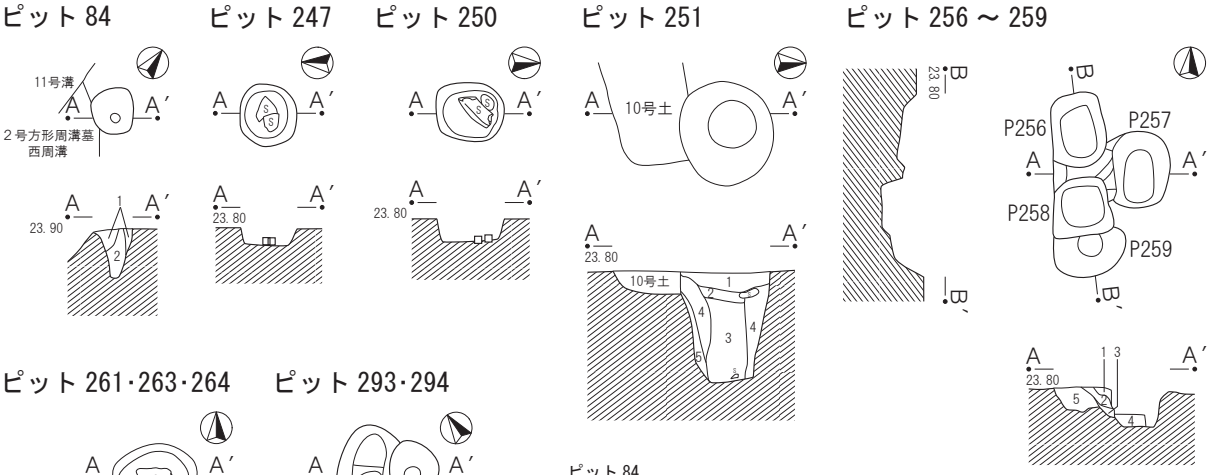
ピット69・70
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
2　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。１層より暗い。

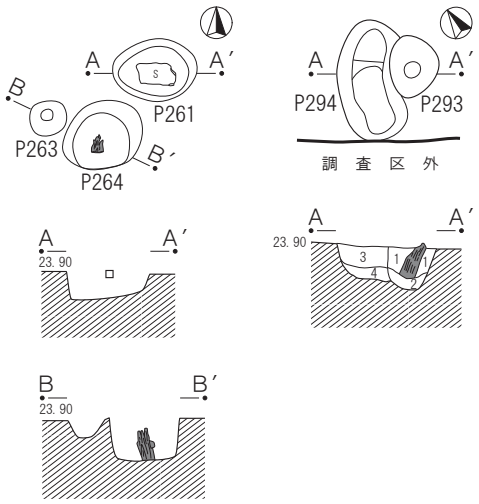
ピット73
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（1㎝大）少量含む。

ピット74・75
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎝大）多量含む。
2　灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、灰黄色ブロック（5㎝大）少量含む。

ピット80
土層説明（ＡＡ′）
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
2　灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。

第54図　ピット（1）





ピット 84
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎝大）多量含む。

ピット 251
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１～３㎝大）多量含む。
3 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（５㎜大）微量含む。
5 灰色粘土：灰黄色ブロック（10㎝大）少量含む。

ピット 257
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。しまり有。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１～３㎝大）少量含む。しまり有。
3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。しまり有。
4 黒 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。しまり有。
5 黒褐色土：粘土質。酸化鉄微量含む。しまり有。

ピット 293・294
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：粘土質。
2 灰白色土：粘土質。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
4 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（１～３㎝大）多量、砂少量含む。

0　2m　1：60

第 55 図　ピット（２）

ピット７・21 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 34 － 85・86 グリッドに位置する。北側に位置するのがピット７、南側がピット 21 である。第５号溝跡の南側立ち上がりを切っている。覆土は、いずれも黄灰色土による単一層（１・２層）であったが、土層断面観察の結果、ピット 21 がピット７を切っていることが確認された。ブロックを含んでいたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 17 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33 － 86 グリッドに位置する。第５号溝跡の南側立ち上がりを切っている。覆土は、２層（１・２層）確認された。ブロックを含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピット 31 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32 － 87 グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は、みられない。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを少量含み、ほぼ水平に堆積していた。自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 34 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 32・33 － 87 グリッドに位置する。第１号方形周溝墓の東周溝中央付近の東側の立ち上がりに位置するが、新旧関係は不明である。径 0.85 m前後と大きく、土坑としても良いかもしれない。底面北側は、ピット状を呈していた。覆土は、３層（１～３層）確

認された。ブロックを含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピット 36・37 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33 － 87 グリッドに位置する。北東に位置するのがピット 36、南西がピット 37 である。第１号方形周溝墓東周溝北端の立ち上がりを切っている。覆土は、色調の異なる２層（１・２層）が確認され、土層断面観察の結果、ピット 37 がピット 36 を切っていることが確認された。ブロックを含んでいたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 40・41 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33 － 87 グリッドに位置する。北西に位置するのがピット 40、南東がピット 41 である。第１号方形周溝墓東周溝北東部の東側立ち上がりに位置するが、新旧関係は不明である。ピット 41 は、南西部にテラス状の段を持つ。覆土は、ピット 40 で２層（１・２層）、ピット 41 で１層（３層）確認され、土層断面観察の結果、ピット 40 がピット 41 を切っていることが確認された。ブロックを含んでいたが、ピット 40 はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。ピット 41 は、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 42 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33 － 87 グリッドに位置する。第１号方形周溝墓東周溝中央付近の東側立ち上がりに位置するが、新旧関係は不明である。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを多量含んでいたが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 58 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 33 － 88 グリッドに位置する。第１号方形周溝墓東周溝南東部の西側立ち上がりを切っている。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを多量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピット 69・70 は、2012（平成 24）年度調査Ｂ区 34 － 88 グリッドに位置する。北東に位置するのがピット 69、南西がピット 70 である。第１号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は不明である。覆土は、いずれも黄灰色土による単一層（１・２層）であったが、土層断面観察の結果、ピット 70 がピット 69 を切っていることが確認された。ピット 70 は、ブロックを含んでいたが、いずれも自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 73 は、2012（平成 24）年度調査Ａ区 37 － 88 グリッドに位置する。第２号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は不明である。覆土は、２層（１・２層）確認された。下層にブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

ピット 74・75 は、2012（平成 24）年度調査Ａ区 38 － 88 グリッドに位置する。北側に位置するのがピット 74、南側がピット 75 である。第２号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は不明である。覆土は、ピット 75 が２層（１・２層）、ピット 74 が１層（３層）確認され、土層断面観察の結果、ピット 75 がピット 74 を切っていることが確認された。いずれもブロックを含んでいたが、ピット 75 はレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。ピット 74 は、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 80 は、2012（平成 24）年度調査Ａ区 38 － 88 グリッドに位置する。第２号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は不明である。覆土は、色調の異なる２層（１・２層）が確認された。ブロックを少量含む１層は、柱痕跡の可能性がある。

ピット 84 は、2012（平成 24）年度調査Ａ区 39 － 88 グリッドに位置する。第２号方形周溝墓西周溝北東端の立ち上がりに位置するが、新旧関係は不明である。覆土は、異なる２層（１・２層）が確認

第 14 表　ピット計測表

No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考	No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考
P1	33-85G	0.24	0.22	0.59	5号溝と新旧不明。	P70	34-88G	0.22	(0.18)	0.1	1号方と新旧不明。P69より新。
P2	33・34-85G	(0.25)	(0.3)	0.27	5号溝、P20と新旧不明。	P71	35-88G	0.25	0.24	0.11	1号方と新旧不明。
P3	34-85G	0.29	0.27	0.18		P72	35-88G	0.38	0.33	0.12	1号方と新旧不明。
P4	34-85G	0.46	0.37	0.17		P73	37-88G	0.53	0.37	0.07	2・9号方と新旧不明。
P5	34-85G	0.27	0.26	0.04		P74	38-88G	0.36	(0.31)	0.28	2・9号方と新旧不明。P75より古。
P6	34-85G	0.32	0.22	0.25		P75	38-88G	(0.27)	0.34	0.26	2・9号方と新旧不明。P74より新。
P7	34-85G	(0.32)	(0.31)	0.21	5号溝と新旧不明。P21より古。	P76	38-88G	0.28	0.25	0.1	2・9号方と新旧不明。
P8	34-85G	(0.32)	(0.24)	0.28	5号溝と新旧不明。	P77	38-88G	0.49	0.39	0.22	2・9号方と新旧不明。
P9	35-85G	(0.31)	(0.19)	0.14	5号溝、8号方と新旧不明。	P78	38-88G	0.38	0.33	0.11	2・9号方と新旧不明。
P10	36-85G	0.39	0.3	不明	8号方と新旧不明。	P79	38-88G	0.43	0.38	0.08	2・9号方と新旧不明。
P11	36-85G	(0.42)	(0.27)	(0.15)	8号方と新旧不明。	P80	38-88G	0.36	0.33	0.2	2・9号方と新旧不明。
P12	37-85G	0.29	0.24	(0.25)	9号溝と新旧不明。	P81	38-88G	0.26	0.24	0.07	2・9号方と新旧不明。
P13	37-85G	(0.4)	(0.3)	(0.15)	9・10号溝と新旧不明。	P82	38-88G	(0.29)	0.22	0.08	2・9号方と新旧不明。
P14	37-85G	0.4	0.3	0.19		P83	38・39-88G	0.24	0.19	0.09	2・9号方と新旧不明。
P15	39-85G	0.71	0.61	0.2	10号溝と新旧不明。	P84	39-88G	0.36	0.33	0.39	2・9号方と新旧不明。
P16	32-86G	0.55	0.48	0.16		P85	39-88G	(0.43)	(0.27)	(0.16)	11号溝、2・9号方と新旧不明。
P17	33-86G	(0.52)	(0.58)	0.18	5号溝より新。	P86	39-88G	0.33	0.29	0.16	8号溝と新旧不明。
P18	33-86G	0.26	0.19	不明	2号住、2号井戸と新旧不明。	P87	31-89G	0.17	0.15	0.12	
P19	33-85・86G	(0.87)	(0.46)	0.28	5号溝と新旧不明。	P88	32-88・89G	0.34	(0.31)	0.21	7号住と新旧不明。
P20	33・34-85・86G	(0.37)	(0.15)	0.13	5号溝、P2と新旧不明。	P89	32-89G	(0.35)	(0.2)	0.19	13号溝と新旧不明。
P21	34-85・86G	0.28	(0.19)	0.16	5号溝と新旧不明。P7より新。	P90	32-89G	0.68	0.44	0.5	
P22	33・34-86G	0.24	0.22	0.17		P91	32-89G	0.23	0.19	0.12	
P23	36-86G	0.26	0.22	0.27	5号住、8号方と新旧不明。	P92	32-89G	0.46	0.39	0.22	奈平土。
P24	36・37-86G	0.26	0.24	0.24	5号住、8号方と新旧不明。	P93	32-89G	0.23	0.18	0.18	3号方と新旧不明。
P25	37-85・86G	0.39	0.35	0.17	前土。	P94	32-89G	0.5	0.48	0.18	3号方と新旧不明。 中。
P26	38-86G	0.55	0.39	0.12		P95	32-88・89G	0.26	0.23	0.3	1号方と新旧不明。
P27	38-86G	0.36	0.31	0.1		P96	32・33-89G	0.4	0.37	0.1	17号溝、3号土と新旧不明。
P28	38-86G	0.32	0.28	0.27	9号方と新旧不明。	P97	33-89G	0.41	0.34	0.16	1号方と新旧不明。
P29	38-86G	0.31	0.3	0.18		P98	33-89G	(0.45)	(0.2)	(0.32)	1号方と新旧不明。
P30	32-87G	(0.58)	(0.43)	0.32	5号溝、1号井戸と新旧不明。	P99	34-88・89G	0.3	0.26	0.21	1号方と新旧不明。
P31	32-87G	0.33	0.31	0.03		P100	34-88・89G	0.3	0.23	0.14	1号方と新旧不明。
P32	32-87G	(0.39)	0.34	(0.18)	5号溝と新旧不明。	P101	34-89G	0.21	0.18	0.14	1号方と新旧不明。
P33	32-87G	0.28	0.26	0.15		P102	34-89G	0.27	0.24	0.25	1号方と新旧不明。
P34	32・33-87G	0.88	0.79	0.22	1号方と新旧不明。	P103	34-89G	0.24	0.18	0.3	1号方と新旧不明。
P35	33-87G	0.19	0.16	0.09		P104	34-89G	(0.26)	0.21	0.36	1号方、P105と新旧不明。
P36	33-87G	(0.43)	(0.22)	(0.21)	1号方より新。P37より古。	P105	34-89G	(0.2)	0.22	0.37	1号方、P104と新旧不明。
P37	33-87G	(0.33)	(0.2)	(0.38)	1号方より新。P36より新。	P106	34-89G	0.2	0.18	0.12	1号方と新旧不明。
P38	33-87G	0.5	0.36	0.16	1号方と新旧不明。	P107	34-89G	0.35	0.31	0.07	1号方と新旧不明。
P39	33-87G	(0.45)	(0.62)	(0.12)	1号方と新旧不明。	P108	34-89G	0.38	0.34	0.16	1号方と新旧不明。
P40	33-87G	(0.41)	(0.29)	0.17	1号方と新旧不明。P41より新。	P109	34-89G	0.4	0.33	0.27	1号方と新旧不明。
P41	33-87G	0.49	0.27	0.11	1号方と新旧不明。P40より古。	P110	35-89G	0.23	0.22	0.22	1号方と新旧不明。
P42	33-87G	0.38	0.35	0.29	1号方と新旧不明。	P111	35-89・90G	0.27	0.21	0.13	4号方と新旧不明。
P43	33-87G	0.27	0.23	0.37	1号方と新旧不明。	P112	36-89G	(0.57)	(0.34)	0.2	2号方と新旧不明。
P44	33-87G	0.28	0.26	0.37	1号方と新旧不明。 前土。	P113	37-88・89G	(0.26)	(0.19)	0.06	2・9号方と新旧不明。
P45	34-87G	0.26	0.24	0.4	1号方と新旧不明。	P114	37-89G	(0.85)	(0.42)	0.16	2・9号方と新旧不明。
P46	34-87G	0.19	0.16	0.16	1号方と新旧不明。	P115	37-89G	0.36	0.29	0.23	2・9号方と新旧不明。
P47	34-87G	0.28	0.23	0.39	1号方と新旧不明。	P116	38-89G	0.48	0.38	0.25	2・9号方と新旧不明。
P48	34-87G	0.27	0.21	0.3	1号方と新旧不明。奈平須。	P117	38・39-88・89G	0.38	0.32	不明	2・9号方と新旧不明。
P49	36・37-87G	0.4	0.38	0.14	8号方と新旧不明。	P118	38・39-89G	(0.38)	(0.32)	0.16	2・9号方と新旧不明。
P50	38-87G	0.22	0.18	0.07	2・9号方と新旧不明。	P119	38・39-89G	(0.29)	(0.24)	0.14	2・9号方と新旧不明。
P51	38-87G	0.32	0.29	0.23	2・9号方と新旧不明。	P120	40-89G	0.51	0.44	0.47	10号方と新旧不明。
P52	39-87G	0.46	0.33	0.55	9号方と新旧不明。	P121	30-90G	0.17	0.16	0.12	22号溝と新旧不明。
P53	32-88G	(0.35)	0.32	(0.13)	1号方と新旧不明。	P122	30-90G	0.2	0.17	0.24	
P54	32-88G	0.3	0.27	0.26		P123	30・31-90G	0.32	(0.19)	0.08	P126と新旧不明。
P55	32-88G	0.38	0.29	0.15	13号溝と新旧不明。	P124	31-89・90G	0.45	0.28	0.16	22・25号溝と新旧不明。
P56	32-88G	0.23	0.19	0.3	13号溝と新旧不明。	P125	31-90G	0.19	0.15	0.11	25号溝と新旧不明。
P57	32-88G	(0.34)	(0.35)	0.09	1号方、3号土と新旧不明。	P126	31-90G	0.7	0.58	0.07	3号方、P123と新旧不明。
P58	33-88G	(0.44)	0.54	(0.36)	1号方より新。	P127	31-90G	0.36	0.32	0.04	13号溝、3号方、P128と新旧不明。奈平土。
P59	33-88G	0.24	0.2	0.24	1号方と新旧不明。	P128	31-90G	0.33	(0.23)	0.04	3号方、P127と新旧不明。
P60	33-88G	0.36	0.33	0.27	1号方と新旧不明。	P129	31-90G	0.18	0.15	0.07	3号方と新旧不明。
P61	33-88G	0.29	0.25	0.18	1号方、P62と新旧不明。	P130	32-90G	0.25	0.19	0.22	3号方と新旧不明。
P62	33-88G	0.4	0.29	0.21	1号方、P61・63と新旧不明。	P131	32-90G	(0.37)	0.38	0.16	3号方と新旧不明。
P63	33-88G	0.29	0.2	0.16	1号方、17号溝、P62と新旧不明。	P132	32-90G	0.25	0.18	0.06	3号方と新旧不明。
P64	33-88G	0.18	0.15	0.16	1号方と新旧不明。	P133	32-90G	0.18	0.18	0.07	3号方と新旧不明。
P65	33・34-88G	0.55	0.53	0.16	1号方と新旧不明。	P134	32-90G	0.2	0.17	0.2	3号方と新旧不明。
P66	33・34-88G	0.29	0.27	0.09	1号方と新旧不明。	P135	35-90G	0.15	0.11	0.05	4号方と新旧不明。
P67	34-88G	0.31	0.28	0.07	1号方、16号溝と新旧不明。	P136	35-90G	0.19	(0.15)	0.06	4号方、P137と新旧不明。
P68	34-88G	0.37	0.29	0.21	1号方と新旧不明。	P137	35-90G	0.29	0.25	0.14	4号方、P136と新旧不明。
P69	34-88G	0.26	0.2	0.07	1号方と新旧不明。P70より古。	P138	35-90G	0.36	0.29	0.1	4号方と新旧不明。

No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考	No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考
P139	35-90G	0.18	0.17	不明	4号方と新旧不明。	P209	33-91G	(0.15)	(0.29)	不明	3号方と新旧不明。
P140	35-90G	0.21	0.2	0.18	28号溝、4号方と新旧不明。	P210	33-91G	(0.76)	(0.3)	0.14	12号井戸、3号方と新旧不明。
P141	35-90G	0.25	0.21	0.12	4号方と新旧不明。	P211	34-91G	0.1	0.09	0.08	4号方と新旧不明。
P142	35-90G	0.17	0.15	0.21	4号方と新旧不明。	P212	34-91G	0.21	0.18	0.15	
P143	35-90G	0.16	0.14	0.22	4号方と新旧不明。	P213	34-91G	0.14	0.12	0.08	
P144	35-90G	0.3	0.25	0.18	4号方、P145と新旧不明。	P214	34-91G	0.29	0.24	0.1	
P145	35-90G	(0.13)	0.19	0.06	4号方、P144と新旧不明。	P215	34・35-91G	0.27	0.24	0.13	4号方と新旧不明。
P146	36-90G	(0.16)	(0.29)	(0.1)	11号溝、4号方と新旧不明。	P216	34・35-91G	(0.4)	(0.26)	0.15	11号溝、4号方、P260と新旧不明。
P147	36-90G	0.22	0.21	0.06	4号方と新旧不明。	P217	35-91G	(0.17)	(0.07)	(0.11)	7号井戸、4号方と新旧不明。
P148	36-90G	0.27	0.23	0.07	4号方と新旧不明。	P218	35-91G	0.21	0.18	0.1	4号方と新旧不明。
P149	36-90G	0.34	0.34	0.06	4号方と新旧不明。	P219	35-91G	0.18	0.18	0.04	4号方と新旧不明。
P150	37-90G	(0.27)	0.32	0.19	4号方、P151と新旧不明。	P220	35-91G	0.33	0.27	0.14	4号方と新旧不明。
P151	37-90G	(0.22)	0.22	0.15	4号方、P150と新旧不明。	P221	35-91G	0.29	0.29	0.15	4号方、P222と新旧不明。
P152	37-90G	0.19	0.18	0.07	4号方と新旧不明。	P222	35-91G	0.23	(0.18)	0.11	4号方、P221と新旧不明。
P153	37-90G	0.32	0.22	0.10	4号方と新旧不明。	P223	35-91G	0.23	0.22	0.15	4号方と新旧不明。
P154	37-90G	0.26	0.23	不明	4号方と新旧不明。	P224	35-91G	0.59	0.56	0.16	4号方と新旧不明。奈平土。
P155	37-90G	0.31	0.25	0.17		P225	35-91G	0.18	0.18	0.12	4号方と新旧不明。
P156	38-89・90G	(0.42)	(0.25)	(0.33)	11号溝、9号方と新旧不明。	P226	35-91G	0.39	0.36	0.17	4号方と新旧不明。
P157	38-90G	0.48	0.46	0.19		P227	35-91G	0.33	0.31	0.17	4号方と新旧不明。奈平土。
P158	38-90G	0.39	0.38	0.34	31号溝より古。	P228	35-91G	0.65	0.59	0.17	4号方と新旧不明。奈平土。
P159	38-90G	0.28	0.24	0.16		P229	35-91G	0.19	0.17	0.21	4号方と新旧不明。
P160	38-90G	0.31	0.24	0.15	31号溝より古。	P230	35-91G	0.23	0.21	0.16	4号方と新旧不明。
P161	39-89・90G	0.25	0.21	不明		P231	36-91G	0.2	0.19	0.1	4号方と新旧不明。
P162	39-89・90G	0.32	(0.25)	不明	10号方と新旧不明。	P232	36-91G	0.25	0.23	0.08	30号溝、4号方と新旧不明。
P163	39-90G	0.43	0.32	不明	10号方と新旧不明。	P233	36-91G	0.23	0.18	0.1	4号方と新旧不明。
P164	39-90G	0.18	0.17	不明		P234	36-91G	0.17	0.15	0.06	4号方と新旧不明。
P165	39-90G	0.32	0.26	不明	32号溝と新旧不明。	P235	36-91G	0.42	0.41	0.28	4号方と新旧不明。
P166	40-90G	0.21	0.19	0.26	10号方と新旧不明。	P236	37-91G	0.51	0.39	不明	4号方と新旧不明。
P167	40-90G	0.43	0.29	0.38	10号方と新旧不明。	P237	37-91G	0.31	0.25	不明	4号方と新旧不明。
P168	40-90G	0.54	0.5	0.44	33号溝、10号方と新旧不明。	P238	39-91G	(0.34)	0.52	0.16	33・34号溝と新旧不明。
P169	40-90G	0.52	0.45	0.54	33号溝、10号方と新旧不明。	P239	30-92G	0.23	0.15	0.1	
P170	30-91G	0.16	0.15	0.08		P240	31-92G	0.47	0.44	(0.26)	1号不、P241と新旧不明。
P171	30-91G	0.42	0.38	0.2		P241	31-92G	0.53	(0.25)	(0.24)	1号不、P240・242と新旧不明。
P172	30-91G	(0.27)	(0.36)	0.15	13・26号溝と新旧不明。	P242	31-92G	0.56	0.48	(0.52)	1号不、P241と新旧不明。
P173	30-91G	0.16	0.11	0.06		P243	32-92G	0.21	0.2	不明	3号方と新旧不明。
P174	30-91G	0.15	0.12	0.03		P244	32-92G	0.32	0.3	0.08	11号住より新。
P175	30-91G	0.18	0.13	0.15		P245	32・33-92G	0.27	0.22	0.05	3号方と新旧不明。
P176	31-90・91G	0.26	0.18	0.11	3号方と新旧不明。	P246	33-92G	(0.42)	0.55	0.14	3号方と新旧不明。
P177	31-91G	0.34	0.23	0.27	3号方と新旧不明。	P247	33-92G	0.49	0.46	0.14	奈平土。
P178	31-91G	0.18	0.13	0.12	3号方と新旧不明。	P248	33-92G	0.35	0.28	0.16	
P179	31-91G	0.18	0.15	0.16	3号方と新旧不明。	P249	33-92G	0.28	0.16	0.08	
P180	31-91G	0.25	0.19	0.31	3号方と新旧不明。	P250	34-91・92G	0.53	0.47	0.18	奈平土。
P181	31-91G	0.63	0.47	0.06	3号方と新旧不明。	P251	33・34-92G	0.83	0.74	0.9	10号土より新。
P182	31-91G	0.25	0.23	0.3	3号方と新旧不明。	P252	34-92G	0.18	0.16	0.12	
P183	31-91G	0.14	0.14	0.04	3号方と新旧不明。	P253	34-92G	0.55	0.48	0.25	奈平土。
P184	31-91G	0.23	0.2	0.12	3号方と新旧不明。	P254	34-92G	(0.57)	(0.32)	0.06	4号方と新旧不明。
P185	31-91G	0.2	0.18	0.12	3号方と新旧不明。	P255	34-92G	(0.42)	0.73	0.26	15号井戸と新旧不明。
P186	31-91G	0.59	0.43	0.27	3号方と新旧不明。	P256	34-92G	0.59	0.43	0.15	P257と新旧不明。
P187	31-91G	0.26	0.25	0.13	3号方と新旧不明。	P257	34-92G	0.92	0.6	0.3	P256・258と新旧不明。
P188	32-91G	0.15	0.13	0.03	3号方と新旧不明。	P258	34-92G	0.48	0.45	0.34	P257・259と新旧不明。
P189	31・32-91G	0.28	0.2	0.12	3号方と新旧不明。	P259	34-92G	0.57	(0.33)	0.27	P258と新旧不明。
P190	32-91G	0.32	0.26	0.28	3号方と新旧不明。	P260	34・35-91・92G	(0.48)	0.52	0.21	11号溝、4号方、P216と新旧不明。
P191	32-91G	0.74	0.68	0.8	3号方と新旧不明。	P261	35-91・92G	0.67	0.5	0.23	4号方と新旧不明。
P192	32-91G	0.27	0.19	不明	3号方と新旧不明。奈平土。	P262	34・35-92G	(0.63)	0.44	0.29	11号溝、4号方と新旧不明。奈平土。
P193	32-91G	0.18	0.13	0.11	3号方と新旧不明。	P263	35-92G	0.29	0.27	0.56	4号方と新旧不明。奈平土。
P194	32-91G	0.2	0.19	0.14	3号方と新旧不明。	P264	35-92G	0.67	0.53	0.35	4号方と新旧不明。奈平土須。
P195	32-91G	0.63	0.45	0.15	3号方と新旧不明。	P265	35-92G	0.34	0.32	0.12	4号方と新旧不明。
P196	32-91G	0.3	0.23	0.08	3号方と新旧不明。	P266	35-92G	(0.27)	0.4	(0.09)	4号方と新旧不明。
P197	32-91G	0.23	0.19	0.14	3号方と新旧不明。	P267	35-92G	0.33	0.26	0.23	4号方と新旧不明。
P198	32-91G	0.18	0.18	0.05	3号方と新旧不明。	P268	35-92G	0.26	0.22	0.15	4号方と新旧不明。奈平土。
P199	32-91G	0.22	0.19	0.15	3号方と新旧不明。	P269	35-92G	0.43	0.27	0.18	4号方と新旧不明。
P200	32-91G	0.42	0.32	0.16	3号方と新旧不明。奈平土。	P270	35-92G	0.53	0.37	0.31	4号方と新旧不明。
P201	32-91G	0.26	0.25	0.2	3号方と新旧不明。	P271	36-92G	0.25	0.22	0.1	4号方と新旧不明。
P202	33-91G	0.25	0.24	0.16	3号方と新旧不明。	P272	36-92G	0.24	0.18	0.22	4号方と新旧不明。
P203	33-91G	0.18	0.12	0.1	3号方と新旧不明。	P273	36-92G	0.23	0.2	0.09	4号方と新旧不明。
P204	33-91G	0.53	0.43	0.16	3号方と新旧不明。	P274	36-92G	0.43	0.28	0.25	4号方と新旧不明。
P205	33-91G	0.57	0.43	0.2	3号方と新旧不明。	P275	36-92G	0.23	0.21	0.13	4号方と新旧不明。奈平土。
P206	33-91G	0.34	0.28	0.24	3号方と新旧不明。	P276	36-92G	0.3	0.25	0.2	4号方と新旧不明。奈平土。
P207	33-91G	0.72	0.71	0.9	3号方と新旧不明。	P277	36-92G	0.45	0.37	0.28	4号方と新旧不明。奈平土。
P208	33-91G	0.22	0.18	0.21	3号方と新旧不明。	P278	36-92G	0.67	0.46	0.23	4号方、P279と新旧不明。

No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考	No.	位　置	長(m)	短(m)	深(m)	備　　考
P279	36-92G	0.37	(0.22)	0.22	4号方、P278・280と新旧不明。	P296	36-93G	0.31	0.24	0.27	
P280	36-92G	0.34	0.29	0.15	4号方、P279と新旧不明。奈平須。	P297	30-94G	0.28	0.19	0.26	5号方と新旧不明。
P281	36-92G	(0.67)	0.55	0.26	4号方と新旧不明。奈平土。	P298	30-94G	0.19	0.17	0.05	5号方と新旧不明。
P282	36-92G	0.33	0.25	0.13	4号方と新旧不明。	P299	30-94G	0.31	0.28	0.2	5号方と新旧不明。前土・奈平土。
P283	36-92G	0.28	0.22	0.13	4号方と新旧不明。	P300	31-94G	0.23	0.18	0.06	
P284	30-93G	0.23	0.2	0.05		P301	31-94G	0.37	0.3	0.26	
P285	30・31-93G	0.32	(0.18)	0.06	5号方と新旧不明。	P302	31-94G	0.12	0.11	0.08	
P286	31-93G	0.38	0.36	0.16	5号方と新旧不明。	P303	31-94G	0.28	0.26	0.1	
P287	32-92・93G	0.43	0.27	0.11		P304	31-94G	0.24	0.19	0.33	奈平土。
P288	32-93G	0.27	0.25	0.08		P305	32-94G	0.18	0.15	0.11	
P289	32-93G	0.31	0.29	0.1		P306	32-94G	0.26	0.22	0.08	
P290	35-93G	0.43	0.36	0.21	6号方と新旧不明。奈平土。	P307	32-94G	0.21	0.15	0.11	
P291	35-93G	0.36	0.34	0.12	6号方と新旧不明。	P308	30-95G	0.18	0.17	0.1	
P292	35-93G	0.2	0.19	0.15	6号方と新旧不明。	P309	31-95G	0.26	0.21	0.12	
P293	35-93G	0.51	(0.39)	0.35	P294より新。奈平土。	P310	28-98G	0.27	(0.14)	0.17	43号溝、P311と新旧不明。
P294	35-93G	0.96	(0.48)	0.31	P293より古。奈平土須。	P311	28-98G	0.34	0.24	0.12	43号溝、P310と新旧不明。
P295	36-92・93G	0.3	0.29	0.18	33号溝、4号方と新旧不明。	P312	28-98G	0.22	0.19	0.07	

された。ランダムな層位であるが、自然堆積か人為的に埋め戻されたか不明である。

ピット 247 は、2011（平成 23）年度調査Ａ区 33 － 92 グリッドに位置する。第３号方形周溝墓南西隅の土橋に位置しているが、新旧関係は不明である。覆土は、図示できなかったため不明であるが、底面中央で礎石と思われる平らな礫が２点検出された。

ピット 250 は、2011（平成 23）年度調査Ａ区 34 － 91・92 グリッドに位置する。第４号方形周溝墓南東隅の土橋に位置しているが、新旧関係は不明である。覆土は、図示できなかったため不明であるが、底面南側で礎石と思われる平らな礫が２点検出された。

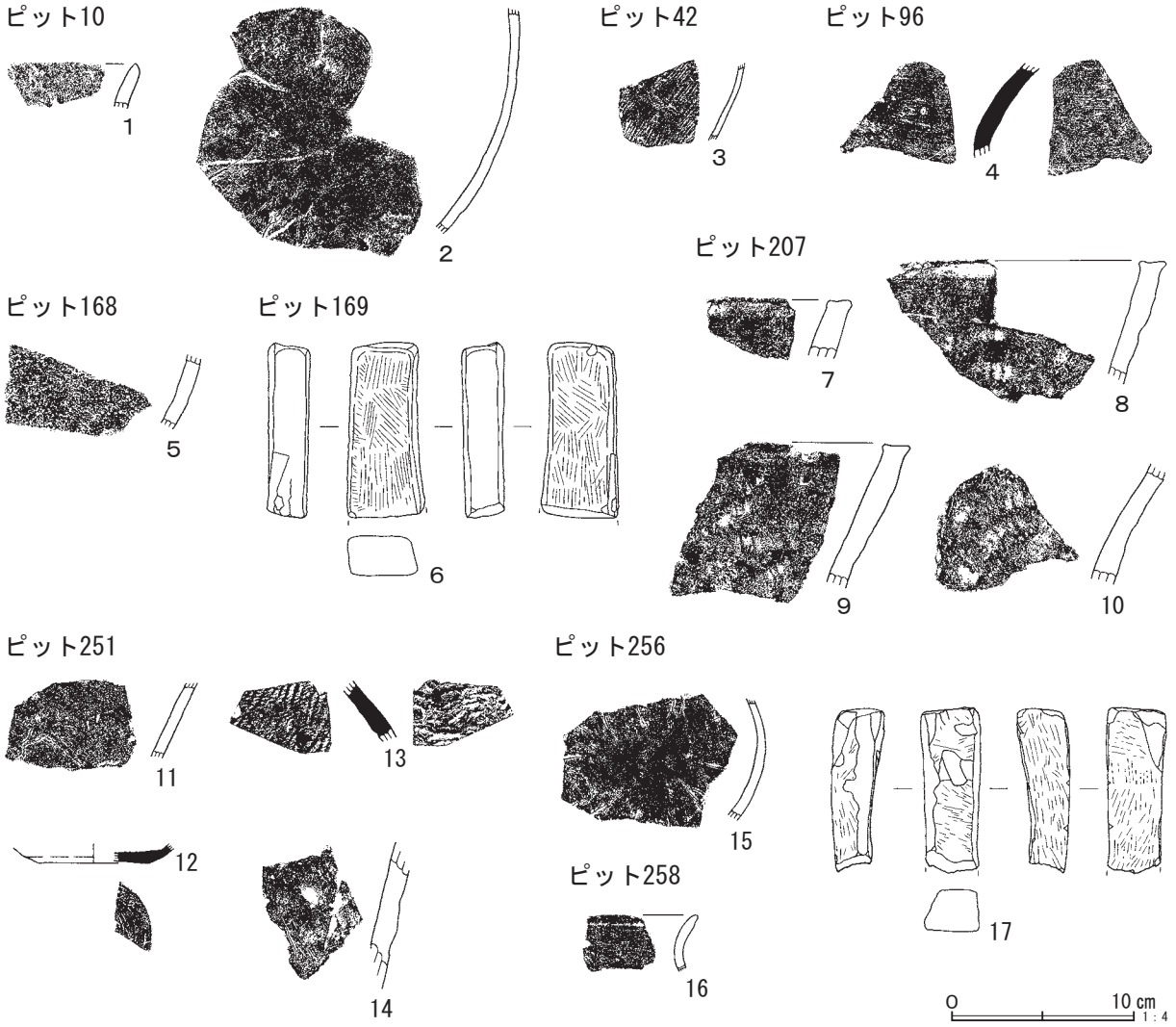
ピット 251 は、2011（平成 23）年度調査Ａ区 33・34 － 92 グリッドに位置する。南側で第 10 号土坑を切っている。覆土は、５層（１～５層）確認された。２・３層は、柱痕跡の可能性がある。

ピット 256 ～ 259 は、2011（平成 23）年度調査Ａ区 34 － 92 グリッドに位置する。４つのピットが南北方向に並んで位置し、ピット 256・258 間に位置するピット 257 は、最深部が東側、テラス状の段が西側にある。新旧関係は、すべて不明である。覆土は、ピット 257 のみの確認である。最深部は底面付近のみの確認であるが、５層（１～５層）が確認された。色調が様々であり、いずれもしまりがあることから人為的に埋め戻された可能性がある。

ピット 261・263・264 は、すべて 2011（平成 23）年度調査Ａ区からの検出である。ピット 261 は 35 － 91・92 グリッド境、その他は 35 － 92 グリッドに位置する。すべて単独の検出であり、第４号方形周溝墓の方台部に位置しているが、新旧関係は不明である。いずれのピットも覆土は図示できなかったが、ピット 261 は底面中央から平らな礫が浮いた状態で検出された。礎石か否か不明である。ピット 263 は、ピット 264 の西側に隣接するが、新旧関係は不明である。ピット 264 は、底面中央から柱材が検出された。脆弱であったことから、取り上げは不可能であった。

ピット 293・294 は、2011（平成 23）年度調査Ａ区 35 － 93 グリッドに位置する。東側に位置するのがピット 293、西側がピット 294 である。覆土は、いずれも２層（１～４層）確認され、土層断面観察の結果、ピット 293 がピット 294 を切っていることが確認された。ピット 293 は、下層の２層上で柱材が検出された。脆弱であったことから、取り上げは不可能であった。ピット 294 は、ほぼレンズ状に堆積していたが、下層にブロックを多量含んでいたことから人為的に埋め戻された可能性がある。

ピット出土遺物（第 56 図）は、弥生時代中期末～後期初頭、古墳時代前期、奈良・平安時代、中世



第 56 図　ピット出土遺物

の４つに大別される。検出された他の遺構の時代・時期と合致するが、各ピットに伴うか不明である。

以下、図示した出土遺物について述べる。

１・２は、ピット 10 出土である。１は、弥生時代中期末から後期初頭までに収まる甕の口縁部片である。無文である。調整は、外面は摩耗が著しいため不明、内面は横・斜位のヘラミガキである。２は、古墳時代前期の土師器台付甕の胴部中段付近から下部までの破片である。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。外面下位に輪積痕が残る。胎土が粗い。３は、ピット 42 出土である。古墳時代前期の土師器台付甕の胴下部片である。器壁が薄いことからＳ字甕と思われる。調整は、外面が斜位のハケメ、内面は斜位のヘラナデである。胎土がやや粗く、白色粒を多量含む。４は、ピット 96 出土である。奈良・平安時代の須恵器甕の口縁部下位から頸部までの破片である。南比企産である。調整は、内外面ともにロクロナデである。内外面に自然釉が付着している。５は、ピット 168 出土である。古墳時代前期の土師器壺の胴下部片である。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。胎土がやや粗い。６は、ピット 169 出土である。古代以降の砂岩製砥石である。片端を欠く。二面使用しており、片面は平滑が顕著である。７～ 10 は、ピット 207 出土である。中世の常滑系陶器片口鉢の口縁部から体部までに収まる破片であり、すべて同一個体である。常滑系第 10

第 15 表　ピット出土遺物観察表

番号	出土ピット	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	ピット10	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIK	外:黒　内:暗褐色	B	口縁部片	弥生中～後。外面摩耗顕著。
2	ピット10	土師器　台付甕	－	－	－	ABCDHIN	橙　浅黄橙	B	胴中～下片	古墳前。内外面摩耗顕著。外面輪積痕有。
3	ピット42	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIKN	オリーブ黒色	B	胴下部片	古墳前。外面やや摩耗。
4	ピット96	須恵器　甕	－	－	－	AFHN	緑黒色	B	口～頸部片	奈良･平安。南比企産。内外面自然釉付着。
5	ピット168	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	古墳前。内外面摩耗顕著。
6	ピット169	砥　石	最大長(9.6)cm、最大幅(4.3)cm、最大厚(2.35)cm。重量(179.9)g。片端欠？砂岩。							
7	ピット207	陶器　片口鉢	－	－	－	－	－	－	口縁部片	中世。常滑系。8～10同一個体。
8	ピット207	陶器　片口鉢	－	－	－	－	－	－	口～体部片	中世。常滑系。7･9･10同一個体。
9	ピット207	陶器　片口鉢	－	－	－	－	－	－	口～体部片	中世。常滑系。7･8･10同一個体。
10	ピット207	陶器　片口鉢	－	－	－	－	－	－	体部片	中世。常滑系。7～9同一個体。
11	ピット251	土師器　壺	－	－	－	ABCHIKN	にぶい褐色	B	胴下部片	古墳前。内面剥離､外面摩耗顕著。
12	ピット251	須恵器　坏	－	(1.05)	(6.2)	ABF	灰　色	B	底部25%	奈良。南比企産。
13	ピット251	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	胴上部片	奈良･平安。南比企産。外面自然釉やや付着。
14	ピット251	瓦質土器片口鉢	－	－	－	ABCDHKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	中世。在地系。
15	ピット256	土師器　壺	－	－	－	ABDHKN	橙　色	B	胴上～下片	古墳前。
16	ピット258	弥生土器広口壺	－	－	－	ABEHKN	外:灰褐　内:橙	B	口～頸部片	弥生中～後。内面摩耗。頸部穿孔有。赤彩？
17	ピット258	砥　石	最大長(9.05)cm、最大幅(3.3)cm、最大厚(2.75)cm。重量(110.5)g。片端･所々欠。凝灰岩。							

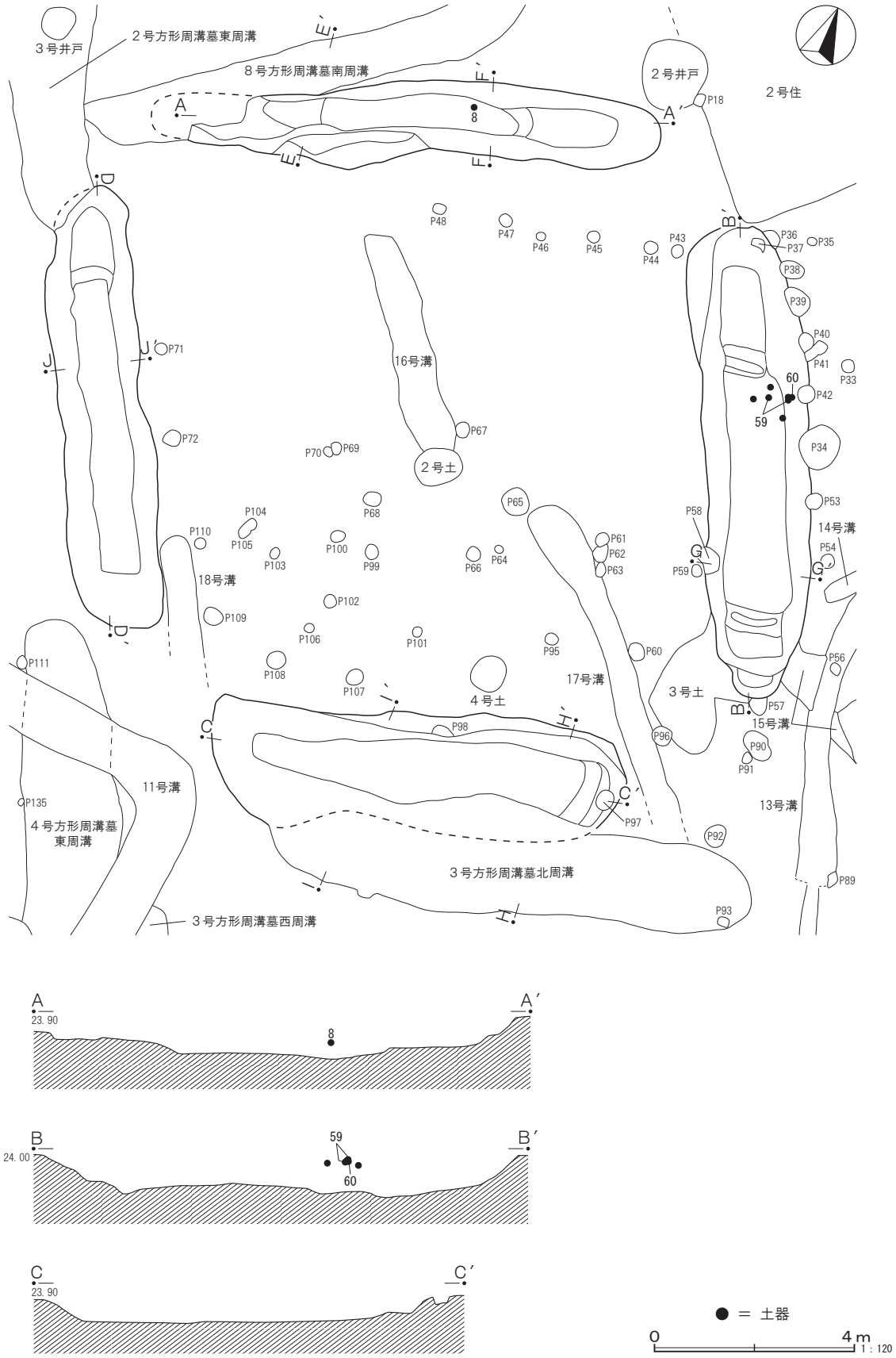
形式（1450 ～ 1500 年代）と思われる。11 ～ 14 は、ピット 251 出土である。11 は、古墳時代前期の土師器壺の胴下部片である。調整は、外面が横・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。12・13 は、奈良・平安時代の須恵器である。いずれも南比企産である。12 は、坏の底部である。底面の調整は、回転糸切り後に外周ヘラ削りが施されている。13 は、甕の胴上部片である。調整は、外面がタタキ、内面はあて具痕が残る。外面は自然釉がやや付着している。14 は、中世の在地系瓦質土器片口鉢の体部片である。外面の指オサエが顕著である。胎土がやや粗い。ピット 251 は、11 ～ 14 の他に写真のみ掲載の桃の種子（図版 56）も出土した。15 は、ピット 256 出土である。古墳時代前期の土師器壺の胴上部から下部までの破片である。調整は、外面が縦・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。16・17 は、ピット 258 出土である。16 は、弥生時代中期末から後期初頭までに収まる広口壺の口縁部から頸部までの破片である。無文である。調整は、外面上位が横ナデ、下位は斜位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明である。頸部に焼成前穿孔があり、孔内側面に赤彩が確認されたことから内外面に赤彩が施された可能性が高い。17 は、凝灰岩製の砥石である。片端と所々を欠く。図示していない上面を含む五面使用している。

7　方形周溝墓

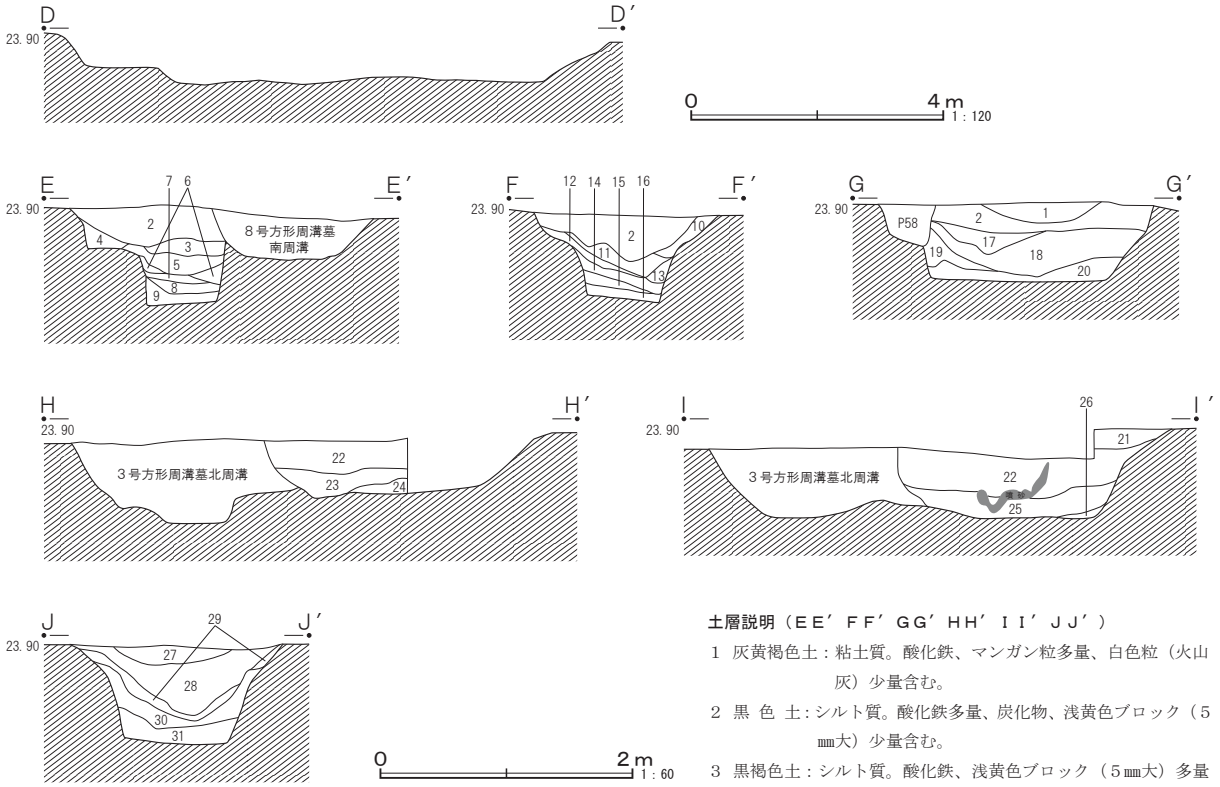
第１号方形周溝墓（第 57・58 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区及び 2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区 32 ～ 36 － 86 ～ 90 グリッドに位置する。南周溝の南側大半が 2011（平成 23）年度調査Ａ区、その他は、2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区で検出された。西側に第２・４号方形周溝墓、南東に第３号方形周溝墓、北西に古墳時代前期の第８号方形周溝墓が位置する。

他の時代に属する多くの遺構と重複する。東周溝は、南東端を第 15 号溝跡に切られており、南西端は第３号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。西周溝は、北西端で第２号方形周溝墓の東周溝と重複するが、新旧関係は、本方形周溝墓が新しい。南周溝は、南側立ち上がり付近で第３号方形周溝墓の北周溝を切っている。北周溝は、北西端付近を第８号方形周溝墓の南周溝に切られている。方台部には、第 16 ～ 18 号溝跡、第２号土坑など多くの遺構が位置しているが、本方形周溝墓がすべての遺構に切られていると思われる。方台部・周溝で重複する単独ピットのうち、東周溝北端に位置す



第57図　第1号方形周溝墓（1）



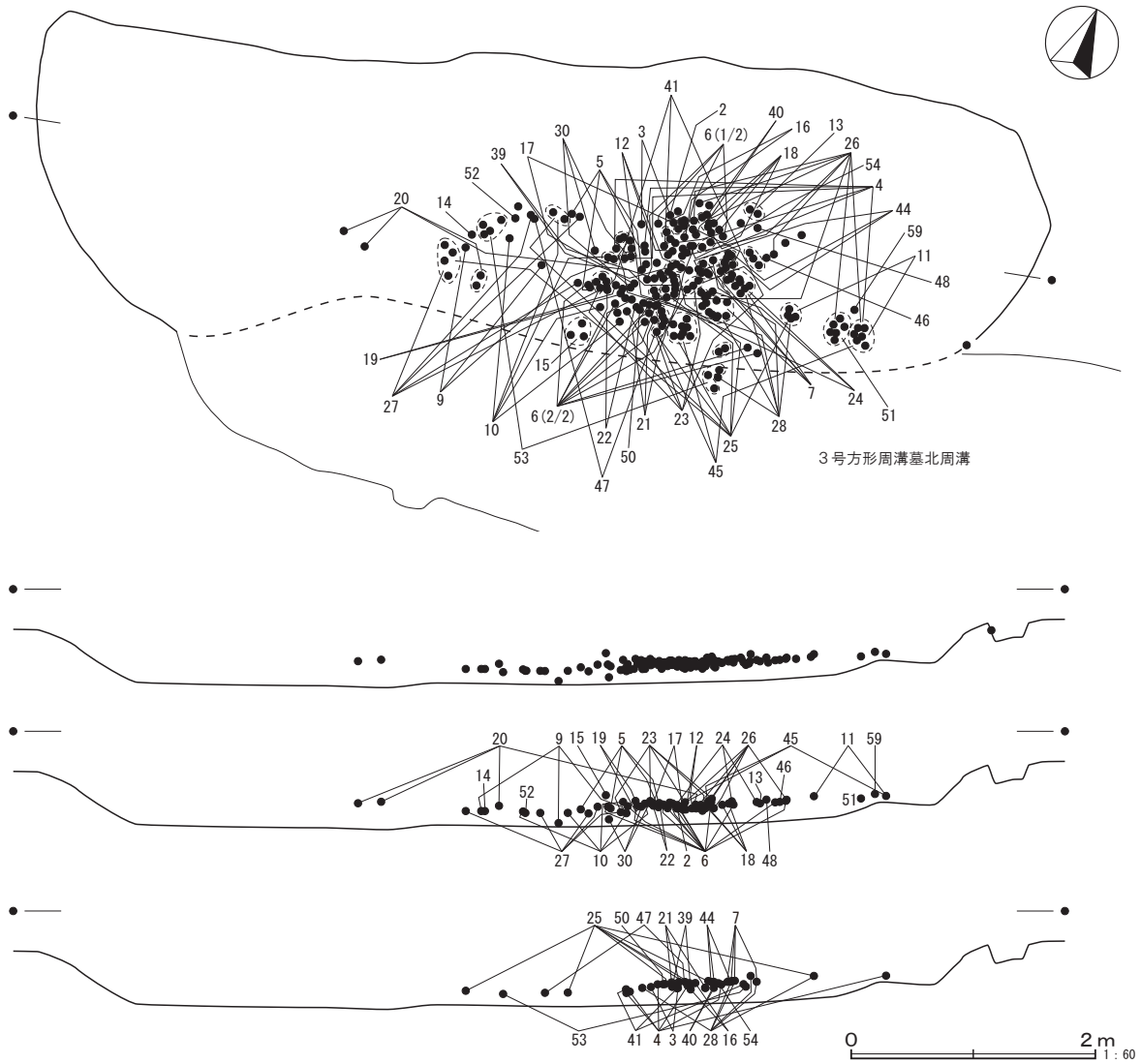
土層説明（ＥＥ′ ＦＦ′ ＧＧ′ ＨＨ′ ＩＩ′ ＪＪ′）

1 灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄、マンガン粒多量、白色粒（火山灰）少量含む。
2 黒 色 土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
3 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、浅黄色ブロック（5㎜大）多量含む。
4 黄灰色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎜大）多量含む。
5 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、焼土粒、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
6 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎜大）多量、砂少量含む。
7 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
8 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
9 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、灰黄色ブロック（2㎝大）少量含む。
10 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
11 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、黒色ブロック（5㎝大）多量含む。
12 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、黒色ブロック（1㎝大）、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
13 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
14 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
15 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、黒色土、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
16 灰オリーブ色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
17 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
18 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
19 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、浅黄色ブロック（5㎜大）多量含む。
20 黄灰色土：シルト質。酸化鉄、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
21 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
22 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
23 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
24 黒 色 土：粘土質。砂、浅黄色ブロック（1㎝大）少量、酸化鉄、炭化物微量含む。
25 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
26 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（5～10㎝大）少量含む。
27 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
28 褐灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～2㎝）少量含む。
29 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～2㎝）少量含む。
30 浅黄色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
31 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。

第58図　第1号方形周溝墓（2）

るピット36・37、東周溝西側立ち上がりの南西に位置するピット58は、本方形周溝墓を切っているが、その他のピットとの新旧関係は、不明である。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓である。規模は、周溝外縁が15.2ｍ、方台部は11ｍ前後を測る。主軸方向は、Ｎ－26°－Ｗを指す。検出された周溝の長さは、北周溝が推定になるが、概ね9ｍ前後を測る。幅は、バラツキがみられた。最も狭い北周溝が1.5ｍ、最も広い南周溝は2.4ｍ前後を測る。確認面からの深さもややバラツキがみられたが、いずれも最深部で0.7ｍ前後を測る。立ち上がりは、長軸方向が緩やかであるが、短軸は鋭角に掘り込まれており、中段に稜を持つ箇所が多くみられた。底面は、いずれも凹凸がみられた。覆土は、計31層（1～31層）と多数確認された。混入物を含む

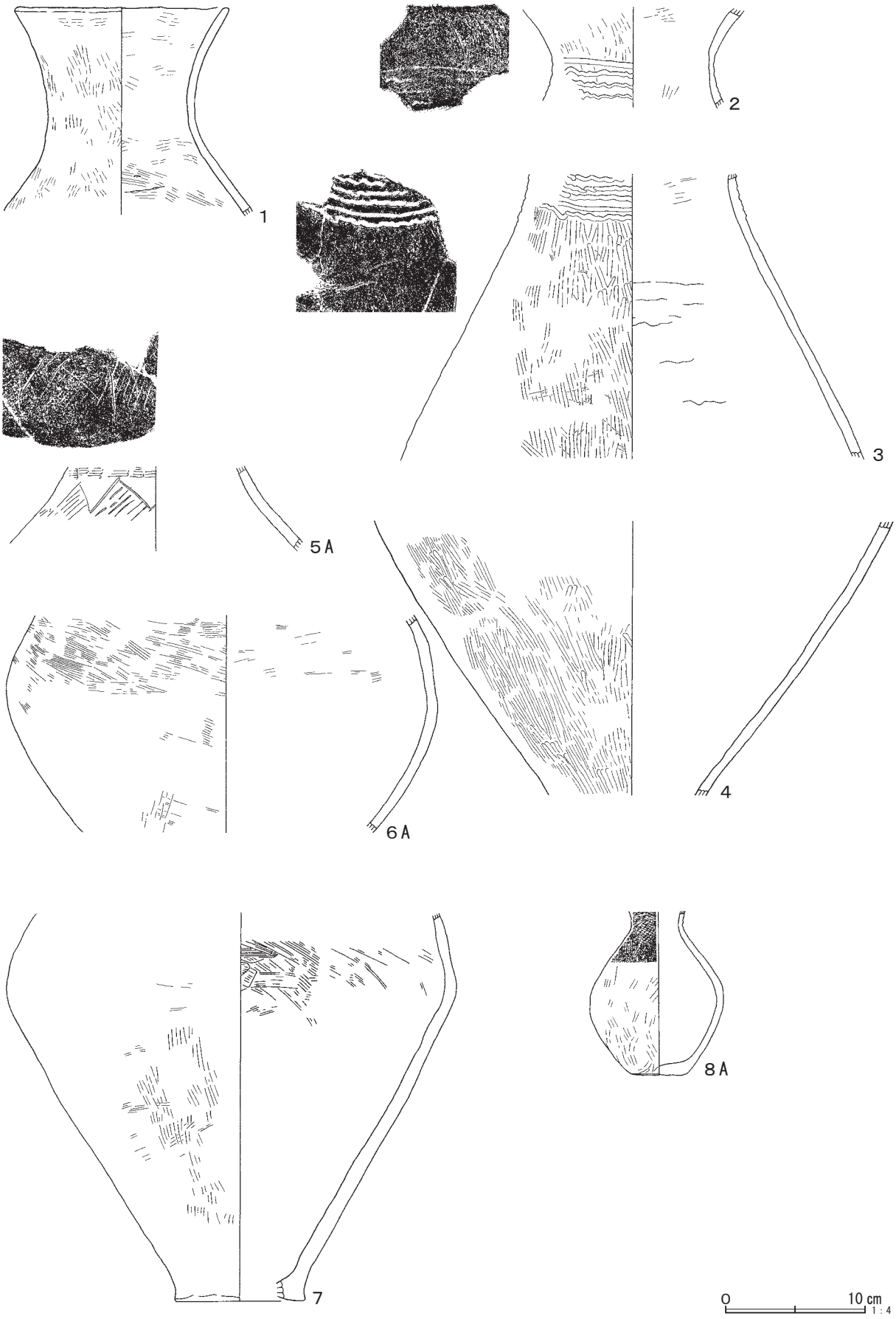


第 59 図　第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況

層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第 60 ～ 64 図）は、弥生土器壺（１～８・36 ～ 40）、甕（９～ 33・41 ～ 61）、高坏（34・35・62・63）がある。遺物はすべての周溝から出土したが、特に南周溝東側からの出土が圧倒的に多く、破砕した状況であった（第 59 図）。出土位置を示していないものも含め、36・59・60 が東周溝、37・43・55 が西周溝、８・38・49 が北周溝、その他は 2011（平成 23）年度調査Ａ区検出の南周溝からの出土である。残存状態が比較的良好なものが多く、甕が目立つ。そのほとんどは、摩耗が著しい。

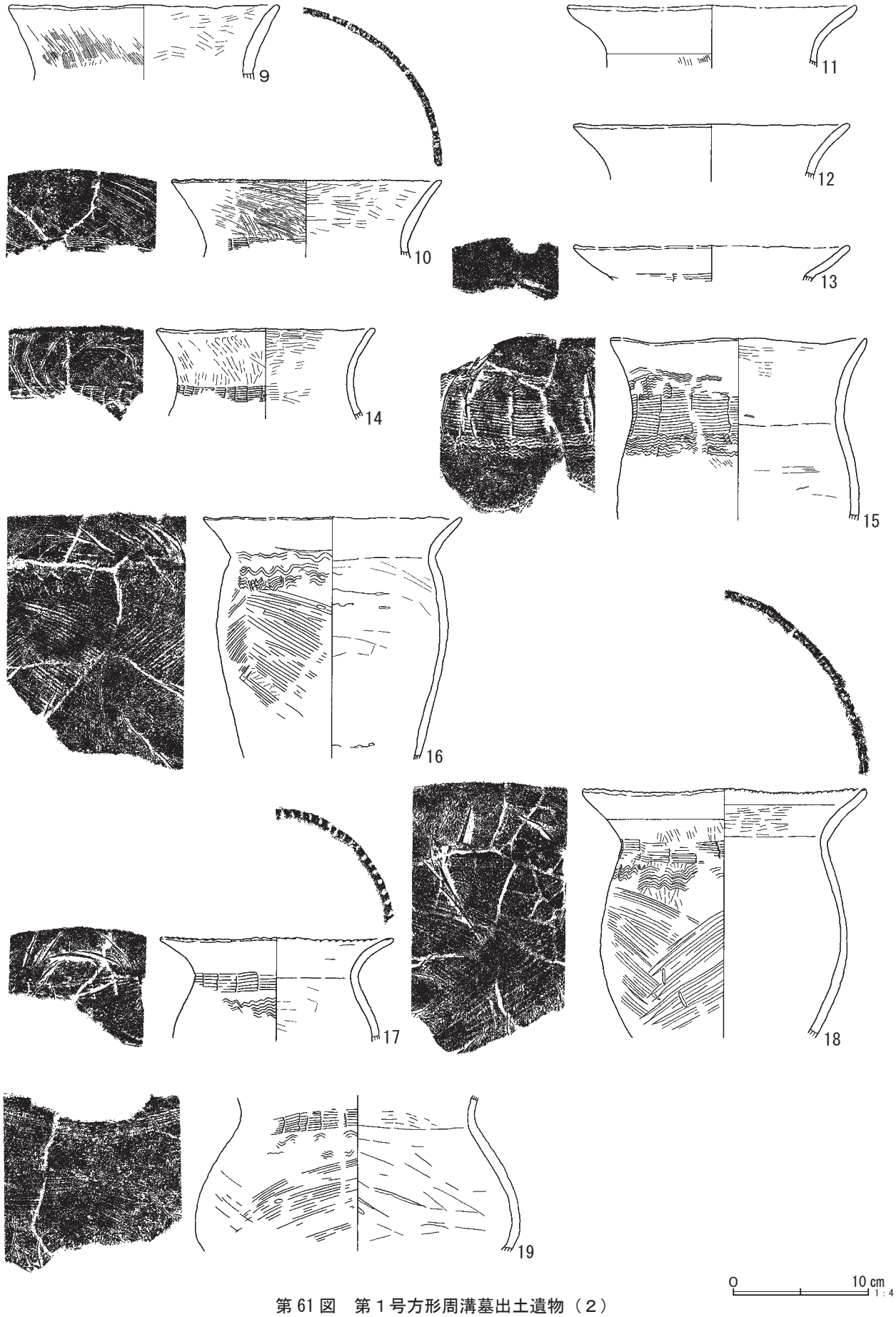
１～８・36 ～ 40 は、弥生土器壺である。１は、口縁部から肩部までの部位である。口縁部が逆ハの字に開き、すぼまる頸部はほぼ直立する。肩部はハの字に下る。無文である。調整は、外面全面と口縁部から頸部までの内面がヘラミガキ、頸部以下の内面はハケメである。肩部内面に輪積痕が残る。胎土に白色粒を多量含む。２～４は、接合関係にないが、同一個体の大型壺である。２は口縁部下位から頸部まで、３は頸部から胴部中段付近直上まで、４は胴部中段直下から下部までの部位であり、縦長の器形を呈すると思われる。口縁部下位は、逆ハの字に開き、すぼまる頸部はほぼ直立する。肩



第 60 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（1）

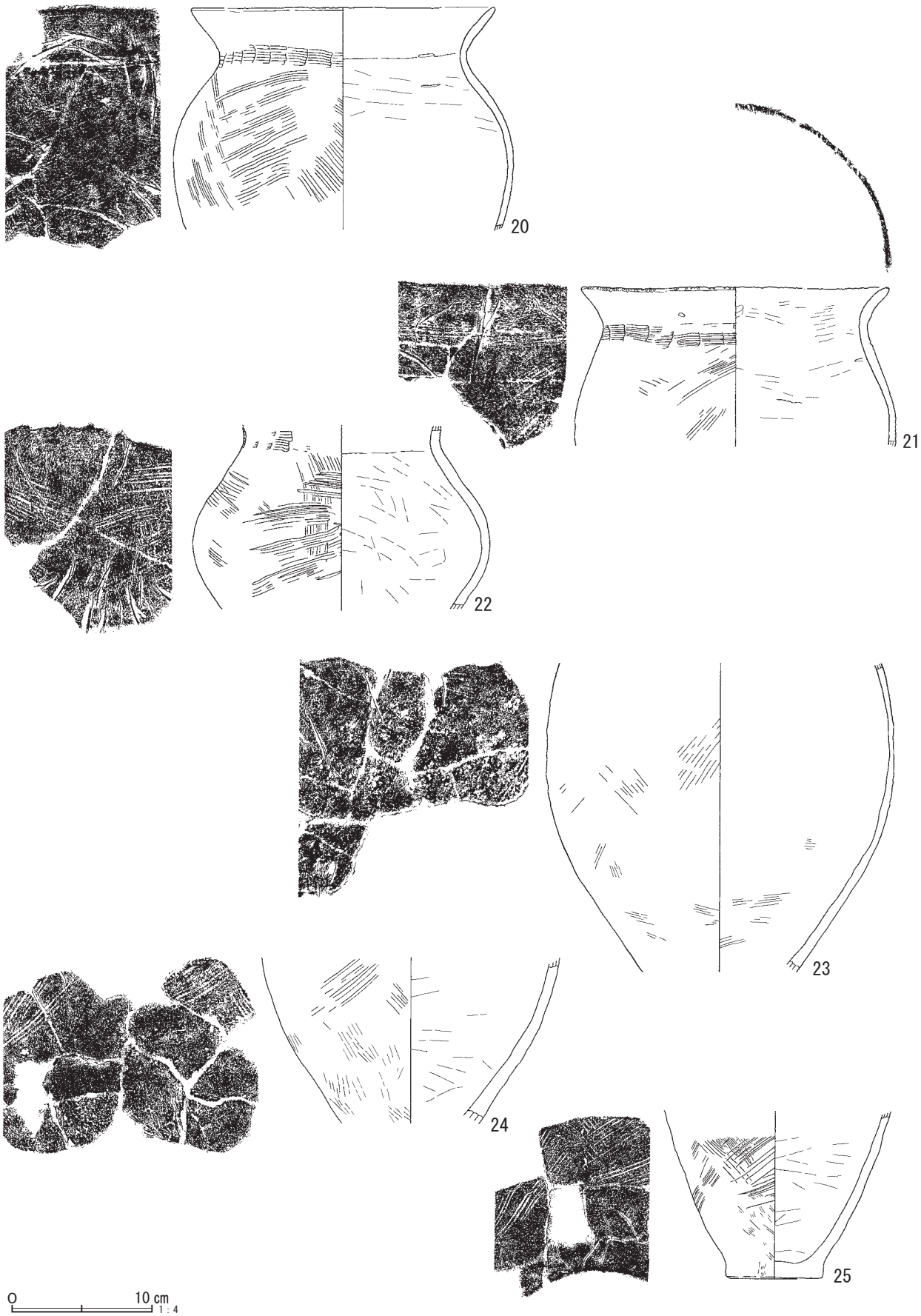
部以下は鋭角に下り、胴部は縦長の算盤玉状を呈すると思われる。外面の文様は、頸部に太いヘラで最上位に平行沈線、以下に複数の波状文が巡るのみである。調整は、外面全面と口縁部から頸部までの内面はヘラミガキであるが、肩部から胴部中段付近の外面はヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。肩部以下の内面は、摩耗・剥離が著しいため不明である。胴上部内面に複数の輪積痕が残る。５・６も接合関係にないが、同一個体である。５は頸部下位から肩部まで、６は胴上部から下部までの部位である。肩部は、やや外反しながら下り、胴部は倒卵形を呈すると思われる。外面文様は、頸部に単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡り、肩部に極細のヘラで上向きの鋸歯文、区画内に同一工具で斜線文が描かれている。調整は、内外面ともにハケメであるが、胴下部付近の外面はハケメ後にヘラミガキが施されている箇所がみられた。外面一部に赤彩が残る箇所がみられたことから全面に施されていた可能性がある。７は、胴上部から底部までの部位である。胴部は倒卵形、底部は円柱状を呈する。無文である。調整は、外面がヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。内面は、ハケメである。８は、小型壺である。口縁部を欠く。頸部がほぼ直立し、胴部は中段付近が大きく膨らみ、球形を呈する。外面文様は、頸部から肩部にオオバコと思われる擬縄文が施文されているのみである。調整は、外面がヘラミガキ、内面は計測不可能であったことから図示していないが、横・斜位のヘラナデである。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。中期末のものであり、流れ込みと思われる。36 は複合口縁部、37 は肩部、38 は頸部から肩部まで、39 は胴部中段付近から下部まで、40 は胴下部の破片である。39・40 は、同一個体である。無文の 39・40 以外の外面文様は、36 の複合口縁部の上下に刻みが施されている。37 は、頸部にヘラ描きの平行沈線が巡り、肩部に上向きの鋸歯文が描かれ、区画内にＬＲ単節縄文が充填されている。鋸歯文下は、半円形の刺突列が巡る。中期後半のものであり、流れ込みと思われる。38 は、頸部に５本一単位の櫛歯状工具による簾状文が２段巡る。調整は、36 の外面は摩耗が著しいため不明、内面は横位のヘラミガキ、37 の内面は斜位のヘラナデ、38 の肩部外面無文部は横・斜位、内面は横位のヘラミガキであるが、両面ともにヘラミガキ前に施されたハケメが一部残る。ハケメは、外面が横・斜位、内面は斜位に施されている。39 は、胴部中段付近の外面が横位、胴下部は斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。40 は、外面が斜位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。内面は、横位のヘラナデである。36 は口縁部内面上位、38 は肩部外面に赤彩が施されている。36 は、胎土に白色粒を多量含む。

９～33・41～61 は、弥生土器甕である。９～13 は、口縁部から頸部までの部位である。９～12 は、口縁部が外反しながら立ち上がる。13 は、短い口縁部が大きく開き、やや受け口状を呈する。頸部は、９・10 が下位にやや広がるが、11・12 はほぼ直立し、13 は内傾する。外面文様は、９・11・12 が未確認であるが、10 は口縁端部に線状の細かい刻みが施されており、13 も含め、頸部に櫛歯状工具による簾状文が巡る。櫛歯の単位は、10 が６本、13 は不明である。調整は、９の口縁部上位は摩耗が著しいため不明、下位から頸部まではハケメ、内面はヘラミガキである。10 は、口縁部外面と内面全面にヘラミガキが施されているが、口縁部外面はヘラミガキ前に施されたハケメが顕著に残る。11 は、口縁部外面が横ナデ、頸部は一部のみの確認であるが、斜位のハケメである。内面は、摩耗が著しいため不明である。12・13 は、内外面ともに横ナデである。９は、器壁が厚い。

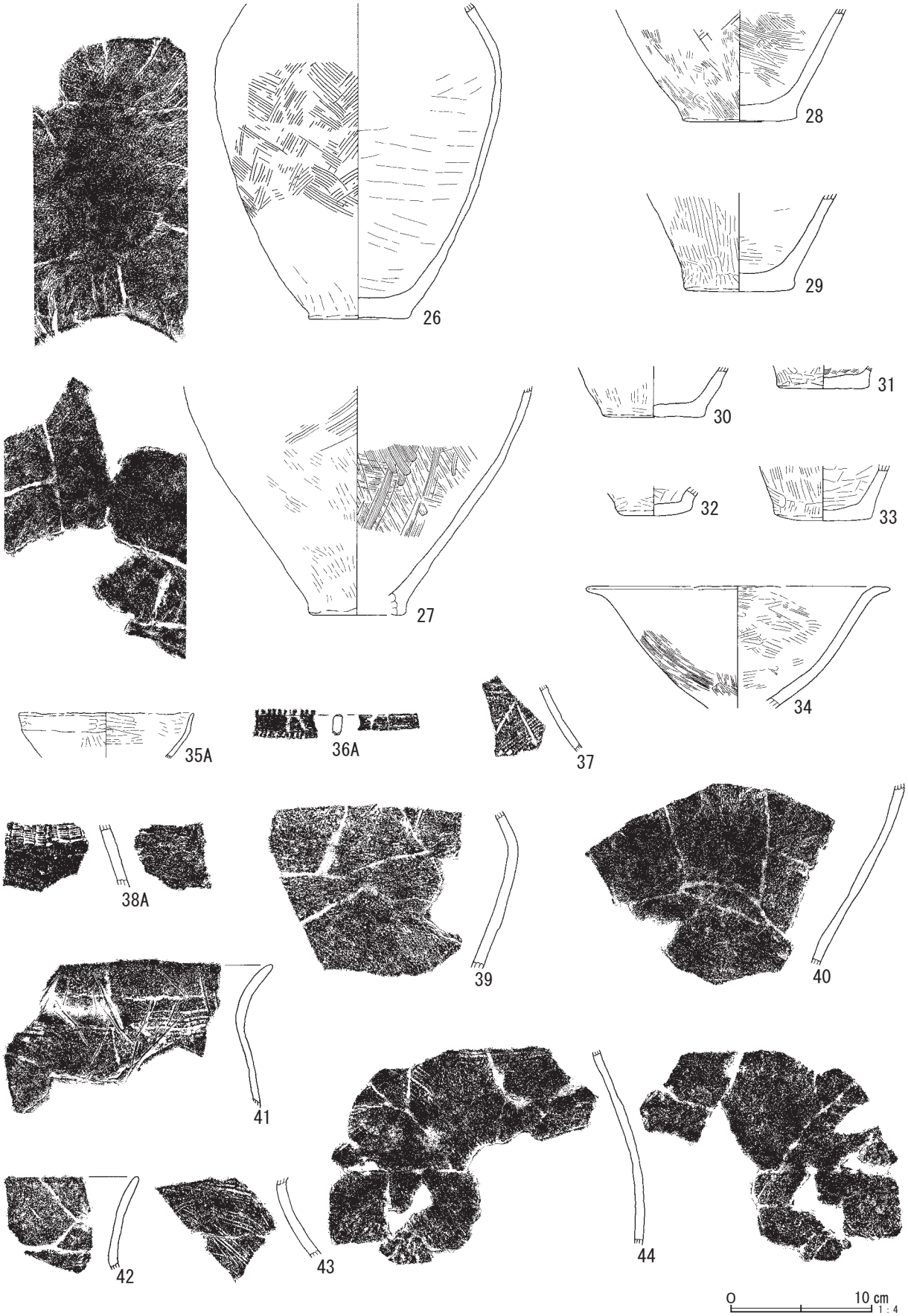


第 61 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（2）

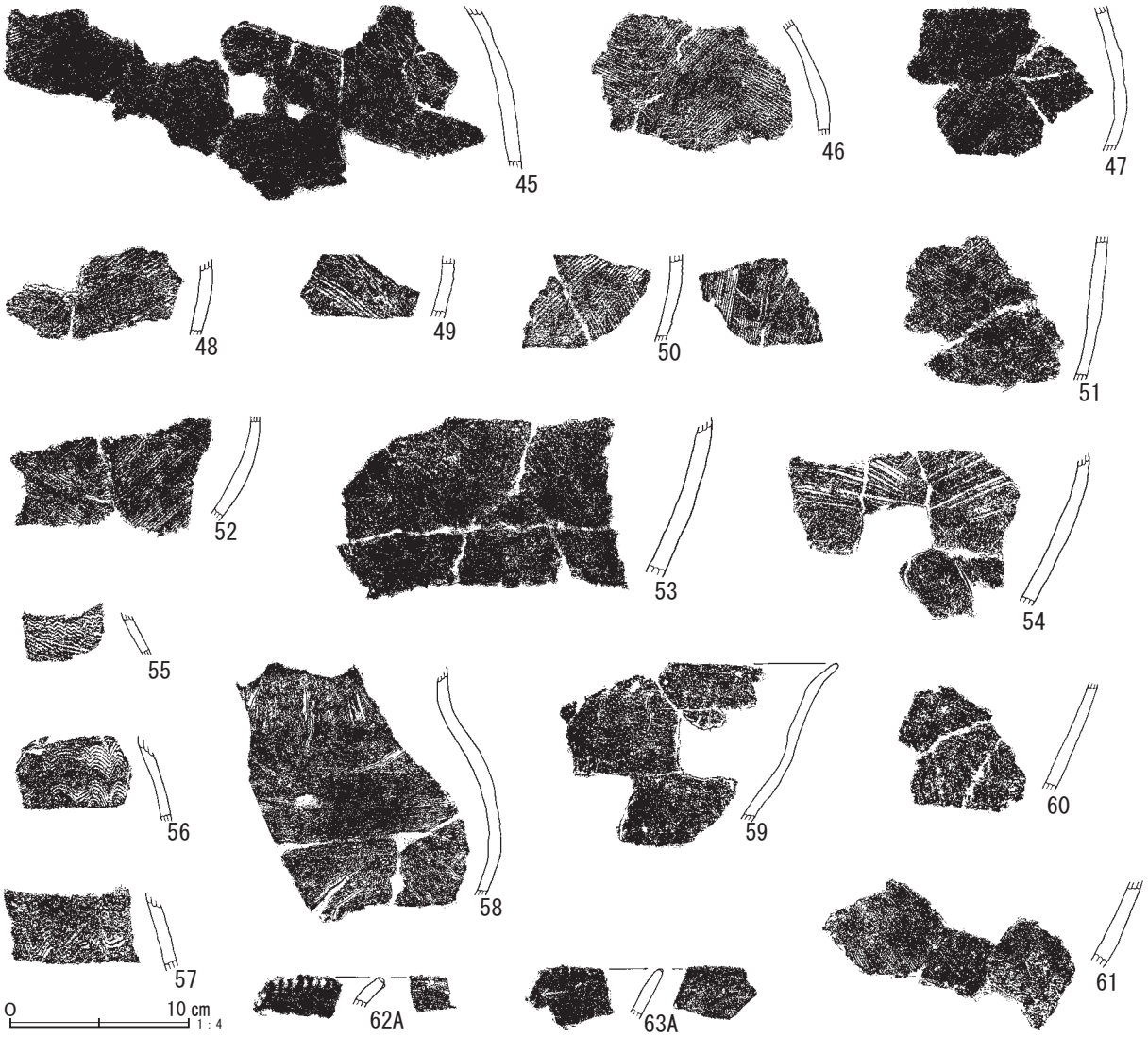
14 ～ 24 は、口縁部から胴下部までに収まる部位である。14 は口縁部から胴上部まで、15・17・20・21 は口縁部から胴部中段付近まで、16・18 は口縁部から胴下部まで、19 は口縁部下位から胴部中段付近まで、22 は頸部から胴下部まで、23 は胴上部から下部まで、24 は胴部中段付近から下部までの部位である。14・15 は、口縁部が外反しながら立ち上がり、すぼまる頸部は直立に近い。16 は、最大径を持つ口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は倒卵形を呈するが、膨らみが小さい。17 は、最大径を持つ口縁部が外反しながら立ち上がり、頸部がすぼまる。胴部は、半球形を呈する。18 は、最大径を持つ口縁部がやや受け口状を呈し、頸部はすぼまる。胴部は、倒卵形を呈すると思われる。19 は、口縁部下位の開きが小さく、すぼまる頸部がほぼ直立する。胴部は、大きく膨らむ。20 は、口縁部が逆ハの字に開き、すぼまる頸部がほぼ直立する。胴部は大きく膨らみ、中段付近に最大径を持つと思われる。21 は、短い口縁部が逆ハの字に開き、頸部がすぼまる。胴部は、緩やかに膨らみ、最大径を中段付近に持つと思われる。22 は、頸部がほぼ直立し、胴部は大きく膨らむ。23・24 の胴部は、倒卵形を呈すると思われる。外面文様は、櫛歯状工具による文様が主体となる。櫛歯の単位は、14・15・18・19・21・22 が７本、17・20 が６本、23・24 は不明である。16 は、文様により確認された単位が異なり、頸部の波状文が３本、胴部の羽状文が６本である。14 は、頸部に簾状文が巡り、胴上部は、摩耗が著しいため文様の有無は不明である。15 は、頸部に簾状文が２段、その上下に波状文が２～３段巡る。16 は、頸部に波状文が３～４段巡り、胴部に縦位の羽状文が描かれている。17 は、口縁端部内面に刻みが施され、頸部に簾状文、胴上部に波状文が巡る。18 は、口縁端部内面に爪形状の細かい刻みが施され、頸部に簾状文、直下に波状文が巡り、胴部は縦位の羽状文が描かれている。19 は、頸部に簾状文が巡り、胴部は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、波状文が２～３段巡り、以下に縦位の羽状文が描かれている。20 ～ 22 は、頸部に簾状文が巡り、23・24 も含め、胴部に縦位の羽状文が描かれている。21 は、口縁端部に刻みが施されている。22 の羽状文は、煩雑である。調整は、14 の口縁部外面と内面全面は、ヘラミガキである。15 は、外面は摩耗が著しいため不明であるが、胴部中段付近でハケメが一部みられた。内面は、口縁部から頸部までがヘラミガキ、以下はヘラナデとハケメである。16 は、内外面ともに摩耗が著しいため部分的な図示であるが、外面は口縁部が横ナデ、胴部はヘラミガキ、内面は口縁部から頸部まで不明、胴部はヘラナデである。17 は、摩耗が著しいため口縁部内外面と胴部外面無文部は不明である。胴部内面は、ヘラナデである。18 は、口縁部上位の内外面が横ナデ、以下の外面と口縁部下位の内面はヘラミガキである。胴部内面は、摩耗が著しいため不明である。19 は、口縁部外面は摩耗が著しいため不明、内面は、口縁部から頸部までがヘラミガキ、胴部はヘラナデである。20 は、口縁部外面が横ナデ、胴部内面はヘラナデである。胴部外面無文部と口縁部内面は、摩耗が著しいため不明である。21 は、外面は摩耗が著しいため不明であるが、内面は口縁部から頸部までがヘラミガキ、以下はヘラナデである。22 は、摩耗が著しい外面無文部と頸部内面が不明であるが、胴部内面はヘラナデである。23 は、内外面ともにハケメである。24 は、外面無文部がヘラミガキ、内面はヘラナデである。15 は頸部内面に一部、16 は胴部内面の上位と下位に複数、17 は口縁部内面、19 は胴部中段付近内面に一部、20 は胴上部内面に一部、21 は胴部内面に輪積痕がみられた。16 は胴上部外面、19 は胴部中段付近の外面にイネと思われる圧痕、21 は口縁部外面に楕円形の種子圧痕がみられた。16 は胎土がやや粗く、17 は密である。胎土に 18・23 は赤褐色粒、20



第 62 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（3）



第 63 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（4）



第 64 図　第 1 号方形周溝墓出土遺物（5）

は褐色粒を多量含む。

25 ～ 33 は、胴上部から底部までに収まる部位である。25・27 は胴部中段付近から底部まで、26 は胴上部から底部まで、28 ～ 30・33 は胴下部から底部までの部位、31・32 は底部である。25 は、胴部中段付近からやや内湾しながら鋭角に下る。26 は、胴部が倒卵形を呈する。27 は、胴部中段付近から内湾しながら下る。28・29・30・33 は、胴下部が逆ハの字に下る。底部は、円柱状を呈するものが多い。胴部外面に文様のある 25 ～ 28 は、すべて櫛歯状工具で縦位の羽状文が描かれている。櫛歯の単位は、25 が 4 本前後、26 が 7 本、27・28 は不明である。調整は、25・33 の外面がハケメ、内面はヘラナデ、26 は外面の摩耗が著しいため定かではないが、ヘラナデかハケメ、内面はヘラナデ、27・31 は外面がヘラミガキ、内面はハケメ、28 は内外面ともにハケメ、29 は内外面ともにヘラミガキ、30 は外面がヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明、32 は外面がヘラミガキ、内面はヘラナデが主体となるが、ハケメも一部みられた。25 は胎土が密であり、32 はやや粗い。29 は、白色粒を多量含む。

41・42・59 は口縁部から胴部中段付近まで、43・44・58 は頸部から胴部中段付近まで、45 ～ 49・55 ～ 57 は胴上部から中段付近まで、50 ～ 54・60・61 は胴部中段付近から下部までに収まる破片である。

第 16 表　第 1 号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	南周溝	弥生土器　壺	15.3	(14.9)	－	ABDN	橙　色	B	口～肩80%	内外面摩耗顕著。肩部内面輪積痕有。
2	南周溝	弥生土器　壺	－	(7.2)	－	ABEHIKN	外:にぶい黄橙　内:黄灰	B	口～頸20%	内外面摩耗。内面大半剥離。3･4同一個体。
3	南周溝	弥生土器　壺	－	(20.5)	－	ABCDHK	外:褐灰　内:灰白	B	頸～胴20%	内面摩耗。内面輪積痕有。2･4同一個体。
4	南周溝	弥生土器　壺	－	(19.65)	－	ABCDHK	外:褐灰　内:灰白	B	胴部40%	外面大半、内面全面摩耗。2･3同一個体。
5	南周溝	弥生土器　壺	－	(6.05)	－	ABDIKN	外:明褐　内:灰黄褐	B	頸～肩40%	内外面摩耗顕著。外面赤彩？6同一個体
6	南周溝	弥生土器　壺	－	(15.6)	－	ABDHIKN	外:橙　内:褐灰	B	胴部70%	内外面摩耗顕著。外面赤彩？5同一個体。
7	南周溝	弥生土器　壺	－	(27.75)	(9.3)	ABCDHIKN	浅黄橙色	B	胴～底50%	内外面摩耗顕著。
8	北周溝	弥生土器　壺	－	(11.7)	4.1	ABDHIKM	橙　色	B	頸～底95%	内外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
9	南周溝	弥生土器　甕	(20.0)	(5.55)	－	ABEHKN	外:黒褐　内:橙	B	口～頸40%	内外面摩耗顕著。
10	南周溝	弥生土器　甕	19.9	(5.75)	－	ABDEGHN	灰褐　橙	B	口～頸60%	内面全面、外面大半摩耗。
11	南周溝	弥生土器　甕	(21.4)	(4.65)	－	ABHIN	明赤褐　褐	B	口～頸40%	内外面摩耗顕著。
12	南周溝	弥生土器　甕	(20.4)	(4.15)	－	ABEHKN	橙　にぶい赤褐	B	口～頸45%	内外面摩耗顕著。
13	南周溝	弥生土器　甕	(20.4)	(2.65)	－	ABEHIKN	にぶい赤褐　暗褐	B	口～頸40%	内外面摩耗顕著。
14	南周溝	弥生土器　甕	(16.2)	(6.75)	－	ABDHIKN	外:黒褐　内:灰褐	B	口～胴25%	内外面大半摩耗顕著。
15	南周溝	弥生土器　甕	(19.0)	(13.5)	－	ABHIKN	黒褐　赤褐	B	口～胴40%	内外面摩耗顕著。頸部内面輪積痕有。
16	南周溝	弥生土器　甕	(19.1)	(17.95)	－	ABEHIN	にぶい橙色	B	口～胴30%	内外面摩耗。内面輪積痕、外面イネ圧痕有。
17	南周溝	弥生土器　甕	(17.2)	(7.7)	－	ABEHIN	にぶい黄橙　にぶい橙	B	口～胴25%	内外面摩耗顕著。口縁部内面輪積痕有。
18	南周溝	弥生土器　甕	(21.0)	(18.5)	－	ABEHN	外:赤褐　内:にぶい黄橙	B	口～胴25%	内外面大半摩耗顕著。
19	南周溝	弥生土器　甕	－	(11.55)	－	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴30%	内外面摩耗。内面輪積痕、外面イネ圧痕有。
20	南周溝	弥生土器　甕	(21.6)	(16.0)	－	ABDIKN	明赤褐色	B	口～胴20%	内外面摩耗。内面輪積痕、外面種子圧痕有。
21	南周溝	弥生土器　甕	(22.0)	(11.35)	－	ABCHN	外:褐　内:褐灰	B	口～胴20%	内外面摩耗顕著。胴部内面輪積痕有。
22	南周溝	弥生土器　甕	－	(13.2)	－	ABDEHIKN	外:にぶい褐　内:にぶい橙	B	頸～胴20%	内外面摩耗顕著。
23	南周溝	弥生土器　甕	－	(22.05)	－	ABDHN	外:明赤褐　内:灰褐	B	胴部40%	内外面摩耗顕著。
24	南周溝	弥生土器　甕	－	(11.8)	－	ABDEIKN	外:赤褐　内:暗褐	B	胴部30%	内外面摩耗顕著。
25	南周溝	弥生土器　甕	－	(12.0)	6.9	ABEHIKN	橙　色	B	胴～底50%	内外面摩耗顕著。
26	南周溝	弥生土器　甕	－	(22.5)	7.1	ABCDN	橙　色	B	胴～底60%	内外面摩耗顕著。
27	南周溝	弥生土器　甕	－	(16.3)	(6.9)	ABEHKN	外:明赤褐　内:黒褐	B	胴～底20%	内外面大半摩耗。
28	南周溝	弥生土器　甕	－	(8.0)	8.1	ABDHIKN	外:にぶい赤褐　内:褐灰	B	胴～底70%	内外面大半摩耗。
29	南周溝	弥生土器　甕	－	(6.95)	7.8	ABEHIKN	外:暗赤褐　内:黒	B	胴～底60%	内面摩耗顕著。
30	南周溝	弥生土器　甕	－	(3.65)	7.2	ABHIKN	赤褐色	B	胴～底90%	内外面摩耗顕著。
31	南周溝	弥生土器　甕	－	(1.7)	6.5	ABDHIK	褐灰　にぶい赤褐	B	底部100%	
32	南周溝	弥生土器　甕	－	(2.05)	5.2	ABHIKN	灰褐色	B	底部80%	外面やや摩耗。
33	南周溝	弥生土器　甕	－	(3.95)	6.9	ABEHIKN	にぶい赤褐色	B	胴～底60%	外面摩耗顕著。
34	南周溝	弥生土器　高坏	(21.6)	(8.6)	－	ABDN	橙　色	B	口～坏40%	内外面摩耗顕著。
35	南周溝	弥生土器　高坏	(12.4)	(3.2)	－	ABDKN	赤褐　にぶい橙	B	口～坏20%	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、外面大半剥落。
36	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHN	外:橙　内:明赤褐	B	口縁部片	外面摩耗顕著。口縁部内面上位赤彩。
37	西周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIK	灰黄褐色	B	肩部片	内外面大半摩耗顕著。
38	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHKN	外:橙　内:にぶい橙	B	頸～肩部片	外面無文部赤彩。
39	南周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDEHIN	外:明赤褐　内:にぶい褐	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。40同一個体。
40	南周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHKN	外:赤褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。39同一個体。
41	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	にぶい褐色	B	口～胴上片	内外面摩耗顕著。
42	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHI	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
43	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHKN	外:明褐　内:にぶい黄橙	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著。
44	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHN	にぶい褐色	B	頸～胴中片	内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
45	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	内面やや摩耗。46･47･51･52･61同一個体。
46	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	にぶい褐色	B	胴上～中片	内面やや摩耗。47･45･51･52･61同一個体。
47	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	外:橙　内:にぶい橙	B	胴中段片	45･46･51･52･61同一個体。
48	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIN	外:にぶい褐　内:黒	B	胴中段片	
49	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中段片	内外面やや摩耗。
50	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:黒褐　内:にぶい褐	B	胴中～下片	外面やや摩耗。
51	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	にぶい褐色	B	胴中～下片	45～47･52･61同一個体。
52	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	内面やや摩耗。45～47･51･61同一個体。
53	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい褐　内:にぶい橙	B	胴下部片	内面摩耗顕著。外面やや摩耗。
54	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIKN	にぶい黄褐色	B	胴下部片	外面下位摩耗顕著。
55	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	外:灰褐　内:にぶい橙	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
56	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	外:にぶい褐　内:にぶい黄橙	B	胴上部片	外面やや摩耗。
57	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCH	外:にぶい黄褐　内:灰黄	B	胴上部片	内外面摩耗顕著。
58	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHIN	外:明赤褐　内:にぶい褐	B	頸～胴中片	内面摩耗顕著。
59	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:灰褐　内:黒褐	B	口～胴中片	内外面摩耗。外面凹み有。60同一個体。
60	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIN	外:にぶい褐　内:灰褐	B	胴下部片	内外面摩耗顕著。59同一個体。
61	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	45～47･51･52同一個体。
62	南周溝	弥生土器　高坏	－	－	－	ABEHK	外:にぶい橙　内:灰褐	B	口縁部片	内面赤彩、ほぼ剥落。
63	南周溝	弥生土器　高坏	－	－	－	ABDHKN	外:にぶい黄橙　内:にぶい橙	B	口縁部片	内面赤彩、大半剥落。

45～47・51・52・61、59・60 は、同一個体である。41～57 は、外面に櫛歯状工具による文様が描かれている。櫛歯の単位は、41 が３本、42 は６本以上、43・49 は４本、44・46・51・56 は７本、45・50・53 は不明、47・52・57 は６本、48・54・55 は５本である。 41～44 は、頸部に簾状文が巡る。 41 は

２段、その他は１段である。胴部は、41・43 ～ 54 が縦位の羽状文が描かれており、55 ～ 57 は波状文が複数巡る。調整は、41・42 の口縁部外面と内面全面、53･55･57 の内面は摩耗が著しいため不明である。43･49 の内面はヘラナデであり、43 は横位、49 は斜位に施されている。44･50 の内面、53 の胴下部外面無文部、55 の外面無文部はハケメであり、44・53･55 は斜位、50 は縦・斜位に施されている。45 ～ 48･51･52 の内面、54 の胴下部外面無文部と内面、56 の外面無文部は、ヘラミガキである。45･51･52 の内面は横位、46 ～ 48 の内面は横・斜位、54 は胴下部外面無文部が斜位、内面は横位に施されている。56 は、外面無文部が斜位、内面は横・斜位に施されているが、外面はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが一部残る。44 は、胴部中段付近の内面に輪積痕がみられた。

58 ～ 61 は、無文である。調整は、外面がハケメ、内面はヘラナデが主体となる。58 は、外面のハケメが細かく、頸部は斜位、以下は横位に施されている。内面のヘラナデは、頸部が横位、以下は斜位に施されている。59 は、口縁部外面が横ナデ、以下は横・縦位のハケメ後、部分的に縦位のヘラミガキが施されている。内面は、摩耗が著しいため不明である。60 は、外面のハケメが上位は斜位、下位は縦位に施されている。内面は、摩耗が著しいため不明である。61 は、外面に斜位のハケメが施された後に縦・斜位のヘラミガキが施されている。内面は、横位のヘラミガキである。59 は、口縁部外面に種子圧痕と思われる凹みがみられた。

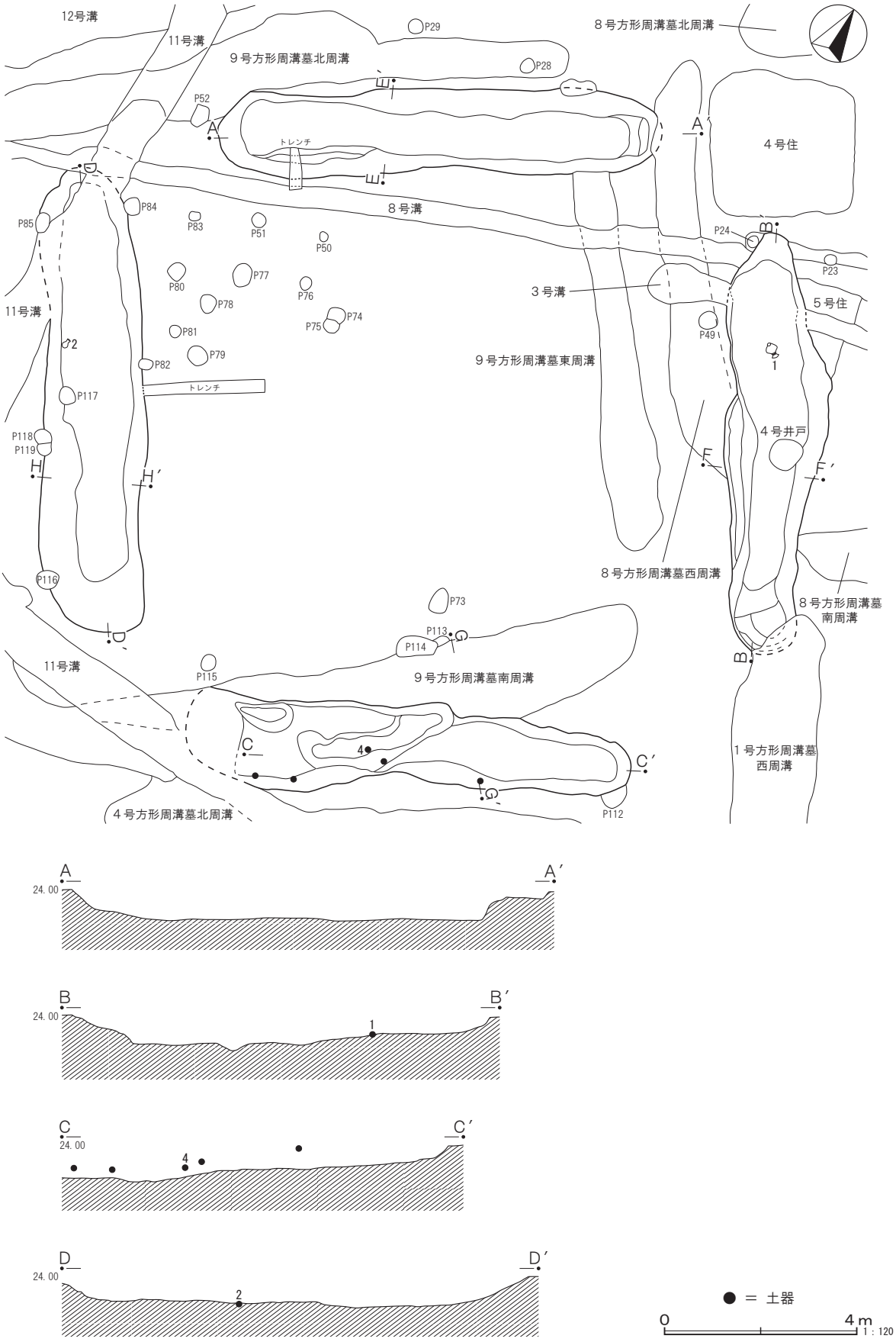
34・35・62・63 は、弥生土器高坏である。34・35 は口縁部から坏部までの部位、62・63 は口縁部片である。34 は、深身で口縁端部が大きく外反し、水平に近い。坏部は、内湾しながら下る。調整は、摩耗が著しいため外面上位は不明、下位はハケメ、内面はヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施されたハケメが残る。胎土に白色粒を多量含む。35 は、口縁部がほぼ直立し、端部がやや外反する。坏部は、逆ハの字に下る。内外面ともにヘラミガキ調整であり、赤彩が施されているが、外面は大半が剥落している。高坏としたが、他の器種の可能性もある。62・63 は、口縁端部に刻みが施されている。調整は、いずれも内外面が横位のヘラミガキであるが、62 の外面はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。内面に赤彩が施されているが、62 はほぼ、63 は大半が剥落している。

本方形周溝墓の時期は、弥生時代後期初頭と思われる。

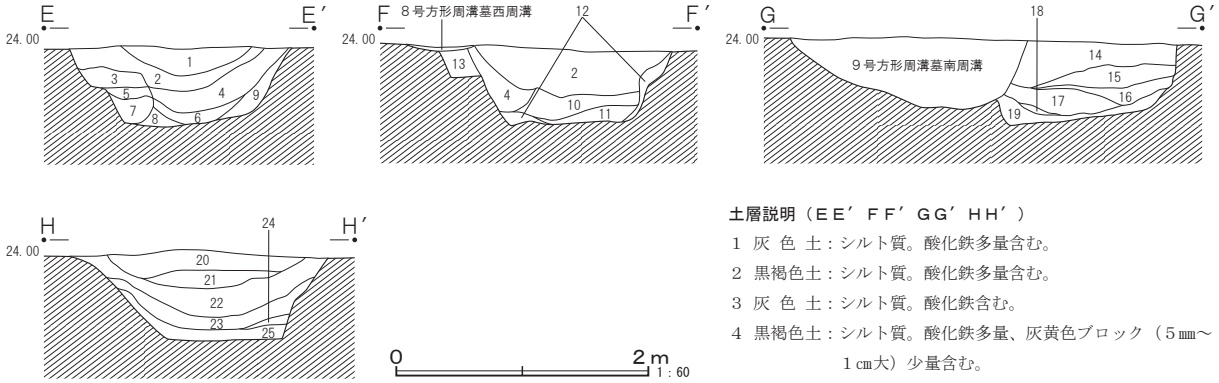
第２号方形周溝墓（第 65・66 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区及び 2012（平成 24）年度調査Ａ区 36 ～ 39 － 86 ～ 90 グリッドに位置する。南周溝西端付近が 2011（平成 23）年度調査Ａ区、その他は、2012（平成 24）年度調査Ａ区で検出された。東側に第１号方形周溝墓と古墳時代前期の第８号方形周溝墓、南東に第４号方形周溝墓、ほぼ同所に古墳時代前期の第９号方形周溝墓が位置する。

他の時代に属する多くの遺構と重複する。東周溝は、北側を第５号住居跡と第３・８号溝跡に切られている。また、中央付近を第４号井戸跡、西側中央付近の立ち上がりを第８号方形周溝墓の西周溝、東側立ち上がりの南東一部を同方形周溝墓の南周溝に切られている。南端は、第１号方形周溝墓西周溝の北端と重複しているが、新旧関係は本方形周溝墓が古い。西周溝は、北端付近を第８・11 号溝跡に切られており、第８号溝跡は方台部も切っている。南周溝は、西端と西側半分の上位を第 11 号溝跡と第９号方形周溝墓の南周溝に切られている。北周溝は、東端を第８号方形周溝墓の西周溝、東端より西側約１ｍの立ち上がりと方台部を第９号方形周溝墓の東周溝、北西端の立ち上がり一部を第９号



第 65 図　第２号方形周溝墓（１）



土層説明（ＥＥ′ ＦＦ′ ＧＧ′ ＨＨ′）

1 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
3 灰 色 土：シルト質。酸化鉄含む。
4 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～1㎝大）少量含む。
5 黒褐色土：シルト質。灰黄色ブロック（5㎝大）少量含む。
6 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
7 淡黄色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
8 暗灰色土：シルト質。灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
9 黄灰色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎜大）多量含む。
10 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）微量含む。
11 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（1㎝大）少量含む。
12 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（2～5㎝大）多量含む。
13 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎜～1㎝大）多量含む。
14 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
15 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物、灰黄色ブロック（5㎜大）微量含む。
16 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
17 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
18 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
19 黄灰色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（1～15㎜大）多量含む。
20 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
21 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
22 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
23 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～1㎝大）少量含む。
24 オリーブ黒色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～1㎝大）少量含む。
25 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（3～10㎝大）少量含む。

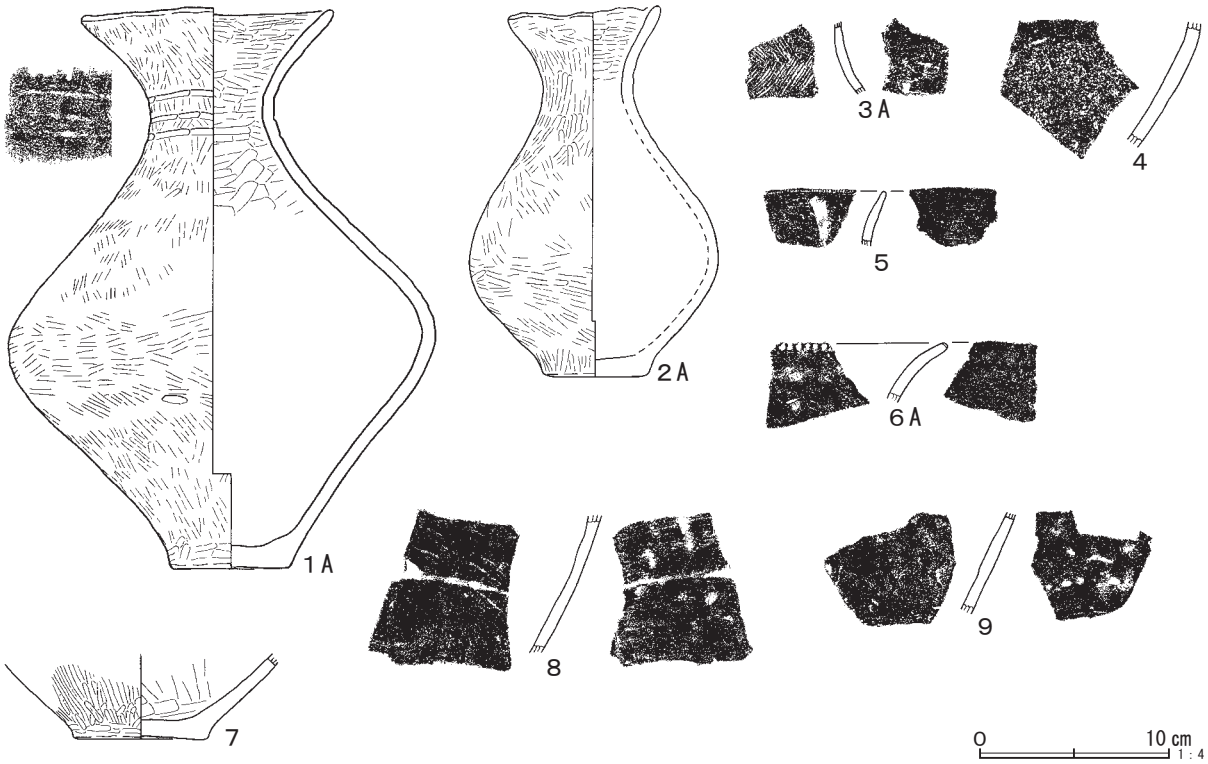
第66図　第２号方形周溝墓（２）

方形周溝墓の北周溝に切られている。方台部には、単独ピットが多数みられるが、各周溝の所々で重複するものも含め、新旧関係は不明である。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓である。規模は、周溝外縁で東西が16.5ｍ、南北は14.6ｍ程を測る。方台部は、東西が12.1ｍ、南北11.1ｍ程を測る。主軸方向は、Ｎ－33°－Ｗを指す。検出された周溝の長さは、概ね9.5ｍ前後を測るが、東周溝のみ8.85ｍとやや短い。幅は、東・南周溝が1.35～2.1ｍ程とバラツキがあるが、西周溝は概ね2.1ｍ、北周溝は1.65ｍ前後を測る。確認面からの深さは、いずれも最大0.6ｍ前後を測る。立ち上がりは、長軸方向が緩やかであるが、短軸は鋭角に掘り込まれており、中段に稜やテラス状の段を持つ箇所がみられた。底面は、いずれも凹凸がみられたが、特に南周溝西側が顕著であった。覆土は、計25層（１～25層）と多数確認された。混入物を含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第67図）は、弥生土器壺（１～４）、甕（５）、高坏（６）がある。出土位置を示していないものも含め、１・３・５が東周溝、２が西周溝、４・６が南周溝からの出土である。この他にも流れ込みで古墳時代前期の土師器壺（７～９）が出土した。７は北周溝、その他は南周溝からの出土である。

１～４は、弥生土器壺である。１は、ほぼ完形の中型壺である。口縁部が逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は算盤玉状を呈し、中段付近に最大径を持つ。やや上げ底の底部は、円柱状を呈する。外面文様は、頸部にヘラ描きの平行沈線が３条巡るのみである。調整は、外面全面と口縁部から頸部までの内面がヘラミガキ、以下の内面は大半が計測不可能であったが、ヘラナデである。胴部外面の中段よりやや下に横長で楕円形を呈する凹みが１つみられたが、種子圧痕ではないと思われる。外面



第 67 図　第２号方形周溝墓出土遺物

第 17 表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	東周溝	弥生土器　壺	13.4	29.6	6.2	ABEIKN	黄橙色	B	ほぼ完形	外面摩耗。外面赤彩、ほぼ剥落。外面凹み有。
2	西周溝	弥生土器　壺	8.1	19.55	5.4	ABEHKN	橙　色	B	完形	内外面摩耗。口縁部内面、外面全面赤彩、ほぼ剥落。
3	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	橙　赤	B	頸～肩部片	内面赤彩。
4	南周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	胴下部片	外面下位摩耗顕著。
5	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
6	南周溝	弥生土器　高坏	－	－	－	ABCDHKN	にぶい橙　赤褐	B	口縁部片	内面赤彩、大半剥落。
7	北周溝	土師器　壺	－	(4.5)	7.1	ABCHIKN	外:橙　内:黒褐	B	胴～底40%	古墳前。
8	南周溝	土師器　壺	－	－	－	ABDHN	橙　色	B	胴下部片	9、4号方23同一個体。内面輪積痕有。
9	南周溝	土師器　壺	－	－	－	ABDHN	橙　色	B	胴下部片	外面下位摩耗顕著。8、4号方23同一個体。

の摩耗が著しいため定かではないが、所々に赤彩の痕跡がみられたことから全面に施されていた可能性がある。器壁がやや厚い。２は、無文の小型壺である。完形である。口縁部がやや受け口状を呈し、すぼまる頸部はほぼ直立する。肩部以下はハの字に下り、最大径を持つ胴部中段よりやや下が膨らむ。やや厚底の底部は、円柱状を呈する。調整は、外面全面と口縁部から頸部までの内面がヘラミガキ、以下の内面は計測不可能であったが、胴部中段付近までがヘラナデ、以下はハケメである。外面全面と口縁部内面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。胎土に赤褐色粒を多量含む。３は頸部から肩部まで、４は胴下部の破片である。３は、外面に４本一単位の櫛歯状工具による横位の羽状文が描かれている。４は、無文である。調整は、３の内面が横・斜位のヘラミガキ、４は外面上位が横位、下位が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。３は、内面に赤彩が施されている。

５は、弥生土器甕の口縁部から頸部までの破片である。文様は、口縁端部に細かい刻みが施されているのみである。調整は、外面が横ナデであるが、頸部に横ナデ前に施された斜位のハケメが残る。内面は、口縁部がヘラミガキ、頸部はハケメであり、いずれも横位に施されている。

６は、弥生土器高坏の口縁部片である。文様は、口縁端部に刻みが施されているのみである。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、外面上位と内面は横位、外面下位は斜位に施されている。外面

下位は、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが一部残る。内面に赤彩が施されているが、大半が剥落している。

７～９は、古墳時代前期の土師器壺である。７は、胴下部から底部までの部位である。底部は、やや上げ底である。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。８・９は、胴下部片である。両者は同一個体であり、本周溝墓南東に位置する第４号方形周溝墓出土23とも同一個体の可能性がある。いずれも調整は、内外面ともにヘラミガキであり、内面は横位、外面は斜位に施されている。また、両面ともヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。ハケメは、内面が横・斜位、外面は斜位に施されている。８は、内面に輪積痕が残る。

本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第３号方形周溝墓（第68・69図）

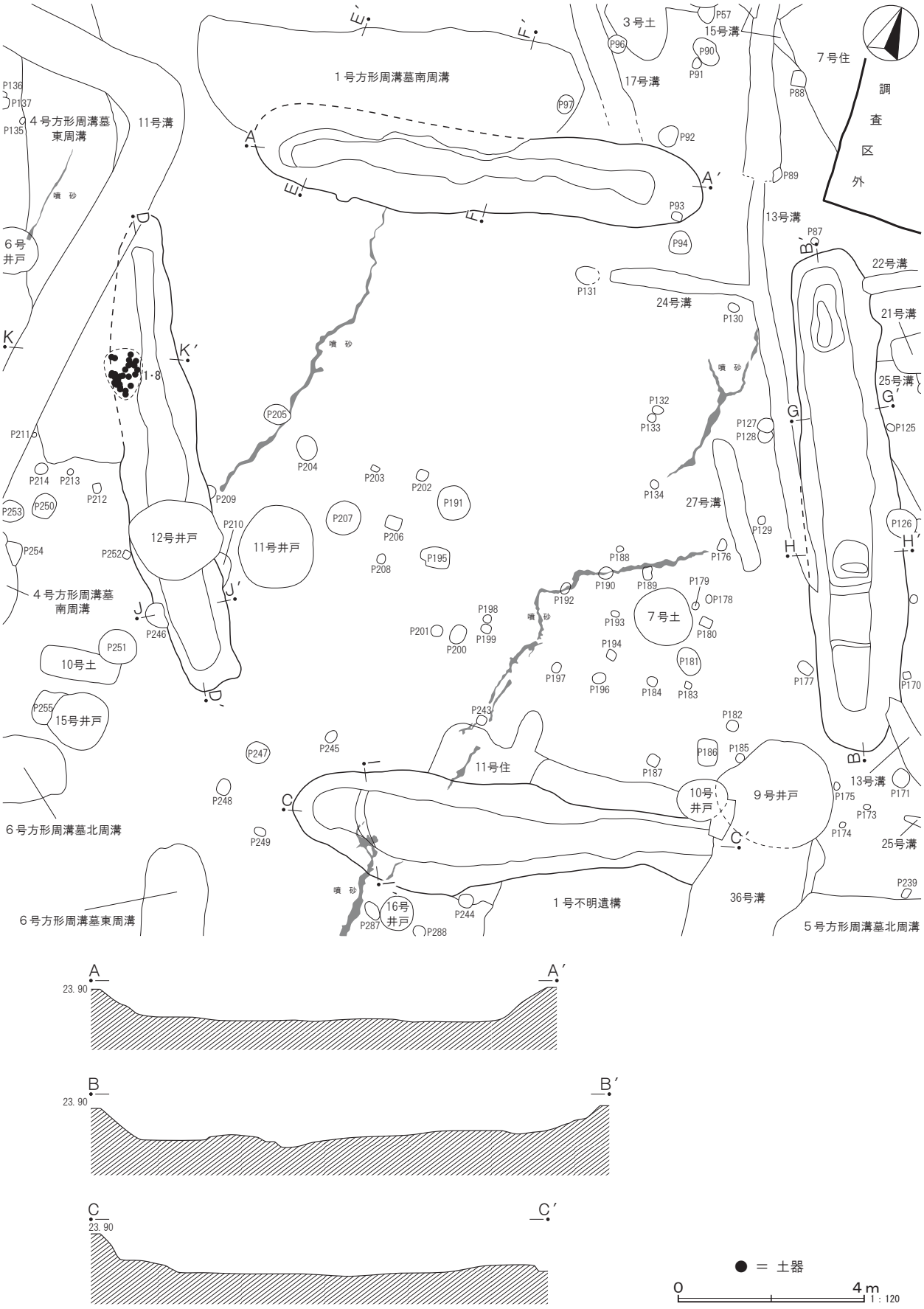
2011（平成23）年度調査Ａ・Ｂ区30～34－89～92グリッドに位置する。東周溝、西端を除く南周溝、北周溝東端付近は、2011（平成23）年度調査Ｂ区、その他は2011（平成23）年度調査Ａ区で検出された。西側に第４号方形周溝墓、南東に第５号方形周溝墓、北西に第１号方形周溝墓が位置する。

他の時代に属する多くの遺構と重複する。東周溝は、東側中央からやや北側の立ち上がりを第25号溝跡、方台部と西側立ち上がり中央付近から南東端を第13号溝跡、北東隅を第22号溝跡に切られている。西周溝は、西側立ち上がりの北側で第４号方形周溝墓の東周溝を切っており、北西端を第11号溝跡、中央から南側を第12号井戸跡に切られている。南周溝は、方台部と中央付近上位を第11号住居跡と第１号不明遺構、東端付近を第36号溝跡、第9・10号井戸跡に切られている。北周溝は、北側立ち上がり西側を第１号方形周溝墓の南周溝に切られている。方台部は、東側に第13・24・27号溝跡と第７号土坑、西側に第11号井戸跡が位置するが、すべての遺構に切られていると思われる。方台部と周溝の所々で重複する単独ピットとの新旧関係は、不明である。

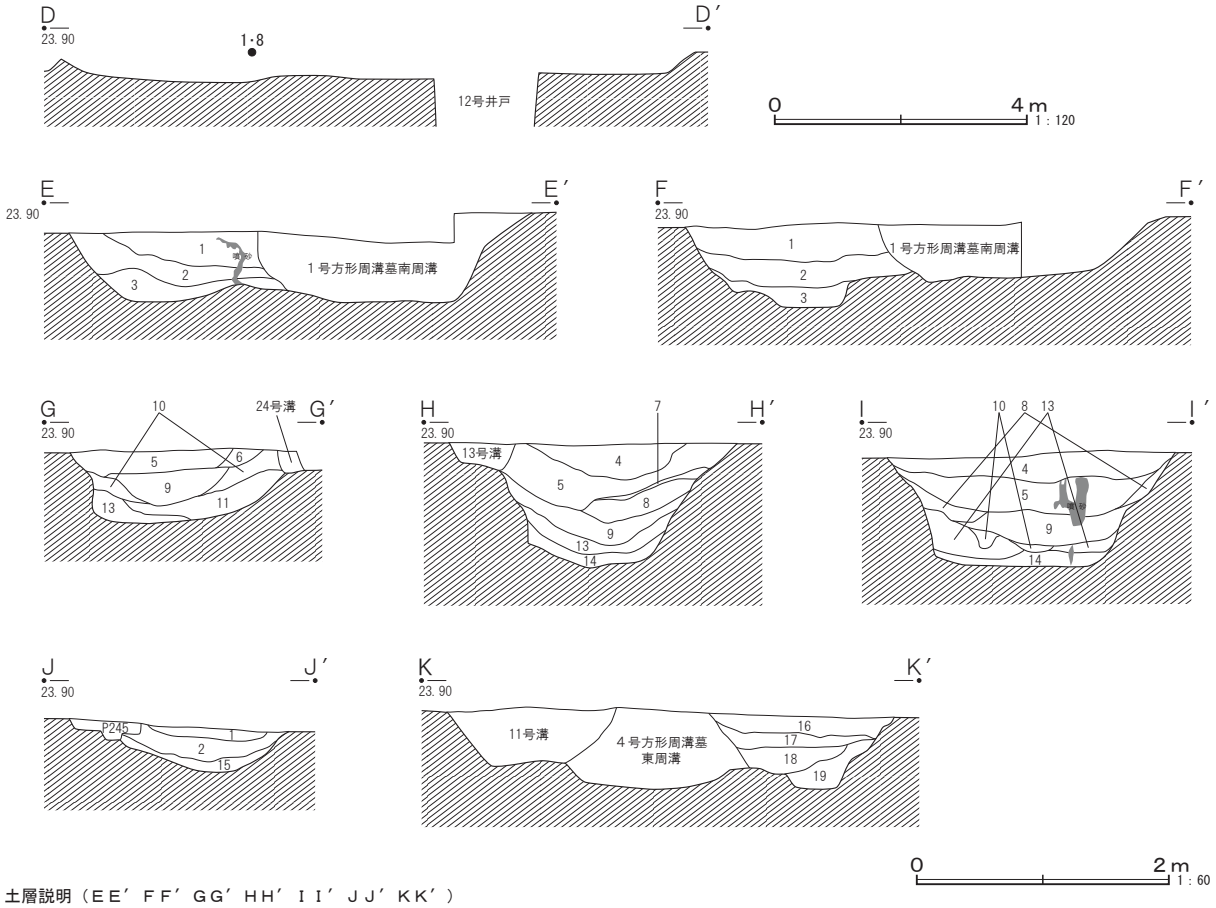
四隅に土橋を持つ方形周溝墓である。規模は、周溝外縁が16.5ｍ前後、方台部は東西が13ｍ、南北は12.5ｍ前後を測る。主軸方向は、Ｎ－24°－Ｗを指す。検出された周溝の長さは、南周溝が不明であるが、その他は概ね10ｍ前後を測る。幅は、南周溝にバラツキがみられ、西側が2.55ｍと広く、東側が1.11ｍと狭いが、その他は概ね1.8ｍ前後を測る。確認面からの深さは、バラツキがみられた。東周溝南側は最大0.97ｍ、南周溝は0.86ｍと深いが、その他は概ね0.55ｍ前後を測る。立ち上がりは、長軸方向が緩やかであるが、短軸は鋭角に掘り込まれており、中段に稜やテラス状の段を持つ箇所がみられた。底面は、いずれも凹凸がみられたが、特に東周溝南側が顕著であった。覆土は、計19層（１～19層）と多数確認された。混入物を含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第70図）は、弥生土器壺（１～６）、甕（７～10）がある。出土位置を示したものも含め、２・４が東周溝、１・８が西周溝、３・５・６が南周溝、その他は北周溝からの出土である。摩耗の著しいものが多い。この他にも流れ込みで古墳時代前期の土師器壺（11）、奈良時代の須恵器坏（12）が出土した。11は北周溝、12は南周溝から出土した。12は、第11号住居跡からの流れ込みと思われる。

１～６は、弥生土器壺である。１は、残存状態が比較的良好な中型壺である。短い口縁部の開きが小さく、すぼまる頸部は太く、ほぼ直立する。胴部は、やや縦長の球形を呈し、中段付近に最大径を



第68図　第3号方形周溝墓（1）

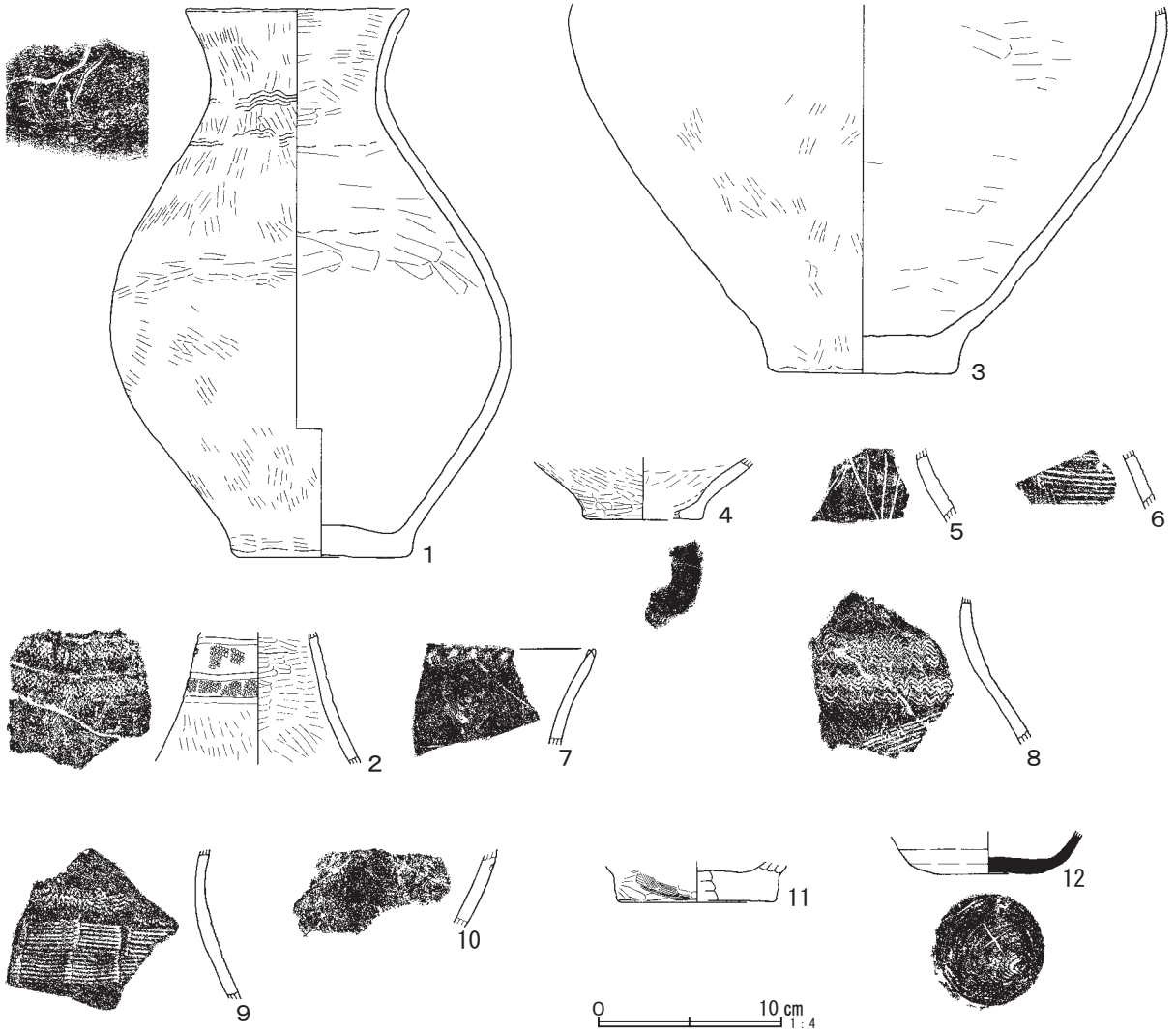


土層説明（ＥＥ′ ＦＦ′ ＧＧ′ ＨＨ′ ＩＩ′ ＪＪ′ ＫＫ′）

1 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
2 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂多量、浅黄色ブロック（１～３㎝大）少量含む。
4 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
5 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、砂多量、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
6 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（３㎝大）多量含む。
7 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（１㎝大）多量、砂少量含む。
8 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（５㎜～３㎝大）少量含む。
9 黒 色 土：粘土質。酸化鉄、砂多量、オリーブ灰色ブロック（１～５㎝大）少量含む。
10 暗緑灰色土：粘土質。酸化鉄、砂多量、浅黄色ブロック（１㎝大）少量含む。
11 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、砂、浅黄色ブロック（５㎜～１㎝大）多量含む。
12 砂　　層：灰色ブロック（５㎜～１㎝大）少量含む。
13 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
14 オリーブ灰色土：粘土質。砂多量含む。
15 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、砂多量、浅黄色ブロック（３～５㎝大）少量含む。
16 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
17 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
18 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
19 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（２～５㎝大）少量含む。

第 69 図　第３号方形周溝墓（２）

を持つ。底部は、厚底で円柱状を呈する。外面の文様は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、頸部から肩部にかけて３本一単位の櫛歯状工具による煩雑な波状文がやや間隔をあけて上下に２段巡る。調整も部分的な図示であるが、外面全面と口縁部から頸部までの内面はヘラミガキ、肩部以下の内面はヘラナデである。肩部と胴上部の内面に輪積痕が残る。胎土に白色粒と礫を多量含む。２は、頸部から肩部までの部位である。ハの字状を呈するが、頸部と肩部の境付近が若干すぼまる。外面文様は、頸部にヘラ描きの平行沈線が３条巡り、沈線間にＲＬ単節縄文が充填されている。調整は、肩部外面と頸部内面はヘラミガキ、肩部内面はヘラナデである。頸部内面上位に輪積痕が一部残る。３は、胴部中段付近から底部までの部位である。胴部は半球形、底部は円柱状を呈し、厚底である。調整は、内外面ともに部分的な図示であるが、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。４は、胴下部から底部までの部位である。やや円柱状を呈する底部中央付近を欠く。焼成後穿孔の可能性がある。



第 70 図　第３号方形周溝墓出土遺物

第 18 表　第３号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	西周溝	弥生土器　壺	(12.2)	30.0	10.0	ABDN	にぶい橙色	B	70%	内外面摩耗。肩･胴上部内面輪積痕有。
2	東周溝	弥生土器　壺	－	(7.25)	－	ABEHIKN	外:橙　内:にぶい褐	B	頸～肩30%	内面下位、外面全面摩耗。内面輪積痕有。
3	南周溝	弥生土器　壺	－	(22.2)	10.4	ABCDHN	橙　色	B	胴～底30%	内外面摩耗顕著。
4	東周溝	弥生土器　壺	－	(3.4)	(6.6)	ABCEHIKN	外:暗褐　内:にぶい赤褐	B	胴～底25%	内外面摩耗顕著。底面焼成後穿孔？
5	南周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHKN	外:黒褐　内:浅黄	B	肩部片	
6	南周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIK	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	胴上部片	内面摩耗顕著。
7	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	口～頸部片	内面やや摩耗。
8	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	外:暗褐　内:にぶい橙	B	頸～胴上片	6号方5同一個体。
9	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	頸～胴上片	内面下位、外面上位摩耗顕著。
10	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	外面摩耗顕著。外面凹み有。
11	北周溝	土師器　壺	－	(2.2)	(8.7)	ABDEHKN	外:にぶい黄橙　内:黒褐	B	底部30%	古墳前。
12	南周溝	須恵器　坏	－	(2.35)	6.0	ABFHN	灰黄色	B	体～底40%	奈良。南比企産。底面×印有。

胴下部下位から底部の内面は、粘土紐がはずれている。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。５は肩部、６は胴上部の破片である。外面文様は、５が細いヘラで下向きの鋸歯文が描かれ、区画内に縦位に近い斜線文が充填されている。６は、２本一単位の櫛歯状工具で重四角文が描かれている。調整は、５の外面無文部が斜位のハケメ、内面は、横・斜位のヘラナデである。６の内面は、摩耗が著しいため不明である。２は中期末、６は中期後半であり、流れ込みと思われる。

７～10 は、弥生土器甕である。７は口縁部から頸部まで、８・９は頸部から胴上部まで、10 は胴下

部の破片である。外面文様は、櫛歯状工具による文様が主体となる。櫛歯の単位は、７・10 が不明、８は７本、９は８本である。７は、口縁端部に刻みが施され、頸部に簾状文が巡る。８は、頸部直下に波状文が２段巡り、胴上部は同一工具で縦位の羽状文が描かれている。９は、頸部上位に波状文が１段、下位に簾状文２段が巡る。10 は、縦位の羽状文が描かれている。調整は、ヘラミガキが主体となる。７は口縁部外面が縦位、内面は横位、８は頸部と胴上部の外面無文部が斜位に粗く、内面は横位に施されている。９は、胴上部外面が斜位のハケメであるが、頸部外面無文部と頸部内面はヘラミガキであり、前者は斜位、後者は横位に施されている。胴上部の内面は、摩耗が著しいため不明である。10 は、外面下位の無文部が不明であるが、内面はヘラミガキが横位に施されている。10 は、胎土がやや粗く、外面に種子圧痕と思われる楕円形の凹みがみられた。８は、第６号方形周溝墓出土５と同一個体である。

11 は、古墳時代前期の土師器壺の底部である。調整は、外面がハケメ後にヘラミガキ、内面はヘラナデが施されている。12 は、奈良時代の須恵器坏の体部から底部までの部位である。南比企産である。体部は逆ハの字に開き、底部は平底に近い。調整は、内外面がロクロナデ、底面は回転糸切り後に外周ヘラ削りが施されており、ヘラによる×印が刻まれている。

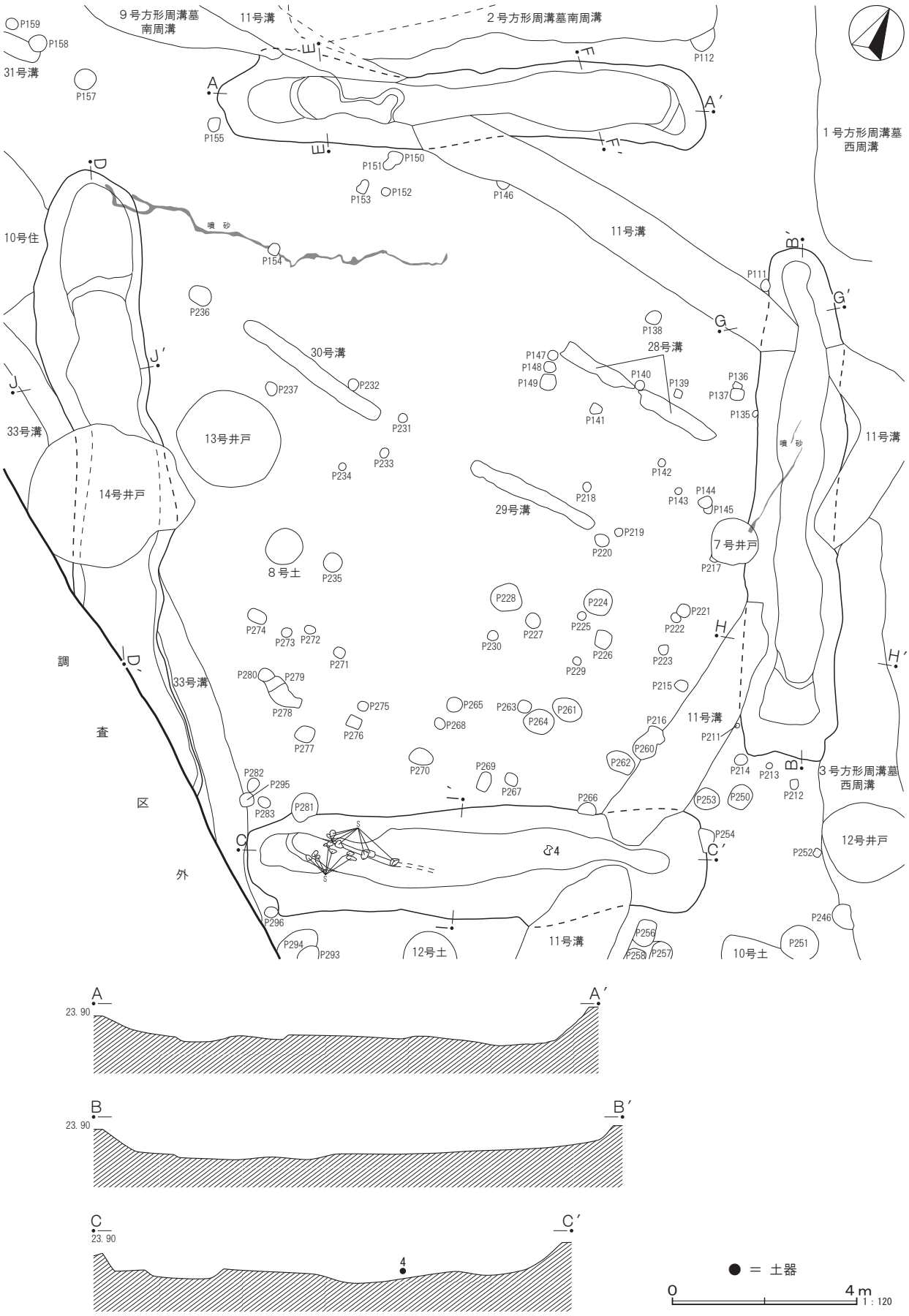
本方形周溝墓の時期は、弥生時代後期初頭と思われる。

第４号方形周溝墓（第 71・72 図）

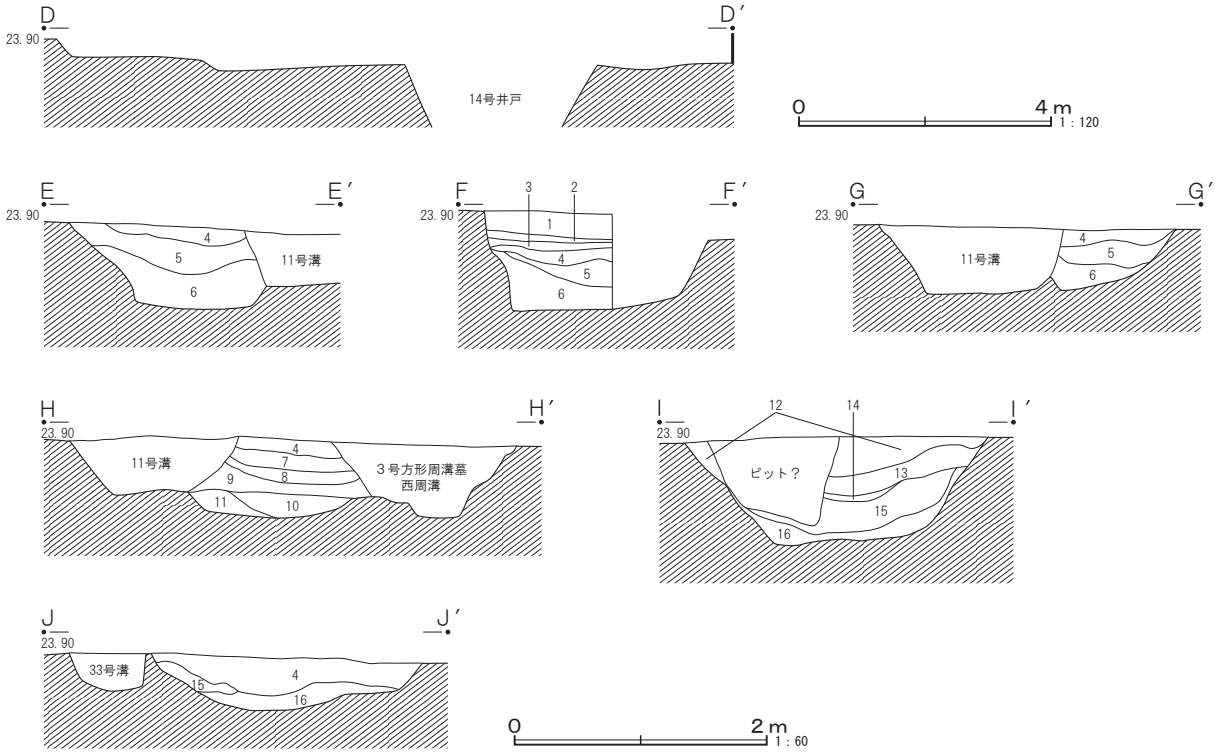
2011（平成 23）年度調査Ａ区及び 2012（平成 24）年度調査Ａ区 34 ～ 38 － 89 ～ 93 グリッドに位置する。北周溝の北東部が 2012（平成 24）年度調査Ａ区、その他は 2011（平成 23）年度調査Ａ区で検出された。東側に第３号方形周溝墓、南東に第６号方形周溝墓、北西に第２号方形周溝墓と古墳時代前期の第９号方形周溝墓が位置する。

他の時代に属する多くの遺構と重複する。東周溝は、北側と東側中央から西側南西部の立ち上がりを第 11 号溝跡、西側中央付近の立ち上がりと方台部を第７号井戸跡、東側中央以南の立ち上がりを第３号方形周溝墓の西周溝に切られている。西周溝は、北西部を第 10 号住居跡、中央付近を第 33 号溝跡と第 14 号井戸跡に切られている。南端を含む南西部は、調査区外にある。南周溝は、東側を第 11 号溝跡に切られている。北周溝も南側中央付近から北西部の立ち上がりを第 11 号溝跡に切られており、北西部は第９号方形周溝墓の南周溝に切られている。方台部は、東・南・北周溝と重複する第 11 号溝跡、西周溝と重複する第 33 号溝跡の他に第 28 ～ 30 号溝跡、第 13 号井戸跡が位置するが、本方形周溝墓がすべての遺構に切られていると思われる。方台部と周溝の所々で重複する単独ピットとの新旧関係は、不明である。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓である。規模は、周溝外縁で東西が 17 m、南北は 18.5 m前後を測る。方台部は、東西が 13 m、南北は 14.6 m前後を測る。主軸方向は、Ｎ－ 29°－Ｗを指す。検出された周溝の長さは、西周溝が不明であるが、その他は概ね 10.5 m前後を測る。幅は、南周溝が 2.4 m程と広く、北周溝は 0.5 m前後と狭いが、その他は、概ね 0.7 m前後を測る。確認面からの深さは、バラツキがみられた。南周溝と北周溝は最大 0.8 ～ 0.85 mと深く、西周溝は 0.42 mと浅いが、その他は概ね 0.65 m前後を測る。立ち上がりは、長軸方向が緩やかであるが、短軸は鋭角に掘り込まれており、中段に稜を持つ箇所がみられた。底面は、いずれも凹凸がみられた。覆土は、計 16 層（１～ 16 層）



第71図　第4号方形周溝墓（1）



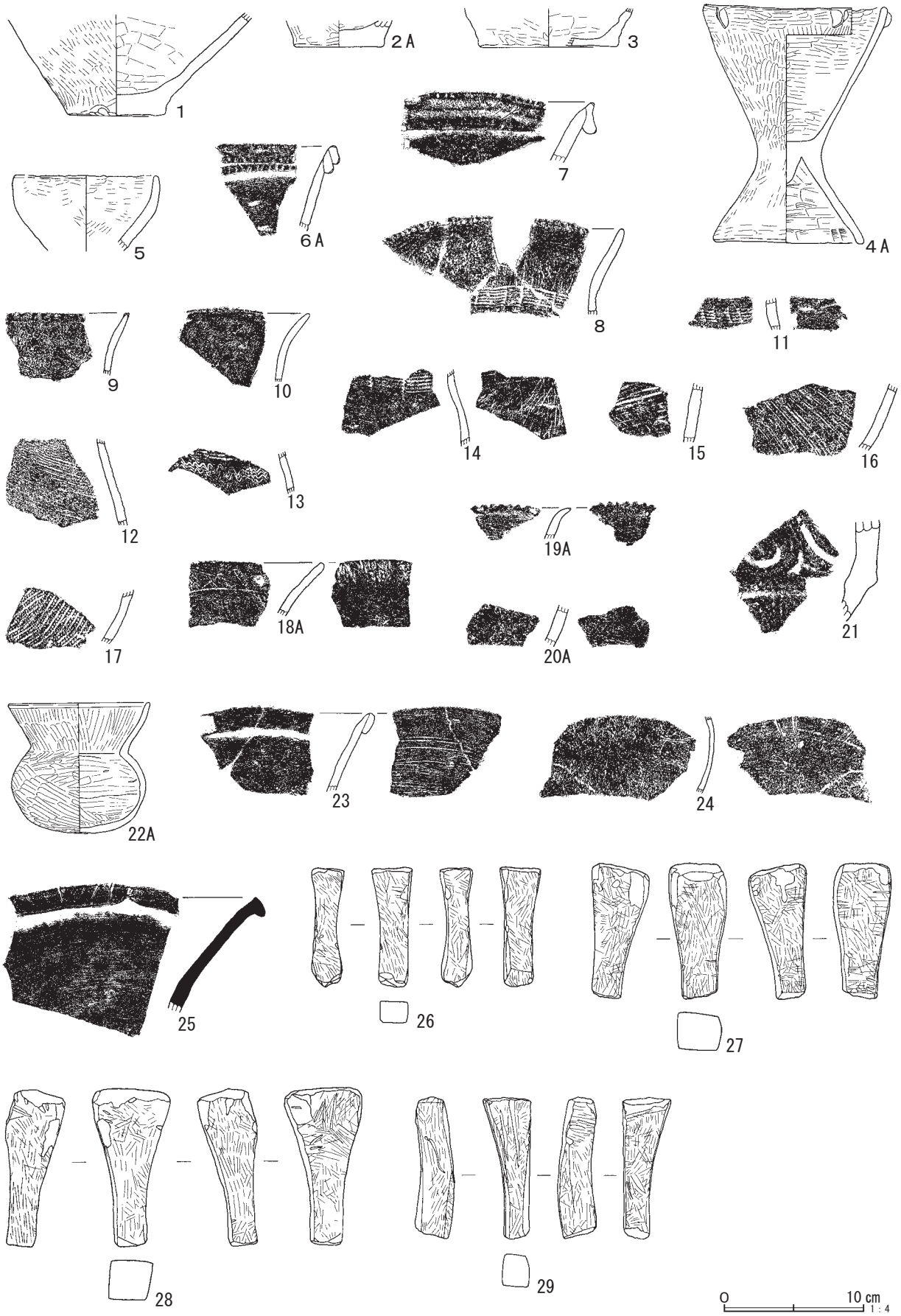
土層説明（ＥＥ′ ＦＦ′ ＧＧ′ ＨＨ′ ＩＩ′ ＪＪ′）

1 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物少量含む。
2 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎜大）多量、焼土粒、炭化物微量含む。
3 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（５㎜～１㎝大）多量、炭化物微量含む。
4 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
5 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
6 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（１～５㎝大）少量含む。
7 灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
8 黄灰色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（１～２㎝大）多量、砂少量含む。
9 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（５㎜大）少量、炭化物微量含む。
10 黒褐色土：粘土質。酸化鉄、浅黄色ブロック（１～10㎝大）多量、砂少量含む。
11 黒 色 土：粘土質。砂少量、炭化物微量含む。
12 黒褐色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量、焼土粒微量含む。
13 黒 色 土：粘土質。酸化鉄多量、砂、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
14 黒 色 土：粘土質。砂、浅黄色ブロック（５㎜大）少量含む。
15 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂多量、浅黄色ブロック（１～５㎝大）少量含む。
16 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂、浅黄色ブロック（５～10㎝大）多量含む。

第 72 図　第４号方形周溝墓（２）

と多数確認された。混入物を含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第 73 図）は、弥生土器壺（１・２・６・７）、甕（３・８～17）、高坏（４・５・18～20）がある。遺物は、すべての周溝から出土した。出土位置を示した４も含め、１・６・８・９・12・17 が東周溝、18・19 が西周溝、２・４・５・13・14 が南周溝、その他が北周溝からの出土である。北周溝出土遺物は、３・７・10・16 が 2012（平成 24）年度調査Ａ区、その他は 2011（平成 23）年度調査Ａ区からの出土である。摩耗の著しいものが多い。この他にも流れ込みで縄文土器深鉢（21）、古墳時代前期の土師器壺（22 ～ 24）、奈良・平安時代の須恵器甕（25）、古代以降の砥石（26 ～ 29）、写真のみ掲載の小動物の骨と桃の種子（図版 56）が出土した。26 は西周溝、25・27 ～ 29 は南周溝、21・22 は 2011（平成 23）年度調査Ａ区検出の北周溝、23・24 は 2012（平成 24）年度調査Ａ区検出の北周溝からの出土である。小動物の骨は南周溝、桃の種子は西・南周溝から出土した。南周溝西側では、上層から中層にかけて礫が多数出土したが、本方形周溝墓には関連しないと思われる。



第 73 図　第４号方形周溝墓出土遺物

第19表　第４号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	東周溝	弥生土器　壺	－	(7.35)	7.0	ABCHIKN	外:灰黄褐　内:褐灰	B	胴～底55%	内外面摩耗顕著。
2	南周溝	弥生土器　壺	－	(1.9)	(6.3)	ABCHKN	外:にぶい黄橙　内:にぶい橙	B	底部40%	内外面やや摩耗。外面赤彩、ほぼ剥落。
3	北周溝	弥生土器　甕	－	(2.75)	(10.0)	ABCHIKN	橙　色	B	底部45%	内外面摩耗顕著。
4	南周溝	弥生土器　高坏	13.2	17.2	10.8	ABEHN	赤　色	B	ほぼ完形	内外面所々摩耗。坏部内面、外面全面赤彩。
5	南周溝	弥生土器　高坏	(10.2)	(5.4)	－	ABDKN	にぶい橙色	B	口～坏20%	内外面摩耗。外面剥離。内外面赤彩、ほぼ剥落。
6	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIN	橙　色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。内外面赤彩、ほぼ剥落。
7	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHKN	橙　色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
8	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	外:黒褐　内:灰褐	B	口～頸部片	内外面大半摩耗顕著。
9	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:橙　内:灰褐	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
10	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:にぶい褐　内:褐	B	口～頸部片	
11	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIK	橙　色	B	頸部片	内外面摩耗顕著。内面輪積痕有。
12	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい褐　内:にぶい橙	B	頸～胴上片	内面摩耗顕著、外面半分摩耗。
13	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIK	外:灰褐　内:にぶい橙	B	頸～胴上片	
14	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCEHK	にぶい橙色	B	頸～胴上片	外面やや摩耗。
15	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHKN	橙　色	B	胴下部片	
16	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIKN	外:橙　内:にぶい橙	B	胴下部片	外面やや摩耗。
17	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIN	外:黒褐　内:暗褐	B	胴下部片	
18	西周溝	弥生土器　高坏	－	－	－	ABDHIK	赤　色	B	口縁部片	内外面摩耗。内外面赤彩、内面ほぼ、外面大半剥落。
19	西周溝	弥生土器　高坏	－	－	－	ABDHKN	灰黄褐　赤	B	口縁部片	内面赤彩、ほぼ剥落。
20	北周溝	弥生土器　高坏	－	－	－	ABDHKN	外:赤　内:暗褐	B	坏部片	内外面赤彩、内面ほぼ剥落。
21	北周溝	縄文土器　深鉢	－	－	－	ABEHIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	縄文後。内外面やや摩耗。
22	北周溝	土師器　壺	10.2	9.35	2.1	ABHIKN	にぶい橙色	B	70%	古墳前。内外面やや摩耗。内面輪積痕有。外面赤彩？
23	北周溝	土師器　壺	－	－	－	ABDHN	浅黄橙色	B	口～頸部片	古墳前。2号方8･9同一個体。
24	北周溝	土師器　壺	－	－	－	ABDEHKN	にぶい赤褐色	B	胴中段片	古墳前。外面所々摩耗顕著。
25	南周溝	須恵器　甕	－	－	－	ABFN	灰　色	B	口～頸部片	奈良･平安。南比企産。内外面自然釉付着。
26	西周溝	砥　石	最大長8.55㎝、最大幅2.85㎝、最大厚2.3㎝。重量(69.5)g。ほぼ完形。凝灰岩。							
27	南周溝	砥　石	最大長9.7㎝、最大幅4.05㎝、最大厚4.05㎝。重量(194.0)g。ほぼ完形。凝灰岩。							
28	南周溝	砥　石	最大長11.3㎝、最大幅5.55㎝、最大厚3.9㎝。重量(233.5)g。ほぼ完形。凝灰岩。							
29	南周溝	砥　石	最大長10.1㎝、最大幅3.45㎝、最大厚2.55㎝。重量(99.0)g。ほぼ完形。凝灰岩。							

１・２・６・７は、弥生土器壺である。１・２は、胴下部から底部までに収まる部位である。１は、壺としたが、甕の可能性もある。底部は、いずれも厚底で円柱状を呈する。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。１は、底部側面に刻みがみられた。２は、外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。６・７は、口縁部から頸部までの破片である。いずれも複合口縁であり、６は中段に輪積痕が残る。口縁部に６は中段の輪積痕以外に３箇所、７は上下に２箇所、刻みが施されている。調整は、６の外面と７の内外面は摩耗が著しいため不明、６の内面は横位のヘラミガキである。６は、内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。胎土に白色粒を多量含む。６・７は、後期初頭のものであり、流れ込みと思われる。

３・８～17は、弥生土器甕である。３は、やや上げ底の底部である。調整は、摩耗が極めて顕著であるため定かではないが、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデと思われる。胎土に白色粒を多量含む。８～10は口縁部から頸部まで、11は頸部、12～14は頸部から胴上部まで、15～17は胴下部の破片である。無文の10以外の外面文様は、櫛歯状工具で文様が描かれるものが多い。櫛歯の単位は、８・14が不明、11は５本、12は７本、13・15は４本、16は６本である。８・11・13・14は、頸部に簾状文、12は波状文が巡る。胴部は12・15・16が縦位の羽状文、13は波状文が描かれている。櫛歯状工具による文様以外では、口縁端部に８はＲＬ単節縄文、９は指頭圧痕が施されている。17は、全面にＬＲ単節縄文が施文されている。中期後半と思われ、流れ込みの可能性が高い。調整は、８が内外面ともにヘラミガキであり、口縁部外面上位は横位、下位は斜位、内面は全面横位に粗く施されている。９の内外面、11の外面無文部と内面、12の内面は、摩耗が著しいため不明である。無文の10は、口縁部上位が内外面ともに横ナデ、外面下位は斜位の細かいハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキである。13は、胴上部の外面無文部と内面がヘラミガキであり、前者は斜位、後者は横位に施されており、後

者はヘラミガキ前に施された横位のハケメが一部残る。14 は、胴上部の外面無文部と内面全面がヘラミガキであり、前者は横・斜位、後者は頸部が横位、以下は斜位に粗く施されており、後者はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが所々に残る。15 ～ 17 の内面は、ヘラミガキであり、15・16 は横・斜位、17 は横位に施されている。11 は、内面に輪積痕が残る。13 は胎土に白色粒、17 は白雲母を多量含む。14 は、やや粗い。

４・５・18 ～ 20 は、弥生土器高坏である。４は、ほぼ完形である。深身で器高が高い。短い口縁部がほぼ直立し、坏部はがやや内湾しながら逆ハの字に下る。脚部はハの字に下り、裾部がほぼ直立する。口縁部にやや縦長の突起が５つ付く。調整は、外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデとハケメが併用されている。坏部の器壁が薄く、脚部は厚い。外面と坏部内面に赤彩が施されている。５は、口縁部から坏部までの部位である。口縁部がほぼ直立し、坏部は逆ハの字に下る。調整は、内外面ともにヘラミガキである。内外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。器壁が厚い。18・19 は口縁部、20 は坏部の破片である。文様は、18 が口縁端部に縄文か刻みが施され、口縁部内面に単位不明の櫛歯状工具による波状文が巡る。19 は、口縁端部に刻みが施されている。調整は、内外面ともにすべてヘラミガキであるが、18 の外面は、ヘラミガキ前に施された斜位のハケメが残る。ヘラミガキは、18・19 の外面が横・斜位、内面は横位、20 の外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。18・20 は内外面、19 は内面に赤彩が施されているが、18 は外面大半と内面ほぼ全面、19・20 は内面がほぼ剥落している。20 は高坏としたが、他器種の可能性もある。

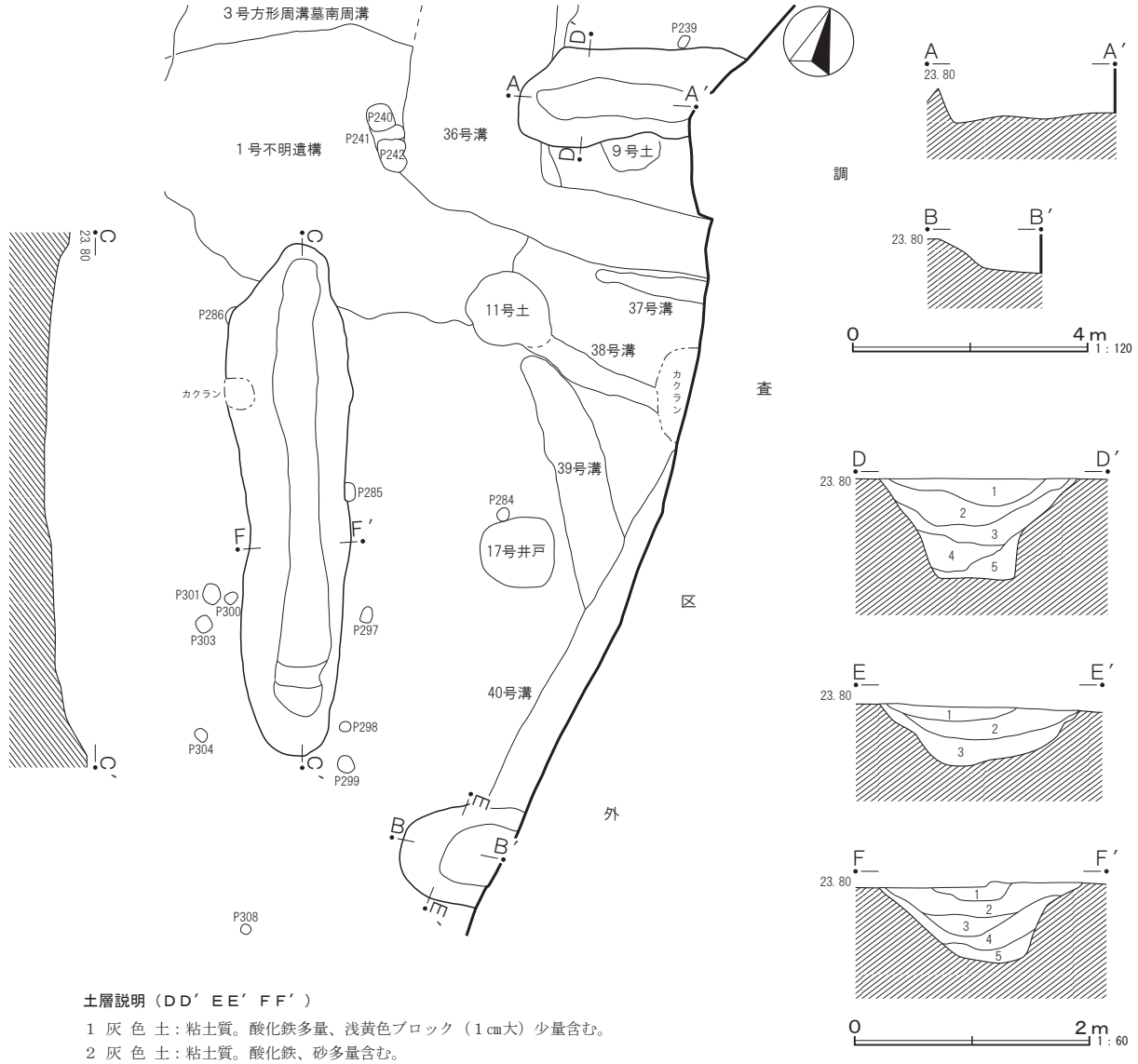
21 は、縄文時代後期後葉高井東式の精製深鉢の波状口縁部片である。文様は、横位に巡る隆帯上に渦巻文が描かれている。器壁が厚い。22 ～ 24 は、古墳時代前期の土師器壺である。22 は、比較的残存状態の良好な小型壺である。口縁部から頸部は受け口状、胴部は詰まった球形を呈する。底部は、丸底に近い。調整は、内外面ともに口縁端部が横ナデ、その他はヘラミガキであるが、胴部内面はヘラナデが一部施されている。胴部内面に輪積痕が残る。外面に赤彩が施されていた可能性がある。23 は複合口縁部から頸部まで、24 は胴部中段付近の破片である。調整は、23 の外面全面と口縁部内面は横位のヘラミガキであるが、前者はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが所々に残る。頸部内面は、横・斜位のハケメである。第２号方形周溝墓出土８・９と同一個体である。24 は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のハケメである。器壁が薄い。25 は、奈良・平安時代の須恵器甕の口縁部から頸部までの破片である。南比企産である。調整は、内外面ともにロクロナデである。口縁部外面と内面全面に自然釉が付着している。26 ～ 29 は、凝灰岩製の砥石である。いずれもほぼ完形である。四面使用している。

本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第５号方形周溝墓（第 74 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30・31 － 92 ～ 95 グリッドに位置する。西側に第６号方形周溝墓、北西に第３号方形周溝墓が位置する。

検出されたのは、西・南・北周溝であり、東周溝は調査区外にある。西周溝は、全形が検出されたが、北端上位を第１号不明遺構に切られており、西側立ち上がり中央より北側は撹乱を受けていた。南周溝は、西端付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。北側立ち上がりの調査区との境を第 40 号



第74図　第5号方形周溝墓

溝跡に切られている。北周溝は、西側1/3程の検出であり、以東は調査区外にある。西端上位を第36号溝跡、南側立ち上がりの一部を第9号土坑に切られている。方台部は、周溝と重複する第1号不明遺構、第40号溝跡、第36号溝跡の他に第37～39号溝跡、第11号土坑、第17号井戸跡が位置するが、すべての遺構に切られていると思われる。方台部や周溝の所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓と思われる。正確な規模は不明であるが、検出された南北の周溝外縁は14.7m、方台部は11.4m程を測ることから東西もほぼ同様と思われる。主軸方向は、N－20°－Wを指すと思われる。検出された周溝の長さは、全形が検出された西周溝が8.73mを測ることから他の周溝もほぼ同様の長さと思われる。検出された幅は、西周溝の北側が2.04mと広いが、その他は概ね1.6m前後を測る。確認面からの深さは、西・北周溝が最大0.75m前後を測るが、南周溝は西端に近いためか0.5mと浅い。長軸方向の立ち上がりは、北周溝西端が鋭角、その他は緩やかであった。

短軸は、鋭角に掘り込まれており、中段に稜を持つ箇所が多くみられた。底面は、いずれも凹凸がみられた。覆土は、５層（１～５層）確認された。混入物を含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

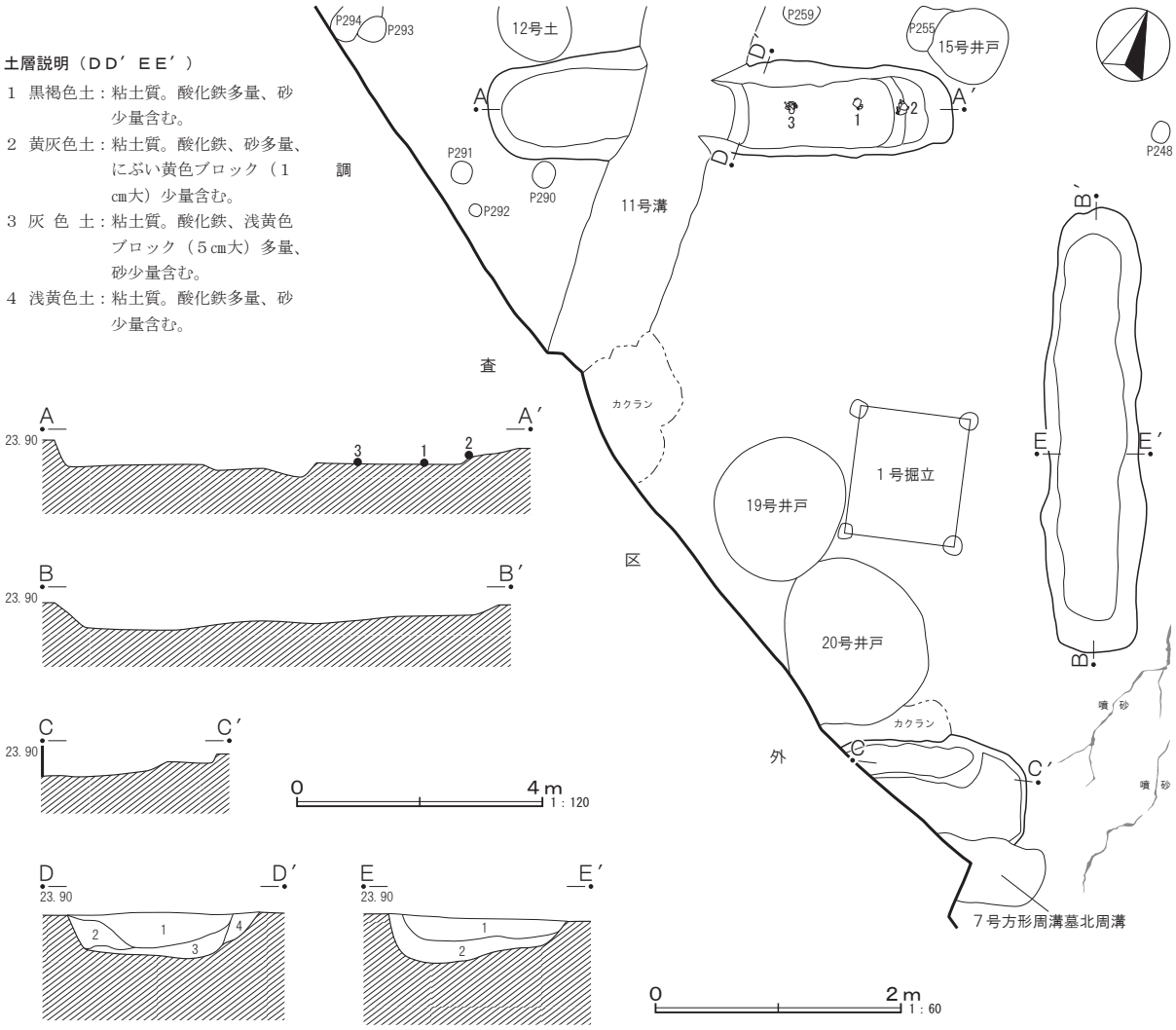
遺物は、器種不明の弥生土器、流れ込みの奈良・平安時代の土師器坏・甕、須恵器坏の小片が東周溝から出土したが、いずれも図示不可能であった。

出土遺物に時期を特定し得るものがないが、本方形周溝墓の時期は、他の方形周溝墓との位置関係などから後期初頭と思われる。

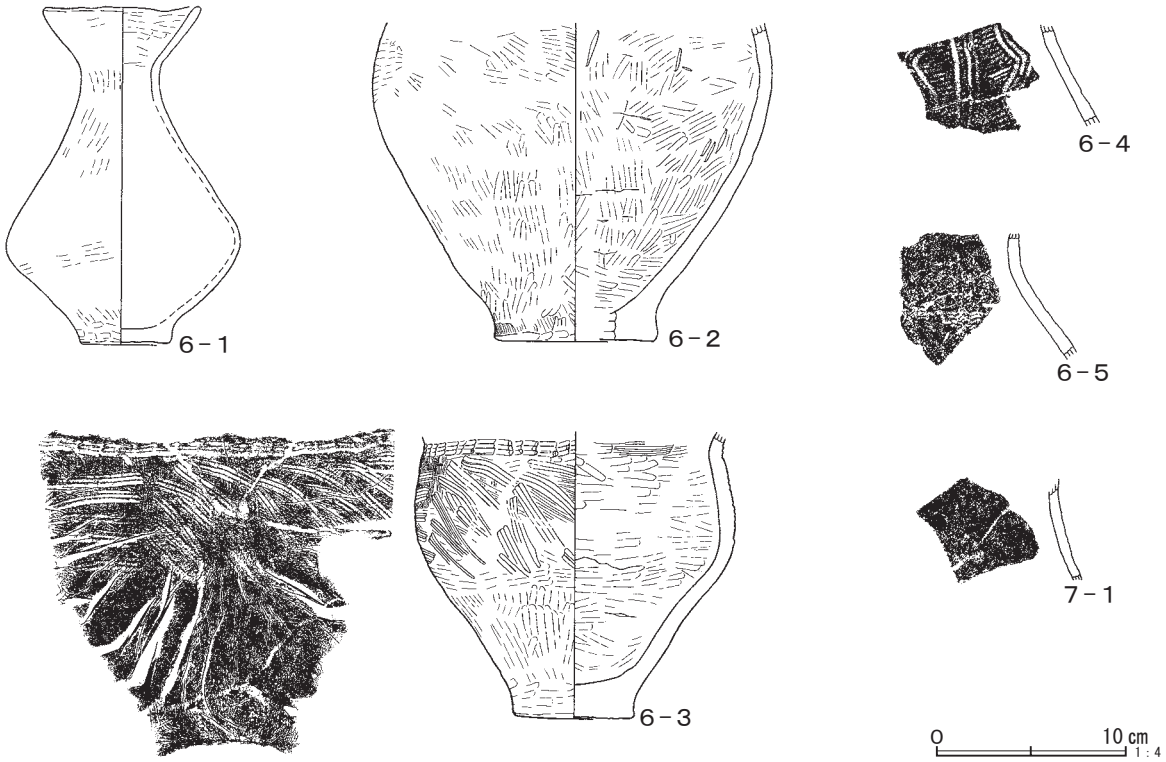
第６号方形周溝墓（第 75 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区 32 ～ 35 － 92 ～ 95 グリッドに位置する。東側に第５号方形周溝墓、南東に第７号方形周溝墓、北西に第４号方形周溝墓が位置する。

検出されたのは、東・南・北周溝であり、西周溝は調査区外にある。東・北周溝は、全形が検出されたが、南周溝は東側約 1/3 の検出であり、残りは調査区外にある。南周溝は、南東で第７号方形周溝墓の北周溝と重複しているが、2011（平成 23）年度調査Ａ・Ｂ区境に位置することから新旧関係を確認することは不可能であった。北周溝は、中央からやや西側を第 11 号溝跡に切られている。



第 75 図　第６号方形周溝墓



第 76 図　第６・７号方形周溝墓出土遺物

第 20 表　第６号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	北周溝	弥生土器　壺	8.35	17.9	4.7	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	90%	内外面摩耗顕著。
2	北周溝	弥生土器　壺	－	(16.75)	8.6	ABDEHIKN	外:にぶい黄橙　内:橙	B	胴～底90%	内外面所々摩耗顕著。胴部内面輪積痕有。
3	北周溝	弥生土器　甕	－	(15.2)	6.4	ABEHIKN	灰黄褐色	B	頸～底90%	内外面大半摩耗顕著。胴部内面輪積痕有。
4	東周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABHIKN	にぶい黄橙色	B	肩～胴上片	
5	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHIKN	外:褐　内:にぶい橙	B	頸～胴上片	内外面摩耗顕著。3号方8同一個体。

方台部は、北周溝と重複する第 11 号溝跡の他に第１号掘立柱建物跡、第 19・20 号井戸跡が位置するが、すべての遺構に切られていると思われる。方台部北西に位置する単独ピットとの新旧関係は、不明である。方台部中央西側の調査区との境付近は、攪乱を受けていた。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓と思われる。正確な規模は不明であるが、検出された周溝外縁の南北は推定で 12.7 m、方台部は 9.6 m程を測ることから東西もほぼ同様と思われる。主軸方向は、N－25°－Wを指す。検出された周溝の長さは、全形が検出された東周溝が 7.59 mを測ることから他の周溝もほぼ同様と思われる。検出された幅は、南周溝が 1.7 m程と広いが、その他は、概ね 1.5 m前後を測る。確認面からの深さは、概ね最大 0.37 m前後を測る。長軸方向の立ち上がりは、北周溝西端及び南周溝東端が鋭角であったが、その他は緩やかであった。短軸は、方台部側が鋭角、外側は緩やかに掘り込まれていた。底面は、いずれもやや凹凸がみられたが、南周溝は方台部側が一段下がる。覆土は、４層（１～４層）確認された。混入物を含む層がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第 76 図）は、弥生土器壺（６－１・２・４）、甕（６－３・５）がある。出土位置を示していないものも含め、６－４・５が東周溝、６－１～３は北周溝からの出土である。６－１～３は、残存状態が比較的良好であるが、これらも含め摩耗の著しいものが多い。

６－１・２・４は、弥生土器壺である。６－１は、栗林式系の小型壺である。無文である。口縁部

が受け口状を呈し、頸部はすぼまり、ほぼ直立する。肩部以下は逆ハの字に下り、中段より下に最大径を持つ。やや上げ底の底部は、円柱状を呈する。調整は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、外面と口縁部内面はヘラミガキ、頸部以下の内面は計測不可能であったが、ヘラナデとハケメが併用されている。６－２は、胴上部以上を欠く。胴部は倒卵形、底部は円柱状を呈する。器壁が厚い。無文である。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、胴下部と底部外面の境はヘラミガキ前に施されたハケメ、胴部内面はヘラナデが残る。胴部内面の所々に輪積痕が残る。６－４は、肩部から胴上部までの破片である。外面文様は、外面にヘラで重四角文と思われる文様が描かれており、区画内に波状文が複数垂下する。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は、横・斜位のヘラミガキである。中期後半のものであり、流れ込みと思われる。

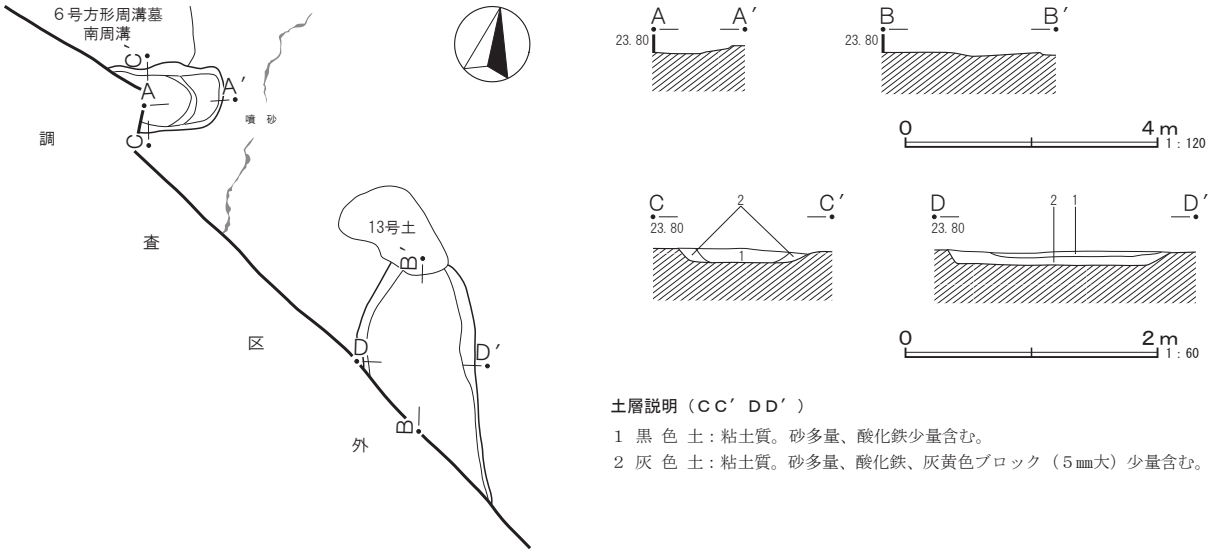
６－３・５は、弥生土器甕である。６－３は、栗林式系の小型甕である。口縁部を欠く。頸部がほぼ直立し、胴部は膨らみが小さく、中段以下は円柱状を呈する底部に向かって反りながら下る。器壁が厚い。文様は、頸部に３本一単位の竹管状工具による簾状文が巡り、胴上部から中段にかけて同一工具による斜線文が複数描かれている。調整は、頸部内面にハケメが施されている以外はヘラミガキが主体となるが、胴上部外面はヘラミガキ前に施されたハケメが残る。胴部内面は、ヘラミガキである。胴部中段以下の内面に輪積痕が残る。６－５は、頸部から胴上部までの破片である。外面文様は、頸部直下に４本一単位の櫛歯状工具による波状文が２段巡る。頸部外面と内面全面の調整は、不明である。第３号方形周溝墓出土８と同一個体である。後期初頭のものであり、流れ込みと思われる。

本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期末と思われる。

第７号方形周溝墓（第 77 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ・Ｂ区 31 ～ 33 － 95・96 グリッドに位置する。北周溝の北側立ち上がり一部がＡ区、その他はＢ区で検出された。北西に第６号方形周溝墓が位置する。

検出されたのは、東・北周溝であり、西・南周溝は調査区外にある。東周溝は、北側約 1/3 の検出



第 77 図　第７号方形周溝墓

第 21 表　第７号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	東周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIKN	明赤褐色	B	頸～胴上片	外面摩耗顕著。

であり、残りは調査区外にある。北端を第 13 号土坑に切られている。北周溝は、東端付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。第６号方形周溝墓の南周溝と重複する北側は、2011（平成 23）年度調査Ａ・Ｂ区境に位置することから新旧関係を確認することは不可能であった。

四隅に土橋を持つ方形周溝墓と思われる。正確な規模は不明であるが、主軸方向は、Ｎ－ 18°－Ｗを指すと思われる。検出された幅は、東周溝が 1.89 ｍと広いが、北周溝は１ｍ前後と狭い。確認面からの深さは、0.1ｍ程と非常に浅い。長軸方向の立ち上がりは、緩やかであり、短軸は方台部側が鋭角、外側は緩やかに掘り込まれていた。底面は、東周溝でやや凹凸がみられたが、北周溝はほぼ平坦であった。覆土は、２層（１・２層）確認された。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第 76 図）は、弥生土器甕の頸部から胴上部までの破片（７－１）のみである。東周溝から出土した。外面は、摩耗が著しいため文様の有無、調整は不明である。内面の調整は、横位のヘラミガキである。

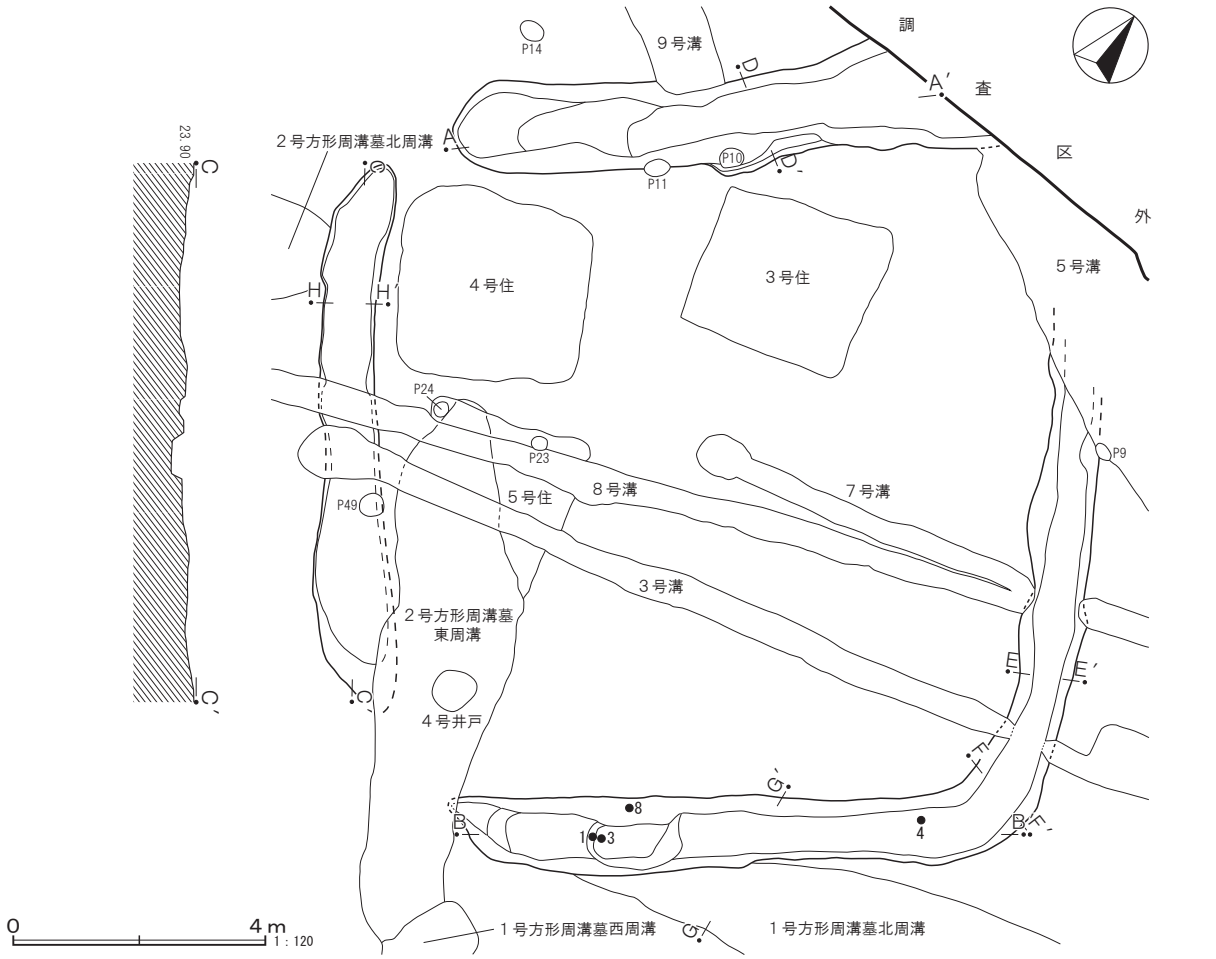
出土遺物に時期を特定し得るものがないが、本方形周溝墓の時期は、他の方形周溝墓との位置関係などから中期末と思われる。

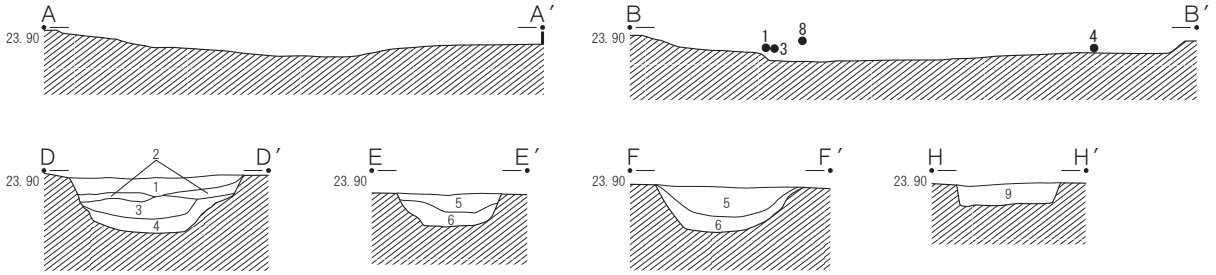
第８号方形周溝墓（第 78 図）

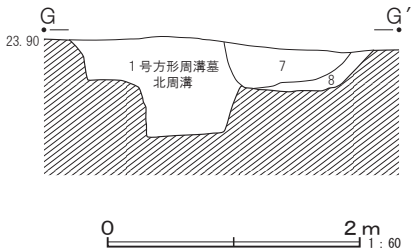
2012（平成 24）年度調査Ａ・Ｂ区 34 ～ 37 － 85 ～ 87 グリッドに位置する。東周溝と南周溝中央付近までがＢ区、その他はＡ区で検出された。南西に第２号方形周溝墓と同時期の第９号方形周溝墓、南東に第１号方形周溝墓が位置する。

他の時代に属する多くの遺構と重複する。東周溝は、北側を第５号溝跡、中央以南を第３・７・８号溝跡に切られている。西周溝は、中央付近を第３・８号溝跡に切られており、北西部で第２号方形周溝墓の北周溝、南東端付近で東周溝を切っている。なお、東側中央以南の立ち上がりは、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、新旧関係から本来は実線で示すべきものである。南周溝は、中央より西側で第１号方形周溝墓の北周溝、西端で第２号方形周溝墓の東周溝を切っている。西端についても図面上では推定ラインとして破線で示しているが、新旧関係から本来は実線で示すべきものである。北周溝は、北側立ち上がり中央付近で第９号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。北東隅付近は、調査区外にある。方台部は、周溝と重複する第３・７・８号溝跡、第１・２号方形周溝墓の他に第３～５号住居跡、第４号井戸跡が位置する。これらの遺構との新旧関係は、第１・２号方形周溝墓、第３～５号住居跡を切っており、その他の遺構に切られていると思われる。方台部と周溝の所々で重複する単独ピットとの新旧関係は、不明である。

南西及び北西隅に土橋を持ち、東・南周溝が連結する方形周溝墓であるが、北東隅付近は第５号溝跡に切られており、また調査区外にあることから周溝がコの字に巡るかは不明である。規模は、周溝外縁で東西が 12.3 ｍ、南北は 12.6 ｍ前後を測る。方台部は 10.2 ｍ前後を測る。主軸方向は、Ｎ－ 40°－Ｗを指す。周溝の幅は、北周溝が 1.5 ｍ前後とやや広いが、その他は概ね 1.05 ｍ前後を測る。確認面からの深さは、バラツキがみられた。東・南周溝は最大 0.3 ｍ前後を測るが、北周溝は 0.44 ｍと深く、西周溝は 0.16 ｍと浅い。立ち上がりは、西周溝の長軸方向と南・北周溝西端は緩やかであるが、その他は鋭角に掘り込まれていた。底面は、いずれも凹凸がみられた。覆土は、計９層（１～９層）





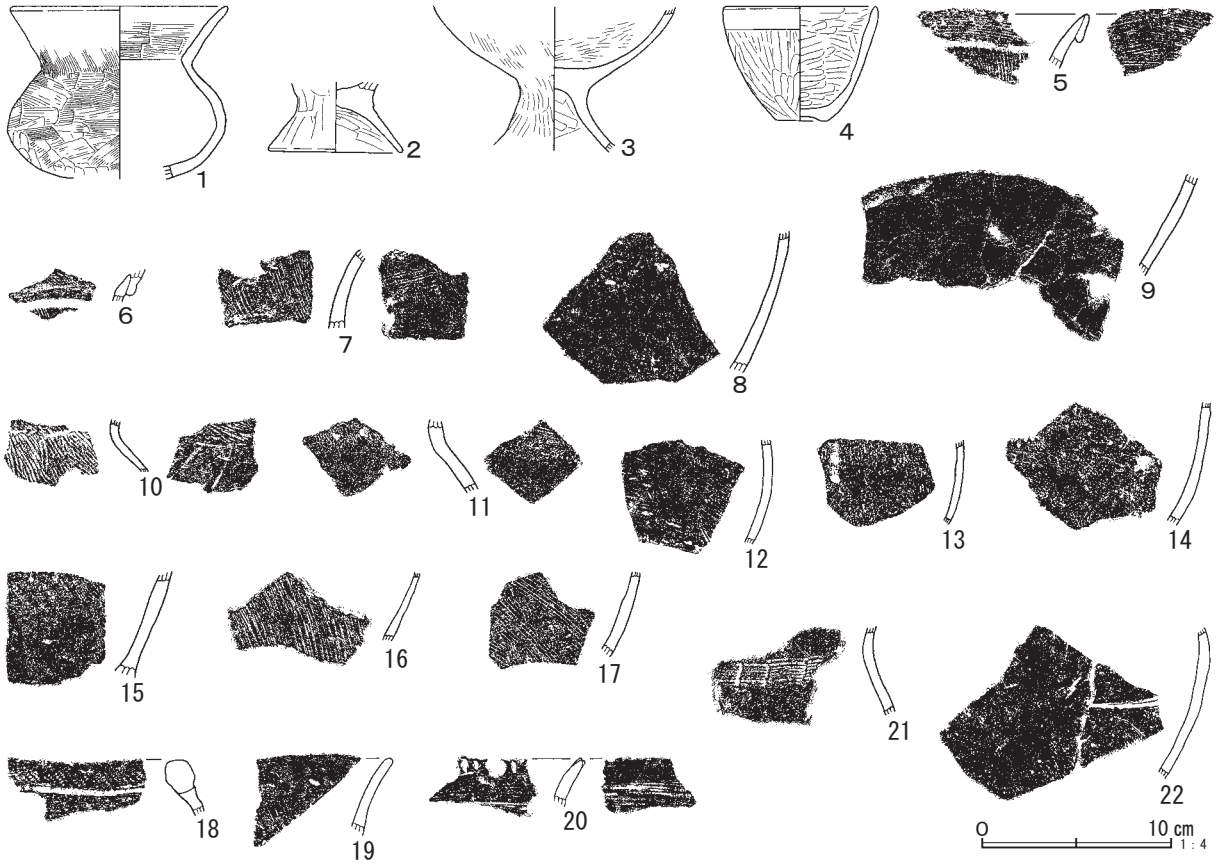


土層説明（DD′ EE′ FF′ GG′ HH′）

1 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜～2㎝大）少量含む。
3 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
4 灰 色 土：シルト質。灰黄色ブロック（1～10㎝大）多量含む。
5 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）微量含む。
6 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（2㎝大）多量含む。
7 黒 色 土：シルト質。酸化鉄多量、浅黄色ブロック（5㎝大）少量含む。
8 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、浅黄色ブロック（2㎝大）多量含む。
9 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（2～5㎝大）少量含む。

第78図　第8号方形周溝墓

確認された。深い北周溝は4層、浅い西周溝は1層、その他は2層確認され、ブロックを含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。



第 79 図　第８号方形周溝墓出土遺物

第 22 表　第８号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	南周溝	土師器　壺	11.55	(9.1)	－	ABDEHIKN	にぶい橙色	B	口～胴90%	
2	南周溝	土師器　台付甕	－	(3.7)	(7.1)	ABDHIKN	にぶい褐色	B	接～台45%	
3	南周溝	土師器　高坏	－	(7.7)	－	ABCEHIKN	灰黄褐色	B	坏～脚40%	内外面摩耗顕著。
4	南周溝	土師器　鉢	8.2	6.05	2.8	ABDHIKN	にぶい橙色	B	ほぼ完形	外面所々摩耗。
5	東周溝	土師器　壺	－	－	－	ABDKN	にぶい橙色	B	口～頸部片	
6	東周溝	土師器　壺	－	－	－	ABDHKN	外:橙　内:浅黄橙	B	口～頸部片	
7	北周溝	土師器　壺	－	－	－	ABCDHK	浅黄色	B	頸部片	
8	南周溝	土師器　壺	－	－	－	ABCDH	外:にぶい橙　内:褐灰	B	胴下部片	
9	北周溝	土師器　壺	－	－	－	ABEHKN	外:黒褐　内:にぶい褐	B	胴下部片	
10	東周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABHKN	外:黒褐　内:褐灰	B	頸～胴上片	
11	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHKN	外:黒褐　内:橙	B	頸～胴上片	内外面やや摩耗。
12	西周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIKN	外:褐灰　内:にぶい黄橙	B	胴中段片	外面一部摩耗顕著。
13	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABEHIK	にぶい褐色	B	胴中段片	外面摩耗顕著。
14	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABDIN	浅黄橙色	B	胴中～下片	内外面摩耗顕著。
15	東周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABHN	外:明赤褐　内:黒褐	B	胴下部片	
16	南周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABDHIKN	外:褐灰　内:にぶい褐	B	胴下部片	外面やや摩耗。
17	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABEHIK	外:にぶい褐　内:にぶい黄橙	B	胴下部片	
18	北周溝	縄文土器　深鉢	－	－	－	ABDHIKN	外:にぶい黄橙　内:灰黄褐	B	口縁部片	後期後。焼成前穿孔有。
19	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	褐灰色	B	口～頸部片	弥生中～後。
20	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKN	外:にぶい黄橙　内:褐灰	B	口～頸部片	弥生中。
21	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	褐灰色	B	頸～胴上片	弥生後。内外面やや摩耗。
22	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABCDHKN	外:浅黄橙　内:にぶい黄橙	B	胴中～下片	弥生中～後。外面摩耗顕著。

出土遺物（第 79 図）は、土師器壺（１・５～９）、台付甕（２・10 ～ 17）、高坏（３）、鉢（４）がある。遺物は、すべての周溝から出土した。出土位置を示していないものも含め、５・６・10・15 が東周溝、12 が西周溝、１～４・８・16 が南周溝、その他が北周溝からの出土である。この他にも流れ込みで縄文土器深鉢（18）、弥生土器甕（19 ～ 22）が出土した。19・20・22 が西周溝、21 が南周溝、18 が北周溝からの出土である。

１・５～９は、土師器壺である。１は、底部を欠くが、残存状態の良好な小型壺である。口縁部がやや外反しながら逆ハの字に開き、頸部はすぼまる。胴部は算盤玉状を呈する。最大径を口縁部に持つが、胴部中段と差がない。調整は、口縁部内外面上位が横ナデ、頸部以下の外面と口縁部下位から頸部までの内面はハケメであるが、頸部以下の外面は一部ヘラナデが併用されている。胴部内面は、計測不可能であったが、上位が横位のヘラナデ、下位は横・斜位のハケメである。５は複合口縁部から頸部まで、６は複合口縁部下位から頸部まで、７は頸部、８・９は胴下部の破片である。調整は、５が内外面ともにハケメで口縁部外面が横位、頸部は斜位、内面は横・斜位に施されている。６は、外面がハケメで口縁部が斜位、頸部は縦位に近い斜位に施されている。内面は、横位のヘラミガキである。７は、外面が斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキであるが、所々にヘラミガキ前に施された横・斜位のハケメが残る。８・９は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。ヘラミガキは８が縦位、９は横・斜位、ヘラナデは８が横・斜位、９は横位に施されている。

２・10 ～ 17 は、土師器台付甕である。２は、接合部から台部までの部位である。短い台部がハの字に開く。調整は、内外面ともにヘラナデである。10・11 は頸部から胴上部まで、12 ～ 17 は胴部中段付近から下部までに収まる破片である。調整は、外面がハケメ、内面はヘラナデが施されるものが多い。10 は外面が斜位のハケメ、内面は頸部が斜位のハケメ、以下は横位のヘラナデである。11 は、頸部の内外面がハケメであり、外面は斜位、内面は横位に施されている。胴上部は、内外面ともにヘラナデであり、外面は斜位、内面は横位に施されている。12・13・16・17 は、外面が斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。14 は、外面が斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。胎土がやや粗い。15 は、外面上位が斜位のハケメ、外面下位と内面は横位のヘラナデである。

３は、土師器高坏の坏部から脚部下位までの部位である。坏部が内湾し、脚部は外反しながら下る。調整は、外面と坏部内面がヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。

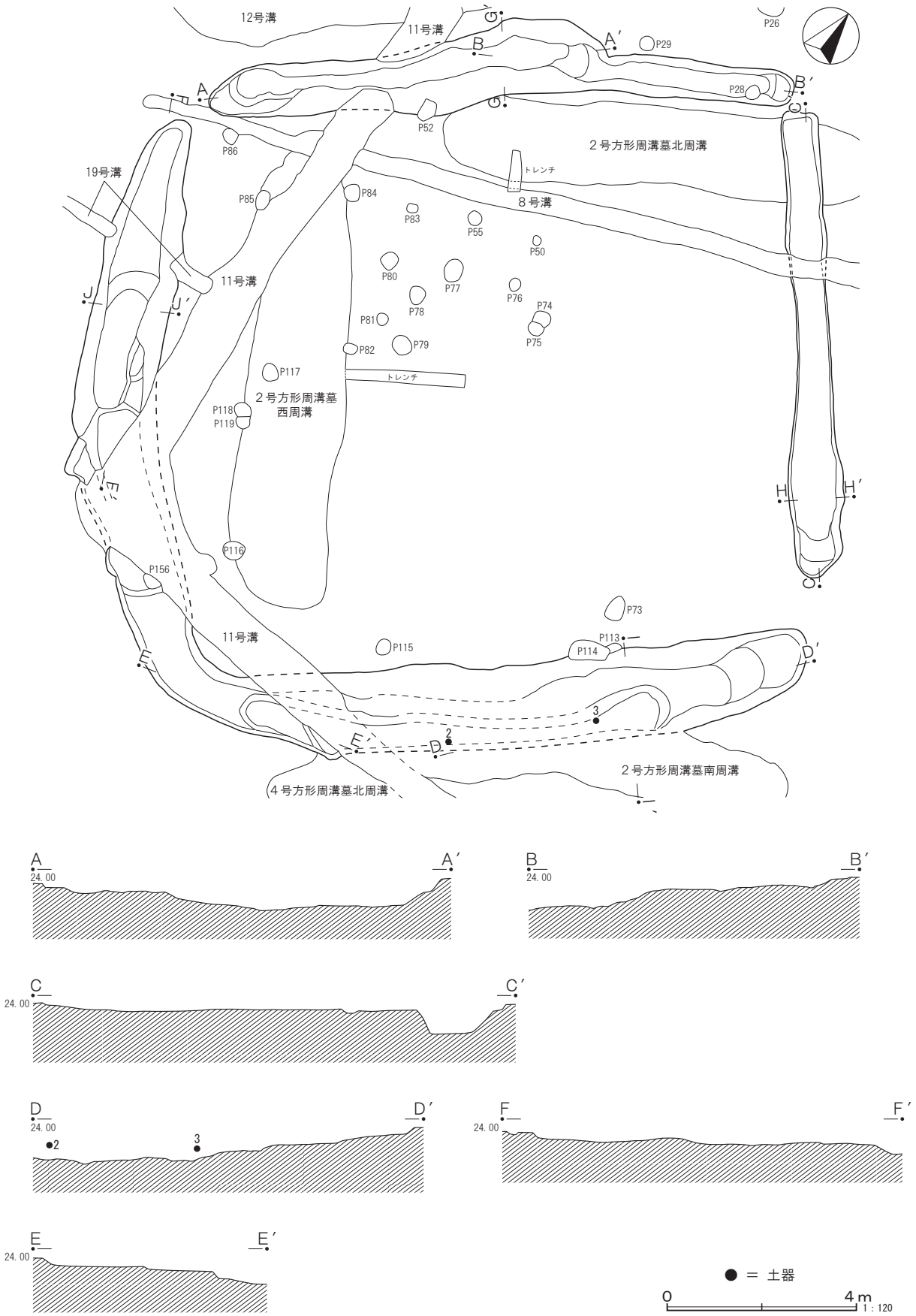
４は、ほぼ完形の土師器鉢である。器形は逆台形状を呈するが、体部下位は内湾する。底部は、上げ底である。調整は、口縁部外面が横ナデ、以下の外面と内面全面はヘラミガキである。

18 は、縄文時代後期後葉安行１式の精製深鉢の口縁部片である。内傾する口縁端部の器壁が厚く、直下に円形を呈する焼成前穿孔がみられた。外面文様は、口縁端部にＲＬ単節縄文が施文され、直下に横位の沈線が巡る。19 ～ 22 は、弥生時代中期後半から後期初頭までに収まる甕である。19・20 は口縁部から頸部まで、21 は頸部から胴上部まで、22 は胴部中段付近から下部までの破片である。無文の 19・22 以外の外面文様は、20 の口縁端部に刻みが施され、21 は頸部に８本一単位の櫛歯状工具による簾状文が巡る。調整は、19 の内外面がヘラミガキであり、口縁部外面と内面全面が横位、頸部外面は斜位に施されている。20 は、口縁部内面と外面全面が横ナデ、頸部内面は横位のハケメである。21 は、簾状文上の頸部外面が横ナデ、以下の胴上部外面と内面全面はヘラミガキであり、前者は横位、後者は横・斜位に施されている。22 は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。21・22 は、胎土がやや粗い。

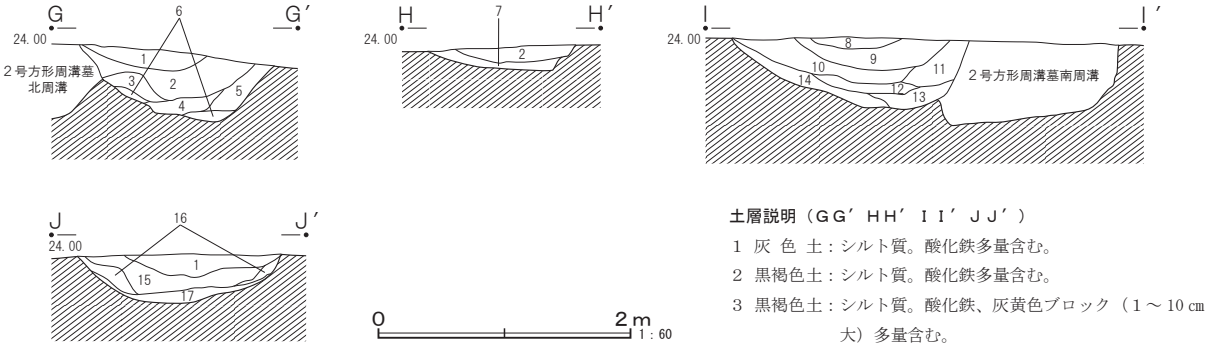
本方形周溝墓の時期は、方台部に位置する同時期の住居跡群より新しい古墳時代前期と思われる。

第９号方形周溝墓（第 80・81 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区及び 2012（平成 24）年度調査Ａ区 36 ～ 40 － 86 ～ 90 グリッドに位置



第 80 図　第９号方形周溝墓（１）



土層説明（ＧＧ′ ＨＨ′ ＩＩ′ ＪＪ′）

1 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
3 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（1～10㎝大）多量含む。
4 暗灰色土：シルト質。灰黄色ブロック（1㎝大）少量含む。
5 淡黄色土：粘土質。酸化鉄多量、砂少量含む。
6 黄灰色土：シルト質。灰黄色ブロック（2～5㎝大）多量含む。
7 褐灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5＝10㎝大）少量含む。
8 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物微量含む。
9 黒 色 土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（2㎜大）少量含む。
10 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
11 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
12 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物、灰黄色ブロック（5㎜～1㎝大）少量含む。
13 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
14 黄灰色土：シルト質。灰黄色ブロック（1～10㎝大）多量含む。
15 黒褐色土：シルト質。酸化鉄多量、灰黄色ブロック（5㎜大）少量含む。
16 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
17 黒褐色土：シルト質。酸化鉄、灰黄色ブロック（5㎝大）多量含む。

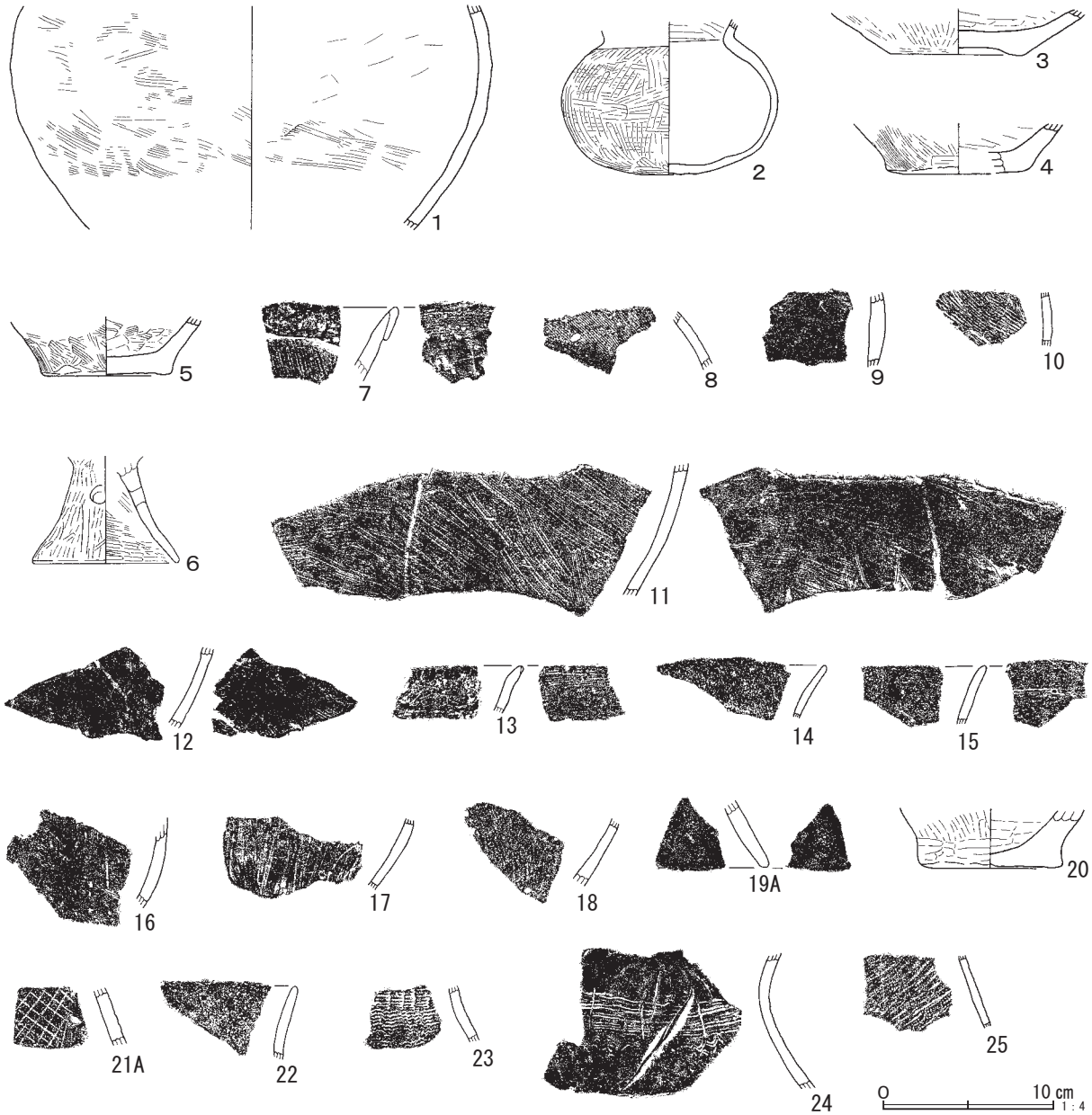
第81図　第９号方形周溝墓（２）

する。南西隅付近が2011（平成23）年度調査Ａ区、その他の大半は2012（平成24）年度調査Ａ区で検出された。同時期の方形周溝墓は、北東に第８号方形周溝墓、南西に第10号方形周溝墓が位置しており、南東には弥生時代の第４号方形周溝墓、ほぼ同所に第２号方形周溝墓が位置する。

他の時代に属する多くの遺構と重複する。東周溝は、中央北側を第８号溝跡に切られており、端部を除く北側で第２号方形周溝墓の北周溝上位を切っている。連結する西・南周溝は、西周溝北側を第19号溝跡、西周溝中央南側から南周溝西側を第11号溝跡に切られており、南周溝は、南側立ち上がり中央で第２号方形周溝墓の南周溝、西側で第４号方形周溝墓の北周溝を切っている。なお、南周溝中央付近は、図面上では推定ラインとして破線で示しているが、新旧関係から本来は実線で示すべきものである。北周溝は、中央西側を第11号溝跡、南西端を第８号溝跡に切られており、南側立ち上がりの中央付近で第２号方形周溝墓の北周溝を切っている。方台部は、周溝と重複する第８・11・19号溝跡の他に本方形周溝墓より古い第２号方形周溝墓の西周溝が位置する。また、北西部をはじめとして所々で単独ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

南西隅以外に土橋を持ち、西・南周溝がＬ字に巡る方形周溝墓である。規模は、周溝外縁で東西が16.2ｍ、南北は15ｍ前後を測る。方台部は、東西13.2ｍ、南北12ｍ前後を測る。主軸方向は、Ｎ－39°－Ｗを指す。周溝の幅は、バラツキがみられた。東周溝、南西隅付近、北周溝東側は0.9ｍ前後と狭いが、その他は概ね1.65ｍ前後を測る。確認面からの深さは、東周溝が最大0.18ｍと浅いが、その他は概ね0.4ｍ前後を測る。立ち上がりは、主に長軸方向が緩やかであるが、その他は鋭角に掘り込まれていた箇所が多い。底面は、東周溝がほぼ平坦であったが、その他は凹凸がみられた。覆土は、計17層（１～17層）と多数確認された。浅い東周溝は２層、その他は複数の土層が確認され、ブロックを含む層が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第82図）は、土師器壺（１～５・７～12）、台付甕（13～18）、高坏（19）、器台（６）があり、東周溝以外の周溝から出土した。出土位置を示していないものも含め、７・13・17が西周溝、



第 82 図　第９号方形周溝墓出土遺物

１～６・９・11・12・14・19 が南周溝、その他は北周溝からの出土である。南周溝の出土遺物は、６・９・12・14・19 が 2011（平成 23）年度調査Ａ区、１～５・11 が 2012（平成 24）年度調査Ａ区からの出土である。摩耗の著しいものが多い。この他にも流れ込みで弥生土器壺（21）、甕（20・22 ～ 25）が出土した。25 が西周溝、23 が 2011（平成 23）年度調査Ａ区検出の南周溝、その他は北周溝からの出土である。

１～５・７～ 12 は、土師器壺である。１は、胴部中段付近から下部までの部位である。半球形を呈する。11 と同一個体である。調整は、摩耗が著しいため部分的な図示であるが、外面がハケメ、内面は上位がヘラナデ、下位はハケメである。胎土に白色粒を多量含む。２は、口縁部を欠く小型壺である。頸部が逆ハの字に開き、胴部は詰まった球形を呈する。底部は、丸底である。調整は、頸部から肩部上位外面までが横ナデ、肩部以下の外面はヘラミガキであるが、ほぼ全面にヘラミガキ前に施さ

第 23 表　第９号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	南周溝	土師器　壺	－	(13.15)	－	ABDIN	にぶい橙色	B	胴部40%	内外面摩耗顕著。11同一個体。
2	南周溝	土師器　壺	－	(7.9)	－	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	頸～底100%	外面所々剥離。
3	南周溝	土師器　壺	－	(2.7)	7.9	ABDHIKN	外:明赤褐　内:にぶい黄橙	B	胴～底80%	外面摩耗顕著。
4	南周溝	土師器　壺	－	(3.0)	8.4	ABHIN	黒褐色	B	胴～底40%	内面全面、外面大半摩耗顕著。
5	南周溝	土師器　壺	－	(3.9)	(7.6)	ABEHIKN	外:にぶい橙　内:浅黄橙	B	胴～底30%	内面摩耗顕著。
6	南周溝	土師器　器台	－	(6.3)	(8.6)	ABCDHIKN	にぶい橙色	B	接～台25%	内外面所々摩耗。
7	西周溝	土師器　壺	－	－	－	ABEN	浅黄橙色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
8	北周溝	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	赤褐色	B	胴上部片	
9	南周溝	土師器　壺	－	－	－	ABHKN	外:黒褐　内:にぶい赤褐	B	胴中段片	内面やや剥離。
10	北周溝	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	外:黒褐　内:灰褐	B	胴中段片	
11	南周溝	土師器　壺	－	－	－	ABEN	外:橙　内:浅黄橙	B	胴下部片	1同一個体。
12	南周溝	土師器　壺	－	－	－	ABHIKN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	内面やや摩耗。
13	西周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABDIKN	外:灰黄褐　内:浅黄橙	B	口～頸部片	内面摩耗顕著。
14	南周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABCDHKN	明黄褐色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
15	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABDEHKN	橙　色	B	口～頸部片	内外面摩耗顕著。
16	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABHKN	灰黄褐色	B	胴中段片	内面摩耗顕著。
17	西周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABHKN	赤褐色　暗褐色	B	胴下部片	
18	北周溝	土師器　台付甕	－	－	－	ABEHKN	外:明赤褐　内:灰黄褐	B	胴下部片	
19	南周溝	土師器　高坏	－	－	－	ABH	赤　色	B	脚部片	内外面やや摩耗。外面赤彩、大半剥落。
20	北周溝	弥生土器　甕	－	(3.05)	7.3	ABHIKN	外:赤褐　内:黒褐	B	胴～底80%	弥生中～後。内外面摩耗顕著。
21	北周溝	弥生土器　壺	－	－	－	ABD	にぶい黄橙色	B	肩部片	弥生後。内外面摩耗顕著。外面無文部赤彩。
22	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIN	外:暗褐　内:橙	B	口～頸部片	弥生中～後。内外面摩耗顕著。
23	南周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHIN	外:橙　内:にぶい橙	B	頸～胴上片	弥生後。
24	北周溝	弥生土器　甕	－	－	－	ABHN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	弥生後。
25	西周溝	弥生土器　甕	－	－	－	AHIN	黒褐色	B	胴上部片	弥生中。内外面摩耗顕著。

れた粗いハケメが残る。頸部内面はヘラミガキ、以下は計測不可能であったため図示できなかったが、横位のヘラナデである。３～５は、胴下部から底部までの部位である。３・５は、上げ底である。調整は、３の外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。４は、外面がハケメ、内面はヘラナデである。５は、内外面ともにハケメである。４は、胎土がやや粗い。７は複合口縁部から頸部まで、８は胴上部、９・10 は胴部中段付近、11・12 は胴下部の破片である。11 は、１と同一個体である。外面の文様は、８の上位に無節Ｒと思われる細かい縄文が施文されている。調整は、７の口縁部外面は摩耗が著しいため不明、頸部外面は斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデであるが、内面はヘラナデ前に施された横位のハケメが所々に残る。胎土に赤褐色粒を多量含む。８は、外面下位の無文部が横位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデである。９は、外面が横・斜位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。10 は、外面が斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。11 は、外面が斜位のハケメ、内面は上位が横位のヘラナデ、下位は斜位のハケメである。１と同じく胎土に白色粒を多量含む。12 は、外面が斜位のヘラミガキであるが、ヘラミガキ前に施された縦位のハケメが一部残る。内面は、横・斜位のハケメである。８は、古墳時代前期のものであるが、本方形周溝墓には伴わない可能性がある。

13 ～ 18 は、土師器台付甕である。13 ～ 15 は口縁部から頸部まで、16 は胴部中段付近、17・18 は胴下部の破片である。文様は、13 の口縁端部外面に刻みが施されている。調整は、13 の口縁部外面が斜位、頸部外面は横位のヘラナデ、内面は口縁部が横位のハケメ、頸部は摩耗が著しいため不明である。14 は、内外面ともに摩耗が著しいため不明である。15 は、口縁部内外面が横ナデ、頸部は内外面ともにヘラナデであるが、外面は斜位、内面は横位に施されている。内面は、ヘラナデ前に施された横位のハケメが所々に残る。16 ～ 18 は、外面がハケメ、内面はヘラナデである。外面のハケメは、16 が斜位、17 は縦位、18 は斜・縦位に施されている。内面のヘラナデは、すべて横・斜位に施されている。18 は、胎土に石英を多量含む。

19 は、土師器高坏の脚部片である。調整は、外面が斜位のヘラミガキ、内面は横・斜位のヘラナデ

である。外面に赤彩が施されているが、大半が剥落している。器壁が厚い。

６は、土師器器台の接合部直下から台部までの部位である。裾部に向かって外反しながら緩やかに下る。台部中段よりやや上に円形の透かし孔がみられた。調整は、外面がヘラミガキ、台部内面は上位がハケメ、下位はヘラミガキであるが、接合部外面と台部内面下位はヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。台部外面下位の所々にヘラによる刻みがみられた。

20 ～ 25 は、弥生時代中期後半から後期初頭までに収まる土器である。21 は、弥生土器壺の肩部片である。外面の文様は、細いヘラで斜格子文が描かれている。調整は、斜格子文脇の外面無文部が縦位のヘラミガキ、内面は横位のヘラナデである。外面無文部は、赤彩が施されている。胎土が密である。20・22 ～ 25 は、弥生土器甕である。20 は、胴下部から底部までの部位である。やや上げ底で円柱状を呈する。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。器壁が厚い。壺の可能性もある。22 は口縁部から頸部まで、23・24 は頸部から胴上部まで、25 は胴上部の破片である。無文の 22 以外の外面文様は、23 の頸部が７本一単位の櫛歯状工具による簾状文、直下に同一工具による波状文が２段巡る。24 は、頸部に４本一単位の櫛歯状工具による簾状文が３段巡り、ヘラによる縦位の沈線が等間隔に垂下する。簾状文直下に同一工具による波状文が１段巡る。25 は、外面全面にＬＲ単節縄文が施文されている。調整は、22 の内外面、25 の内面は摩耗が著しいため不明であるが、その他はヘラミガキである。23 は、内面上位が横位、下位が斜位、24 の頸部上位と胴上部外面は斜位、内面は横・斜位に施されている。23・24 は、胎土がやや粗い。

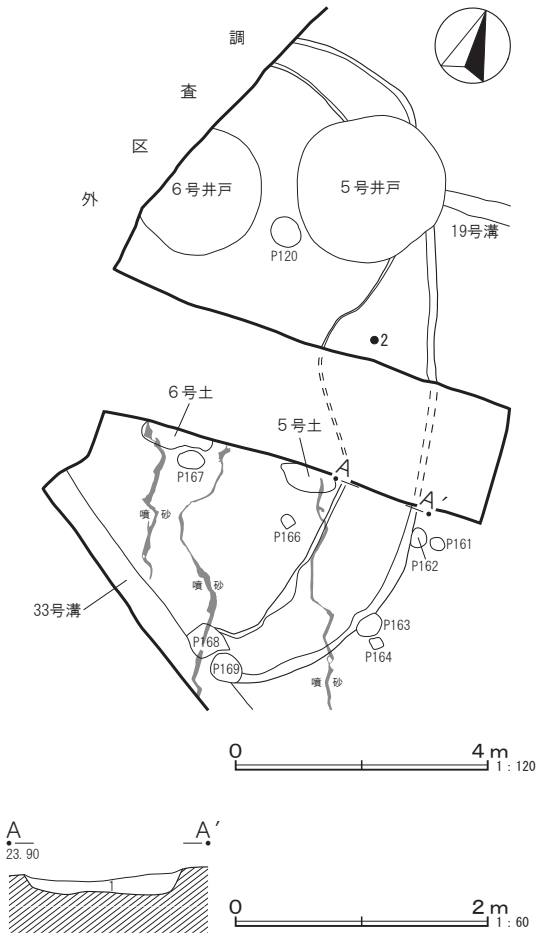
本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と思われる。

第 10 号方形周溝墓（第 83 図）

2011（平成 23）年度調査Ａ区及び 2012（平成 24）年度調査Ａ区 39・40 － 88 ～ 90 グリッドに位置する。南側約 1/3 が 2011（平成 23）年度調査Ａ区、北側約半分は 2012（平成 24）年度調査Ａ区で検出された。北東に同時期の第 10 号方形周溝墓が位置する。

検出されたのは、東と南北の東端付近の周溝である。2011（平成 23）年度調査Ａ区と 2012（平成 24）年度調査Ａ区の境付近と西側大半は、調査区外にある。方台部と周溝の北東隅付近を第５号井戸跡、南周溝の調査区との境付近を第 33 号溝跡に切られている。方台部は、第５・６号土坑、第６号井戸跡が位置するが、すべての遺構に切られていると思われる。方台部と南東隅付近で重複する単独ピットとの新旧関係は、不明である。

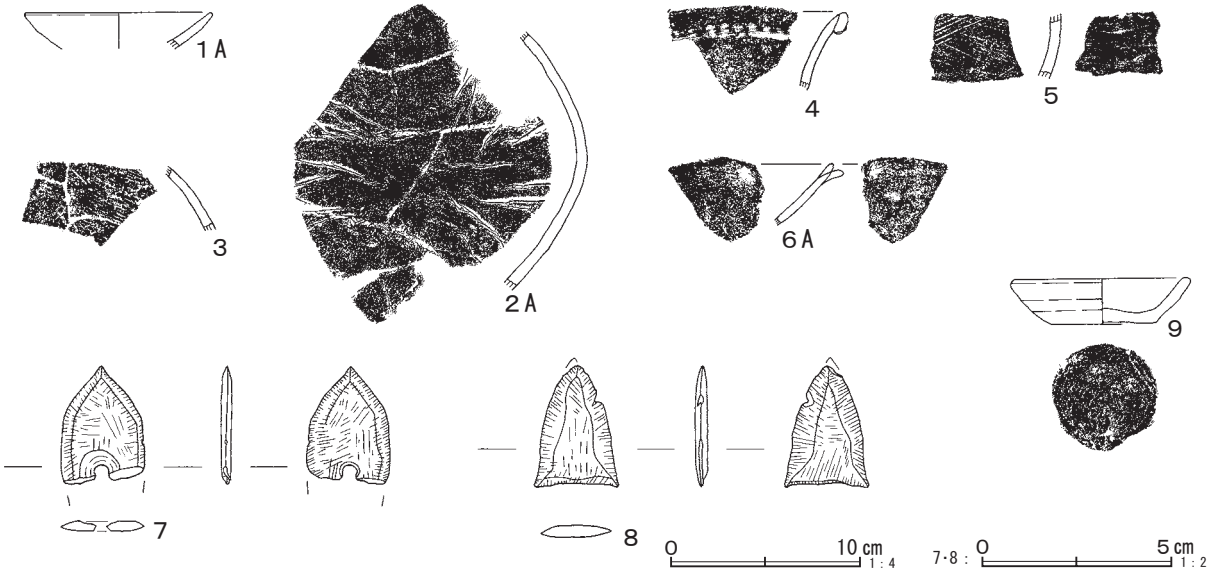
検出された範囲内では、周溝が全周する。正確な規



土層説明（ＡＡ′）

１ 灰 色 土：粘土質。酸化鉄、砂、灰オリーブ色ブロック（１～５㎝大）多量含む。

第 83 図　第 10 号方形周溝墓



第 84 図　第 10 号方形周溝墓出土遺物

第 24 表　第 10 号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土年度	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	2011年度	土師器　器台	(10.0)	(1.9)	－	ABHN	にぶい橙色	B	器受部20%	内外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
2	2012年度	土師器　壺	－	－	－	ABDN	にぶい橙色	B	胴上～下片	内外面摩耗顕著。外面赤彩、ほぼ剥落。
3	2011年度	土師器　台付甕	－	－	－	ABCHKN	橙　色	B	胴上部片	内面やや摩耗、外面半分摩耗顕著。
4	2011年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABCEHKN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	弥生後。内外面摩耗顕著。
5	2011年度	弥生土器　甕	－	－	－	ABHKN	黒褐色	B	胴中段片	弥生中～後。
6	2011年度	弥生土器　片口	－	－	－	ABEHIKN	橙　色	B	口～体部片	弥生中～後。内面摩耗。内外面赤彩、内面ほぼ、外面大半剥落。
7	2011年度	磨製石鏃	最大長(3.1)cm、最大幅2.2cm、最大厚0.25cm。重量(2.4)g。基部欠。緑泥片岩。							
8	2011年度	磨製石鏃	最大長(3.2)cm、最大幅2.2cm、最大厚0.32cm。重量(2.8)g。刃先・側面一部欠。頁岩。							
9	2011年度	土師質かわらけ	9.5	2.45	5.7	ABEHK	にぶい橙色	B	75%	中世。在地系。

模は不明であるが、検出された周溝外縁の南北は 10.35 m、方台部は９m 程を測ることから東西もほぼ同様と思われる。主軸方向は、N－17°－Wを指すと思われる。周溝の幅は、バラツキがみられた。南・北周溝は、0.75 m前後と狭いが、東周溝は中央付近が 1.8 m程と広い。確認面からの深さは、概ね 0.15 m程と浅い。立ち上がりは、鋭角に掘り込まれており、底面はやや凹凸がみられたが、概ね平坦であった。覆土は、灰色土による単一層（１層）であった。ブロックを多量含んでいたが、自然堆積と思われる。方台部にマウンドや主体部などの痕跡は、確認されなかった。

出土遺物（第 84 図）は、土師器壺（２）、台付甕（３）、器台（１）がある。２は 2012（平成 24）年度調査Ａ区、１・３は 2011（平成 23）年度調査Ａ区からの出土である。この他にも流れ込みで弥生土器壺（４）、甕（５）、片口（６）、磨製石鏃（７・８）、中世の土師質土器かわらけ（９）が出土した。すべて 2011（平成 23）年度調査Ａ区からの出土である。

２は、土師器壺の胴上部から下部までの破片である。調整は、内外面ともに摩耗が著しいため不明である。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。胎土が密である。３は、土師器台付甕の胴上部片である。調整は、外面が横位に近い斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデである。１は、土師器器台の器受部である。口縁部は、やや内湾しながら立ち上がる。調整は、内外面ともに摩耗が著しいため不明である。外面に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。

４～８は、弥生時代中期後半から後期初頭までに収まる遺物である。４は、弥生土器壺の複合口縁部から頸部までの破片である。外面文様は、複合口縁下端に竹管状工具による刻みが施されている。調整は、内外面ともにヘラミガキであり、複合口縁部外面と内面全面は横位、頸部外面は縦・斜位に

施されている。５は、弥生土器甕の胴部中段付近の破片である。外面文様は、７本一単位の櫛歯状工具による縦位の羽状文が描かれている。調整は、外面無文部が斜位のハケメ、内面は横位のハケメ後、部分的に横位のヘラミガキが施されている。６は、弥生土器片口の片口部を含む口縁部から体部までの破片である。無文である。調整は、口縁部外面が横位、体部は斜位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明である。内外面に赤彩が施されているが、内面はほぼ、外面は大半が剥落している。７・８は、磨製石鏃である。７は、刃先が尖り、以下は縦長の長方形状を呈する。基部を欠くが、中央に片側穿孔がみられた。緑泥片岩製である。８は、刃先と側面一部を欠くが、刃先から基部まで緩やかに膨らむ。基部は、中央がやや凹む。頁岩製である。

９は、中世の在地系土師質土器かわらけである。調整は、内外面がロクロナデ、底面は回転糸切り痕が残る。器壁が厚い。

本方形周溝墓の時期は、古墳時代前期と思われる。

８　不明遺構

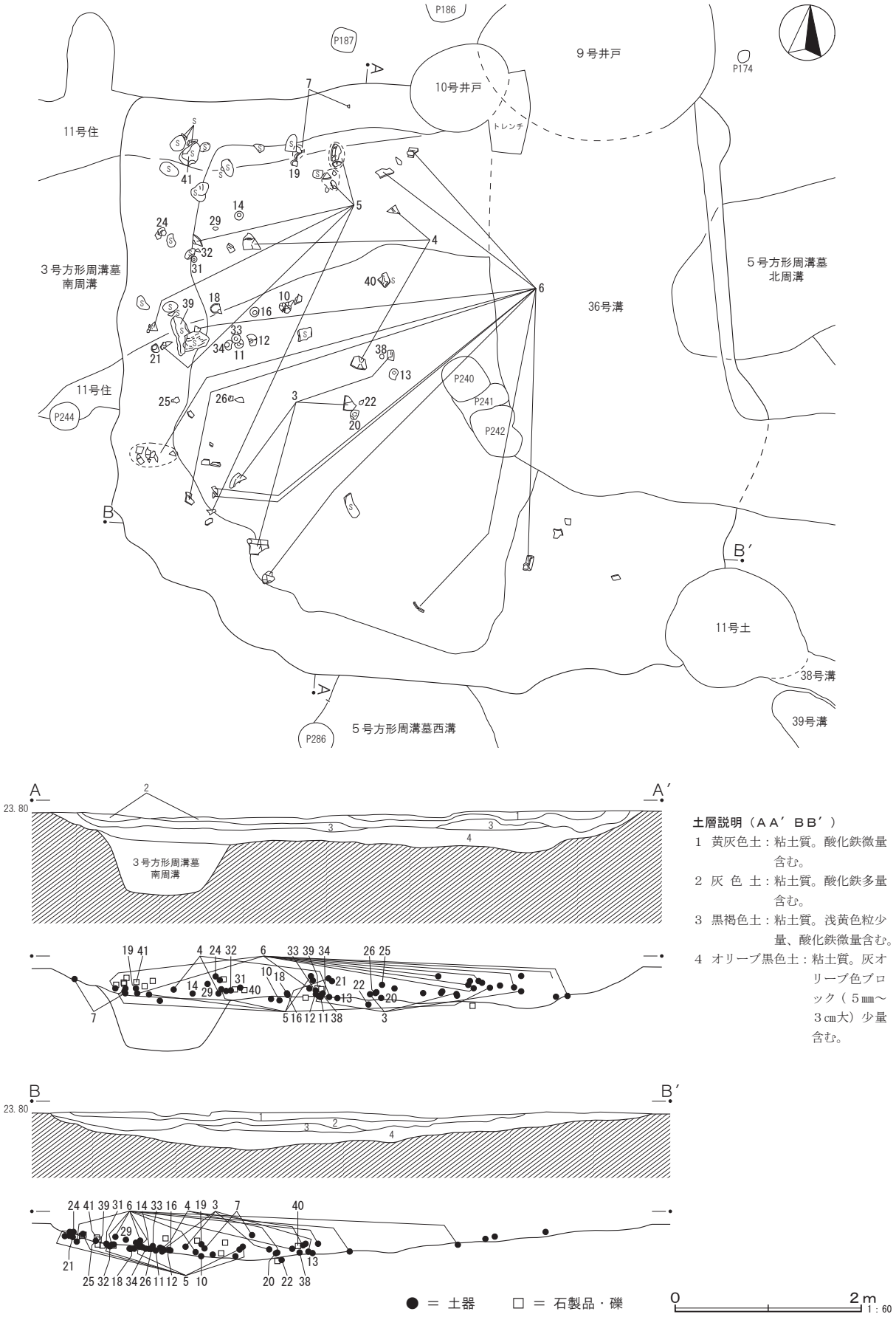
第１号不明遺構（第 85 図）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区 30 ～ 32 － 92・93 グリッドに位置する。他の時代に属する多くの遺構と重複する。東側は、立ち上がり中央付近で第５号方形周溝墓の北周溝東端付近を切っており、北東部は第 36 号溝跡と第９・10 号井戸跡に切られている。北西部は第 11 号住居跡、北側は第３号方形周溝墓の方台部と南周溝東側上位、南側立ち上がり中央付近から東側は、第５号方形周溝墓の方台部と西周溝北端を切っている。南東隅で第 11 号土坑、中央付近で単独ピット 240 ～ 242 と重複するが、新旧関係は不明である。

一辺 6.5 m前後のややいびつな方形を呈する。確認面からの深さは、最大 0.43 mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面は凹凸がみられた。覆土は、４層（１～４層）確認された。最下層にブロックを少量含んでいたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第 86・87 図）は、青磁碗（１）、瓦質土器器台（２）、土鍋（３・４）、焙烙（５・６）、土師質土器かわらけ（７～ 38）、板碑（39・40）、石製品五輪塔（41）、写真のみ掲載の鉄滓（図版 53）、被熱した礫３点（未掲載）がある。この他にも奈良・平安時代の須恵器坏（42）、瓶（43）、灰釉陶器長頸瓶（44）が出土したが、これらは第 11 号住居跡からの流れ込みと思われる。伴う遺物は、出土位置を図示していないものも含め、ほぼ全面から出土したが、特に北西部からの出土が目立つ。

１は、中国の龍泉窯系青磁碗Ｉ－３類の体部片である。内面にヘラで片切彫りの文様が描かれている。12 世紀中頃～ 13 世紀と思われる。２～６は、在地系の瓦質土器である。２は、裾部外面に突帯が２段貼り付けられている。器台としたが、火鉢の可能性もある。３・４は、土鍋である。３は底部の大半を欠くが、全形の分かる個体、４は口縁部から体部下位までの部位である。いずれも口縁部が受け口状を呈する。口縁部と体部の境がくびれて、くの字状を呈し、内面に明確な稜を持つ。体部はやや丸みを持ちながら下る。内耳は、３が対面で２つ、４は１つ確認された。いずれも調整は、口縁部内外面が回転ナデ、体部内外面はヘラナデである。３は、体部外面に煤が付着している。15 世紀後半～ 16 世紀初頭と思われる。５・６は、焙烙である。いずれも全形の分かる個体であるが、５は約半分の



土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

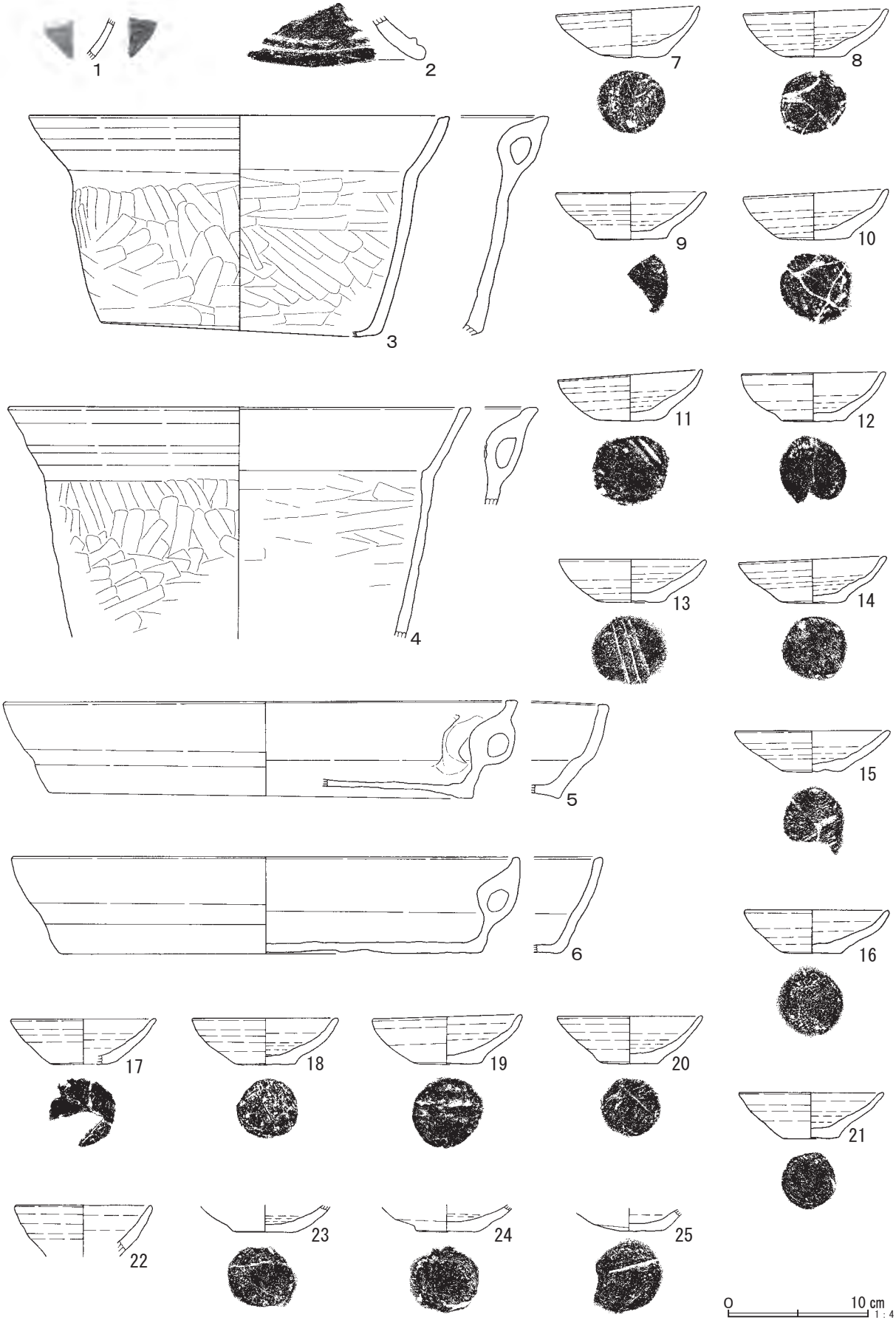
1　黄灰色土：粘土質。酸化鉄微量含む。

2　灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。

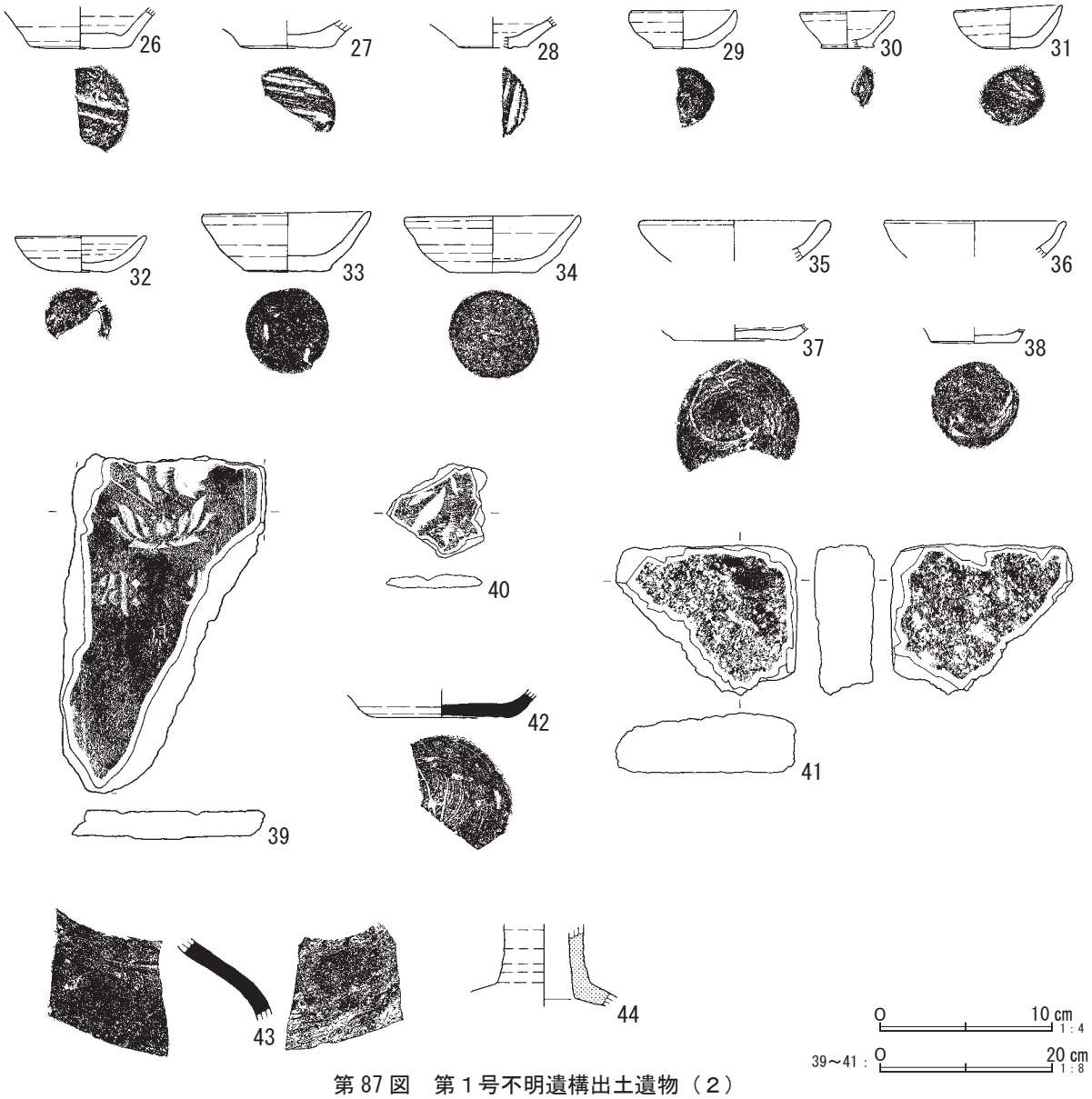
3　黒褐色土：粘土質。浅黄色粒少量、酸化鉄微量含む。

4　オリーブ黒色土：粘土質。灰オリーブ色ブロック（５㎜～３㎝大）少量含む。

第 85 図　第１号不明遺構



第 86 図　第 1 号不明遺構出土遺物（1）



第 87 図　第１号不明遺構出土遺物（２）

残存、６は残存状態が比較的良好である。いずれも口縁部が受け口状を呈し、体部との境の内外面に稜を持つ。内耳は、５がやや間隔を空けて２つ、６は対面で２つ確認された。調整は、内外面ともに回転ナデである。

７～38 は、在地系の土師質土器かわらけである。７～21・29～34 は全形の分かる個体、22・35・36 は口縁部から体部まで、23～28 は体部から底部までの部位、37・38 は底部である。７～28・33～38 は中型、29～32 は小型である。７～32 は古河公方系、その他は古河公方系ではない在地系である。中型７～28 と小型の 30 は、口縁部が受け口状を呈し、体部との境付近に緩い稜を持つ。小型の 29・31・32 は、口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。古河公方系ではない在地系 33～38 のうち、33・34 は、口縁部から体部が逆ハの字に開き、口縁部外面が凹む。35 は口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。器壁が厚い。36 は口縁端部が外反し、体部は内湾する。調整は、いずれも内外面がロクロナデであり、古河公方系は見込みに指ナデ痕がみられた。底面は、７～９・23・24・29・30・32～34・37・38 が回転糸切痕、10～17・25 は板目状圧痕、18～21・26～28・31 は回転糸切痕と板目

第 25 表　第 1 号不明遺構出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	青磁　碗	－	－	－	－	－	－	体部片	龍泉窯系。
2	瓦質土器　器台	－	－	－	ABDK	灰白色	B	台部片	在地系。火鉢の可能性有。
3	瓦質土器　土鍋	30.1	15.8	20.15	ABCHIKN	外:黒　内:黄灰	B	60%	在地系。体部外面煤付着。
4	瓦質土器　土鍋	(33.2)	(16.5)	－	ABEHIKN	外:黒褐　内:灰	B	口～体20%	在地系。体部内面大半摩耗顕著。
5	瓦質土器　焙烙	37.8	7.0	30.4	ABDHIKN	外:黒　内:にぶい黄	B	40%	在地系。
6	瓦質土器　焙烙	36.4	7.0	30.2	ABHIKN	外:黒　内:灰白	B	70%	在地系。
7	土師質かわらけ	10.3	3.7	4.7	ABEHKN	浅黄橙色	B	80%	古河公方系。外面大半摩耗顕著。
8	土師質かわらけ	10.5	3.5	4.5	ABCHK	浅黄橙色	B	60%	古河公方系。外面摩耗顕著。
9	土師質かわらけ	(10.8)	3.4	(5.1)	ABCHIK	浅黄橙色	B	20%	古河公方系。
10	土師質かわらけ	10.45	3.6	5.1	ABCHIKN	浅黄橙色	B	90%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
11	土師質かわらけ	10.4	3.7	5.2	ABCHK	浅黄橙色	B	80%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
12	土師質かわらけ	10.3	3.55	4.6	ABCHKN	浅黄橙色	B	60%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
13	土師質かわらけ	(10.5)	3.1	5.0	ABCDHK	浅黄橙色	B	90%	古河公方系。内外面やや摩耗。
14	土師質かわらけ	10.6	3.35	4.6	ABCEHIK	灰黄褐色	B	90%	古河公方系。外面摩耗顕著。
15	土師質かわらけ	(11.2)	2.95	4.5	ABCIK	浅黄橙色	B	40%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
16	土師質かわらけ	(10.4)	3.1	4.4	ABDIK	にぶい黄橙色	B	70%	古河公方系。
17	土師質かわらけ	(10.4)	3.25	4.6	ABCDK	浅黄橙色	B	40%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
18	土師質かわらけ	10.5	3.4	4.3	ABEHK	にぶい橙色	B	90%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
19	土師質かわらけ	(10.8)	3.65	5.0	ABCHK	浅黄橙色	B	80%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
20	土師質かわらけ	(10.4)	3.45	4.3	ABDHKN	灰白色	B	60%	古河公方系。
21	土師質かわらけ	(10.4)	3.3	4.0	ABCDHK	浅黄橙色	B	50%	古河公方系。
22	土師質かわらけ	(9.8)	(3.7)	－	ABIK	外:黒褐　内:にぶい黄橙	B	口～体30%	古河公方系。外面摩耗顕著。
23	土師質かわらけ	－	(1.95)	4.6	ABCDHKN	にぶい黄橙色	B	体～底50%	古河公方系。外面摩耗顕著。
24	土師質かわらけ	－	(1.95)	4.4	ABHK	灰黄褐　黒	B	体～底60%	古河公方系。内外面摩耗顕著。内面タール付着。
25	土師質かわらけ	－	(1.7)	5.0	ABDEK	灰黄色	B	体～底50%	古河公方系。内外面摩耗顕著。
26	土師質かわらけ	－	(2.4)	(5.8)	ABCDHN	黄橙色	B	体～底30%	古河公方系。
27	土師質かわらけ	－	(1.6)	(5.5)	ABCK	灰白色	B	体～底40%	古河公方系。
28	土師質かわらけ	－	(1.8)	(4.0)	ABHK	浅黄橙色	B	体～底40%	古河公方系。
29	土師質かわらけ	(6.3)	2.25	3.5	ABEHK	浅黄橙色	B	50%	古河公方系。
30	土師質かわらけ	5.5	2.15	3.1	ABCH	浅黄橙色	B	50%	古河公方系。口縁部内外面タール付着。
31	土師質かわらけ	6.35	2.45	3.3	ABDHIK	灰白　黒褐	B	95%	古河公方系。口縁部内外面タール付着。
32	土師質かわらけ	(7.7)	2.1	3.6	ABDEK	灰白色	B	40%	古河公方系。口縁部内外面タール付着。
33	土師質かわらけ	9.8	3.55	4.9	ABCHN	橙　色	B	ほぼ完形	在地系。内外面摩耗顕著。
34	土師質かわらけ	10.25	3.4	5.2	ABCHK	浅黄橙色	B	90%	在地系。内外面摩耗顕著。
35	土師質かわらけ	(11.2)	(2.4)	－	ABCHK	外:にぶい橙　内:褐灰	B	口～体45%	在地系。内外面やや摩耗。
36	土師質かわらけ	(10.6)	(2.15)	－	ABCK	浅黄橙色	B	口～体25%	在地系。内外面摩耗顕著。
37	土師質かわらけ	－	(0.95)	(7.2)	ABCIKN	にぶい黄橙色	B	底部70%	在地系。
38	土師質かわらけ	－	(0.9)	5.1	ABCDHIN	橙　色	B	底部90%	在地系。内外面摩耗顕著。
39	板石塔婆	最大長(39.5)cm、最大幅(23.95)cm、最大厚(3.2)cm。重量(5,000)g。種子下位～基部上位残。緑泥片岩。							
40	板石塔婆	最大長(10.85)cm、最大幅(11.55)cm、最大厚(2.45)cm。重量(261.0)g。蓮座一部残。緑泥片岩。							
41	石製品　五輪塔	最大長(17.5)cm、最大幅(21.1)cm、最大厚(7.0)cm。重量(1,538.0)g。半分欠。角閃石安山岩。地輪部。							
42	須恵器　坏	－	(1.65)	(8.2)	ABFN	灰　にぶい褐	B	体～底40%	奈良。南比企産。
43	須恵器　瓶	－	－	－	ABFN	灰　色	B	肩～胴上片	奈良･平安。南比企産。
44	灰釉陶器長頸瓶	－	(4.8)	－	AB	灰白色	B	頸～肩90%	平安。産地不明。

状圧痕が残る。24 は内面、30 ～ 32 は口縁部内外面にタールが付着している。すべて 15 世紀後半～ 16 世紀初頭と思われる。

39 ～ 41 は、石製品である。39・40 は、緑泥片岩製の板石塔婆である。いずれも大半を欠くが、39 は主尊種子下位付近から基部直上までの部位、40 は蓮座の一部である。41 は、角閃石安山岩製の石製品五輪塔の地輪部である。方形を呈すると思われるが、約半分を欠く。

42 ～ 44 は、奈良・平安時代の土器である。42・43 は、南比企産の須恵器である。42 は、坏の体部から底部までの部位である。体部が内湾し、底部はやや上げ底である。調整は、体部内外面がロクロナデ、底面は回転糸切後に外周ヘラ削りが施されている。43 は、瓶の肩部から胴上部までの破片である。調整は、内外面ともにロクロナデであるが、内面は下位にあて具痕が残る。44 は、灰釉陶器長頸瓶の頸部から肩部までの部位である。産地不明である。頸部がほぼ直立し、肩部は膨らむ。調整は、内外面ともにロクロナデである。

本遺構の時期は、中世と思われる。

９　遺構外出土遺物

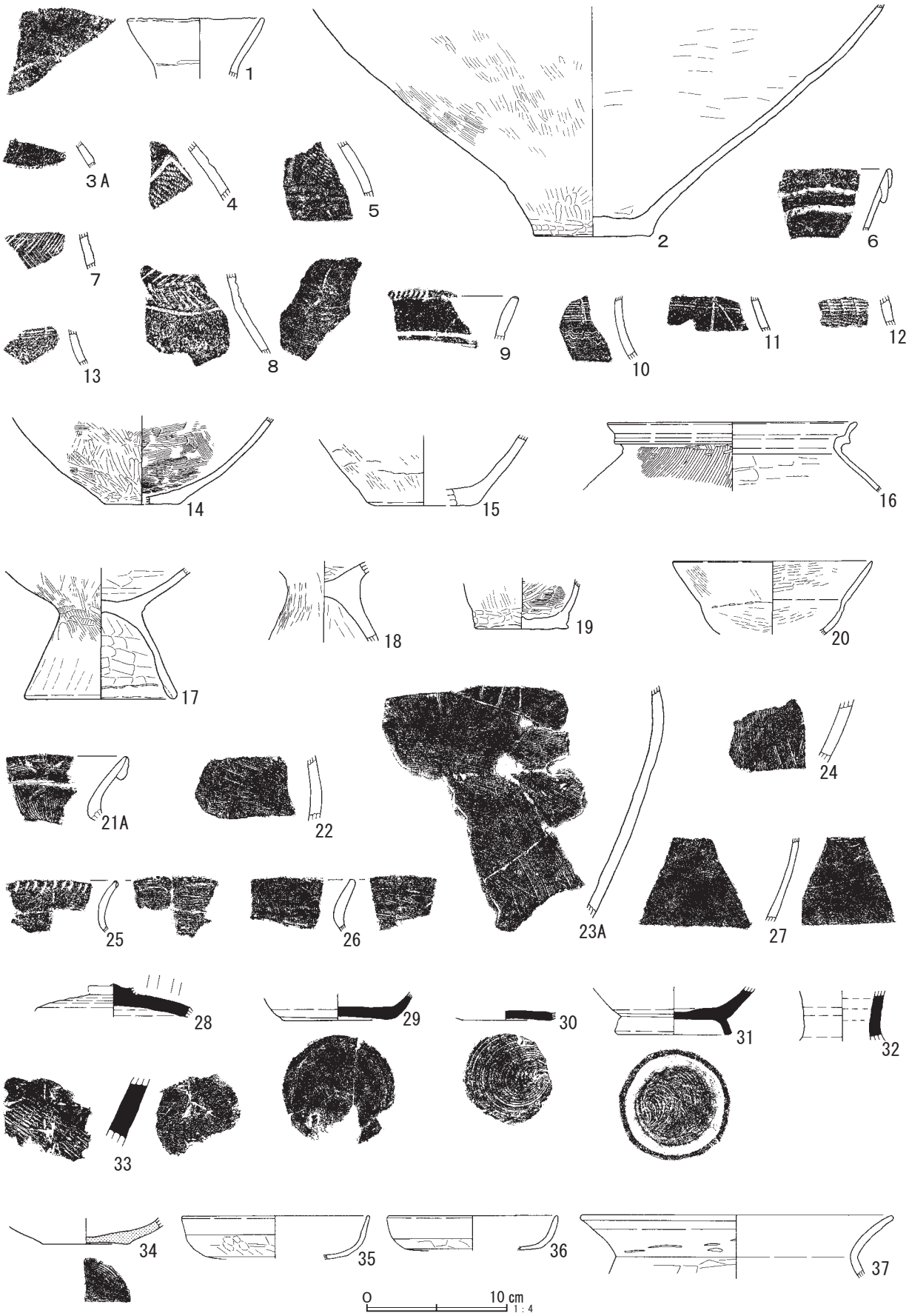
遺構外出土遺物は、弥生時代から近世まで幅広く検出されており、検出された遺構の時代・時期とほぼ合致する。出土位置は、図示不可能なものも含め、2011（平成 23）年度調査からの出土が多い。

出土遺物（第 88・89 図）は、弥生土器壺（１～８）、甕（９～ 13）、古墳時代前期の土師器壺（14・15・21 ～ 24）、台付甕（16 ～ 18・25 ～ 27）、椀（19）、鉢（20）、奈良・平安時代の須恵器蓋（28）、坏（29・30）、高台付椀（31）、長頸瓶（32）、甕（33）、灰釉陶器皿（34）、土師器坏（35・36）、甕（37）、中世の青磁碗（38 ～ 40）、陶器甕（41 ～ 43）、瓦質土器甕（44）、土師質土器かわらけ（45・46）、板石塔婆（47）、近世の瓦質土器蓋（48）、時期不明の磨石（49）、敲石（50）がある。

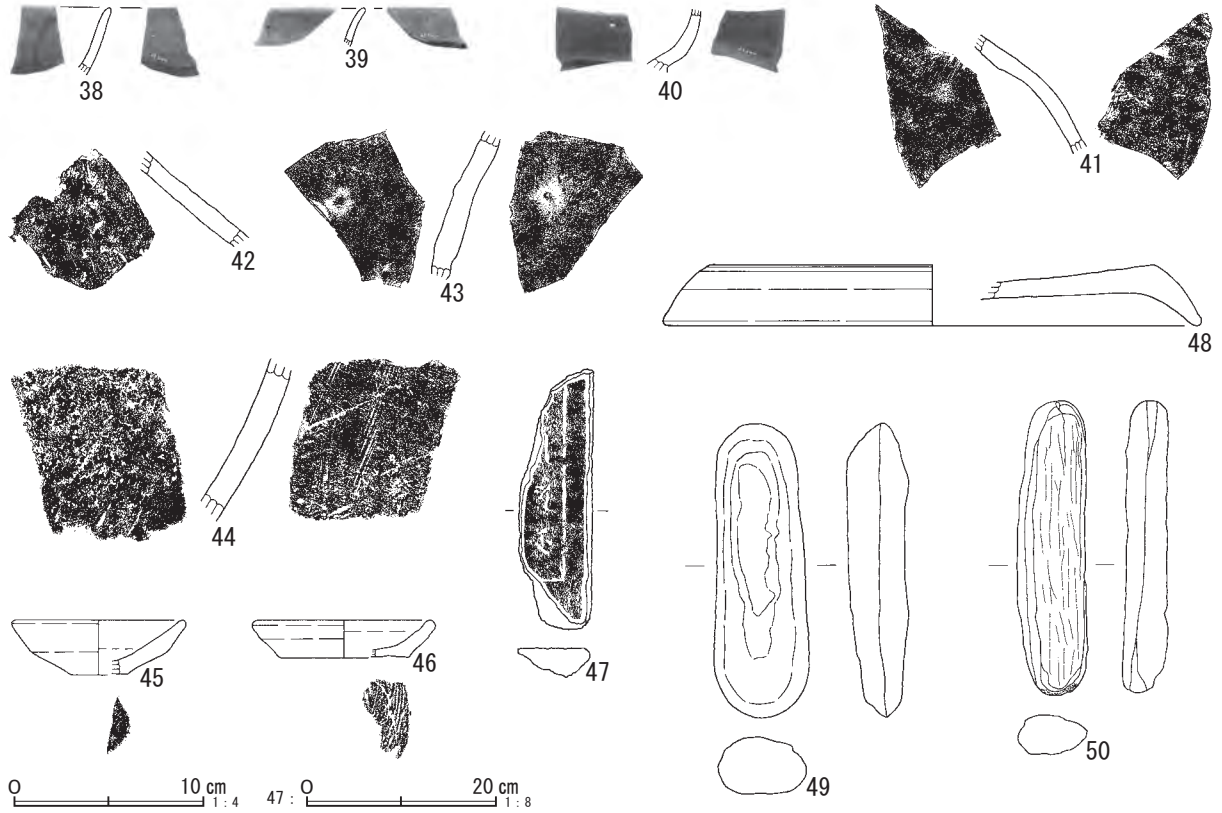
１～ 13 は、弥生時代中期後半から後期初頭までに収まる土器である。１～５は、中期後半～末の弥生土器壺である。１は、口縁部から頸部までの部位である。口縁部がやや受け口状を呈し、すぼまる頸部がほぼ直立する。無文である。調整は、内外面ともに摩耗が著しいため不明であるが、口縁部と頸部境に調整による段がみられた。２は、大型壺の胴部中段直下から底部までの部位である。胴部から底部までやや反りながら下る。底部は、円柱状を呈する。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデと思われるが、内面はハケメの可能性もある。３・４は肩部、５は胴上部の破片である。外面文様は、３が段上にＬＲ単節縄文が施文され、下に爪形の刺突列が巡る。縄文施文部に赤彩が施されているが、ほぼ剥落している。４は、ヘラで上向きの鋸歯文が描かれ、区画内にＲＬ単節縄文が充填されている。５は、ヘラで重四角文が描かれており、摩耗が著しいため定かではないが、ＲＬ単節縄文が区画内に充填、あるいは地文に施文されている。調整は、３の内面が横位のヘラナデ、４は、外面上位の無文部が斜位のヘラミガキ、内面は摩耗が著しいため不明、５の内面は斜位のヘラナデである。

６～ 13 は、後期初頭の弥生土器である。６～８は、壺である。６は複合口縁部から頸部まで、７は頸部、８は頸部から肩部までの破片である。無文の６以外の外面文様は、７が単位不明の櫛歯状工具、８はヘラで横位の羽状文が描かれており、８は羽状文下に沈線が１条巡る。調整は、６が内外面ともに摩耗が著しいため不明、７の内面は斜位のヘラナデ、８の肩部外面無文部は摩耗が著しいため不明、内面は横・斜位のハケメである。６は、口縁部外面に輪積痕が残る。９～ 13 は、甕である。９は口縁部から頸部まで、10 ～ 13 は頸部から胴上部までの破片である。外面文様は、９が口縁端部に刻みが施され、頸部に単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡る。10・12・13 は、頸部に櫛歯状工具による簾状文、直下に同一工具による波状文が巡る。櫛歯の単位は、10 が９本、12 は５本、13 は不明である。11 は、頸部に単位不明の櫛歯状工具による簾状文が巡る。調整は、９の口縁部外面が横ナデ、10 の胴上部外面無文部は斜位のハケメ、13 の内面は斜位の粗いヘラミガキである。９・10・12 の内面、11 の内外面は、摩耗が著しいため不明である。

14 ～ 27 は、古墳時代前期の土師器である。14・15・21 ～ 24 は、壺である。14・15 は、胴下部から底部までの部位である。胴下部は、14 が内湾しながら、15 は逆ハの字に下る。調整は、いずれも外面がヘラミガキ、14 の内面はハケメであるが、14 の外面はヘラミガキ前に施されたハケメが所々に残る。15 の内面は、摩耗が著しいため不明である。15 は、外面に輪積痕が複数残る。胎土が粉っぽい。21 は複合口縁部から頸部まで、22 ～ 24 は胴部中段から下部までに収まる破片である。22 ～ 24 は、同一個



第 88 図　遺構外出土遺物（1）



第 89 図　遺構外出土遺物（２）

体である。調整は、21 の複合口縁部外面が横位、以下は斜位のハケメ、内面は、全面横位のヘラミガキであるが、内面はヘラミガキ前に施された横位のハケメが一部残る。複合口縁部外面と内面全面に赤彩が施されているが、大半が剥落している。22 ～ 24 は、胴部中段付近の外面が斜位のヘラミガキ、胴下部は斜位のハケメであるが、胴部中段付近はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが所々に残り、胴下部は斜位のハケメ後、斜位のヘラミガキが部分的に施されている。23 の外面に赤彩が確認されたことから、22・24 も外面に赤彩が施されていた可能性がある。16 ～ 18・25 ～ 27 は、台付甕である。16 は、S 字甕の口縁部から胴上部までの部位である。口縁部が S 字状を呈し、胴上部は下位に向かって大きく膨らむ。調整は、口縁部内外面と頸部内面が横ナデ、胴上部外面はやや粗いハケメ、内面はヘラナデである。胎土に褐色粒を多量含む。17 は、胴下部から台部までの部位である。台部がハの字に下り、裾部内面を折り返している。調整は、接合部付近の外面がハケメである以外は内外面ともにヘラナデであるが、胴下部外面はヘラナデ前に施されたハケメが所々に残る。18 は、接合部から台部中段付近までの部位である。調整は、外面がハケメ、胴下部と台部の内面はヘラナデである。25・26 は口縁部から頸部まで、27 は胴下部の破片である。26 は、口縁端部に刻みが施されている。調整は、25 の口縁部外面が横位のヘラナデ、頸部外面と内面全面はハケメであり、前者は縦位、後者は横・斜位に施されている。26 は、外面の摩耗が著しいため不明、内面は横・斜位のハケメである。27 は、外面が斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。内面に輪積痕が一部残る。胎土に赤色粒を多量含む。19 は、椀の体部から底部までの部位である。体部がやや内湾し、径の大きい底部は円柱状を呈する。調整は、内外面ともにヘラミガキであるが、外面はヘラミガキ前に施されたハケメが一部、内面は大半が残る。椀としたが、他の器種の可能性がある。20 は、鉢である。底部を欠く。最大径を

第 26 表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土年度	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	2011年度	弥生土器　壺	(9.3)	(4.35)	－	ABDIKN	にぶい褐色	B	口～頸20%	弥生中。内外面摩耗顕著。
2	2011年度	弥生土器　壺	－	(16.45)	8.4	ABEHIKN	外:にぶい褐　内:明赤褐	B	胴～底30%	弥生中。内外面摩耗、内面剥離顕著。
3	2011年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABDIKN	灰黄色	B	肩部片	弥生中。縄文施文部赤彩、ほぼ剥落。
4	2012年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	外:にぶい褐　内:灰褐	B	肩部片	弥生中～後。内面摩耗顕著。
5	2011年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHI	外:橙　内:灰黄褐	B	胴上部片	弥生中。内外面摩耗顕著。
6	2011年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIN	橙　色	B	口～頸部片	弥生後。内外面摩耗。外面輪積痕有。
7	2011年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIK	外:灰褐　内:黒	B	頸部片	弥生後。
8	2011年度	弥生土器　壺	－	－	－	ABDIKN	にぶい黄褐色	B	頸～肩部片	弥生後。内外面摩耗顕著。
9	2011年度	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	弥生後。内外面摩耗顕著。
10	2011年度	弥生土器　甕	－	－	－	ABHI	灰褐色	B	頸～胴上片	弥生後。内面摩耗顕著。
11	2011年度	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIK	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	弥生後。内外面摩耗顕著。
12	2011年度	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHKN	外:明赤褐　内:暗褐	B	頸～胴上片	弥生後。内外面摩耗顕著。
13	2011年度	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	外:浅黄　内:黒褐	B	頸～胴上片	弥生後。外面摩耗顕著。
14	2011年度	土師器　壺	－	(6.3)	(5.4)	ABDHIKN	にぶい橙色	B	胴～底15%	古墳前。内外面所々摩耗。
15	2012年度	土師器　壺	－	(5.05)	(8.0)	ABDEHIM	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	古墳前。内外面摩耗。外面輪積痕有。
16	2012年度	土師器　台付甕	(17.8)	(4.95)	－	ABDHKN	灰黄色	B	口～胴20%	古墳前。胴上部内面やや摩耗。
17	2011年度	土師器　台付甕	－	(9.45)	10.9	ABEHIKN	橙　色	B	胴～台80%	古墳前。胴部内面、外面全面大半摩耗。
18	2012年度	土師器　台付甕	－	(5.75)	－	ABDEIN	外:橙　内:黒	B	接～台80%	古墳前。内外面摩耗顕著。
19	2012年度	土師器　椀	－	(3.7)	6.7	ABCDHIK	外:灰黄褐　内:にぶい黄橙	B	体～底60%	古墳前。
20	2012年度	土師器　鉢	(14.2)	(5.4)	－	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～体20%	古墳前。内外面摩耗。外面輪積痕有。
21	2012年度	土師器　壺	－	－	－	ABDHIKN	浅黄橙色	B	口～頸部片	古墳前。内外面赤彩、大半剥落。
22	2011年度	土師器　壺	－	－	－	ABDEHIKN	外:黒褐　内:にぶい黄橙	B	胴中段片	古墳前。内面やや摩耗。23・24同一個体。
23	2011年度	土師器　壺	－	－	－	ABCDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴中～下片	古墳前。内面大半剥離。外面赤彩。22・24同一個体。
24	2011年度	土師器　壺	－	－	－	ABEHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	古墳前。22・23同一個体。
25	2012年度	土師器　台付甕	－	－	－	ABEN	橙　色	B	口～頸部片	古墳前。外面摩耗顕著。
26	2011年度	土師器　台付甕	－	－	－	ABCEHIKN	橙　色	B	口～頸部片	古墳前。
27	2011年度	土師器　台付甕	－	－	－	ABCDHN	外:黒褐　内:橙	B	胴下部片	古墳前。内面輪積痕有。
28	2011年度	須恵器　蓋	－	(2.2)	－	ABCDHN	灰黄色	C	天～体40%	奈良・平安。南比企産。
29	2011年度	須恵器　坏	－	(1.9)	(7.1)	ABDFN	灰黄色	B	体～底80%	奈良。南比企産。
30	2012年度	須恵器　坏	－	(0.7)	(6.4)	ABCDF	灰黄色	A	底部90%	奈良・平安。南比企産。
31	2011年度	須恵器高台付椀	－	(3.4)	8.3	ABDHLN	灰黄色	B	体～高80%	平安。末野産。
32	2011年度	須恵器　長頸瓶	－	(3.55)	－	ABFHN	灰　色	B	頸部70%	奈良・平安。南比企産。内外面自然釉付着。
33	2012年度	須恵器　甕	－	－	－	ABFHN	灰　色	B	胴下部片	奈良・平安。南比企産。外面剥離顕著。
34	2011年度	灰釉陶器　皿	－	(1.85)	(6.4)	ABN	灰白色	B	体～底25%	平安。産地不明。外面トチン付着。
35	2011年度	土師器　坏	(13.4)	(3.1)	(10.2)	ABHIKN	橙　色	B	20%	奈良。
36	2011年度	土師器　坏	(12.1)	(2.5)	(9.8)	ABHKN	橙　色	B	20%	奈良。
37	2011年度	土師器　甕	(22.3)	(4.5)	－	ABDEHK	外:にぶい橙　内:橙	B	口～胴20%	奈良。
38	2011年度	青磁　碗	－	－	－	－	－	－	口～体部片	中世。龍泉窯系。
39	2011年度	青磁　碗	－	－	－	－	－	－	口縁部片	中世。龍泉窯系。
40	2011年度	青磁　碗	－	－	－	－	－	－	体部片	中世。龍泉窯系。
41	2011年度	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	肩～胴上片	中世。常滑系。
42	2012年度	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	肩部片	中世。常滑系。
43	2011年度	陶器　甕	－	－	－	－	－	－	胴下部片	中世。常滑系。
44	2012年度	瓦質土器　甕	－	－	－	AHIKN	明赤褐色	B	胴下部片	中世。在地系。
45	2011年度	土師質かわらけ	(9.2)	2.9	(3.0)	ABCDKN	浅黄橙色	B	30%	中世。古河公方系。
46	2012年度	土師質かわらけ	(9.7)	2.0	(6.9)	ABCHKN	浅黄橙色	B	20%	中世。在地系。
47	2011年度	板石塔婆	最大長(27.0)cm、最大幅(7.8)cm、最大厚(3.05)cm。重量(923.0)g。大半欠。緑泥片岩。							
48	2012年度	瓦質土器　蓋	(28.4)	(3.2)	(23.2)	ABEK	橙　色	B	15%	近世。在地系。
49	2011年度	磨　石	最大長15.5cm、最大幅5.05cm、最大厚3.25cm。重量364.0g。完形。片岩。							
50	2012年度	敲　石	最大長15.55cm、最大幅3.65cm、最大厚2.35cm。重量203.0g。完形。片岩。							

持つ口縁部が逆ハの字に大きく開き、体部との境がすぼまる。体部は半球形を呈する。調整は、内外面ともにヘラミガキである。口縁部と体部の外面境に輪積痕が残る。

28 ～ 37 は、奈良・平安時代の土器である。28 ～ 33 は、須恵器である。31 のみ末野産、その他は南比企産である。28 は、蓋である。つまみを含む天井部付近の部位である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、外面は回転ヘラ削りが施されている。29・30 は、坏である。29 は体部から底部までの部位、30 は底部である。29 の体部内外面の調整は、ロクロナデである。底面は、29 が回転糸切り後外周ヘラ削りが施されており、30 は回転糸切り痕を残す。31 は、高台付椀である。口縁部を欠く。高台がハの字に開く。調整は、内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切り痕を残す。器壁がやや厚い。32 は、長頸瓶の頸部である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、両面に自然釉が付着している。

33 は、甕の胴下部片である。調整は、外面がタタキ、内面は横位のヘラナデであるが、所々にあて具痕が残る。

34 は、灰釉陶器皿である。口縁部を欠く。産地不明である。調整は、内外面ともにロクロナデであり、底面は回転糸切り痕を残す。体部外面にトチンが一部付着している。

35 ～ 37 は、土師器である。35・36 は、坏である。浅身で口縁部の開きが小さく、体部は内湾する。いずれも底部中央付近を欠くが、平底に近い。調整は、口縁部内外面が横ナデ、体部と底部外面はヘラ削りであるが、35 は体部外面に指オサエも施されている。いずれも器壁が薄い。37 は、長胴甕の口縁部から胴上部までの部位である。やや短い口縁部がくの字状を呈し、上位に稜を持つ。調整は、口縁部内外面が横ナデ、胴上部外面はヘラ削り、内面はヘラナデである。口縁部外面にヘラによる刻みが複数みられた。

38 ～ 47 は、中世の遺物である。38 ～ 40 は、中国龍泉窯系の青磁碗である。38 は、Ｉ－５類の口縁部から体部までの破片である。外面に片切彫りによる蓮弁文が描かれている。13 世紀代と思われる。39 は、外反する口縁部片である。15 世紀前半～ 16 世紀前半と思われる。40 は、体部付近の破片である。高台部が僅かに残る。41 ～ 43 は、常滑系陶器甕である。41 は肩部から胴上部まで、42 は肩部、43 は胴下部の破片である。41 は、外面に縦長の格子文が押印されている。44 は、在地系瓦質土器甕の胴下部片である。外面に焼成時の黒斑、内面に櫛歯状工具による斜位の調整痕が残る。45・46 は、在地系の土師質土器かわらけである。45 は、古河公方系である。口縁部が受け口状を呈し、体部との境付近に緩い稜を持つ。15 世紀後半～ 16 世紀初頭と思われる。46 は、浅身で口縁部から体部が短く、逆ハの字に開く。底径は、45 が小さく、46 は大きい。調整は、いずれも内外面がロクロナデ、底面は回転糸切痕が残る。器壁が厚い。47 は、緑泥片岩製板石塔婆の基部直上の破片である。供養者名が刻まれているが解読不可能である。

48 は、近世の瓦質土器蓋である。つまみを欠く。調整は、口縁部から体部までがロクロナデ、体部と底部の境付近は回転ヘラ削り、つまみ周囲は回転ヘラナデが施されている。

49・50 は、時期不明の石器である。49 は磨石、50 は敲石である。いずれも片岩製で完形である。50 は片端に敲打痕がみられた。

Ⅴ　調査のまとめ

今回報告する調査地点は、遺跡範囲北西部に位置する。本遺跡の報告は８回目であり、上之土地区画整理地内での報告は４回目となる。本遺跡は、縄文時代後期から近世までほぼ絶え間なく続く複合遺跡であるが、上之土地区画整理地内の調査では、これまで古墳時代前期、奈良・平安時代、中世、近世の４つが確認されていた。本報告の新たな成果としては、上之土地区画整理地内では初となる弥生時代及び古墳時代前期の方形周溝墓が検出されたこと、そして遺構の検出はなかったが、縄文土器が出土したことなどが挙げられる。他の時代については、過去の成果をほぼトレースするものと言えるが、いずれも興味深い成果が得られた。従って、ここでは遺構・遺物が確認された各時代について簡潔に述べてみたい。

弥生時代について

検出された遺構は、方形周溝墓７基である。出土遺物は土器のみであるが、出土遺物のない第５号方形周溝墓以外は、時期を特定し得るものが出土した。時期は、中期末と後期初頭に分けられ、前者は西側に位置する第２・４・６・７号方形周溝墓、後者は東側の第１・３号方形周溝墓が該当し、時期によって東西に列で分かれることが判明した。出土遺物のない第５号方形周溝墓については、東側に位置することを重視して第１・３号方形周溝墓と同じく後期初頭と判断した。従って、弥生時代の方形周溝墓は、西から東の順に構築されたと思われる。なお、第１号方形周溝墓では、南周溝から甕を中心に多数の土器が破砕した状態で出土したが、これについては、埋葬に際し、何らかの儀式が行われたことが窺える。

弥生時代の方形周溝墓は、本報告地点南東で実施された未報告の 2017（平成 29）年度及び 2018（平成 30）年度調査でも検出されていることから本報告の調査区南東に位置する第 41・43 号溝跡は、方形周溝墓になる可能性が高い。これらの方形周溝墓は、本遺跡南側に隣接する前中西遺跡の弥生時代集落の墓域と考えられる。

古墳時代前期について

検出された遺構は、住居跡 10 軒、溝跡３条、土坑１基、方形周溝墓３基である。すべて調査区中央付近から北側に位置する。住居跡と方形周溝墓が同一箇所に位置するものがあり、新旧関係については切り合いを明確に把握できていないが、住居廃絶後に方形周溝墓が構築されたと考えられる。

古墳時代前期については、既報告（熊谷市教育委員会 2020）において居住域だけでなく墓域としても土地利用されていたこと、そして前中西遺跡や西側に隣接する藤之宮遺跡でも多数の遺構・遺物が確認されていることから周辺一帯にはいくつかのグループに分かれて集落が形成されていたことを述べたが、本報告ではその見解を裏付ける成果が得られた。

奈良・平安時代について

検出された遺構は、住居跡１軒、溝跡 28 条、土坑３基、井戸跡１基である。出土遺物が少なく、また時期を特定し得るものが少ないことから各遺構の詳細な時期を把握できていないものが多いが、同時代の集落は、本報告北側の既報告地点（熊谷市教育委員会 2007）において多数確認されており、中心はそちらにあると思われる。

本報告では、住居跡は１軒のみの検出であり、溝跡が多数検出されていること、本報告南東で実施された未報告の 2017（平成 29）年度及び 2018（平成 30）年度調査では、住居跡が検出されていないことなどを考慮すると、本報告地点の奈良・平安時代は、集落の外縁にあたることは間違いないと思われる。

中世について

本遺跡の中世については、在地の武士である成田氏に関連する遺構・遺物が多数確認されている。第Ⅱ章でも述べたとおり、成田氏館跡の南側に位置する本遺跡では、熊谷市教育委員会及び公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が過去に実施した調査において遺構・遺物が多数確認されており、本報告東側に隣接する既報告地点（熊谷市教育委員会 2020）では、約 14,000 枚を数える大量の埋蔵銭をはじめ、遺構・遺物が多数検出されている。

本報告の中世は、室町時代と戦国時代の遺構・遺物が確認された。検出された遺構は、溝跡２条、井戸跡 12 基、不明遺構１基である。内訳は、室町時代が溝跡１条、井戸跡６基、不明遺構１基、戦国時代は溝跡１条、井戸跡１基であり、井戸跡５基は不明である。具体的な時期は、出土遺物から室町時代が 15 世紀後半～ 16 世紀初頭、戦国時代は 16 世紀末～ 17 世紀前半頃が主体になると思われる。中世の遺構は、時期不明や中世以降としたものがあることから、検出数がさらに増える可能性がある。

室町時代については、出土した土師質土器かわらけの７割程を古河公方系が占めていることから本報告地点一帯は、古河公方方の拠点であった可能性が高い。また、第 19・20 号井戸跡では、山内上杉系と古河公方系のかわらけが共伴しており、このことは争いを繰り返していた両者の当時の関係を示す大変貴重な事例と言える。不明遺構としたものについては、遺物の出土状況からみると何かしらの儀式が行われたことが窺えるが、その性格については、やはり不明と言わざるを得ない。また、時期不明とした多数のピットは、その多くが柱筋を捉えられなかった掘立柱建物跡ないし柵列跡になる可能性があり、出土遺物の内容を加味すると、古河公方方の館跡の存在が想定される。

近世について

検出された遺構は、溝跡２条、井戸跡３基であるが、中世同様、時期不明とした遺構に該当するものがあるかもしれない。また、ピットについても近世のものが含まれる可能性がある。

既報告（熊谷市教育委員会 2020）でも述べたとおり、近世の遺構は、本報告北側に位置する寺院、東光寺に関連すると思われる。東光寺は、医王山瑠璃院と号し、成田氏の菩提寺である竜淵寺の末寺であり、寛永十年（1634）の創建とされている。近世の遺構は、本報告東側に隣接する既報告地点（熊谷市教育委員会 2020）や西側に隣接する未報告の 2016（平成 28）年度調査においても検出されているが、これらはすべて東光寺に関連すると思われる。

最後に遺物のみ検出された縄文時代と古墳時代後期について述べる。縄文時代の遺物は、第４号方形周溝墓で後期後葉の高井東式、第８号方形周溝墓で高井東式に続く後期後葉安行１式の精製深鉢の口縁部片が出土している。縄文時代後・晩期の遺構・遺物は、本遺跡範囲北東部において多数確認されているが、北西部で遺物が出土したのは今回が初となる。本報告地点周辺では、これまで縄文時代の遺構・遺物が確認されたことはなかったが、今回遺物が出土したことにより遺構が所在する可能性が高まった。

古墳時代後期の遺物は、第 13 号井戸跡から須恵器高坏の接合部、第 17 号井戸跡から須恵器瓶の口縁部片、第 20 号井戸跡から円筒埴輪の胴部片が出土している。これらの遺物については、本遺跡とほぼ同所に所在する上之古墳群からの影響と思われるが、本報告地点では同時期の遺構は皆無であり、本報告南東で実施された未報告の 2017（平成 29）年度及び 2018（平成 30）年度調査においても確認されていないことから古墳群が本報告地点までは広がっていないことがほぼ確定した。上之古墳群では、現在まで確認例が 4 基と少ないが、本古墳群が小規模な群集墳であったことは、本報告も含めた周辺における調査成果から再認識することが出来た。

以上、紙数の都合もあり、簡潔に述べた。本報告地点については、調査から十数年経過してしまった。十分な報告が出来たとは言い難いが、本書が今後熊谷市の埋蔵文化財資料として活用していただけたら幸いである。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001『諏訪木遺跡』
2013『上之古墳群・諏訪木遺跡』
2016『前中西遺跡Ⅹ』
熊谷市教育委員会　1979『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』
1981『鎧塚古墳』
1983『めづか』
2002『北島遺跡』
『前中西遺跡Ⅱ』
『中条氏館跡』
2003『前中西遺跡Ⅲ』
2007『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第２号墳』
2008『藤之宮遺跡』
2009『前中西遺跡Ⅳ』
2010『西城切通遺跡』
『前中西遺跡Ⅴ』
2011『前中西遺跡Ⅵ』
『円山遺跡』
2012『前中西遺跡Ⅶ』
2013『前中西遺跡　西別府館跡　王子西遺跡　立野遺跡』
『前中西遺跡Ⅷ』
2016『前中西遺跡Ⅺ』
2017『諏訪木遺跡Ⅲ』
2018『中西遺跡Ⅰ』
『前中西遺跡Ⅻ』
2019『中西遺跡Ⅱ』

熊谷市教育委員会　2020『諏訪木遺跡Ⅴ　上之古墳群第３・４号墳』
2021『北島遺跡Ⅱ　石原古墳群第４号墳　諏訪木遺跡Ⅵ　瀬戸山古墳群第29号墳』
『藤之宮遺跡Ⅱ』
2023『前中西遺跡ⅩⅢ』
『上中条中島遺跡Ⅱ　諏訪木遺跡Ⅶ　上前原遺跡Ⅵ・Ⅶ』
熊谷市前中西遺跡調査会　1999『前中西遺跡』
2014『前中西遺跡Ⅸ』
埼玉県遺跡調査会　1971『横塚山古墳』
埼玉県教育委員会　1984『池守・池上』
1988『埼玉の中世城館跡』
㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集
1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
2003『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
2007『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
2008『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集

写 真 図 版

発掘作業風景

2011（平成 23）年度調査Ａ区全景（南東から）

2011（平成 23）年度調査Ａ区全景（北西から）

図版２

2011（平成 23）年度調査Ａ区東側全景（西から）

2011（平成 23）年度調査Ａ区東側全景（北から）

2011（平成 23）年度調査Ａ区西側全景（北東から）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区北側全景（西から）

図版４

2011（平成 23）年度調査Ｂ区中央全景（西から）

2011（平成 23）年度調査Ｂ区南側全景（北西から）

2012（平成 24）年度調査Ａ区全景１（南から）

2012（平成 24）年度調査Ａ区全景２（南から）

図版６

2012（平成 24）年度調査Ｂ区全景（西から）

2012（平成 24）年度調査Ｂ区全景（北から）

第１号住居跡（北西から）

第１号住居跡ピット２遺物出土状況（西から）

第１号住居跡遺物出土状況１（北から）

第２号住居跡（北西から）

第１号住居跡遺物出土状況２（南から）

第２号住居跡遺物出土状況（北東から）

第１号住居跡遺物出土状況３（東から）

第２号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（東から）

図版８

第２号住居跡ピット３遺物出土状況（東から）

第６号住居跡（北東から）

第３号住居跡（北西から）

第７号住居跡（北東から）

第４号住居跡（南東から）

第７号住居跡遺物出土状況１（南から）

第４号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（南東から）

第７号住居跡遺物出土状況２（南東から）

第８号住居跡（南西から）

第 10 号住居跡（北東から）

第８号住居跡遺物出土状況（西から）

第 11 号住居跡（南から）

第９号住居跡（南東から）

第７号住居跡カマド（南から）

第９号住居跡炉跡（南西から）

第１～６号溝跡（南東から）

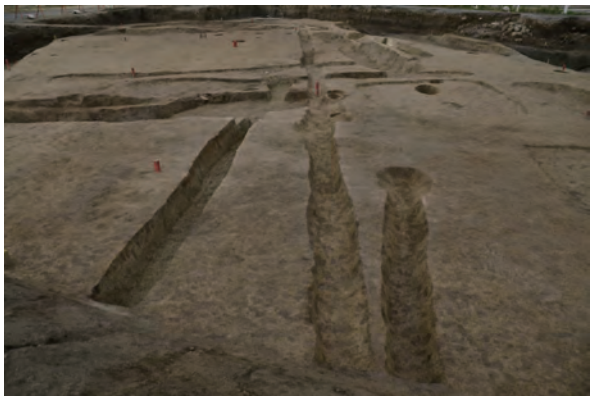
図版 10

第２・３・５・６号溝跡（北西から）

第３号溝跡木組遺構検出状況２
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　北西から）

第２・３・７・８号溝跡（2012（平成24）年度調査Ｂ区　西から）

第４・５号溝跡（南東から）



第３・７・８号溝跡（2012（平成24）年度調査Ａ区　北東から）

第９号溝跡（南東から）

第３号溝跡木組遺構検出状況１
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　東から）

第 10 号溝跡（西から）

第 10 号溝跡遺物出土状況 1（西から）

第 11 号溝跡（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北から）

第 10 号溝跡遺物出土状況 2（西から）

第 11 号溝跡（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南から）

第 10 号溝跡遺物出土状況 3（西から）

第 11 号溝跡遺物出土状況 1
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　東から）

第 10 号溝跡遺物出土状況 4（南から）

第 11 号溝跡遺物出土状況 2
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　西から）

第 11 号溝跡遺物出土状況３
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　西から）

第 11 号溝跡遺物出土状況４
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　西から）

第 11 号溝跡礫出土状況
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南東から）

第 12 号溝跡（南西から）

第 12 号溝跡遺物出土状況１（北西から）

第 12 号溝跡遺物出土状況２（北西から）

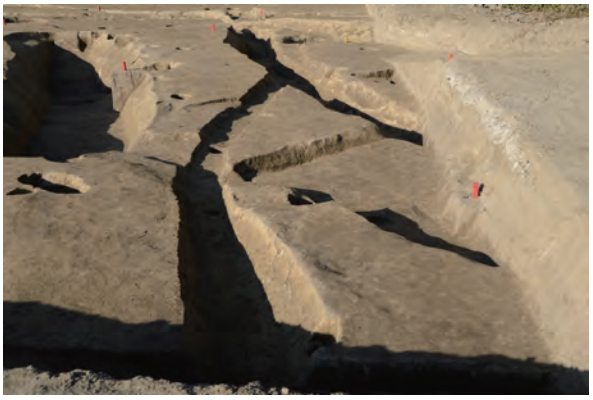
第 12 号溝跡遺物出土状況３（北西から）

第 12 号溝跡遺物出土状況４（北西から）

第 12 号溝跡遺物出土状況５（北西から）

第 12 号溝跡遺物出土状況９（西から）

第 12 号溝跡遺物出土状況６（北西から）



第 13～15 号溝跡（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　南から）

第 12 号溝跡遺物出土状況７（西から）

第 13･22 号溝跡（2011（平成 23）年度調査Ｂ区　南東から）

第 12 号溝跡遺物出土状況８（西から）

第 13･26 号溝跡（2011（平成 23）年度調査Ｂ区　南東から）

図版 14

第 16 号溝跡・第２号土坑（北東から）

第 21 号溝跡遺物出土状況（北西から）

第 17 号溝跡（北東から）

第 22 号溝跡（西から）

第 18 号溝跡（北東から）

第 24 号溝跡（西から）

第 20・21 号溝跡（南西から）

第 27 号溝跡（南西から）

第 32 号溝跡（北から）

第 36 号溝跡・第９号井戸跡（西から）

第 33 号溝跡（北西から）

第 37 号溝跡（南から）

第 38・39 号溝跡（南から）

第 34・35 号溝跡（北から）

第 40 号溝跡（南から）

第 41 号溝跡（北西から）

第３号土坑（北東から）

第 42・43 号溝跡（南西から）

第４号土坑（西から）

第 44・45 号溝跡（南から）

第５号土坑（東から）

第１号土坑（東から）

第７号土坑（西から）

第 12 号土坑（西から）

第４号井戸跡（東から）

第１号井戸跡（東から）

第５号井戸跡（北から）

第２号井戸跡（北西から）

第６号井戸跡（西から）

第３号井戸跡（北西から）

第８号井戸跡（北東から）

第９号井戸跡（北西から）

第 12 号井戸跡（南西から）

第９号井戸跡遺物出土状況（北西から）

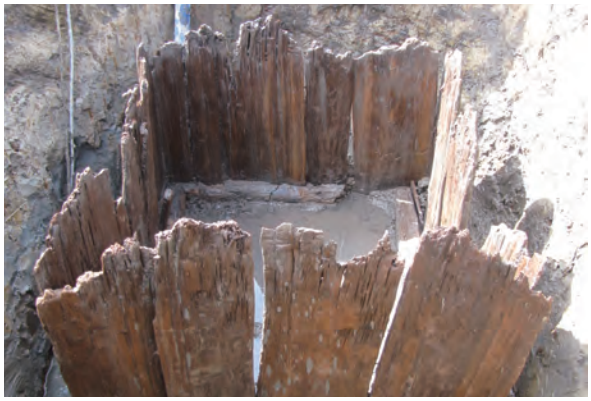
第 13 号井戸跡（北東から）

第 10 号井戸跡（北から）

第 13 号井戸跡井戸枠検出状況１（北西から）

第 11 号井戸跡（北東から）

第 13 号井戸跡井戸枠検出状況２（南東から）



第 13 号井戸跡井戸枠検出状況３（北東から）

第 13 号井戸跡井戸枠内１（北から）

第 13 号井戸跡井戸枠内２（南東から）

第 14 号井戸跡（南西から）

第 16 号井戸跡（南から）

第 17 号井戸跡（西から）

第 18 号井戸跡（南から）

第 19 号井戸跡（北から）

図版 20

第 20 号井戸跡（北から）

第 20 号井戸跡井戸枠南東隅検出状況（南から）

第 20 号井戸跡半裁状況（南から）

第 20 号井戸跡井戸枠南西隅検出状況（南から）

第 20 号井戸跡井戸枠検出状況 1（南から）

第 20 号井戸跡井戸枠北東隅検出状況（北から）

第 20 号井戸跡井戸枠検出状況 2（西から）

第 20 号井戸跡遺物出土状況（南から）

第１号方形周溝墓（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　南西から）

第１号方形周溝墓東周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　北から）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北から）

第１号方形周溝墓東周溝遺物出土状況２
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　南から）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況２
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北西から）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況３
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　東から）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況７
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北から）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況４
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　西から）

第１号方形周溝墓南周溝発掘作業状況
（2011（平成 23）年度調査Ａ区）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況５
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　西から）

第１号方形周溝墓北周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　南西から）

第１号方形周溝墓南周溝遺物出土状況６
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南東から）

第１号方形周溝墓北周溝遺物出土状況２
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　南から）

第２号方形周溝墓（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南東から）

第２号方形周溝墓東周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　東から）

第２号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南から）

第２号方形周溝墓東周溝遺物出土状況２
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南から）

第２号方形周溝墓南周溝遺物出土状況２
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　北東から）

第３号方形周溝墓（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南東から）

第３号方形周溝墓（2011（平成 23）年度調査Ｂ区　南から）

第３号方形周溝墓東周溝遺物出土状況１
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北西から）

第３号方形周溝墓東周溝遺物出土状況２
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南東から）

第４号方形周溝墓（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南西から）

第４号方形周溝墓南周溝西側礫出土状況
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南東から）

第４号方形周溝墓北周溝東側
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南東から）

第４号方形周溝墓南周溝西側骨片出土状況
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南東から）

第４号方形周溝墓南周溝東側遺物出土状況２
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北西から）

第４号方形周溝墓南周溝東側遺物出土状況１
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　北から）

第４号方形周溝墓南周溝東側遺物出土状況３
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南西から）

第５号方形周溝墓（南西から）

第６号方形周溝墓（北東から）

第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況１（南東から）

第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況３（北東から）

第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況２（東から）

第６号方形周溝墓北周溝遺物出土状況４（北東から）

第７号方形周溝墓（北西から）

第８号方形周溝墓（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南東から）

第８号方形周溝墓（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　上から）

第８号方形周溝墓西周溝遺物出土状況
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南から）

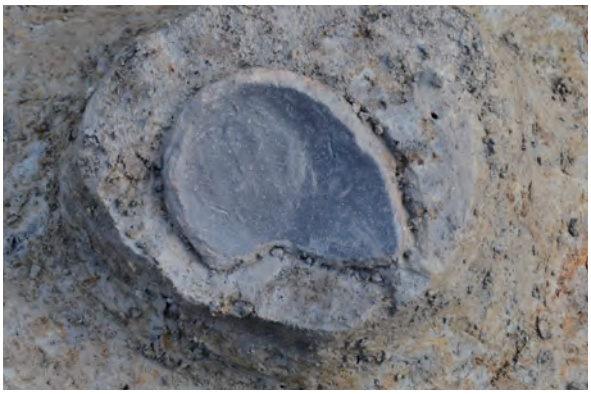
第８号方形周溝墓南周溝遺物出土状況２
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　北西から）

第８号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　北西から）

第８号方形周溝墓南周溝遺物出土状況３
（2012（平成 24）年度調査Ｂ区　北から）

第９号方形周溝墓（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南東から）

第９号方形周溝墓南西隅周溝
（2011（平成 23）年度調査Ａ区　南から）



第９号方形周溝墓北周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　北西から）

第９号方形周溝墓南周溝遺物出土状況１
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　南西から）

第９号方形周溝墓北周溝遺物出土状況２
（2012（平成 24）年度調査Ａ区　東から）

第10号方形周溝墓北側（2012（平成24）年度調査Ａ区　南から）

第10号方形周溝墓南側（2011（平成23）年度調査Ａ区　東から）

第１号不明遺構（西から）

第１号不明遺構遺物出土状況４（南東から）

第１号不明遺構遺物出土状況１（北から）

第１号不明遺構遺物出土状況５（西から）

第１号不明遺構遺物出土状況２（北東から）

第１号不明遺構遺物出土状況６（南から）

第１号不明遺構遺物出土状況３（南東から）

第１号不明遺構遺物出土状況７（北から）

第１号不明遺構遺物出土状況８（北から）

第１号不明遺構遺物出土状況12（東から）

第１号不明遺構遺物出土状況９（東から）

地元小学生見学会１（2011（平成23）年度調査Ａ区）

第１号不明遺構遺物出土状況 10（南東から）

地元小学生見学会２（2011（平成23）年度調査Ａ区）

第１号不明遺構遺物出土状況11（北から）

地元中学生発掘体験（2011（平成23）年度調査Ｂ区）

第 11 号住居跡　第 26 図３

第 11 号溝跡　第 40 図 11 ― ９

第１号方形周溝墓　第 60 図１

第１号方形周溝墓　第 60 図２

第１号方形周溝墓　第 60 図３

第１号方形周溝墓　第 60 図４

第１号方形周溝墓　第 60 図５

第１号方形周溝墓　第 60 図６

第１号方形周溝墓　第 60 図７

第１号方形周溝墓　第 60 図８

第１号方形周溝墓　第 61 図９

第１号方形周溝墓　第 61 図 10

第１号方形周溝墓　第 61 図 11

第１号方形周溝墓　第 61 図 12

第１号方形周溝墓　第 61 図 13

第 1 号方形周溝墓　第 61 図 14

第 1 号方形周溝墓　第 61 図 15

第 1 号方形周溝墓　第 61 図 16

第 1 号方形周溝墓　第 61 図 17

第 1 号方形周溝墓　第 61 図 18

第 1 号方形周溝墓　第 61 図 19

第 1 号方形周溝墓　第 62 図 20

第 1 号方形周溝墓　第 62 図 21

第 1 号方形周溝墓　第 62 図 22

第 1 号方形周溝墓　第 62 図 23

第 1 号方形周溝墓　第 62 図 24

第 1 号方形周溝墓　第 62 図 25

第 1 号方形周溝墓　第 63 図 26

第 1 号方形周溝墓　第 63 図 27

第 1 号方形周溝墓　第 63 図 28

第１号方形周溝墓　第 63 図 34

第１号方形周溝墓　第 63 図 35

第２号方形周溝墓　第 67 図１

第２号方形周溝墓　第 67 図２

第３号方形周溝墓　第 70 図１

第３号方形周溝墓　第 70 図２

第３号方形周溝墓　第 70 図３

第３号方形周溝墓　第 70 図４

第４号方形周溝墓　第 73 図１

第４号方形周溝墓　第 73 図４

第４号方形周溝墓　第 73 図５

第６号方形周溝墓　第 76 図６－１

第６号方形周溝墓　第 76 図６－２

第６号方形周溝墓　第 76 図６－３

遺構外　第 88 図２

第１号住居跡　第 11 図１

第２号住居跡　第 13 図１

第２号住居跡　第 13 図３

第２号住居跡　第 13 図４

第４号住居跡　第 15 図１

第５号住居跡　第 16 図１

第７号住居跡　第 19 図１

第７号住居跡　第 19 図２

第７号住居跡　第 19 図３

第８号住居跡　第 21 図１

第８号住居跡　第 21 図２

第５号溝跡　第 38 図５－７

第５号溝跡　第 38 図５－８

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 17

第 12 号溝跡　第 41 図 12 － 1

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 2

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 3

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 4

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 7

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 8

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 9

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 10

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 12

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 13

第 12 号溝跡　第 41 図 12 ― 14

第 20 号溝跡　第 42 図 20 ― 1

第 21 号溝跡　第 42 図 21 ― 1

第 33 号溝跡　第 42 図 33 ― 4

第 4 号方形周溝墓　第 73 図 22

第 8 号方形周溝墓　第 79 図 1

第８号方形周溝墓　第 79 図２

第８号方形周溝墓　第 79 図３

第８号方形周溝墓　第 79 図４

第９号方形周溝墓　第 82 図１

第９号方形周溝墓　第 82 図２

第９号方形周溝墓　第 82 図６

第 10 号方形周溝墓　第 84 図１

遺構外　第 88 図 16

遺構外　第 88 図 17

遺構外　第 88 図 20

第 13 号井戸跡　第 52 図 13 ― 14

第２号溝跡　第 38 図２― 1

第 22 号溝跡　第 42 図 22 ― 1

第 34 号溝跡　第 42 図 34 ― 1

第 34 号溝跡　第 42 図 34 ― 2

第 14 号井戸跡　第 52 図 14 ― 6

図版 40

第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 11

第 17 号井戸跡　第 52 図 17 － 1

第３号方形周溝墓　第 70 図 12

第１号不明遺構　第 87 図 44

遺構外　第 88 図 28

遺構外　第 88 図 29

遺構外　第 88 図 31

遺構外　第 88 図 32

遺構外　第 88 図 34

第 11 号住居跡　第 26 図４

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 1

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 2

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 3

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 6

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 5

第 11 号溝跡　第 39 図 11 － 1

第 11 号溝跡　第 39 図 11 － 2

第 11 号溝跡　第 39 図 11 － 3

第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 4

第 1 号井戸跡　第 50 図 1 － 1

第 5 号井戸跡　第 50 図 5 － 5

第 6 号井戸跡　第 50 図 6 － 3

第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － 4

第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － 5

第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － 6

第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － 7

第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － 8

第 19 号井戸跡　第 53 図 19 － 10

第 20 号井戸跡　第 53 図 20 － 2

第 20 号井戸跡　第 53 図 20 － 5

第 20 号井戸跡　第 53 図 20 － 6

第 20 号井戸跡　第 53 図 20 － 7

第 10 号方形周溝墓　第 84 図 9

第１号不明遺構　第 86 図３

第１号不明遺構　第 86 図５

第１号不明遺構　第 86 図４

第１号不明遺構　第 86 図６

第１号不明遺構　第 86 図７

第１号不明遺構　第 86 図 11

第１号不明遺構　第 86 図 14

第１号不明遺構　第 86 図８

第１号不明遺構　第 86 図 12

第１号不明遺構　第 86 図 16

第１号不明遺構　第 86 図 10

第１号不明遺構　第 86 図 13

第１号不明遺構　第 86 図 17

第 1 号不明遺構　第 86 図 18

第 1 号不明遺構　第 86 図 25

第 1 号不明遺構　第 87 図 34

第 1 号不明遺構　第 86 図 19

第 1 号不明遺構　第 87 図 29

第 36 号溝跡　第 42 図 36 ― 2

第 1 号不明遺構　第 86 図 20

第 1 号不明遺構　第 87 図 30

第 36 号溝跡　第 42 図 36 ― 3

第 1 号不明遺構　第 86 図 21

第 1 号不明遺構　第 87 図 31

第 36 号溝跡　第 42 図 36 ― 4

第 1 号不明遺構　第 86 図 23

第 1 号不明遺構　第 87 図 32

第 36 号溝跡　第 42 図 36 ― 7

第 1 号不明遺構　第 86 図 24

第 1 号不明遺構　第 87 図 33

遺構外　第 89 図 48

第８号溝跡　第 39 図８－１　　第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 14 ～ 16　　第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 10 ～ 17
第 12 号溝跡　第 41 図 12 － 22・23　　第５号井戸跡　第 50 図５－８・９　ピット 10・257　第 56 図１・16

第１号方形周溝墓　第 63 図 36 ～ 44・第 64 図 45 ～ 47

第１号方形周溝墓　第 64 図 48 ～ 63

第２号方形周溝墓　第 67 図３～６　　第３号方形周溝墓　第 70 図５～ 10
第４号方形周溝墓　第 73 図６～ 20

第６号方形周溝墓　第 76 図６－４・５　　第７号方形周溝墓　第 76 図７－１
第８号方形周溝墓　第 79 図 19 ～ 22　　第９号方形周溝墓　第 82 図 21 ～ 25
第 10 号方形周溝墓　第 84 図４～６　　遺構外　第 88 図３～ 13

第１号住居跡　第 11 図２～９　　第２号住居跡　第 13 図５～ 11

第３号住居跡　第 14 図１・２　　第７号住居跡　第 19 図４～８　　第９号住居跡　第 23 図１～６
第３号溝跡　第 38 図３－２・３　　第４号溝跡　第 38 図４－１　　第５号溝跡　第 38 図５－ 11 ～ 13

第８号溝跡　第 39 図８－２・３　　第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 18 ～ 20　　第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 18 ～ 21
第 12 号溝跡　第 41 図 12 － 15 ～ 21　　第 13 号溝跡　第 41 図 13 －２・３

第 22 号溝跡　第 42 図 22 －３～５　　第 24 号溝跡　第 42 図 24 －１～３　　第 25 号溝跡　第 42 図 25 －１・２
第４号土坑　第 45 図４－１・２　　第８号土坑　第 45 図８－１　　第１号井戸跡　第 50 図１－６
第５号井戸跡　第 50 図５－ 10　　ピット 10・42・168・251・256　第 56 図２・３・５・11・15

第２号方形周溝墓　第 67 図８・９　　第４号方形周溝墓　第 73 図 23・24
第８号方形周溝墓　第 79 図５～ 17　　第９号方形周溝墓　第 82 図７～ 11

第９号方形周溝墓　第 82 図 12 ～ 19　　第 10 号方形周溝墓　第 84 図２・３　　遺構外　第 88 図 21 ～ 27

第５号溝跡　第 38 図５－３～５　　第６号溝跡　第 38 図６－２～５　　第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 24 ～ 28

第 17 号溝跡　第 41 図 17 －１　　第 22 号溝跡　第 42 図 22 －２　　第 33 号溝跡　第 42 図 33 －２
第 34 号溝跡　第 42 図 34 －３　　第 36 号溝跡　第 42 図 36 －９　　第１号井戸跡　第 50 図１－７・８
第 10 号井戸跡　第 50 図 10 －１　　第 13 号井戸跡　第 52 図 13 － 16　　第 14 号井戸跡　第 52 図 14 －７・８

第 14 号井戸跡　第 52 図 14 －９・10　　第 17 号井戸跡　第 52 図 17 －２　　ピット 96・251　第 56 図４・13
第４号方形周溝墓　第 73 図 25　　第１号不明遺構　第 87 図 43　　遺構外　第 88 図 33

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 7 ・ 8　　第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 5　　第 36 号溝跡　第 42 図 36 － 1 ・ 6 ・ 10
第 6 号井戸跡　第 50 図 6 － 1　　第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 1　　第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 1
第 20 号井戸跡　第 53 図 20 － 1　　第 1 号不明遺構　第 86 図 1　　遺構外　第 89 図 38 ～ 40

第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 6　　第 36 号溝跡　第 42 図 36 － 5　　第 5 号井戸跡　第 50 図 5 － 1 ～ 3
第 6 号井戸跡　第 50 図 6 － 2　　第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 2 ～ 4　　第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 2
遺構外　第 89 図 41 ～ 43

第２号溝跡　第 38 図２－２　　第３号溝跡　第 38 図３－１　　第 10 号溝跡　第 39 図 10 －９～ 11
第 11 号溝跡　第 40 図 11 －７　　第１号井戸跡　第 50 図１－３・４　　第５号井戸跡　第 50 図５－４

第 11 号井戸跡　第 51 図 11 －１　　第 12 号井戸跡　第 51 図 12 －１　　第 19 号井戸跡　第 53 図 19 －１～３
第 20 号井戸跡　第 53 図 20 －３　　ピット 207・251　第 56 図７～ 10・14　　第１号不明遺構　第 86 図２
遺構外　第 89 図 44

第４号方形周溝墓　第 73 図 21　　第８号方形周溝墓　第 79 図 18

第 20 号井戸跡　第 53 図 20 ― ９

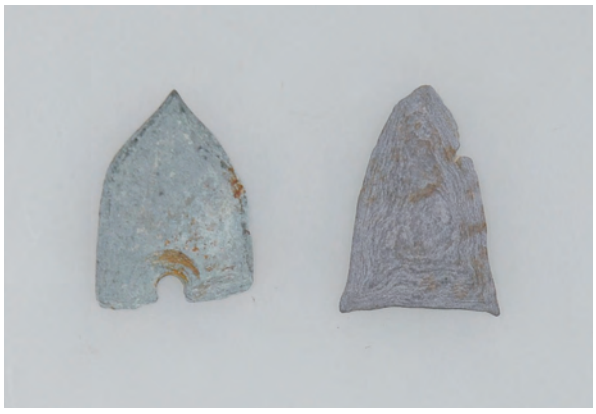
第 36 号溝跡　第 42 図 36 ― ８

第 11 号溝跡　第 40 図 11 ― 30
第 20 号溝跡　第 42 図 20 ― ２

第 11 号溝跡　第 40 図 11 ― 32・33

第１号不明遺構出土鉄滓

第 10 号溝跡　第 39 図 10 ― 12



第 10 号方形周溝墓　第 84 図７・８

第５号溝跡　第 38 図５－６
遺構外　第 89 図 49・50

第６号溝跡　第 38 図６－６
第１号井戸跡　第 50 図１－５
ピット 169　第 56 図６
ピット 258　第 56 図 17
第４号方形周溝墓　第 73 図 26 ～ 29

第１号不明遺構　第 87 図 39

第１号不明遺構　第 87 図 40

遺構外　第 89 図 47

第 10 号溝跡　第 39 図 10 － 13

第 11 号溝跡　第 40 図 11 － 8

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 6

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 7

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 8

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 9

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 10

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 11

第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 12

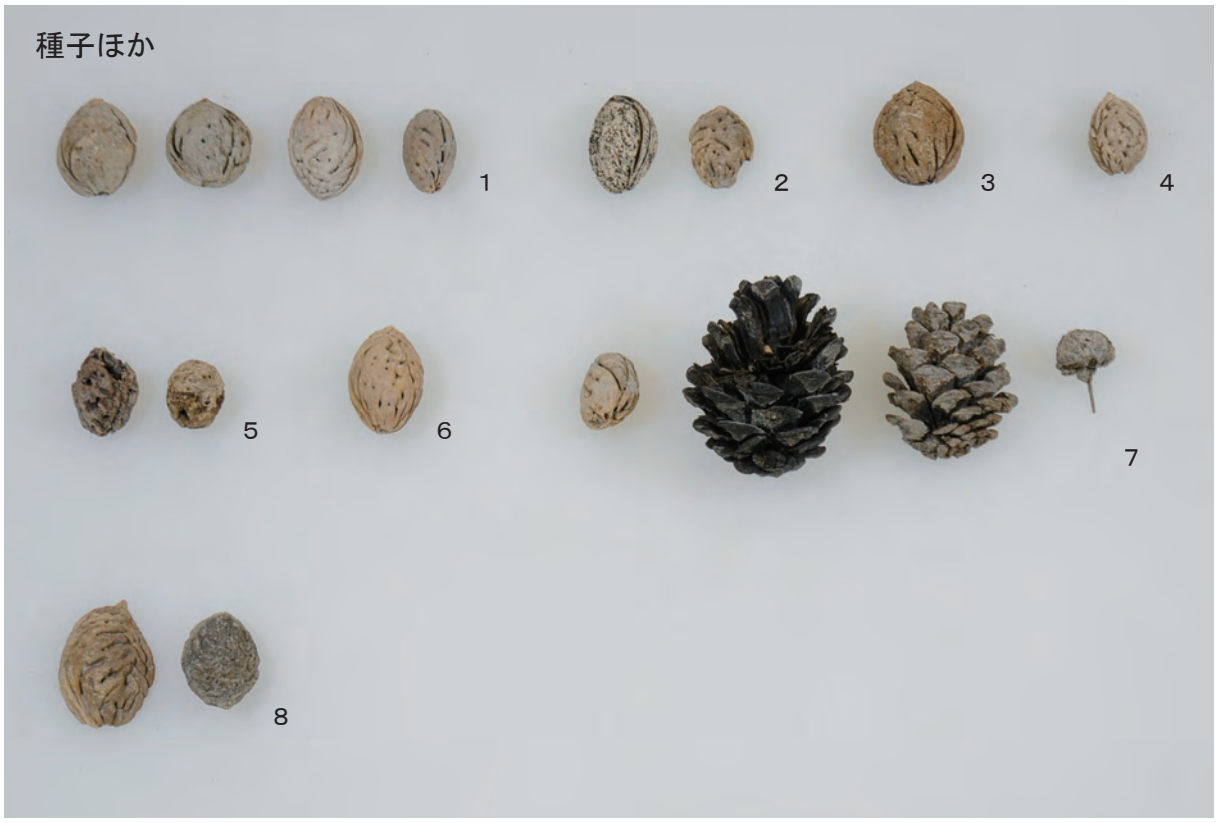
第 13 号井戸跡　第 51 図 13 － 13

第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 4

第 14 号井戸跡　第 52 図 14 － 5

第 1 号不明遺構　第 87 図 41

1．第 22 号溝跡　2．第４号方形周溝墓南周溝　3．第 12 号溝跡　4．第９号井戸跡



1．第 11 号井戸跡　2．第 18 号井戸跡　3．第 10 号井戸跡　4．第４号方形周溝墓西周溝
5．第４号方形周溝墓南周溝　6．ピット 251　7．第９号井戸跡　8．第１号井戸跡

報　告　書　抄　録

ふりがな	すわのきいせきはち
書名	諏訪木遺跡Ⅷ
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ＸＶ
巻次	―
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第47集
編集者名	松田　哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107 熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2024（令和6）年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
諏訪木遺跡（すわのきいせき）	熊谷市上之1969番地3（くまがやしかみの ばんち）	11202	016	36°08′53″	139°24′24″	20110829～20120113	1,670	区画整理街路築造工事
	熊谷市上之1971番地1（くまがやしかみの ばんち）			36°08′54″	139°24′24″	20120906～20130110	950	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪木遺跡	集落 墓 祭祀 城館跡	縄文時代後・晩期	―	縄文土器	本報告地点周辺では初となる弥生時代と古墳時代前期の方形周溝墓が検出された。 中世は、古河公方系の土師質土器かわらけが多数出土しており、本報告地点周辺が古河公方方の拠点であった可能性が高い。
		弥生時代中期末～後期初	方形周溝墓　７基	弥生土器	
		古墳時代前期	住居跡　10軒 溝跡　３条 土坑　１基 方形周溝墓　３基	土師器、土製品	
		古墳時代後期	―	須恵器、円筒埴輪	
		奈良・平安時代	住居跡　１軒 溝跡　28条 土坑　３基 井戸跡　１基	須恵器、灰釉陶器 土師器、土製品	
		中世	溝跡　２条 井戸跡　12基 不明遺構　１基	陶磁器、瓦質土器 土師質土器、銭貨 石製品、骨、種子	
		近世	溝跡　２条 井戸跡　３基	陶器、瓦質土器 土師質土器、木製品 骨、種子、植物	
		時期不明	掘立柱建物跡　１棟 溝跡　10条 土坑　９基 井戸跡　４基 ピット群	弥生土器、土師器 須恵器、陶器 瓦質土器、石製品	

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第 47 集

諏訪木遺跡Ⅷ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書ＸＶ－

令和６年３月 22 日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関東図書株式会社